

サードライフ=インフィニット・ストラトス

神倉斐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何の因果か3度目の人生を歩む事になった彼はとある教室でとある少女達と出会った。

『天災』と呼ばれた少女と『最強』の片鱗を見せる少女、

世界に『約束』された男の子とその傍に『在る』べき女の子に

そしてその出会いこそが彼をその物語に、本来の『無限の成層圏』の物語でなく、少し変わった『無限の成層圏』を飛ばたく物語の舞台へと登らせる。

時は2014年、日本。物語の幕は遂に上り、その空へは『無限の成層圏』とは違うもう1つの翼、『戦乙女』達が飛ばたいて行く。その対翼が翔けるソラの果てに在るのは人の希望かはたまた絶望か、ただそれでも彼女、彼らの翼(夢)はそのソラに向け今、飛ばたいのだった。

# 目次

## プロローグ

彼の話 | 1

## 第0章 原作開始前の話

3回目の人生 | 4

『天災』と呼ばれた『少女』 | 6

少女の『慟哭』 | 9

少女の『慟哭』 | 篠ノ之東 side | 15

『世界最強』を目指した少女 | 22

『世界最強』を目指した少女 | 織斑千冬 side | 31

5年生の夏のある日 | 39

メリークリスマス | 46

転換期、そして…… | 52

『魔法』と『誓い』とその『夢』に | 62

研究の手伝いとテストパイロット | 66

試験飛行と水色のリボン | 73

ミッション：インポッシブル 授業参観に潜入せよ | 80

『白騎士事件』 飛翔せし一対の翼 | 90

『白騎士事件』 交錯する白き対翼 | 102

始まりより前の終わり | 114

## 設定集

人物設定 (情報公開毎に随時更新予定) | 121

機体設定 (情報公開毎に随時更新予定) | 129

可変戦闘機設定 | 134

## 第1章 IS学園入学編

7年後の世界は……	140
目覚めた少年	146
これからの事	153
表の物語の始まり	160
初日の授業	168
英国貴族令嬢、襲来	175
クラス代表決め	183
食堂での作戦会議	190
放課後	195
寮の同居人と闖入者	200
専用機と改造機	206
模擬戦の行方	214
蒼き涙の過去と今と	225
第2章 クラス対抗戦編	
1年1組クラス代表決定、あと序でに中国娘来日	231
祝 クラス代表就任パーティー	238
中華娘、襲来	252
時雨の専用機	259
少女の残した1年越し約束	267
クラス対抗戦までの日常	277
——天羽時雨side——	
クラス対抗戦までの日常	290
——織斑一夏side——	
開幕 クラス代表対抗戦、銀河の妖精来日	302
譲れぬ闘い	308

## プロローグ 彼の話

〈1〉

ん？君は誰？まあいつか、どうせ暇だし俺の話でも聞いていくかい？

聞いてくれる？じゃあそこにも座って聞いてくれ。

あく、言い出しつぺのくせに悪いんだけど聞いててあんま楽しくはないと思うよ？平凡な内容だしやたら長いし挙げ句の果てには結構つまらない、安っぽくて馬鹿らしい話だけど本当に良い？

え？それでも聞いてやるから話してみろって？分かった分かった、後で後悔したりつまらなかったとか言わないでよ？こう見えて案外ガラスハートなんだ。

痛い痛い痛い!!？前置き長すぎるって!!？しかも自分からガラスハートとか言う奴は大体はガラスハートじゃないって？だからって殴ることないでしょ……はいはい、始めますよ。

コホン……、じゃあちよつと真面目に話を始めるよ。

ねえ、君はこの『世界』をどう思う？

言っている意味が分からない？そのままだよ、君が知る君のいる世界の事だ。

……ふむ、成る程、君はそう考えるか。うん、なかなか良い考えだ。そこに辿り着いた分君はよく世界を見ている。

俺の考えはどうなんだって？うん、良い質問だ。そう聞いてくれると思っていたよ、万が一聞いてくれなかったら他の言い回しも考えてたくらいだからね。

……つと、話がズレたね。俺はね、そうだな……言葉にし辛いけどあれだ、『試験管』に見えるんだ。

ふふふつ、それもまた期待通りの顔だ。タンマタンマつ、ハイ拳を

握りしめるのナシね!?? そんなにバカスカ殴られて喜ぶようなDMでもマゾでもねえよ俺は。

ふう……何回中断すればいいんだよ……で、さっきの続きなんだけど俺は『世界』の事を『試験管』って言ったよね? これは案外いい例えかもしれない。ねえ君は『試験管』と聞いて何を思い浮かべる?・

そうそう、理科室とか科学室にあるよね。んでよくさ、『実験』とかによく使われているよね。対象実験とかさ。

あ、分かったみたいだね。そう、つまり『世界』は『実験』により創られ存在してるんだよ。条件が揃った中身のそっくりな『試験管』が何本もあって1つずつ若干違う『因子』を紛れ込ませてその結末の差異を観察する対象実験、もしくは『実験者』の望む『成果』を探す箱庭。

ここまでくれば『誰』が『実験者』かは想像できるよね。

はい、正解。『神』様です。正解した君には飴玉を差し上げましょう。

いらないですか? 残念です。秘蔵のブドウ味だったんですが……、『神』様はいくつもの『試験管』を使われて何か『実験』をしている訳なんですよ。その何かはなんとなく俺も予想はついているけどそれは最後にとっておいて、そのいくつもの試験管が全て『並行世界』って言うのは分かってたよね?

そうだよ、その通り。つまり世界なんていくらでもあるのさ、なんて『神』が『神』の為にやってる実験だよ? 人間の俺達には理解できるはずがないくらいの規模と時間と手間を掛ける訳。

で、結局何が言いたいのかって? つまりは俺達がなんでこんな所で暇してるかって事だよ。

まさかまさかそのまさか、俺達は今『試験管』、つまり『世界』の外にいるのさ。実験器具で言えばスライドガラスかスポイトの真っ只中? 要するに俺達は異世界転生または転移の準備の真っ最中、ってとこだね。

なんでそんな事を知ってるかって? 簡単だよ、俺前に1回ここに来た事があるのさ。つまり『前世』持ち、イエイ。

いやいやいや、だから拳を握るな拳を。全く、お父さんは君をそんな風に育てた覚えはないぞ。

ぐはっ、すみません調子に乗りました。閑話休題、それはさておきねえねえ、君は俺を見てどう思う？

だよねー、ファンタジー異世界ほいよね。実はその通り、こう見えて異世界帰りですはい。まんまだけどね。

1番目の人生は地球にある日本での高校生、死因はありきたりな事故死。2度目の人生、つまり前世はどっかの星の普通にでかい国の辺境伯嫡子、ファンタジー要素がぶち込まれてた世界だから魔法とかも習得できたしこう見えて剣術はかなり強いです。ま、チートあつたし火薬作ってライフル構えて敵薙ぎ倒してたからな。案外生きて人生2回目でようやくの寿命で死んだ。んで今ここ、

猛者だつて？うん、俺もそう思う。一応結婚とか子育てとか人生に1度は経験しときたい事は全部やったかな？

結婚できたんだだと？失礼な、できたよ。かなり美人さんだったんだ、俺には勿体ないくらいね。貴族社会で恋愛結婚できるとは思わなかったなあ……。

あらあら、また話がズレた。君と話しているとよく話がズレる、なんだろうか？誰かに似ているのかもね？

おっと、時間だ。お互い光の粒子に成り始めたな。ここから先は赤ちゃんから再スタートかそのまま放り出されるかの2択だから目が覚めてからのお楽しみだな。ちゃんとチートとかもつくし最初は『神』様が勝手に誘導してくれるから気にせずに進めばいい。

ん？最後に取つといた俺の予想は何だつて？それはな……

『神を創り出す事』だよ。

じゃあな、運が良いか悪いか分からないがまたここで会える日まで。

バイバイ。

## 第0章 原作開始前の話

### 3 回目の人生

〈2〉

どうも、初めまして、2度目の転生、3度の人生に乗り出した『若宮ツバサ翼』です。よろしくお願ひします。現在0歳から始めて丁度11歳になりました、懐かしの小学校5年生です。

いつの間に2桁ちよいの月日が流れたんだと思うかもしれないがここは割愛させて頂く、だってひたすら隠れて木刀振ったりして身体を鍛えたり高等数学まで完全履修してただけだもん。聞いても面白くはないでしょ？

ああ、それに言い忘れてたけどこの世界でもなんか魔法使えるみたいでとにかくそれを訓練をしたかな。前の世界程度はないけどもこの世界地球にも稀薄だけど大気中に魔力があつて魔法式と発動キーさえ理解しておけば前の世界程の規模、効果は発揮されないものの発動するらしく、10年の月日を注ぎ込んでとにかく効率化を目指し今ではようやく前世の3分の2程度まで効果が出せるようになった。例えば、骨折程度なら回復魔法で一発で治せて、強化魔法で5歳児が大人を軽々と投げ飛ばせるくらいに。……ここまできるともう俺は普通の人間じゃないかと若干諦められるレベルである。それ以前に3回目の人生を経験している時点で普通ではないが……。

ではここで俺の家族についてお話ししよう。俺の家族、『若宮』家は4人家族、教師の父に研究者の母、11の俺に3歳の妹であと父の名は『総司』、母は『琴乃』、妹は『栞』となるがこれは蛇足である。

で、何が言いたいかというと父はどうでもいいが母が『研究者』であるという事だ。どうやらこの世界地球、俺が前々世で生きていた世界地球とほぼ同じ西暦2004年であるというのにこちらの方が圧倒的に科学技術が進歩しているらしく、よって母のしている研究もやっぱり前々世では考えられない『外装改変型戦闘機基礎理論と設計』と



いう男の浪漫ロマンがすぐくすぐられるもので、そのせいで俺達一家はよく研究所や航空自衛隊の基地付近へと引越しを繰り返していたのだ。そのせいで小学校になってからは友達が少ない少ない、長ければ1年、短ければ1ヶ月で転校などまだ3歳児の癪ならまだいけるが小学生の俺はかなりキツかった。つくっては別れ、つくっては別れ、つくってはしばらくはいけるかと思っただけですぐ別れる。……親友と呼べる奴は作れただろうか？いや、作れてないだろう。

……まあ、そんなこんなで今回も基地に併設された研究所近くの街に住む事になって5年生でまた転校する事になったのだが今回は数年はこの街、母の場合は研究所に住む事になり俺はようやく親友が作れるなど思い学校に通う事にした。

そして俺は『彼女』と出逢った。

前世で嫌という程触れてきた悲哀と絶望、それを内包したただ1人孤独に教室にいた『天災』と呼ばれる小さな彼女に。

## 『天災』と呼ばれた『少女』

〈3〉

「どうも初めまして、新しく転校してきた若宮翼です。よろしくお願  
いします」

教室で拍手が起こる。今何が起きているかと言うと、ただ単純に今日転校してきた俺が先生に言われ自己紹介、まあ名前を言っただけだが、ただだけである。そう考えているといつの間にか質問タイムに入っていたらしく彼ら、主に大半が女子だが質問攻めにあった。

「ねえ、前はどこに住んでいたの?」

「誕生日いつ?」

「出身は?」

「何人家族なの?」

「彼女いる?」

おい、前4つはまだ分かるが最後の何だ。小5がする内容じゃないだろ。え?今時は小4でリア充の奴もいる?マジか……ジエネレーシヨンギャップって奴だな……。

「前は母の研究の関係で関西に、誕生日は8月の15日、出身は和歌山県との事、父、母、妹の4人家族です。……最後の彼女はいるかですが、いません」

『キヤーー』

「……………」

何?この黄色い歓声?

ジエネレーシヨンギャップについていけない若宮だった。……まあ実のところ、若宮がここまで女子に黄色い<sup>ロククオン</sup>歓声<sup>される</sup>にあうのは珍しい事ではない。なんせ彼は母親遺伝の濡れ羽色の黒髪に異世界継承の濃く黒に近い紫色の瞳を持ち更に上の下もしくは中の上にはいるレベルで容姿は整っているのだから、それだけでも十分に女子から好意を受け易いのだ。但し、本人はまるつきりそれには気付かない。

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

「はいはい、終了。朝の会はこれで終わりだ、続きは休み時間にでもしろ。若宮君、君の席は悪いが……『あの子』の隣に座ってくれ」

先生が指を指したのは教室最後尾の左端、つまり窓際から2番目の席で確かに唯一席が空いている。最後尾は無理矢理継ぎ足したらしく若宮の分とさつきからずつとNPCノットパソコンを叩いている女子の2席しかなかった。

「はい、分かりました」

鞆を片手に席に向かう。その途中、

『ひそひそ……転校生君も災難ね。隣の席がああ『天災』なのよ?』

『ひそひそ……そうね……、転校生君かわいそう』

『ひそひそ……おい見ろよ、ああ転校生ああ『天災』の隣の席らしいぜ』

『ひそひそ……マジかよ、御愁傷様だな』

ひそひそ陰口に成り切っていないひそひそ声が俺の耳に届く。その対象は俺だがその悪意や害意の矛先は俺ではなくて隣の席の『彼女』1人に向けられている。

……胸くそが悪い

悪意も害意も前々世や前世で嫌という程触れてきた。だが、やはりいつまで経っても俺はそれに慣れる事はできなかった。そしてそんな『ドス黒い意思』を今僅か11の少女が一身に受けているのだ。そんな様子を見て気持ち良く感じられる者はそういないだろう。

「……初めまして、今日から隣になる若宮翼だ。君は?」

「……………」

彼女は面倒くさげにNPCから一瞬目を離し若宮を見るとすぐに視線を画面に戻す。……おそらく数式であろう数列を打ち込みながら彼女は呟くように名前を言った。

「……………篠ノ之束シノノノノタバネ」

「よろしく、篠ノ之さん」

「……………」

これが『彼』と『天災』との邂逅、だが彼が彼女に本当に笑って欲しいと思ったのはこの時ではない。それはその日から数日後、1週間

すら経っていない、その日の出来事である。

## 少女の『慟哭』

〈4〉

……転校してから5日、その日もまた彼は登校して教室に入るとあれから毎日繰り返している彼女への挨拶をした。

「おはよう、篠ノ之さん。昨日はしっかりと寝ましたか？」

「……………」

「……寝てなさそうだね……、篠ノ之さん。いくら1日以上ぶっ続けで作業出来るからってしつかり寝ないと疲労は蓄積するし成長しないよっ。」

「……………うるさい、3時間は寝た」

「いやいや、短いよ!?!?せめて5時間は寝て!?!?」

「……………やっぱりうるさい。思考の邪魔……………」

「……………ごめん」

「……………分かればいい。……………おはよう」

と、まあギリギリ会話っぽいのが成り立つくらいにコミュニケーションが取れるようになった。まだ酷くね?と思う方、甘く見ないでくれ。最初初日なんて、

「おはよう篠ノ之さん」

「……………」

「篠ノ之さん?」

「……………うるさい」

の無視からの僅か一言だったのが、延々と話し掛け続けて2日目から、

「おはよう篠ノ之さん」

「……………うるさい」

になって、3日目、

「おはよう篠ノ之さん」

「……………ん」

「目の下に隈ができてるよ。昨日はしっかりと休んだ?」

「……………休んでない、休まなくてもいける。あとうるさい」

4日目、昨日、

「おはよう篠ノ之さん、また今日も目の下に隈があるよ」

「……………知ってる」

「休まなくても大丈夫なんだとしてもせめて睡眠時間は取ったほうがいいよ?」

「……………でもうるさい」

んで、今日の上記の会話。俺にとって日々成長を感じる朝の一幕であり、意外と楽しみに成りつつある。彼女の数式を解く邪魔をしているのはしっかり理解してはいるが、俺はできれば年相応に周りの人と関わりを持って笑ってくれたら良いなと思っ**て**いるので毎回限界ギリギリを見切**つ**て彼女に話し掛けていた。

が、それは本人と若宮にしか分からない事で周りには『ただ一方的に篠ノ之束が若宮を無視している』様にしか見えていなかったのだ。それ故、その日はそれだけでは終わら**な**かった、いや終わることは**な**かったのだ。

「ねえ、『天災』さん?若宮君が毎日話掛けてくれてるんだからもう少し返事しなさいよ」

前の方からクラスの女子達のまとめ役らしい女子生徒がそう言いながら若宮と篠ノ之のいる後ろの席まで歩いてくる。俺は今更自分のミスに気付いたがどうしようも**な**かった、あと自分でできることは**そ**う言**つ**てきた彼女と標的にされた篠ノ之の話の行く末を見守る**こ**と程度である。……………まあ既に予想はできているが、

「……………」

「ねえ、聞**い**てるの。返事しなさいよ『天災』!」

「……………」

「なによ、偉**そ**うに授業も受けないでノートパソコンばかり触**つ**て!そうや**つ**て偉**そ**うにしているのが気に食**わ**ないのよ!!?」

篠ノ之が無視する事に彼女は苛立つ。そこでようやく篠ノ之がNPCを叩くのを中断し**さ**ぞめんど**ぐ**さ**げ**に、

「……………うるさい、私の邪魔を**し**ないで。貴女みたいな凡人構**つ**ている

暇は私には無い」

「……………」

その一言が、そのあまりにも他人に配慮しないその言葉により完全に彼女の我慢が吹っ切れる。彼女は開いた手を振り上げ篠ノ之の顔に……

がしっ

「!?？」

「……………」

当たらなかつた。若宮がその手を掴んだからだ。

「駄目だ。手をあげちゃ駄目なんだ」

教室の温度が『低下した』気がする。いや、実際に『下がった』のだ。若宮が無意識に氷魔法を使用した事によって。

「……………」

「確かに篠ノ之さんは口が悪かつたし言葉足らずで君を怒らせた。でも手を出したら駄目なんだよ。これは俺が篠ノ之さんに勝手にやっている事だしこれでも話し掛けていいギリギリを見極めて話掛けているんだ。君達に迷惑を掛けるつもりはなかつただけ俺のミスだ。だから俺は君に謝らなくちゃならない。ごめん、でもありがとう。気にしてくれてたんだよね? だからありがとう」

「うおっ!?? なんか寒っ!??」

そこでタイミング良く担任の先生が入って来てこの件はうやむやになる。……いや、1人だけうやむやにならなかつた人がいた。

「……………」

もちろん、篠ノ之だ。

放課後、若宮は篠ノ之に教室に呼び出されていた。

「……………」

「……………」

無言、呼び出した篠ノ之の方も呼び出された若宮の方も何も言わない。カタカタと彼女がキーを叩く音だけが教室を支配する。

ふと、彼女は数式を液晶の中に綴るのを中断すると彼を見ずに呟い

た。

「……………どうして私を庇った」

小さな、弱々しい言葉、そんな言葉は俺にはただ答えを求めているだけの言葉ではない様に思えた。

「別に」

「……………別になんだ？」

「庇う事に大した理由はあるのか？」

「……………え？」

「ああなつた原因の一端は俺の配慮不足にあった、……………それに暴力は駄目だし特にこれ以上君が孤立して1人になって欲しくなかったからからかな？」

「……………う……………い」

彼女はそれを聞いて顔を歪める。

「……………うるさい、うるさいうるさいうるさい！転校してきたばかりのお前に何が分かるっていうのよ!?？」

「優しくして私に媚でも売るつもり？そんな手になんか乗らない、私は1人だつて気にしない！」

「そもそも、最初に私を1人ぼっちにしたのはお前達じゃないか!!？異常だつて、おかしいって、私は他の皆などと違うって！私を最初に見捨てたのは、切り捨てたのは、1人にしたのはお前達じゃないか!!？」

彼女は叫ぶ、心の内に押し固められていた思い全てを吐き出す様に。

悲しく、痛々しい。僅か11の少女が溜め込むにはあまりにも重過ぎる『絶望』、だが彼女はそれを溜め込む事が出来てしまった。『天災』と賞される程の頭脳とそれに伴い大人びてしまった精神によって。

「……………もういい、もういいんだ」

……………気付けば、俺は彼女を抱きしめていた。泣き叫ぶ子供を見たら抱きしめてしまうのは前世の癖だ、今こんなところで出ずともよいというのに……………でも俺はその癖に感謝した、それでもなければ彼女に言葉を掛けることはできなかつただろうから……………



「ごめんね……」

「……………」

「辛かったね……」

「……………」

「寂しかったね……」

「……………」

彼女は何も答えない。

「よく、頑張ったね。だから……」

「……泣いていいんだよ？」

「……………うう、うわああああっん、ああああああー」

涙が決壊する。前世で、嫌という程見てきた……『絶望』や『悲哀』、『悲しみ』をその身に内包し、誰にもそれを理解されず、ただ1人、1人ぼつちで折れてしまった人達を、壊れてしまった人達を。

そして俺はその全ては不可能だがその一端だけでもそれを理解できる様になった。

だから俺は『どうかかしたい』と思った。『助ける』とか『救う』とか贅沢な事じゃない、ただそんな彼等を『どうかかしたい』と思ったのだ。

だから俺は『彼女』を見て『どうかかしたい』と思った。

トントントンと心音に合わせリズム良く背中を叩く、愚図る子供を落ち着かせる時や小さい子を寝かしつける時によく使うテクニクだが、今の彼女に使っても許されるだろう。彼女だってまだ子供なのだから。

「……落ち着いた？」

「ぐすつ……うん」

「しっかり泣いた？」

「うん……」

「なら……いいよ」

落ち着いてきた彼女の頭を前世でよくやっていた通りに撫でる。

「……その、……ごめん」

「気にするな、俺がしたくてした事だ」

「ん……」

遅くなつたがハンカチを取り出し涙や鼻水で汚れた彼女の顔を綺麗に拭き取る。汚れたままは嫌だろう。

「……………」

「さて、もう時間も遅いし帰ろうか？送ってくよ」

俺は机に掛けてある鞆を手に彼女にそう言う。ふと服シヤの背中ツの裾が控気味に引っ張られた。

「ん？なんですか篠ノ之さん？篠ノ之さん？」

何気無く俺は振り返る。

「……………」

振り返るとすぐ近くに彼女は立っていて、若宮にそう言つて微笑むと彼が固まっている内にNPCを手に教室から走り去つて行く。

……………その微笑みはまるで開いた桜のように綺麗で、黄昏に染まった教室でもとても印象に残る、そんな微笑みだった。

少女の『慟哭』 — 篠ノ之束 side —

〈5〉

『彼』はやっぱりどこか他の人とは違った。確かに私は初めは『彼』も世の中に多くいる有象無象の凡人の一人なのだとおもっていた。でもそれは間違いで、どちらかといえば『彼』はこちら側の人間だった。なんたって『天災』たる私を見捨てなかった唯一の非凡であり凡庸な『他人』だったのだから。



アイツがこの学校に転校してきたのは6日程前の話だった。自己紹介については聞いていない、まだそんな事になるとは私でも思いもしていなかったのだから。だから彼が隣の席に来た時、  
「……初めまして、今日から隣になる若宮翼だ。君は？」  
と言っても私は無言の後にポツリと、  
「……………篠ノ之束」

と返しただけで特に何も返さなかった。でもここで私は気付くべきだったのだ、彼が普通じゃない事に。普通ならこれだけでも他人は私に良い感情は抱かない、なのに彼は、  
「よろしく、篠ノ之さん」  
「……………」

普通にそう返してきたのだから。  
その後のやりとりはあまり覚えていない、適当に聞き流していたし、さして覚えようともしていなかったからだ。でも何故か、「また明日、篠ノ之さん」と帰り際に言われたその言葉は、冷えきっていた私の胸の奥に届いた。



2日目以降も彼が私に話し掛けられない日は無かった。毎時間休み時間になると世間話からちよつとマイナーな話まで様々な話題を持って私に彼は話し掛けてきた。殆ど無視してやったが彼は飽きる事なく私に話し掛けてくる、そしてすぐに気付いた事だが彼は『引き』が上手い。彼は私が限界となるギリギリのラインで毎回話を切り上げた。あくまで自然に、周りが違和感を感じないよう、さり気なく。それでいくら無視し続けている私でもそれに気付くし興味も湧いた。

『変わった奴だ、少し周りの様な有象無象の凡人とは違うのかもしれない』と、

それで私は彼の話を聞くのにほんの少し、そうほんの少しだけ興味を向けてやる事にした。

次の日、

「おはよう篠ノ之さん」

「……………うるさい」

その次の日、

「おはよう篠ノ之さん」

「……………ん」

「目の下に隈ができてるよ。昨日はしつかり休んだ？」

「……………休んでない、休まなくてもいける。あとうるさい」

……………今考えればかなり酷いものだと思える。その次の日はまだ良い、次の日はやっぱり酷過ぎた。反省…………。

コホン、ま、まあ置いといてだ。ちよつとだけ…………ちよつとだけだが真面目に聞いてやってやると基本彼が話題にあげるのは1割が雑学、2割がマイナーな話、そして大部分を占める7割はどうしてか私の健康についてなのだ。大事な事なのでもう一度言うが何故か私の健康についてなのだ。

ちゃんと休んだのか云々

睡眠は取ったのか云々

朝食は食べたのか云々

運動は大切です云々

健康は云々……………等々

……私ってそんなに不健康そうに見えるだろうか……？いや確かに体育は基本ボイコットしてるし（若宮が来てからは無理矢理若宮に連行された）休憩や睡眠なんて殆ど取らずにPCを触ってる（若宮との会話により無理矢理休まされている）けれどここ数年は問題なく生活してるんだよ？いやでも……そんな私にアイツはこれだけ言ってくるのだからもしかしたら側から見れば私は健康そうには見えないのかもしれない。……………少しぐらいアイツの言う通り改善してやらないでもないか……。

そして、彼が転校して来て5日が経った日。すなわち、私の運命のターニングポイント転換点となったその日。

「おはよう、篠ノ之さん。昨日はしっかりと寝ましたか？」

「……………」

「……………寝てなさそうだね……、篠ノ之さん。いくら1日以上ぶっ続けで作業出来るからってしつかり寝ないと疲労は蓄積するし成長しないよ。」

「……………うるさい、3時間は寝た」

「いやいや、短いよ!??せめて5時間は寝て!?!」

「……………やっぱりうるさい。思考の邪魔……………」

「……………ごめん」

「……………分かればいい。……………おはよう」

ようやくくまとも(?)に近い会話ができた。日々思ってしまう様になつていた事だが、私はもしかしたら彼とのこの会話が楽しくて、本当は楽しみにしているのかもしれない。

だからだろうか?私は忘れていた。私はみんなに嫌われる、みんなとは違う化物の『天災』なのであることを……。

「ねえ、『天災』さん?若宮君が毎日話掛けてくれてるんだからもう少し返事しなさいよ」

ほら、ね?来た。

「ねえ、聞いているの。返事しなさいよ『天災』!」

「なによ、偉そうに授業も受けないでノートパソコンばかり触って！そうやって偉そうにしているのが気に食わないのよ!!?」

「一方的な主張ばかり……私を否定するばかり……、やっぱ『天災』を肯定するものは……ない。」

「冷え切った心のままに私は口にする。」

「……うるさい、私の邪魔をしないで。貴女みたいな凡人構っている暇は私には無い」

「……っ!??」

感情の針が振り切れたらしい、目の前の『私を否定する』人は手を振り上げ……それが振り下ろされる事はなかった。

「駄目だ。手をあげちゃ駄目なんだ」

「どうして?どうして貴方が止めるの?どうして私を守ろうとするの?なんの関係もない、たった5日しか関わりのない貴方が?」

私を守ったのは彼だった。友達である織斑千冬オリムラチフユではなくまだ『他人』のはずの彼だったのだ。

私は分からなかった、どうして『他人』の筈の彼が私を守ったのか。『友達』ですらない赤の他人が私なんかを助けたのか。そもそも何故私にこれ程まで構ってくるのか。だから……私は彼を放課後に教室に呼び出した。



そして、彼が私を守った理由を聞いて、私は、私の心の奥底にしまっていたその思いを、その感情を溢れさせてしまった。

溢れさせる必要は無かったのに、溢れされてはいけなかったというのに、私は初めてそれをコントロールする事ができなかった。

「……うるさい、うるさいうるさいうるさい!転校してきたばかりのお前に何が分かるっていうのよ!??」

「違う……こんな事を言いたいんじゃない」

「優しくして私に媚でも売るつもり?そんな手になんか乗らない、私は1人だって気にしない!」

そうじゃない、そうじゃないのに……

「そもそも、最初に私を1人ぼっちにしたのはお前達じゃないか!!? 異常だって、おかしいって、私は他の皆んなと違うって! 私を最初に見捨てたのは、切り捨てたのは、1人にしたのはお前達じゃないか!!」

「……こんな事を言いたいんじゃない、彼に言うのは間違ってる。でも……心から溢れる。」

彼にぶつけるべきではない感情が溢れ、私はそれを彼に投げつける。

「ああ……どうして私はこうも醜いのだろうか? 歪んでいるのだろうか? 人と異なるのだろうか?」

私をもっと人らしかったならば、美しければ、真っ直ぐであれば、私は彼と『友達』になれただろうに……。

「……もういい、もういいんだ」

気付けば……私は彼に抱きしめられていた。

「ごめんね……」

ああ、なんで今更……

「辛かったね……」

何故今更……

「寂しかったね……」

どうして貴方は……

「よく、頑張ったね。だから……」

……泣いていいんだよ?」

「こども優しいのだろうか?」

感情が決壊した。

随分と……久しぶりに流した涙と鼻水で顔がぐちゃぐちゃになる。

ぽんぽんと背中と心音に合わせリズム良く背中を叩かれる。ああ……心地いい。子供扱いをされているのは分かっていたが、私は何も言わなかった。こんな時くらい……甘えてもいいよね?」

泣いた、泣いた、涙が枯れるまで、今まで流せなかった分を今流しているかの様に。泣いて泣いて泣き続けて、ようやく落ち着いてきた

時、彼は私の頭の撫でながら聞いてきた。

「……落ち着いた？」

「ぐすつ……うん」

「しっかり泣いた？」

「うん……」

「なら……いいよ」

彼はハンカチを取り出してぐちやぐちやになった私の顔を拭く。

「……その、……ごめん」

「気にするな、俺がしたくてした事だ」

「ん……」

彼は優しく私に微笑む、彼のシャツは私の涙と鼻水でさっきまでの私の顔と同じ位ぐしゃぐしゃになっていて私には少し罪悪感を感じた。

「さて、もう時間も遅いし帰ろうか？送ってくよ」

彼は自分の机にある鞆を取るために私に背を向ける。自然に私の手は彼の服の裾に伸びていた。

「ん？なんですか篠ノ之さん？篠ノ之さん？」

彼は振り返る。

「……ありがとう」

感謝を込めよう。私を守ってくれた貴方に、私を救ってくれた貴方に、私を見てくれた貴方にこの感謝の思いを言葉で伝える為に。優しい貴方にこの胸に生まれた新たな『感情』を伝える為に。

私は自然と彼に微笑んでいた。私が微笑んでいるのを見て驚いたのか彼は固まっている。私は途端に恥ずかしくなって彼を置いて教室から飛び出て行ってしまった。送って行ってくれと言っていたのに悪い気がする、でも……

『若宮……翼』かあ……」

若宮<sup>彼</sup>翼の名を呟いてしまう。

この日、しばらく彼女が付け加えられる事の無かった『友達』と言う項目欄に新たな名前が付け加えられた。『若宮 翼』……それはそんな名だったと言う。



この日、1人の『天災』と呼ばれた少女の運命が変わった。

## 『世界最強』を目指した少女

〈6〉

「おはよう篠ノ之さん」

「……おはよう若宮クン」

あの日から俺こと若宮 翼は彼女こと篠ノ之 束に『友達』認定を受けた様で、朝話し掛けるとしつかりと返事が貰える様になつてた。

「顔色はいつもより良いみたいだけどよく寝た？」

「……ろ、6時間位……」

「……まだまだ短めだけど進歩したね。偉い偉い」

「……子供扱いしないで……」

「まだまだ子供だよ、俺達は」

「むうう……」

嬉しくなさそうな声だが逆に顔はちよつぴり嬉しそうに笑つてい  
る。どうやら口より身体の方が素直な様だ。

「……ねえ、若宮クン」

「ん？なんですか？」

珍しく篠ノ之さんから話し掛けてきたので俺は彼女の目を見る。  
彼女は目を真つ直ぐ見られるのに少し動揺したらしく瞳が少し揺れ  
た。

「つ……コホン、わ、若宮クンに紹介したい私の『友達』がいるんだけ  
ど、会って、くれる？」

「良いよ」

篠ノ之の提案に俺はのる、彼女はどこかほつとした様で、どこか嬉  
しそうな顔をして喜んだ。

「良かった、じゃあ放課後に紹介するね。……その子の名前は『織斑  
チツユ 千冬』って言うから覚えておいて」

「了解、『織斑 千冬』さんね」

俺は彼女から伝えられた名前を記憶の片隅に留めておく。その時

担任の先生が来て朝のS H Rが始まる、いや朝の会だったか？ともかく先生が諸々の連絡事項を話す。俺は放課後までいつも通りに授業を受けいつも通り篠ノ之さんに話しかけて時間を過ごしたのだった。



「これより織斑千冬と若宮翼両名における模擬戦試合を行う。礼」

「お願いします」

「……お願いします」

目の前には竹刀を中段で構えた織斑千冬がおり、対して俺は竹刀を片手で持つて特に構える訳でもなく立っている。まだ『始め』の号令は掛かってはいないのだが、目の前にいる彼女からは肌にひしひしと感じられる程闘気というか殺気というか何やら気配がビシビシ飛んで来ており正直マジで俺は困惑していた。

……どうしてこうなった？

時は数十分程前に遡る。学校が放課後となり、俺は朝篠ノ之さんに言われた通り彼女の『友達』である織斑千冬と対面していた。

「じゃあ、紹介するね。この子が私の友達の織斑千冬ちゃん、私はちーちゃんって呼んでるよ。で逆にこっちが私に新しくできた友達で前から言ってた若宮翼くんだよ。あだ名は……まだ決めてない」

「……………」

「……はじめまして」

俺は一応ちゃんと挨拶をするが何故か対面している織斑彼女さんの反応は普通どころかどこか睨まれている様な気がしないでもない。俺には理由がさっぱり分からないがどこか彼女には気に入らないところでもあるのかも知れない。

「ねえ……」

「あ、はい。何でしょうか織斑さん」

何故か思わず同年代なはずなのに敬語で返してしまう。

「1つ良いか？」

「もちろん、構わないよ」

彼女は真剣な目を俺の目に向ける。俺はその目を逸らしてはならない、そう本能的に思った。だから俺はその目を正面から正々堂々受ける、やましい事なんてないのだから。

「……私と勝負しろ」

「え？」

「私と剣で勝負しろ。お前が東にとって『友達』として相応しいか確かめてやる。だから私に負けたら私はお前が東の友達とは認めない、代わりにお前が勝つたらお前が東の友達だと認めるし1つだけ言う事を聞いてやる。だから私と勝負しろ！異論は認めない」

「ええっ!??!」

いきなりの戦線布告と言うか挑戦状が叩きつけられ俺は戸惑うがそんな暇はくれないらしい。織斑さんは俺の左手と篠ノ之さんの右手を掴むとどこかに向けて歩き出した。

「ちよっ、どこに!??!」

「東の家、東の家は道場を開いてるからそこを借りる」

「マジで!??!」

織斑さんの篠ノ之家カミングアウトに俺は驚く、でそこに、

「そうだよ、私は興味が無いから習ってないけど私の家は『篠ノ之流剣術』っていう流派を持つ武道一族なんだよ」

「へー、って俺は今からそこに<sup>連行</sup>拉致されるの?」

「そうだ」「うん」

「……」

なんだかんだ篠ノ之さんも織斑さんを止める気はない様なので俺は観念して付いていく事にした。確かに後腐れなく織斑さんに『友達』だと認めて貰えるだろうけど、万が一俺が負けたらどうする気なんだろうか篠ノ之さんや?」

で、なんか道<sup>篠ノ之さん宅</sup>場に着いたら織斑さんが<sup>多分篠ノ之さんの父親</sup>師範らしき人に事情を説明

し、謎にトントン拍子に準備が整えられてただ場所と竹刀を貸してくれたら良かっただけなのに何故か師範以下門下生全員が見ている前でやる事になった。あと師範らしき人が「娘はやらん、織斑、手加減

無しでぶち……コホン、思い知らせてやれ」とか言ってたのは聞かなかった事にしよう、うん。

で、今さっきの上の所、ひとつ言わせてもらえるなら何度でも言う。どうしてこうなった？

「若宮クン頑張ってる」

「翼にいがんばってる」

篠ノ之さんと篠ノ之さんの妹、箒ちゃん（3歳）の声援を受け俺はそんな現実逃避から意識を元に戻す。あ、ちなみにいつ箒ちゃんと仲良くなったかってさっきまで準備中だったからその間に構ってたら懐かれたのだ。もちろん織斑さんの弟、一夏君（3歳）とも仲良くなつたが彼の方は姉である織斑さんを応援している。……なんかどこから「東だけでなく箒まで誑かすとは……許すまじ!!?」とか聞こえた気がするがやっぱり聞こえなかった事にしよう。

「覚悟は良いか?」

「大丈夫だと思うよ……なんか最近暇しないな……はあ」

あ、心の声が漏れた。

『始め!!?』

「はあっ!」

鋭い掛け声と共に大人顔負けの織斑さんの鋭い斬り込みを紙一重で躲す。……本当に織斑さん小学生？

カツ、カカカツ

薙、斬、突き、払い……どれを取っても大人に劣らぬ重さと鋭さを兼ね備えた一撃一撃を丁寧に片手の竹刀で逸らす。全て当たらないが……小学生で突きは辞めようよ。下手したら相手が死ぬよ? 剣道じゃなくて剣術だけどき。

「っ!!?..ならっ!」

「お、『三段突き』」

かの有名な新撰組の沖田総司の得意技『三段突き』、それを織斑さんは放つが俺はそれを全て対処して見せた。避けて避けて最後は逸らす、恐ろしい速さだが前世の敵と比べたらまだ『遅い』。

『ば、馬鹿なっ!!?..織斑の三段突きを捌いただと!!?』

『それ以前にまだ片手しか使っていないぞあの小学生』  
ざわざわ

門下生達が騒ぎ出すが俺は気にしない。とそこに織斑さんが話し掛けてきた。

「……………どうして反撃しない」

確かに俺は彼女の剣を完全に捌いてはいるが一撃も竹刀を彼女に向け振るっていない。

「様子見……………かな？」

「様子見……………だと？」

「そう、でも君の強さなら『少し』見せても大丈夫かな？だから……………俺は竹刀を構える。今度はこちらからいく。」

「耐えて見せろ」

ヒュッ

ガガガッ

「くうっ！」

「千冬姉!!？」

一瞬だ、一緒に俺は彼女の背後に現れる。なんとか彼女は全て防ぎ耐え切って見せたらしい。

「……………やるね。全部防いだんだ」

「……………なんなんだアレは……………」

『『三絃』』

『『三絃』』前世に習得した剣術で一瞬で太刀筋を『突き』『切り上げ』『切り下げ』の3つに変化させる高速の連撃である。全力で放った訳ではないがある程度力を入れた、それを全て初見で防いで見せたのだから彼女の剣才はかなりのものである。

「……………一体どこでこんな『技』を」

「昔通りすがりの宮廷長に教わった」

「馬鹿な……………」

嘘は言っていない、嘘はね。だって前世だもん。

「まだやる？やるなら次は「双剣でくる？」……………良く分かったね」  
彼女は竹刀を構えつつ言う。少し痛そうな感じだ。

「……ずっと疑問だった、何故片手で竹刀を握ってるのか。でもそれは多分お前の基本形態が両手に武器を持った双剣使いだからだ、1本だけでくるのはあくまで自分の過剰な力を抑える為、違うか?」

「御名答、全くその通りだよ。言い当てられる君も充分『化物』だね」  
「……ふん、更に『化物』なお前には言われたくない」

「あらら、酷い言い方で。取り敢えず篠ノ之さん、もう1本竹刀を……」

「はい」

「早いね……ありがとう」

「どういたしまして」

竹刀が刺さっている箱に一番近くにいた篠ノ之さんに竹刀を取って貰おうと声を掛けようとしたらいつの間にか差し出されていた竹刀を受け取る。マジで早いな……俺の考え読んでない?

俺は右手の竹刀を順手で持ち、左手の竹刀を逆手で持つ。これが俺の双剣の時の通常の構えだ。

「……変わった構えだな」

「でしょ? 誰かを守る為には1本じゃ足りなかったんだよ。自分を守る為と誰かを守る為にのもう1本、合計2本剣が必要だったんだ」

これも前世で考えた構えと型だ。実践の織り込み済みの型、ただの思い付きの構えとはレベルが違う。

「行きます」

「来い」

最初に動いたのは織斑だった。先程俺が放った『三絃』、それを彼女なりに再現した連撃を俺は双剣で弾き躲す。心なしか彼女の動きのキレが最初より遥かに良くなっている、鋭さ重さ共に最初とは比ではない強さだ。しかも彼女は楽しそうに『微笑んで』いる。

「たあつ!!?」

シヤツガガガカカカツ

突き薙ぎ払い斬り上げ斬り下げ、変幻自在の剣技、まさに美しき『刀剣乱舞』を俺は全て捌いた。弾き躲し逸らし、その全てをだ。

「これでっ、いっけえっ!!?」

『三段突き』からの『三絃』の多重連撃、まさしく彼女の全身全霊を込めた最高の『技』。

「……やるじゃないか、でも」

前世『双剣使い』の名は伊達じゃない。

……全て潜り抜けた。最後の一撃を紙一重すれすれで躲し順手に持ち替えた左手の竹刀で彼女の竹刀を打ち上げ右手で彼女に突き付ける。コートの外に落ちた竹刀の濁いた音が響いた。

「……俺の勝ちだ。織斑」「私の負けだ……若宮」

俺の言葉と織斑の言葉が被る。彼女は負けがとても清々しい顔をしていた……そして同時にそれはとても綺麗な微笑みだった。

『や、止めっ。勝者若宮 翼』

俺は竹刀を下ろす。そこに未だかつて見ぬハイテンションと化した篠ノ之さんと箒ちゃんが入り込んで来た。

「若宮くんっ！」

「翼にいつ！」

「ぐふっ、……2人とも……ちよつとタツクルがきつすぎるよ……あと汗もかいてるからやめた方が……」「やつ」……はあ」

嬉しいのは分かるよ？でも俺のHPがもう7割切ったよ君達のタツクルで。

逆に織斑の方は、

「千冬ねえ……」

「ふふっ、ごめんね一夏。お姉ちゃん負けちゃった」

「そんな事どうでもいいもん、千冬ねえ！」

「よしよし、ありがとうな」

彼女が弟を撫でていた。

「若宮」

「ん？何織斑……さん」

「言いにくそうだな、『千冬』でいい」

「じゃ、千冬さんで」

「……苗字は呼び捨てなのにか？まあいい、約束だ。お前を束の『友達』だと認める。要望はなんだ？1つだけ聞いてやる……約束だから



な」

千冬さんは俺にそう言う。ならばと俺は一夏達の話聞いてついさつき思い付いた事をお願いする事にした。

「じゃあこれからは『1日1度は俺の家で食事を一緒に摂る事』で」  
「え?」

千冬さんは思いもしていなかったお願いに目が点になる。一夏の方は嬉しそうに笑った。

「翼にい、良いの!?」

「うん、大丈夫だよ一夏君」

「ちよっ!?? なんの話をしている話についていけないんだが……」

「簡潔に話せばウチはさ、両親が共働きだから毎回晩御飯は俺が作るんだけど妹とだと毎回余るんだ。それに一夏君も千冬さんと2人つきりで晩御飯を食べてるみたいだからついでに4人で食べてしまおうっていう話。母さんも多分了解してくれるだろうから食べに来てよ、作り甲斐があるし」

「……………」

千冬さんは少し上目遣いになりながら聞く。

「……………良いの? 本当に?」

「うん、妹も2人つきりじゃ寂しいって言ってたし千冬さんだって大変なんですよ? 利害の一致はしてるし『約束』は守ってもらうからね?」

「……………うん、分かった。これからお邪魔させてもらう……………」

「なら帰ろっか、千冬さんと一夏君も一緒に」

「わーい! またね東ねえ! 箒!」

「バイバイ! 翼にい! 千冬ねえ! 一夏!」

帰ろうとした俺に篠ノ之さんが近づいて来る。

「後片付けはしとく、ちーちゃんを下の名前で呼ぶなら私も束って読んで」

少し不機嫌そうに彼女は言う。

「分かった、じゃあね『東』さん」

「!……………またね!」

名前で呼んであげると彼女は喜んでくれた。

そして帰る途中、

「若宮、……不束者だがこれからは宜しく頼む」

「こちらこそ、千冬さん」

そしてその日からの若宮家と織斑家の食事は賑やかになった。

『世界最強』を目指した少女 — 織斑千冬 side —

〈7〉

初めは驚きと不信感からだ。突然ここ最近私の目から見ても明らかなくらい孤立してしまっていた親友である『篠ノ之 東』が新しい『友達』ができたと言ってきたのだから当たり前だろう。

素直に言えは、私はとても驚いた。相手が例の新しく転校してきた少年であり、それ以上に、最近彼女が見せる事がなかったその優しい微笑みをその少年に向けていたのだから……。



「じゃあ、紹介するね。この子が私の友達の織斑千冬ちゃん、私はちーちゃんって呼んでるよ。で逆にこっちが私に新しくできた友達で前から言ってた若宮翼クンだよ。あだ名は……まだ決めてない」

「……はじめまして」  
「……」

その日、私は親友（腐れ縁）である篠ノ之 東に彼女にとって随分と久しぶりにできた彼女の新しい『友達』と顔合わせをしていた。

身長は私と同じ位、黒髪で色白、瞳の色は黒に近い深い紫色で身こなしや手の平にある剣だこからかなり鍛えたであろうが悲しかな肉が付きにくい体質らしく見た目はよく分からない。いわゆる隠れ細マッチョである。

「……………」

よくよく観察してみると彼もまた自分を観察していることに気が付いた、ただ私の様に身体付きとかの観察ではなく彼の場合は私の様子を見ている様ではあったが。

コイツ……何を見ている？

一瞬、身体に不思議な感覚が走りすぐに消える。だが直感で私は彼が私に何かをしたのだと分かった。

「ねえ……」

「あ、はい。何でしょうか織斑さん」

声を掛けてみると何故か敬語で返される。確かに私は顔は少しきついらしいし言動も威圧感を与えやすいようだが初対面でそんな反応をされるのはあまり慣れない。それに未だ何故コイツに束が心を開いたのかがイマイチ分からない。

「1つ良いか?」

「もちろん、構わないよ」

だがそれはすぐに分かった。何故なら私がそう質問した時、彼は真っ直ぐに私の目を見たのだ。その瞳に偽りのない、誰よりも澄んでいて誰よりも誰もが持つ光と闇を映して、そして彼は内包したソレを当たり前のようにしていたのだから。

ああ……成る程、だからコイツはアイツ束の事を『バケモノ天』としてではなくアイツ束自身だと認識できるのか。

本当に『バケモノ』だと思う。……少なくとも小学生が辿り着いてはいけない境地、人の美しいところも、醜いところも、希望も、絶望も何もかも『見て』きた者だけが辿り着いく真理。世界を、人の行く先を見る道標、そんな物を彼は既に持っていたのだから。

だからこそ、私は彼に問いたい。

「……私と勝負しろ」

「え?」

「私と剣で勝負しろ。お前が束にとって『友達』として相応しいか確かめてやる。だから私に負けたら私はお前が束の友達とは認めない、代わりにお前が勝ったらお前が束の友達だと認めるし1つだけ言う事を聞いてやる。だから私と勝負しろ!異論は認めない」

自分勝手なのは理解している、それでも私は彼に聞きたかったのだ。その思いを、その願いを、その彼が見るその先の景色を『剣』で。私は剣を振るくらいしか能はない、でもだからこそ私は剣を交えれば分かる事ができる。

私は未だかつてない程自分自身のその剣気が高まるのを感じた、彼は間違いなく強い。それを彼自身がかかなり上手く隠蔽しひた隠しに

しているが私の生来から持つ高い『直感』がそう告げていた。

ああ……、彼ならば私も『全力』で剣を振るえるかもしれない。

ここ数年、歳上である門下生でも道場主である師範でさえも相手にする時に何処か『ツマラナイ』と感じてしまっていた私はいつの間にか彼にそんな確信めいた事を考えていた。

私は彼と束の手を掴むと篠ノ之神社にある道場で場所と竹刀等を借りる為に強制連行して行く。

「ちよつ、どこに!?」

「束の家、束の家は道場を開いてるからそこを借りる」

「マジで!?」

いきなりの事に混乱しているであろう彼の質問に私はそう答える。

「そうだよ、私は興味がなから習ってないけど私の家は『篠ノ之流剣術』っていう流派を持つ武道一族なんだよ」

「へー」

そして私の言葉を束が補足し詳しく説明すると彼は何かに気付いたらしく、

「……って俺は今からそこに拉致連行されるの?」

「……」

「そうだ」「うん」

と私と束は事実なので迷う事なく見事な同調でそう言い切った。

「……」

なんだかんだ束も止めようとはしないようで彼も観念して諦めたらしく大人しく付いて来る2人の腕を握り私は先頭を歩く。今更だが、もし彼が私に負けたらどうするつもりなのだろうか? 確かに見た感じかなり強いだろうが私とやり合って勝てるかどうかは分からないう、これは単純にそれだけ彼の事を『信頼』しているだけなのだろうか? はたまたまただの馬鹿なのだろうか? ……多分私は両方だと思う。

ただ私は驚いた、何故なら『あの』束がそれだけ若宮翼<sup>彼</sup>に対してそれだけの信頼を寄せているという事が信じられなかったからだ。

そして、その時私が抱いていたのは若宮翼に対する『嫉妬』だ。今だからよく分かる、あの時私は彼に嫉妬していたのだ。束と長い間の

『腐れ縁』であった私よりも、つい最近『友達』になつてばかりの彼の方が束に信頼され更に彼女は彼の事ばかり見ていたからからだ。しかもその時それを自覚出来ていなかったのだから夕チが悪い、私はいつの間にか当初の目的から大きく離れてただの私怨で彼と剣を交える氣になつていたのだ。

……そしてその考え諸共私の剣が斬り裂かれるのはその試合の中である。



試合を始めて、ようやく彼が本氣双剣で来るようになってから、私は人知れず微笑笑つてんでいた。

楽しい、私が全力を出しても打ち合えている事が。

嬉しい、私を受け止めてくれる相手貴方がいる事が。

全力を出す為身体を稼動限界ギリギリまで稼動させ、1撃1撃が『必殺』足り得る刺突斬を連続かつ最高速度で放つ。2振りと1振りの竹刀刃が交差し続け断続的に打ち合う音が私と彼の2人の狭間に響く。

決め切れない……か

竹刀を振るう間に私はそう思う。どの1撃を取つても必殺とも言える剣戟の中を彼はその手に持つ2振りの竹刀を駆使使し逸らして受け流し、躲し、時には受けて軽やかに舞い踊る。

これは私と彼の剣の舞い、一寸の、寸分もの狂いも許されね奇跡の美しき私と彼だけの『舞踏会』。

絶える事なく斬り結び、1撃も被弾する事無く切り抜ける。  
熱く情熱的に舞い、静かにその音色に身を委ねる。

私はそれが永遠に続けばいいと思つた、このまま心地良い彼との舞いで心を通わせていたかった。しかし私の身体はそれを許さない。身体の出来ていない、たった10歳の身体ではこれ以上の全力稼動は危険だったからだ。

これで……最後、ならばここで私の今までで最高の剣を見せねば彼に失礼だ。

「……いぐじ」

小さくそう呟き、まるで弓を引き絞るかのようにして力を溜める。

「はっ!!?」

そしてそれを瞬時に解放し間合いを省略、縮地の果てにその速度を乗せた三度の刺突、『無明三段突むみやうさんだんつきき』を放つ。

それを彼は最小の動きで逸らす、だが逸らされるのは想定内、だからっ！

ヒュウツ

『三段突さんだんつきき』からの『三絃』の多重連撃、全身全霊を込めた彼に捧げる今自分が放てる最高の『技』。

「これでっ、いっけえっ!!?」

神速の剣劇、ほぼ同時に6度の攻撃が彼に襲い掛かる。

「……やるじゃないか、でも」

私は目を疑うような光景を目にした。6つの点と線の攻撃、防御? 論外。回避? 不可能。そんな『嵐』中を彼は前に踏み出したのだから。

刺突を捌く、前へ

下段からの切り上げをずらす、前へ

そして最後の上段からの切り下げを受け流し前へと、私に向かって突き進んできた。

カーンツ

私の握る竹刀が軽々と弾き飛ばされる、技を放った後の握力が緩まる一瞬を突かれたのだ。

バケモノか、そう言葉で説明するのは簡単だがそれを実行する為には神業とも言えるだけの技量とその裏打ちされた経験という名の直感、更に相手の剣の柔と剛を完璧に把握していなければ不可能な芸当である。勿論、私にはそんなことはできない。そもそもその神業ともいえる技量に裏打ちされた経験が無いのだから。

コートの外に落ちる竹刀の乾いた音が響き目の前には彼の竹刀の先端があった。

……ああ、認めよう。貴方は私なんかよりずっとアイツ東の傍に相應しい者だ。

「……俺の勝ちだ。織斑」「私の負けだ……若宮」

『や、止めっ。勝者若宮 翼』

審判をかってでてくれた先生には悪いが私は彼、若宮翼には勝てなかった。それでも私は負けたというのに心は何処か晴々としていて、もう私には慢心も無ければ嫉妬も無い。そんなもの彼との舞いには必要無かったのだから。

「千冬ねえ……」

「ふふっ、ごめんね一夏。お姉ちゃん負けちゃった」

一夏が少し寂しそうな顔をする。私は一夏を守る為にもう負けな  
いと決めた、でも負けてしまった。それでも不思議と後悔はないがそ  
の一夏の顔だけは心を痛めさせた。

「そんな事どうでもいいもん、千冬ねえ！」

「よしよし、ありがとうな」

だが一夏は強かった。慰める言葉を探していた私のほうが一夏に  
慰められてしまったのだから……。まったく姉としては減点ものだ  
な……。

「若宮」

「ん？何織斑……さん」

「言いにくそうだな、『千冬』でいい」

「じゃ、千冬さんで」

「……苗字は呼び捨てなのにか？まあいい、約束だ。お前を束の『友  
達』だと認める。要望はなんだ？1つだけ聞いてやる……約束だから  
な」

決めたからには落とし前はつけねばならない、私は若宮にそう聞い  
た。すると何ともまあ驚くべきお願いをされる事になった。

「じゃあこれからは『1日1度は俺の家で食事を一緒に摂る事』で」

「えっ？」

私は思いもしていなかったお願いに目が点になる。逆に一夏の方  
は嬉しそうに笑った。

「翼にい、良いの？？」



「うん、大丈夫だよ一夏君」

「ちよっ!?? なんの話をしている話についていけないんだが……」

「簡潔に話せばウチはさ、両親が共働きだから毎回晩御飯は俺が作るんだけど妹とだと毎回余るんだ。それに一夏君も千冬さんと2人つきりで晩御飯を食べてるみたいだからついでに4人で食べてしまおうっていう話。母さんも多分了解してくれるだろうから食べに来てよ、作り甲斐があるし」

「……………」

何ともまあ……あれだ、予想外すぎるな……

だがその時私は間違はなくそれに嬉しく思ったのだ。

「……………良いの? 本当に?」

「うん、妹も2人つきりじゃ寂しいって言ってたし千冬さんだって大変なんですよ? 利害の一致はしてるし『約束』は守ってもらうからね?」

「……………うん、分かった。これからお邪魔させてもらう……………」

「なら帰ろっか、千冬さんと一夏君も一緒に」

「わーい! またね東ねえ! 箸!」

「バイバイ! 翼にい! 千冬ねえ! 一夏!」

一夏が私の手を引いて若宮のところまで連れて行く。そして彼は私にその手を差し出した。

「行こうか、千冬さん。ウチのこれからの夕食に招待するよ」

私はその手を取る。その構図は初めに私が彼と束を連れて来た時の構図とは逆で、何処か私に運命を感じさせた。

黄昏色に染まったその道中、

「若宮、……………不束者だがこれからは宜しく頼む」

「……………そ、千冬さん」

そしてその日からの若宮家と織斑家の食事は賑やかになった。そ

して、  
私は……。

## 5年生の夏のある日

〈8〉

さて、織斑姉弟きょうだいが俺の家で夕飯だけでなく時には朝食や昼食も一緒に食べる様になって暫く、学校は長い様で短い夏休みに入っていた。

これはそのとある日の朝の出来事である。



7月某日、早朝6時、篠ノ之神社道場にて

「せいっ!!?」

「なんのっ!!?」

ビシバシッ、ビシバシバシッ

道場におけるもはや日課というか日常となった織斑 v s. 若宮の  
実践式掛かり稽古が行われていた。

打つ、弾く、突く、逸らす、斬る、躲す……

2本の竹刀が目にも留まらぬ速さで空を斬り、対処される。見てる人から見れば本当に小学生なのか疑いたくなる程のレベルの剣の応酬がもう既に半時間は経過していた。

「これで、倒れる翼!!?」

「まだ負けない!!?」

どれだけ互いに打ち込んでも有効打に成り得ない一進一退の斬り合いはなお続く。

「ふわあ……、凄いね。ちふゆねえ千冬姉と翼兄ついにい」

「う、うん。私達が素振りを始める前からずっとやってるからもう20分くらいしてるんじゃないかな?」

「正確には32分と14秒だよ、いつくんいつくんに箒ちゃん」

「束さん」「お姉ちゃん」

そして隣で基本稽古をしていた一夏と箒の元もとにいつの間にか束が

現れる。服装は薄い蒼のワンピースで髪は黒いゴムでひとつに纏めてあった、所謂ポニーテールいわゆるって言うやつである。

「2人共5時半にはここに来て掃除、準備体操、ランニング、基本稽古を済ませて今この掛かり稽古だからね……。……。本当、私が言うのもなんだけど2人共人間辞めてるよね〜」

「あははははは……」

そう言った束の言葉に一夏と箒は引き攣った苦笑いを溢す。まさに目の前の3人を言い表すにはびつたりの言葉だったからだ。但し、その過程は3人共違う。

まず束は元からの人外、人類史の数百年先はいくその天才的頭脳に肉体も細胞レベルで人を超越した天才を超えた『天災』。

千冬は肉体系においては束すら超える能力を持ち、全ての戦闘における特に近接戦においては世界最強足り得る戦闘センスを持つ努力相乗効果型の天才。

対して翼は特に天才と言える才能はほぼ無いものの、3桁を超える経験から導き出されるほぼ当たる『直感』と実践にて擦り合わされ実用化された技術、そしてそれを十分に活かし切るだけの頭の回転の速さとその応用力は積み重ねられた彼の人生そのものであり、2人の天才達に引けを取る事はない。

パシイッン

「お、決まった」

と丁度決着がついたらしい。結果は翼の竹刀が千冬の頭ギリギリで停止しており千冬の竹刀は翼の胴手前で止まっているので僅か零コマ数秒の差で翼の勝ちである。試合所要時間37分27秒42の持久戦であった。

「ふう……また負けた……」

「でもかなり危なかったよ。特に27合前の2段突きからの切り上げは」

「だがお前は躲しただろう。しかもそこから小手を狙ってくるとは予想外だ」

「そうでもしなきゃ千冬さんに一泡吹かせないじゃないか。最後は結

局シンプルな面か胴でしか有効打入らないんだし」

何故有効打として入りそうな突きがないかというところ、以前千冬が翼相手に突きで有効打を決めようとした時防御した2人の竹刀が内部から吹き飛んだ事があるのだ。それ以来2人は破片とかが危険なので突きでの有効打は余り狙わない様にしていく訳だが……東や一夏、箒からすれば十二分有効打狙ってるだろそれっていうレベルのものではある。

「さて、もう6時みたいだから朝食にウチに来る？千冬さんと一夏君は当たり前だけど東さんも箒ちゃんも」

「いいの！？行く行く！！？」

「お姉ちゃん……興奮し過ぎ、良いんですか？」

「構わないよ、栞も喜ぶし沢山人数がいた方がこういう時は美味しく感じれるから」

「じゃあ……お邪魔します翼さん」

「どうぞ、じゃあ戸締りしてから行くうか。千冬さんは窓の鍵確認して、2人は先に着替えておいで後は俺達がやっておくから」

「二分かった」

2人は道着から着替える為に更衣室に走って行く。

「つー君♪」

「うわっ、なんですかいきなり？汗かいてるのでくっ付かないほうが良いですよっ」

「寧ろこのままがいい。クンクン、つー君の匂いだっ」

「やめなさい、ばっちいでしようが」

「やっ！！？」

背中に抱きついて来た東が翼の背中にぐりぐりと顔を当てる。汗をかいていてあまり清潔とは言えないので引き剥がそうとするがなかなか外れない。しばらくそんな格闘を続けていると唐突にひよいつと背中の拘束が取られた。

「た、東！！？お前翼に何をしている！！？」

「もー、ちーちゃん邪魔しないでよ。今つー君の匂いを嗅いでたのに……」

「嗅いっ!??お前それは協定違反だぞっ!??」

「だってちーちゃんは剣の稽古としてっー君を独占してるじゃん。ちーちゃんばっかりズルい」

「うっ、それは……。じゃあお前も一緒にすれば良いじゃないか!!?」

「やだ、つまらないもん」

「たくばくね〜!」

束の襟をまるで猫の首元を掴むかのように釣り上げた千冬は道場の端まで彼女を引き摺って行くと何やら2人で話し出す。身体強化の魔法で聴力を強化すれば何を話しているか聞こえなくもないが聞いてはいけないような直感がするのでやめておく。

「こほん……。2人共、もう行くよ?俺も早く帰ってシャワー浴びたいし」

「すっ、済まない翼」

「ゴメンっー君」

「良いですけど次は気を付けてね?」

「はーい」

取り敢えず2人が言い合っている間に片付けを終わらせて2人に注意する、丁度着替えて来た一夏と箒が帰ってきたので丁度良かったのである。

「んじゃま、行こうか」



朝7時、若宮宅にて

「ふう……。スッキリした」

「出たか翼、次は私が入らせて貰うぞ」

「どうぞ千冬さん、朝食の用意はしとくよ」

「頼んだ」

シャワーを浴びてサツパリしてきた翼はジャージに着替え居間にリビング出てきて、立ち替わり今度は千冬がシャワーを浴びに部屋を出て行く。待っていた一夏と箒は起きて来ていた栞と遊んでおり、束はそれ

を居間のテーブルに肘をつきながらながめていた。

「あ、お兄ちゃんおはよう!!?」

「葉おはよう、朝ご飯は何が良い?」

毎朝の朝食のメニューは『箒↓葉↓一夏↓東↓千冬↓初めに戻る』の順でリクエストの元翼が作っているので今日は葉にリクエストを貰う日なのだ。因みに元々翼は東と千冬をこのサイクルに入れる事を考えていた訳ではないのだがちゃっかり2人は一夏達3人がジャンケンで決めようとしていた中に潜り込みサイクルに入る事に成功し今に至っている。(なお、流石に姉としての自覚があった為苦渋の決断ではあったが初めの順番は妹達<sup>弟</sup>に譲った)

「んーとね、ゴハンが良い!」

「オカズは?」

「卵焼き!」

「分かった、今すぐ作るよ」

「二「わーい」」

リクエストを聞いた翼は居間<sup>リビング</sup>に隣接するキッチンに入るとまず昨晚のうちから予約炊飯をしていた御飯を確認する。

うん、しつかり炊けていた。

次に御飯を蒸らしている間にIHクッキングヒーターの電源を入れフライパンを置き、ある程度熱する間に卵を幾つか割って出汁と共に掻き混ぜておく。

「んー、冷蔵庫に具になりそうなのは……あ、昨日切った葱<sup>ネギ</sup>があったわ。あれ入れよう」

ガサゴソある程度整頓された冷蔵庫の棚を動かしパックに入れてあった刻んだ葱を引っ張り出す。丁度フライパンが温まり終わったので卵焼きを焼き始めた。

「♪」

『Fly Me to the Moon』を鼻歌で歌いながら卵をひっくり返し、そこに新たな卵を注ぎ足して葱をまぶす。それを幾度か繰り返しとそれなりに太く長い卵焼きの完成である。あとは一口サイズにカットしてついでに味噌汁を添えれば、はい完成。若宮翼謹

製『出汁巻き卵定食』の完成である。

「できたよ、葉、一夏、箒、手伝って」

「はーい」

「束さんも手伝う」

お子様3人とちよつと大きいお子様1人の手を借り居間リビングにある食卓に6人分の朝食を並べる。

「ふう……お、準備がもうできていたか……」

「丁度今できたところだよ、さ、早く座って」

「うん、分かった」

丁度シャワーを浴びて着替えてきた千冬が戻って来たので皆んな席に着き手を合わせる。

「じゃ、皆んな、いただきます」

「いただきますすつ!!?」

「いただきます」

「いただきます!」

出汁巻き卵を一口、うん、美味しい。他の5人も「美味しい」と言つて食べてくれているので嬉しい限りである。

「うくん……良い匂い……」

「あ、母さん。おはよう」

「もぐもぐ……、ママおはよー!」

まだ眠そうに瞼を擦りながら居間に入って来た女性の名はわかみや『若宮 琴乃』、研究者であり翼と葉2人を育てる二児の母だった。

「おはようございます、琴乃さん。お邪魔しています」

「おはようございます、私もお邪魔しています」

「おはよく、良いのよ千冬ちゃんに束ちゃん、それに一夏クンに箒ちゃんも遠慮しないでね」

「おはようございますトノさん!!?」

そう挨拶をしつつも白いパジャマを来た琴乃は眠いからか若干フラフラとしながら翼のいつも通り立ち上がっていた元に向かう。

「ふあゝああ、翼あゝコーヒ」

「はいはい、これ、甘くて熱いヤツだよ」



「ありがと〜」

毎回の事なので手慣れた翼がコーヒーを渡し、寝癖のアホ毛を黒い長髪のいたるところからピョンピョン跳ねさせながら琴乃は甘いコーヒーをズズズツと飲みつつソファアーに腰を下ろす。

「ああ……おいちー、相変わらずグッドな味だね翼」

「なら良かったよ母さん。ところでいつ帰ってたの？気付かなかったんだけど……」

「3時位かな、シャワーだけ浴びて部屋で寝てたから」

「身体には気を付けてよ、俺と葉の母さんは1人しかいないんだから倒れたら嫌だよ?」

食べ終わった食器を片付けつつ席を立った翼はそう言う。

「ありがと翼、心配してくれて。オカーサン嬉しいよ」

「当たり前でしょ、家族なんだから」

「……これ素でやってるんだよね?だとしたらオカーサン怖いよ。千冬ちゃんや束ちゃんが落ちた訳だ……」

「?、なんの話?」

「「何でもない(よ)(ぞ)!!?」」

「お、おう……」

理解してはいないものの琴乃の呟きを聞いていた翼が聞き返すと琴乃だけでなく何故か顔真っ赤にした千冬と束の2人にも何でもないと言われる羽目になり、

「お兄ちゃん鈍い」

「鈍いです」

「?」

それを見た小さい3人組(上から葉、箒、一夏)にも駄目出しを食らっていた。(同じく理解していない一夏を除く)

「なんでさ?」

「……教育間違えたかなあ?」

そしてこの親子2人の心からの声もかなり切実なものだったのだった……。

## メリークリスマス

〈9〉

クリスマスとは12月25日のイエス・キリストの降誕を祝う祭のことであり、日本においてはクリスマス・イブからクリスマスにかけての夜に子供にプレゼントを贈る日の事である。

そして今日はその聖夜の前日クリスマス・イブ、クリスマス一色に染まった街の一角に翼達兄<sup>姉</sup>3人組はいた。

「ふう、寒いね」

「ああ、今は冬で12月だからな」

「今年もあとちよつとだねえ」

黒いコートに赤いマフラーを巻いた翼を挟むように白いコートを着た千冬と薄い青のコートと同じく青い毛糸で編まれた帽子を被る束が歩く。3人のコートは色は違うものの型が同じのお揃いである。「さて、じゃあ早いところ『買い物』を済ませて家に帰ろうか。一夏達が待ってるし今夜の夕食の準備もしないといけないし」

そう、今日3人がわざわざ街の商店街にやって来た理由は一夏達弟や妹達のクリスマスプレゼントを買う為である。

「えつと……、確か一夏が欲しがってたのは『超便利、手入れ簡単調理セット』で、箒ちゃんは『新しい竹刀』、栞は『大きなクマの人形』だったっけ？」

「ああ、一夏のは通販で売っていたのを買っておいた。梱包もしてあるからあとは箒と栞のを買えば問題ないぞ」

「了解、じゃデパートにでも行くか。あそこなら大体揃うし」

「レッツゴ」

3人はデパートに向かった。



デパートにて

「うーん、クマのぬいぐるみってこんなのが良いのかな？」

「わ、私に聞くなよ……。束はどう思う？」

「ちーちゃんにつーくん、私はこれが良いと思うよ!!？」

「いや、それクマじゃなくてウサギじゃん」

「ええー、確かにそうだけど手触り良いんだよ？触ってみる？」

「へー、確かに……」

「おい、翼……目的がずれてるぞ……。ハア……。翼、コレにしておくぞ」

「モフモフ……ん、分かった。値段は……1万6,500円＋税……」

「高っ」

「高いね」

「ま、良いか」

「「良いのかよ!?!？」」

と、いう感じに3人組のプレゼント選びは順調(?)に進む。最後に箒の新しい竹刀を買う為にスポーツ用品店に入り千冬チョイスの女の子らしく実用性の高い小物や竹刀の手元に桜が彫ってある竹刀を購入し、3人はフードコートでジュースを飲みつつひと息休憩を取っていた。

「結構買ったね」

「箒と葉のプレゼントに今夜の夕食用の食材、3人でも袋で両手がふさがる量だな」

「多いね、ねー、ちーちゃん。私力弱い子だからさー、持ってくれない？」

「さて、アイアンクローが良いか絞め技が良いか……」

「カルイナカルイナ、ウフフ、ワタシ、チカラモチダカラダイジョウブだよ、ホントだよ?じゃっ!!？」

「あ、先帰っちゃった……」

「全く……仕方ない奴だ。まあ荷物だけは持って行ったから許すが」

ふう、と千冬はため息を吐きながらそう言う。それでも持つ物をちやつかり一番重くないプレゼントを選ぶあたり彼女もまた重いのは嫌なのだろう。

2人並んで商店街を歩く。

ふと翼が千冬に視線を向けてみると彼女の視線はとある店のショーウィンドウに向けられていた。

「どうしたの?」

「あつ、いや、何でもない。さ、行くぞ」

「……うん」

声を掛けると千冬は何かを誤魔化す様に焦った声で翼を促す。翼も再び前を向いて歩くがその寸前、彼女が『何』を見ていたのかを翼はしっかりと見たのだった。



夕食、若宮宅のリビングにある机の上には沢山の料理が所狭しと並んでいた。七面鳥の丸焼きにドイツ風ソーセージ、フライドポテト、ピザ、ローストビーフなど買った物も多いが大半は翼が腕によりを掛けて作った傑作である。

「美味しい?」

「」「美味しい!!?」「」

「お、おう、なら良かった」

山程用意してあつた筈の料理があつと言う間に皿だけになる。

あれ? いつの間にか七面鳥の丸焼きが骨だけになってるけどいつ食べたんだ? ピザも既に4皿くらい無くなってるし……目、疲れてんのかな?

そんな細くて小さい身体の何処に食べた物が入ってるんだ? と本気で考えてしまう位5人はよく食べる。

「……さて、ケーキの準備しとくか……」

思ったより1時間程早く出番が来そうなケーキの準備に翼は席を立つのだった……。



午前3時29分

「……ようやく寝たか」

むくりと自分の用のベッドから起きた翼が着ていたのは真つ赤のサンタ服、千冬や束、一夏、箒はクリスマスツリーのある1階の客間で寝ておりその扉を少し開けて全員が寝た事を確認する。

栞のは先に置いてきたけど、一夏は「サンタさんが来るまで絶対寝ない!!?」とか箒は「サンタさんが本当にいるか見る」とか言つて2時位まで粘つたからな……、見張りの千冬や束が先に寝ちゃったし。

身体強化魔法と風魔法を併用、足音が鳴らないよう、もし鳴つても気付かれないよう細心の注意を払つて4人の枕元まで歩く。白い袋から一夏と箒のプレゼントを取り出しツリーの下に置いた。

「さて……」

次は……



12月25日朝、クリスマス

私は隣で寝ていた一夏達の声で目を覚ます。すっかり欲しかった物が貰えたやらなんやら朝から元気で騒がしいが今日くらいはいいだろう、なんとたつて今日はクリスマスなのだから。

「……朝か」

「あ、千冬姉。おはよう!!?」

「おはよちーちゃん」

「おはようございませす千冬さん」

「おはよう、それはサンタさんからのプレゼントか?」

仕掛け人の1人である自分がわざとらしいかもしれないが一夏に向けてそう言う。一夏は嬉しそうに掲げるようにしてプレゼント調を見せた。

「うん!これでつー兄と一緒に料理ができるよ!!?」

「良かったな」

「私は新しい竹刀と面タオルでした」

桜模様の入った竹刀と面タオルを抱き締めて嬉しそうに報告してくれる筈の姿を見て少し恥ずかしくなる。選んだ物を気に入ってくれたので良かった。

「そう言えば束姉の他にも千冬姉のプレゼントもあつたよ？」

「ん？本当か？」

「うん、ほら」

用意した覚えがない自分のプレゼントを一夏に渡される。よく分からないが私はプレゼントの小箱を開けてみた。

「えっ……っ？」

綺麗に梱包された小箱に入っていたのは銀鎖を通した銀色の指輪、指にはめる為の指輪でなくペンダントとして首に掛けておくアクセサリーである。

だが驚いたのはそこではない、驚いたのはソレを昨日見たからだ。昨日ショーウィンドウに飾られていた少し高めのアクセサリー、確かに欲しいとは思った。だがそれを知っているのは誰もいない筈……、

そこまで考えてただ一人だけ知っていた可能性がある人物の顔が浮かぶ、それは

「翼か……」

あの時隣で歩いていた翼しか居ない。

「……ばれていたか」

上手く誤魔化したつもりだった。それでもあのサンタクローズ彼にはお見通しだったらしい。

「あれ、千冬姉、顔赤いよ？風邪？」

「いや、……そうかな？そうかも知れないな」

「大丈夫なの？」

「大丈夫さ、さて朝ご飯に行こうか」

顔が赤くなっているのは風邪を引いたからだ、身体の芯からポカポカしているのも風邪の所為だ。なら私に風邪をひかせた奴には責任を取って貰わなければならない。

「っー兄!!？朝ご飯は!!？」

一夏達がりビングに入る、そしてそこに全ての彼元凶が居た。

赤いコートに黒ベルト、赤い三角帽子の先にあるのは白い玉、大きな白い袋を持った子供達に夢と希望を与える幻想<sup>架空</sup>上の子供<sup>私達</sup>にだけの正義の味方、それに扮した彼は笑って言う。

「メリー、失礼。呼びかけに応じ参上したサンタクロースのお兄さんだ。さあ、じゃあみんな一緒に」

メリークリスマス!!?

転換期、そして……

〈10〉

あれから2年経ち3人仲良く小学校を卒業し新たに中学1年生となった今日この日、俺は今……

「さて、説明してもらおうか翼？」

「ウフフフツ、逃がさないぞおーつー君？」

篠ノ之道場の物

真 剣を片手に持った千冬と何東やらよくわ印からない棒達み改たいな物造を持った束スにタ囲まれていた。……しかも2人共顔は優しく微笑ンんでるロツのに目が笑ってない。

「い、いや、おふたりさん？兎に角そのヤバそうなブツは仕舞ってくれませんか？オレハマダシニタクナイ……」

あまりの怖さに逃げたくとも背後は自室の壁、右は刀を持った千冬、左はスタンロットを持った束、正しく『前門東の虎冬に後門千に狼』……今使える限り全ての魔法を使っても何故だろう？今のこの2人からは絶対に逃げられない気がする……。

「む、今『魔法』で逃げようとしたらどう？したよな？」

「さあて、つー君ヒドイよ。束さんも知らない『魔法』なんてモノを使えるのに親友の束さん達に教えてもくれなかったなんて」

そう、彼女達がここまで怒っている理由は今の今までずっと俺が『魔法』を使えると言う事を彼女達に一切話していなかったからである。

「さて、覚悟は良いな？」

「うっふっふ」

「ふ、不幸だ……」

事の原因は今日の朝まで遡る。





入学式当日<sup>日</sup>、朝

「さて、制服は着たし変な所はないかな？」

俺はブレザーの制服のネクタイを締めつつ鏡の前で確認する。いつもなら身なりは最低限で余り気にはしないが一生に1度しかない(人生3週目なので3回目だが)晴れ姿なのだから綺麗にしておきたいと言うのは間違っではないはずだ。

時間もそろそろなので俺は自室から出て1階のリビングに降りる。そこには珍しく白衣でなくスーツを着た母と準備万端、制服を完璧に着こなした千冬が待っていた。

「おまたせ」

「ようやく降りてきたか、男なのに女の私より用意が長くてどうするんだ、まったく」

「ふふふ、千冬ちゃんだつて翼が降りてくるまで制服のスカートとりボンを弄つてたじゃない？」

「なっ!?? 琴乃さん☒そ、そんな事ないですよっ☒」

「またまた、うふふふ」

「琴音さーん!?!?」

「なにこのカオス？」

「ふふふ」と笑う母親とキャラ崩壊を引き起こした千冬の2人を見て翼はそつと目を逸らしてそう呟いた。多分ここに東が居たならばカオス混沌を通り越して諦めの境地光でも見えてきそうだが生憎と彼女は途中合流の予定なのでここには居ない。絶対にそれが唯一の救いだろうが、

「とにかく、そろそろ出た方が良いよね?もう学校の集合予定時間まで30分は切ったし、東も待つてるだろうし」

「そそそ、そうだな。うん、行こう。すぐ行こう」

「……大丈夫?千冬さん」

「だだだ、大丈夫だぞ?つ、翼」

大丈夫な気がしない……、恨みますよ母さん……。

大事な時直前に面倒くさい事をしでかした母親に恨みがましい視線を向けるが彼女はそんなものどこ吹く風と「ふふふ」と笑っている。「……取り敢えず家を出ようか。……あア、キョウモソラハアオイ

ナア……」

「ふふふ、曇ってますね♪」

「アアアアアアアア……」

……もう駄目かも知れない。

とにかくそんなカオスっていた俺達だがなんとか家から出発でき、途中合流した束とその両親に「何があつたし若宮家」と言われたりなんやりについてはやはりどうでも良い蛇足である。



『え、本校に今年度入学した君達1年生諸君には本校が掲げる『自治』と『自由』についてを学び……』

で、始まった入学式。既にクラスに分けられてパイプ椅子に座らされている訳なのであるが背後から突き刺さる2つの視線、内1つはどこか嬉しそうなぽかぽかした物、そしてもう1つは悔しさと恨めしさが入り混じった無茶苦茶感じてて痛い物……あれか？真の英雄とは目だけで殺す。つてヤツだろうか？

はい、入学式早々現実逃避に走っております若宮翼です。いや、考えてもみてくれ。いつも颯めつ面がデフォみたいな千冬さんが目尻を7ミリくらい下げて嬉しそうにしてると、いつも二十面相くらいしてる束さんは極寒の冷気を局所的に発しながら倍の二百面相してるんだよ？いやどんな顔だよ!?？怖すぎるよ☒

この原因は入学式前、外に貼り出されていた『クラス分け表』である。つまり2対1、俺と千冬さんが同じクラスで束さんが1人隣のクラスであったのだ。

(回想中)

『私は……1組だな』

『お、俺も1組だ。たば……束さん!?』

『……私だけ、2組？ちーちゃんかつーくんは1組なの？私だ

け2組?』

『た、束さん、「もちついて」!!?』

『「落ち着いて」だぞ!?!? そう言う翼も落ち着け!!?』

『私だけ……私だけ2組……私だけ……』

『束も正気に戻れ、そう、運が悪かったんだ。それにクラスが違っても休み時間にはコッチに来れるだろ? だから……』

『つーくんの裏切り者おーちーちゃんだつて当事者じゃないからそんなこと言えるんだい! うわあーん!!?』

『濡れ衣だあー束さーん☒』『ちよつと待て束えー!?!?』

(回想終了)

……うん、カオス。思い返してみたけど凄いカオスってる。いやカオスってるってなんだよ?

自分で話して自分で突っ込む。うん、冷静な証拠だな(錯乱)!とにかく俺が現実逃避してしまった理由は理解していただけたかとは思うが問題がある。

「……どうやってこの問題解決しよう」

どうやってても根本的解決に至れる気がしない。既に決まったクラスを変える事なんて以ての外だし休憩時間に会いに来る、もしくは会いに行くのも根本的解決にならない。

神よ、俺に何か恨みでもあるのか? 俺にどうしろと?

「はあ……」

胃に悪い地獄のような入学式は刻々と緩慢にだが過ぎていった。



で、その帰り道。

「……づがれた」

「同感だ……翼」

「ぶうう、なんでだよお、なんで私もつーくんとちーちゃんと一緒

じゃないのさあ」

今よりずっと不機嫌だった束さんを学校出てからずっと宥め続けたいた俺と千冬さんは疲労困憊へ口へ口になりつつ家への帰途についていた。このあと栞と一夏、箒の3人とその保護者親達全員が全員我が家に集まって入学祝いを祝しバーベキューをする予定なのだが親達は何故か買い物があるからと俺達3人を先に帰らせ歩いているのだ。あれ？買い物って何買うつもりなんだ？昨日のうちに俺が買い出しに行つて肉から酒類まで全部買い揃えた筈なんだけど……

親達（一部駄目だと騒いだ人も居たが鎮圧された）の策略に気付けない俺は背を伸ばし気分転換に大きく息をする。

「……はあ」

「ため息か？」

「いや、ただの深呼吸だよ。そう言う千冬さんこそ1回くらいはしといた方が良くないかな？……精神的に」

「……いや、駄目だ。1回したら100回はしたくなるから駄目だ」  
「……………」

千冬さんの悲しい弱音に思わず今世で初の自棄酒ヤケをしたくなつた。多分将来千冬さんとなら結構飲めそうな気がする、まあ浴びるくらい飲んでも酔わない体質なんだけどアルコールあんまり好きじゃないんだけどね。

「そう言えば今夜らしいね、流星」

「ん、ああ。確か実際に地球に降ってくるらしいな。とはいえ、落下予想地点はアメリカの何処からしいが」

「燃え尽きない大ききさつて事だから今回は結構大きなクレーターができそうだね」

「フッフッフツ、そんな時は束さんにお任せさーこの前ちよつと気分転換にその新しく出来るであろうクレーターの位置と大きさをチヨチヨイつと計算してみたんだけどね……」

とまあ、そんな気まぐれな無駄話を話しつつ歩道を歩いていると歩道橋の近くに丁度新しくできた公園の前に差し掛かった。

「ん？黒猫？」

と、その時少し先にある公園の入り口から黒猫が飛び出して来た。そしてそれを追うようにして女の子とその後には男の子が飛び出して来た。

「なっ!?? 不味い、赤信号でトラックが!!?」

目の前には黒猫を追い飛び出した女の子と男の子、男の子は女の子がトラックに打つかりかけていることに気付き手を伸ばすが届かない。トラックが衝突するのに存在する猶予はごく僅か、千冬さんでも間に合わない。

「間に合えっ!!?」

俺は迷わず『身体強化』と『風魔法』を使い驚異のスピードを出し文字通り翔ける。トラックと衝突する直前、僅か数コンマ0秒の世界を突き抜け女の子を抱き抱えるとひと足で隣の歩道に着地する。やはり急な身体強化による急加速は身体に負担がかかるな……。

「うえ?..え?」

黒猫を追っていた筈がいきなり景色が変わりしかも見知らぬ男にお姫様抱っこされている事に混乱しているらしい女の子がそんな声を出す。まあ、仕方のない事だろう。

「大丈夫か?」

「え?あ、はい……………なんで私轢かれて……………ないの?」

「なら良かった、立てるか?」

「はい……………」

「イオリ!!?良かった!」

抱えていた少女を地面に降ろすと遅れてこちら側の歩道にやって来た男の子がそう言って感極まって女の子に抱きつこうとする。しかし、

「うわ、キモッ」

「ぐふっ……………」

あまりにも鋭利過ぎる一言に心をぶち抜かれ膝をついていた。いや、君達即効でシリアスぶっ壊すのやめようよ。今さっき君達事故に遭い掛けてたんだけれども?何この慣れてますって猶予の落ち着き、え?何処ぞの不幸高校生レベルの不幸さなのかい君達?

「でもどうやって私を助けて？」

そんな中女の子はそんなごもつとも疑問を口に出す。そんな女の子を見てちよつとだけ悪戯心の芽生えた俺はとあるセイギノミカタの台詞を真似する事にした。

「お兄さんはね、魔法使いなんだ」

目の前の2人の目が点になる、確かにいきなり「私は魔法使いです」なんて言われたら驚くよね。だが思うにこの時の俺は明らかに詰めが甘かったのだと思う。だっていくら緊急事態であつたとはいえ今まで一体どんなヒト達とここまで歩いて来ていたのかをすっぱり忘れていたのだから。

「つ・ば・さ・さう?」「つ・う・く・ん?」

「ビクツ!」

そう、超が付くくらいハイスペックでよく翼の動きを見て知る束さんと千冬さんがいたのだ。

「翼、今のはなんだ?」

ぽん、と千冬さんの手が俺の右肩に置かれる。

「ななな、なんの事?」

「駄目だよ、しらばつくれちゃ。ほら、ちゃんと録画っていう証拠も有るし」

「それに私の目動体視力が良い事はよく知っている筈だよな?翼?」

空いたもう片方の肩には束さんの手が置かれ俺は動けなくなる。固まったままの俺はダラダラと冷や汗を流し続けていた。

「あ……はい、分かっています……って束さん録画って何さ!?!?どうやって撮ってるの!?!?」

「ふっふっふ、私の兔耳、舐めちゃ駄目なんだよっーくん。兔耳内蔵スーパースローカメラは億千秒の壁を軽く超えて超画像鮮度で録画できるのだ!」

「なにそれ!?!?初耳なんたけど☒」

「耳だけに?」

「ちやうわ!?!?ギャグちやうわ!大事なことだからもう一度言うけどギャグと違うから!!?」

シリアスがシリアルとなり場の空気がカオスと化しかける。

「とにかく、お前の部屋でゆつくりと聞かせてもらおうとしようか。ゆつくりとな?」

「そうだよ、束さんすごーく気になるんだ今つーくんがした事。教えて……くれるよね? つ・う・く・ん?」

「えくと、そのお……」

「取り敢えず先に帰るのが先決だな。ほら行くぞ翼」

「そーだね! 行こつかちーちゃん♪」

「まだ俺返事してない!?」

「拒否権なんてないからな?」

「うん」

「なんでさあああつ!?」

問答無用とばかりにずりずり引き摺られ連行される俺が見えなくなりその場に残された男の子は「なんだろ、あれ?」と呟く。そしてその隣にいた女の子であるが……

「格好……良い」

「ふえ!?」

驚き過ぎて先程の一幕を認識できていなかった女の子はぽつと顔を赤くしながらそう呟いたのだった。

「なんでさあああつ!」

最後まで報われない男の子だった……。



でもって現在……

「ほう……成る程な、翼の強さの秘密の一角を理解できた気がする」

「魔法! 魔力! 魔術回路! くうーつ、この天才である束さんですら知らない技術! 知恵! 凄い、凄いよつーくん!!」

観念した翼は隠していた『魔法』についての知識を2人に話す。翼の秘密のひとつを知る事ができた千冬は何処か嬉しそうにそう呟き、一方束の方は『魔法』というものの可能性に大興奮し翼の部屋中を飛

び回っていた。

「ところで翼、私も魔法は使えるのか？」

ふと気になったのか千冬は翼にそう聞く。翼は今まで1度も他人が使えるかどうかを試した事がなかった為憶測ではあるものの答えた。

「多分……魔術回路があるなら使える。回路自身は人間が生まれ持つ神経に近い擬似神経みたいなものだから開き方さえ分かれば千冬さんも使えるようになる……と思うよ？」

「ほうほう……」

千冬はそれを聞き少し考え込む。その代わりに今度は束の方が質問してきた。

「ねーねー、質問！それって物質に転写とかできるの？」

「物質に転写？できないこともないけど……かなり高度な技術が要るね。一般的には転写する手間が掛かり過ぎるから転写じゃなくて簡単に模倣した擬似回線を敷いて代用するのが一般的だから」

「へえ……『セオリー』……ね？でも魔法なんてものがあるなら長年アプローチの仕方として悩んでたアレについていい案が出るかも……」

今度は束が千冬と同じく考え込み始めるが翼はさっきの束の言葉が気になった。

「物質に転写？ってなにをするつもりなんだ……？」

ほつりとそんな独り言を漏らす、今の翼には何故束が魔法自体にではなく魔術回路の転写技術について興味を抱いたのかを理解できてはいなかった。

そして翼が束の言葉に引っ掛かっている内に思考を終えたであろう千冬と束は顔を合わせ頷く。

「なあ翼」「ねえっーくん」

「私達に……」

「「ねえねえ!!？魔法ってなに！僕（私）にも教えてよ!!？」」

「げっ、葉達も聞いてたのか!!？」

「うん、最初の方から！」



2人揃って翼に魔法を教えて貰おうとしたその時、翼の部屋の扉が勢い良く開き妹達弟が雪崩れ込んできた。聞くに3人もまたかなり始めの方から翼の話を盗み聞きしていたらしくどうやらごまかせそうにない。

「と、言う事だ翼……」

「「「私（僕）にもちゃんと教えてね？翼先生？」」」」

「勘弁してくれ……」

結局、翼は千冬、東、栞、一夏、箒の5人に魔法を教える事になってしまったのだった。

## 『魔法』と『誓い』とその『夢』に

〈11〉

先日の魔法使用発覚事件から数日、翼に魔法について学びだした5人（千冬、東、葉、一夏、箒）は篠ノ之神社の一角に存在する束と箒達の家の一室に集まっていた。

「ここをあーして、こーして……えーと……」

「ねえねえ、つーくん今日は何を……っていうか何してるの？」

昨日寝る前に各家々にこっそりお邪魔して（親が知らないだけで子供は知ってる）魔術回路を開けて回り驚くことにスイツチのオンオフのしかた<sup>方</sup>をあつさり習得してしまったハイスツペク教え子5人組の内のひとり、束は今日の授業を始める前に何やら床に手をつけて何かをしている翼に疑問を持ちそう尋ねる。

「ん？ああ、ここ、篠ノ之神社の真下に結構大きな『龍脈』が通ってるみたいなんだ。これがあると色々と便利になるだろうから流れを少し調整<sup>弄</sup>して使えるようにしようと思って」

『龍脈』？』

「龍脈っていうのはね、地球にある地中を流れる<sup>地殻エネルギー</sup>気、魔力のルート的事で、生き物で例えるなら血液の流れる『大動脈』みたいなものだよ」

「へえ〜」  
「だからあくまで少し調整<sup>弄</sup>する程度じゃないと、さっき例えた大動脈の流れ遮る事になると血が血管に溢れ破裂させてしまうのと同じように龍脈もまた破裂、決壊して下手すればこの辺り一帯が更地に還る事に成りかねないから注意が必要だね」

「……えっ!?!」

翼の説明にそれを直接聞いた束だけでなく他の4人もまた少しばかりぞわつとするがそれを見た翼はその反応が正しいよと5人に微笑み掛ける。

「大丈夫、使う加減さえ間違えなかったら龍脈だってただ便利なだけだから。それにもしも何年も使わなかったならいつの間にか本来の

流れに戻ってるように調整してあるからこの龍脈については問題無いよ」

「もう、脅かさないでよ。つーくんのイジワル」

「そうだぞ翼、一夏達も怖がってるじゃないか」

「あははは、ごめんね。でもとても大切な事だったから敢えてこんな言い方にしたんだよ。龍脈や魔法はとても便利なものだけど使い方によってはとてつもなく危険な兵器にもなる、大きな力だからこそその使い方を誤ってはいけないという事を実感してもらいたくてね」

5人は先程の翼の例え話から脳裏に思い浮かんだ街が焦土と化してしまう光景を思い返す、あんな事が実際に起これば自分達だけでなく街の見知らずの人をも巻き込んだ大惨事となる事が予想できた。

そして翼がわざわざこんな話を5人の前でしたのかというと、それはこの5人に魔法などを含めてこれから先に力の使い方を間違ったくて欲しくなかったからである。千冬も朶も朶や一夏、箒もみんな将来きつと大成する事になる。それだけの能力や力、運もあるし、それにこれは前世、前々世を生きて色んな英雄や勇者といわれる人々を直接見てきた自分だからこそ導きだした予言である。ただだからこそ、その過程で大きな過ちを犯して欲しくなかったのだ。

「後悔しても良い、間違えても構わない。逃げてても泣いても非難はしない。でもだからこそ他人でなく自分に誇れるように、そして今を大切にして欲しい。これが俺が君達に魔法を教える事の条件だよ」

途中から話が変わってしまったが、この際これでも構わないだろう。間違いなくこれが翼が彼女達に魔法について教える条件なのだから。

「……誓おう、私はこれから習う魔法だけでなくこれからも手に入れるであろう力を決して間違えて使わない。私は私に誇れるように生きてみせる……お前にだって誇れるように」

「私も誓うよ！私は私の『夢』を必ず叶えてみせる為だけにつかう！」

「ボクも！」

「私も！」

「うん、私も！」

千冬と束の掲げた誓いに一夏達も幼いながらにその意味を噛み締めそれに負けないくらいに思いを込めて誓った。

「ありがとう、なら俺はみんなに全力で魔法について教えるよ」

5人の決意を嬉しく思いつつ魔法を教える為に人払いの境界を張るがふと、翼は先程束が言った今まで聞いた事がなかった彼女の『夢』について尋ねた。

「ねえ、束さんの夢って?」

「私の夢はね! 乗り物や宇宙服なんて使わないで人が自分自身だけであの高い空を、そしてその先にある宇宙を自由に飛び回る事だよ!」

彼女はいつもの大人びた雰囲気かのように年相応の輝きを見せて自らの夢を語る。彼女が語る夢とその笑顔はとても、綺麗だった。

「良い夢だね。遥か高き空そらと無限の宙ソラを飛ぶ翼、さしずめ『無限の成層圏』ってとこかな?」

「無限の……成層圏インフイニットストラトス、……良いねそれ! 決めた! 私が夢を完成させたら絶対にこの夢につーくんから貰ったこの名を付けるね!!?」

ふと思った事を言ってみただけだったのだが思いの外束には気に入ったらしい、「インフイニットストラトス、インフイニットストラトス」と何度も呟きながら時たまふふふつと未だかつてないくらい嬉しそうに笑っている。それを見た千冬はなんだか自分が負けているような気がして自分もまた翼へと夢を打ち明けていた。

「私は世界最強でも目指してみようと思う。一度剣を握ったのだ、ならばその頂きを目指さぬのは私が振り続けた剣に対する冒瀆なのではないか、そして一夏の姉として1人の女として1度は世界に名を馳せてみたいと思うのは当然じゃないか?……それにそれを目指す為のその第一歩であり私が超えるべき最大の強敵壁、それはお前だ。翼」

千冬は翼に目を合わせ試合の時と同じ位、いやそれ以上の意志想いを込めてその夢を翼に語った。

「私が私の中で1番超えたい相手はお前なんだ、翼。お前を超えて世界最強である事を勝ち負けなんかじゃなくお前にだけ証明してみせる事が私の夢なんだ! だからきつと私はお前を超えてみせる」

「俺を超えてみせる……か、参ったなあ……俺からすれば千冬さんこそが俺の超えるべき人なんだけど……、それじゃあ俺は君に超えられるまで君が超えるべきだと思いつけられるよう頑張るよ」

「ああーありがとう翼」

翼の答えに千冬は僅かに頬を上気させながら微笑む。その姿もまた東に劣らぬ程綺麗でただ美しいものだった。

そしてそれに続き一夏や栞、箒が夢を話す中でただ一人、翼だけが夢を言っていない状況になる。

「そう言えば翼、お前の『夢』ってなんだ？私と東の他に一夏達のも聞いたんだ、そろそろ翼のも聞かせて欲しいのだが」

「俺の夢？」

当たり前のように聞いた千冬だが逆に聞かれた方がキョトンと目を丸くして驚いている、そしてまさか千冬もまた翼がここで驚くとは思いにもよらなかった為驚いてしまっていた。

「そうだな……俺の『夢』か……」

翼は一度目を瞑り少し思案した後再び目を開く。その目は今を見ているようで、それでも何処か遠い昔を眺めているようだった。

「……そう、俺の『夢』は『もう後悔しない事』かな」

カチリ……

その時翼の側にいた千冬には欠けていたはずの何かはまる、そんな音がしたように聞こえたのだった。

未だ欠けた時計の歯車は回り出す、その錆び付いた銀針が動き出すにはまだ少し時間欠片が足りないようだったが掛かりそうだった。

## 研究の手伝いとテストパイロット

〈12〉

翼が千冬や束達に魔法を教え始めておおよそ一週間が過ぎた頃、若宮宅には一夏と箒と共に家から外出している葉を除き翼とその母親しか残って居なかった。そして、

「え？母さんの研究の手伝い？」

リビングのソファアーにて文庫本を読んでいた翼は研究者である母親に研究の手伝い<sup>アルバイト</sup>を打診されていた。

「良いけど……手伝いつて何するの？」

「んー、取り敢えずシミュレーターに乗ってもらおうのとアイディアの提出かな？アルバイトだから一応お給料出すよ、最近翼も千冬ちゃんと束ちゃん達とよく出かけるみたいだし文庫本、新しいの買いたいでしょ？」

母親である琴音はそう言っているお小遣い<sup>2千円</sup>＋時給<sup>千円×3時間</sup>＝<sup>5千円</sup>アルバイト代を足した金額を翼に掲示する。確かに新しい文庫本が欲しいとは思ってはいるものの浪費家ではなく余りお金には困っていない為別に受ける必要があった訳ではないがわざわざ母親からお願いである。親孝行できていない身であると考えている翼はこんな時くらい孝行するべきだろうと思いつつその依頼を了承する事にした。

「分かった、良いよ。いつから始めるの？」

「んー丁度良いから今日にしようか、今から私も研究所に向かうし車に乗って」

「服装は？」

「その黒のジャージで良いと思うよ？もし駄目だったら<sup>研究所</sup>コッチの方で貸すし」

「了解、行こうか」

文庫本に葉を挟んで閉じた翼はソファアーから立ち上がる、こうして彼は車の鍵を手に白衣を着た琴乃の後を追いつつ随分と久しぶりに母親の研究所に向かう為に家から外出したのであった。



家を車で出発して約20分程、翼と琴乃の乗った乗用車は航空自衛隊の基地に併設された研究所へと着いていた。

「随分と久しぶりにここに来た気がする……前に来たのはいつだったか？」

「前に私にお弁当を届けてくれた日以来だから3ヶ月振りくらいね。こつちよ」

車から降りると翼は琴乃の案内に従い一緒に研究所内に入る。軍事施設と併設された研究所だけあってこのセキュリティは高い、次回からは専用のセキュリティカードを渡すそうだが今回はゲスト用のカードを渡され目的地向け研究所内を進む。

「所長、今日はお子さんとご一緒ですか？」

「ええ、シミュレーターへのテストパイロットのアルバイトに呼んだの」「ああ、あれですか。しかし翼君はまだ中学1年生の学生です、上が許可しますかね？」

偶然通路で鉢合わせした顔見知りの所員と所長は翼のアルバイトの件について話し出す。

「大丈夫よ、やって貰う事はシミュレーターに乗ってデータを取るだけだし、上には「私の手伝いをしてきているだけです」で押し通せば問題にはならないわよ？」

「それは……かなり黒クロに近い灰色グレーですね……また上や副所長に注意されてもしりませんよ？」

「仕方ないじゃない、後はデータを集めるだけなのにテストを担当してたパイロットが転属なんてこつちとしてはかなりいい迷惑よ。それに暫く補填が効かないなんてこつちの研究までストップするじゃない」

「そりやそうですが……はあ……、それはそうとシミュレーターを置いてある部屋へはこのルートでは行けませんよ？この先には……つてまさか……」

所員の言葉に琴乃はとても「イイ」顔でわらう。重要な事なのでもう1度言うが「イイ」顔である、断じて良いではない。それを見た翼と所員の2人は嫌な予感を察知した、いや察知してしまった。

「そう、先に格納庫にある機体を見せておこうと思つて」

「はあ!? 所長それ機密です! しかも軍事機密です! 一般人に見せて良い訳ないじゃないですか!」

「母さん……それは流石にないと思うよ……?」

「大丈夫大丈夫、中身をスキャンされる訳でもないしもう組み上がったから見れるのも外形だけでしょ? それに珍しく翼がここに来てくれたんだから親として子にはちよつとくらいは自慢したいじゃない」

「そう言つて先週くらいに来たあの……確か千冬つて子と束つて子に見せて副所長に見つかつて大目玉食らつてたじゃないですか!!」

「え? なんでここで千冬さんと束さんの名前が?」

思いにもよらなかつた2人の名前が突然出てきた事に翼は驚くが、それに琴乃は「そうだった」と拳で手を打つ。1週間前の事を綺麗さっぱり忘れていてようだ。

「ああつ、あの時の事? いやあれの目的は別だったしついついあの後も束ちゃんと話し込んでたてたしですつかり忘れてたよ。でも丁度良いから後であの2人もアルバイトに誘つてみようかしら? 翼も居るつて言つたらすぐ来てくれるつて決めてくれるかもしれないしね」

「もう勘弁して……」

親馬鹿と息子に向けられるあの2人の恋心を知るから故のお節介忠とちよつぱり自分の仕事が楽になりそうという邪心を胸に珍しく暴走を始めた所長母にその子翼と部下所員は盛大に溜め息を吐いた。こうなつたら自分達では彼女の暴走を止められないと理解しているからだ。

「さて、うっかり話し込んだじゃつてたけどそろそろ行こうか。あと……そうだ君は副所長にこれを渡しといて」

「……了解です。で、中身は?」

「アルバイトとして翼を雇つたつて事の釈明言い訳とお給料は私のポケットマネーから出すよつて事の(事後)報告書、あとまだ増えるかもつて



言つといてくれないかな？じゃ頼んだからね？」

「もうどうとでもなれ……分かりました副所長に言つときます……」

「……強く生きて下さいね」

「ああ……、ありがとう翼君<sup>同士</sup>」

色々と吹っ切つてしまった所員<sup>同士</sup>を背に2人はその場を離れる。同士の為、幸福を祈つた翼であるが蛇足としてこの後、琴乃から渡す事を頼まれた事後報告書を宛先<sup>副所長</sup>人に提出しに行つた彼だったが副所長である女性（琴乃一番の被害者）にいたく同情され愚痴を言い合う為に夜2人で飲み会に出て、その後何かと色々あつて付き合う事になり次の年には職場結婚を果たしたそう。つまり被害に遭いながらも幸福になれたある意味数少ない勝ち組。



「へえ……これが母さんの作つてる機体……」

『ASF・C・F—X00/YF—0』性能評価試験機の前に組み立てた試作実験機で私達はこの機体の事を「雪風」と呼んでいるわ」

「雪風」……か」

薄暗い格納庫にて上から照らされる白い機体、尾翼は真紅で塗られ主翼には日本所属機である事を示す日の丸<sup>赤丸</sup>が塗装された今や少なくなつてしまつた可変翼型戦闘機の姿を模した実験機が其処にあった。

「モデルは……F—14かF—15？」

「惜しい、機体の主翼と胴体はF—14で機首周りはSu—27がモデルなの。空気抵抗とか変形機構の都合上F—14をそのまま流用できなかったのよ、だから翼の見立てはあながち間違ひではないわ」

琴乃はそう言つて機体に近付きその純白の機首を撫でる、その手付きは翼や葉を撫でる時と同じくらい優しいものだ。それだけ彼女は自らの研究<sup>夢</sup>を大切に思つているといふ事である。

「ASF・C・F—X00/YF—0は、雪風は私の夢の形、だから私はこの子を完成させてあげたい」

「俺もこの機体が実際に空を飛ぶところを見てみたいよ。この機体と

母さんを見て俺はそう思った」

「ありがとう、だけど……やっぱ翼は天然の『たらし』なのね……。こんな感じで無意識にこの子は女の子を落とすのかしら……。千冬ちゃんも束ちゃんも苦労するわね……」

「つていきなりなんの話!?!?」

機体から翼に向き直った琴乃は自分の息子のたらしっぷりに少しため息を吐きつつそう言う。母親であるにも関わらず不覚にも少しドキツとしてしまったのは内緒だ。少し先が思いやられる、無自覚でハーレムとか作って将来苦労しそうなのは確実にあの2人組なのだから。

「こっちの話、翼、千冬ちゃんと束ちゃん、大切にしないね」

母親としてあの2人組を応援したい琴乃は翼にそう言う。

「勿論、大切な友達だから」

……ただ、やっぱりこの鈍感具合はあの2人組の為にもどうにかすべきだと思うのは彼女の思い違いなのだろうか？



格納庫からシミュレーターのある部屋に移動して来て30分、ジャージのまま操縦支援用の試作インターフェイスを装着した翼は今、シミュレーターの管理と操作を担当する琴乃と女性所員の人にひと通り操縦方法を教えられ身体に掛かるGまでも再現できるという高性能シミュレーターのコックピットに座っていた。

『じゃあシミュレーションを始めるわね。難易度設定は初心者用のEだけど操縦の方は大丈夫?』

「多分問題無いよ、右が操縦で左が出力。左を倒せば戦闘機形態で、中間で中間形態、起こせば人型形態になる。武装選択や標準はインターフェイスの脳波コントロールを使えば良いから初心者でもある程度使えると思うよ」

今回は離陸を飛ばして既に飛行した状態から始めるようで操縦席から見える風景は既に空の上、計器などを表示している画面には今回

のシミュレートの内容が表示されていた。

『なら良いわ、初めは撃墜されても構わないから慣れる事に集中して。  
では開始』スタート

開始と同時に自動操縦が解除されレーダーに敵機影が映る。数2、北西方向より接近中、会敵まで残り170。このまま行けば真正面からのドッグファイトになるが2対1ではこちらが不利、ならば見敵必殺先に見つけて先に引き鉄を引き先に一機は叩き落とさねばならない。さもなければ開始早々翼の方が落とされる。

「やってみるか……OK、右に旋回」

翼は右に操縦桿を倒しもう1度主翼内蔵の機銃と機体下に装備されているガンポッドの引き鉄を強く握りしめた。

一方、シミュレーター観測室では……

「凄いですね……翼君」

「ええ……想像以上に……ね」

シミュレーションから採取されたデータの映し出される画面には機体の稼働状態やそこにかかるG、空気抵抗や機体への負荷などが数字として表示されているがシミュレーションを監視するこの2人が目を見張ったのは機体の稼働状態と現在の撃墜数である。

「機体稼働率83%……職業軍人前任者より22%も高い」

「しかも開始10分で撃墜数3、しかも被弾無しで……」

2人には目の前に表示される数字が信じられなかった。確かに難易度設定は初心者用の1番簡単な『E』、しかしだからと言って戦闘機に乗った事も無いまだ中学生である一般人が前テストパイロットである空自戦闘機パイロットよりもこの機体を圧倒的に上手く使って敵機を撃墜していつているのだ。これを信じろと言われる方が無理がある、しかし目の前で表示されているこの数字に誤りなどはなくそれが現実であるという事を確かに証明していたのだ。

「凄い……もう撃墜が6機に！」

「それだけじゃないわ……あの子戦闘機動中にバトロイドやガウオークに急速変形して急減速や急加速をしてA Iの隙を突いて攻撃してる」

「せ、戦闘機動中に変形!?? そんな事したらGとか機体が」

「保たせている……って感じね。特にドッグファイトから擦れ違いざまにファイターからガウオークに変形してガンポッドで機体下を撃ち抜くこの戦術……今まで誰もやらなかったわね。それに直進してからバトロイドに変形してミサイル迎撃と回避運動、殆ど滞空無しで変形するから隙が少ないわ」

ありえないくらい突出した戦闘機動を見せる翼に2人はただ驚く事ばかり。そしてふと2人は同じ事を考えてしまった。

「これ……彼を専属のテストパイロットにしたら凄い事になるんじゃない?」

女性所員の呟きが漏れる、隣に立つ琴乃はそれをはつきりと耳にしていた。

「決めるかどうかは翼次第……か……」

彼女は専属テストパイロットの事を翼に打診するかを悩む、親<sup>母</sup>としてはこれ以上は一般人である翼には危険なので関わらせたくはないが夢を叶えようとする研究者としては是非参加して欲しい、そんなジレンマを抱え最終的には翼本人に決定を委ねる事にしてしまった。

その日、その打診を翼が了承した事により所長権限にてASF.

C.F | X00 / YF | 0 雪風 の専属テストパイロットが若宮

翼に決定。後日データを見た航空自衛隊幕僚監部は特例としてこの決定を承認する事となる異例の事態が発生した。

## 試験飛行と水色のリボン

〈13〉

ASF・C<sup>雪</sup> F-X00/YF-0<sup>風</sup> 専属のテストパイロットのアル  
バイトを引き受けてから季節は巡り、いつの間にか1年の月日が経っ  
ていた。翼や千冬、東の3人も中学2年生となり更に今年からは栞や  
一夏、箒の3人も小学校新一年生になりつい先日家族揃って入学式を  
見に行ってきたばかりでもある。

そしてまだ満開の桜がゆっくりと散るそんな4月のある日、航空自  
衛隊基地に隣接された研究所の格納庫ではつい先日試験飛行の許可  
が下りた試作実験機のテストパイロットが代わって初の第3回飛行  
試験が行われる前の最終整備が行われていた。

「AからCまでの回路異常無し」

「EからG、こちらも異常無い」

「計器異常無し、操縦系は？」

「主翼、尾翼共に異常無し」

「主機、福機共にエンジン異常無し」

ひとつひとつ丁寧に整備士や研究者達が整備チェック要項を確認  
し機体を万全となるように整えていく。その場には同じくバイトと  
して働いている千冬や東も居た。

「整備主任、状況は？」

「はっ、全体の79%が完了、毎分3%の速度で実行中です」

「予定通りだな、頼む」

「無論です織斑秘書殿」

「篠ノ之顧問、顧問が設置した例の装置ですが」

「ちよつと待って、今行く」

「お願いします、こいつは顧問じゃなきや弄れませんからね」

「ちよつと!?!?それは禁則事項だよ!?!?」

「おっと、いけないいけない。そうでしたな」

「わざとだよね☒それ絶対わざとだよね!?!?」

琴乃お下がりのレディーススーツに身を包み整備主任のおつちやんに現在状況を確認している千冬に同じくお下がりの白衣を纏った束はアドバイザーのバイトここに來てからすぐに機体に取り付けた謎の装置のメンテナンスに走る。

……2人共違和感ねえな……大人に混じって作業バイトしてるのに本職に劣ってねえぞ……

そう考えていたのはここに來てから2度目の試作パイロットスーツを着てヘルメット片手に格納庫の片隅でその様子を眺めていた若宮翼である。何故琴乃母親からのバイトの依頼を彼女達が受けたのか、以前少し気になって尋ねてみたところ詳しくは言わないが曰く、

「さ、最近恥ずかしい事に家計が……な、それに時給2千円が良過ぎて……」

「琴乃さんとは話が合うし色々……ね?それに私程千年に1人じゃないけど琴乃さんも天数百年に1人才だもの!」

らしい。2人が良いならそれで構わないしもし有つても言う権利は無いとは思うのだが何か母親が無理を言ったりはしていないかと少々心配になるのだった。

それはさておき  
閑話休題……

「……そう言えば束さん、前に謎の装置を操縦コックピット席の座席下に設置してたけどアレ、結局母さんの許可取ったんだろうか?多分勝手につけちゃ駄目だと思っただけ……忘れそうになるけどコレ軍事機密だし」

先程のように毎回整備士の人に呼ばれて取り付けた張本人である彼女自身がメンテナンススチエックを行っている黒い、丁度手のひらサイズの正方形の箱を翼は脳裏へと思い浮かべ首を傾げる。

「……本当にアレ何なんだろうね」

「アレってなんですか?」

「ん?アレって言うのは……って誰かな君達?」

思わず口から零れ落ちた考え事に返事が帰って來た事に違和感を感じた翼はその声が発せられたであろう方向、左下を見る。丁度左手

に抱えたヘルメットの死角となる位置には2人の女の子が立っていた。身長からしておそらく10代前半、丁度栞や一夏、箒達と同じ年くらいの女の子で1人は人見知りなのかもう1人の背後うしろに隠れながらこちらをチラチラと見ている。そして珍しい事に2人の髪の色は水色だった。

「私の名前はかたな、こっちは妹のかっちゃん」

「……は、はじめまして……」

「こちらこそ初めまして、俺は翼、よろしく2人共」

「分かった」

「……うん」

……なんかめっちゃかわいい、素直過ぎてなんかめっちゃかわいい栞実妹と一夏弟分と箒妹分も可愛いがこの2人はまた違うベクトルでの可愛さがあり思わず2人の頭を翼は撫でていた。

「はっ！悪い、いつも妹達にする感覚でつい……」

「あ……」

急いで手を引つ込めるが撫でられていた当の2人はなんだか残念そうにその手を目線で追い少しシユンとなる。

やべえ……めっちゃかわいい！めっちゃかわいいんですけど……？

この似てる水色姉妹、どうやら翼のシスコブラコンンのスイツチを入れてしまったらしい。なんとなく前に千冬や束に見せた扇子広げたら中の文字が変わるマジックを見せたらかたな姉の方と言う名の子の方に馬鹿受けしてタネを仕込んだ扇子ごとプレゼントしておいた。そこでふと思ったのだがこの2人、どうやってここに入って来たのだろうか？

「ところで2人はどうやってここに？格納庫は関係者立ち入り禁止だしそもそも研究所に入るには受付で貰うか交付されたカードキーが必要なんだけど……もしかして迷子？」

「違うよ、お父さんの仕事に一緒に連れて来て貰ったの！断じて迷子なんかじゃないんだから！」

「仕事？もしかしてお父さんは自衛隊の幹部の人？いやでも子供をこんな場所に連れてくるか……？」

「違うよ、お父さんは悪い事する人達から日本を守る人だよ！」

「悪い事をする人から守る人って事は警備の人？いやでも日本て……」

思わぬスケールの大きさに彼女達の父親の職業が気になる翼であるが、残念な事に時間が来たらしい。『発進準備』を表す天井に付いたランプが回り始め、機体の整備を行っていた整備士達が機体から離れていく。

「まだ話したい事は色々あつて残念だけどまた今度かな、良かったらで良いから屋上からでも試験飛行を見てね」

「うん分かった」

「……はい、分かりました」

頷いてくれた2人に軽く手を振りつつ翼は機体に向けて走る。途中で翼が来るのを待っていたらしい千冬と東と一瞬視線、『頑張つて』と込められたそれに『了解』と視線で応えて操縦席に飛び込む。

機体電源スイッチ、オン

機体制御システム、起動

機体補助システム、起動

戦術データリンクシステム、アクティブ作動開始

火器管制システム、オンライン接続

全システム、問題なしオールグリーン

『こちら研究所発令室、これより第3回可変型戦闘機飛行試験行います。若宮君、気分は？』

「悪くはありません、大丈夫です」

『分かりました、では予定通り第3滑走路へ移動して下さい。尚この後の指示は航空自衛隊基地管制塔を優先、プラン通り行動して下さい』

『こちら航空自衛隊基地管制塔、現時点をもってASF・C・FOX00/YF-0の管制を開始します』

雪風はエンジン出力を少し上げ滑走路までゆっくりと自走し始める。途中操縦桿とペダルを動かし主翼と尾翼の動作翼の動きをチェック



しつつ機体は第3滑走路へと入った。

「こちらV0、滑走路滑走開始地点に到達」

『了解、離陸発進許可出ました。V0は発進して下さい』

発進許可が下りた、後は滑走助走をつけしあの彼方蒼穹に向け飛び上羽ばたくがるのみ。

『若宮君、成功を祈ります。幸運を』

「了解。V0、ASF.C.F—X00/YF—0 雪風、発進する」

左手の出力レバーを目一杯前まで押し込む。リミッターの掛けられたエンジンが瞬時に最大出力を発揮し前へと加速を始める。

「……100、……200、……300、予想滑走離陸地点まで残り100」

「90、80、70、60、50、40、30、20、10、今!!？」  
そして滑走が距離400に達したその時、白銀の翼は空中へと浮き上がり車輪が地面から離れ、そのまま空に向け一直線に飛翔する。

琴乃の翼夢に乗った翼は、その遙かな空へとその翼をはためかせて行った。



白き翼が空を舞う。踊るように、流れるように、まるで剣の型、剣舞かのようにあの翼は自由自在に天を翔ける。

右ロール

左ロール

バレルロール

右旋回

左旋回

ループ

背面飛行

追従飛行

空中起動変形

数々の試験内容を流れるように、そしてあのパイロット自身が心の底から楽しむようにしてこなしていく。それはひとつの『芸術』かのようで、そんなものに水色の2人の少女は魅せられた。

「凄い……」

「綺麗……」

太陽を背に天を翔ける戦乙女ヴァルキリー、乗り手は男ではあるがその雛形オリジナルである雪風を設計した女性がこれから生まれるであろうその機体とその後継機達にWalkyrieヴァークリーという愛称を付けた。

そんな白き翼の戦乙女は2人の少女の心を奪う、それは彼女達の空への思いを掻き立てるものであり2人は将来この翼が舞う空を指す目標夢となった。

「あ、飛行機雲」

「本当だ……」

高度5,000から18,000の間で巨大なループにより生まれた飛行機雲に彼女達は目を奪われる。

そしてその純白の円はいつまでも空に憧れた彼女達の記憶に残り彼女達がこの日の事を思い出す為の大切な思い出となる。彼女達が初めて描いた『空への夢』を思い出させる、そんな優しい記憶として。



飛行試験終了後、所長室には部屋の主人である若宮琴乃ともう1人、黒ずくめのスーツの男が対面に座っていた。

「飛行試験は成功、これで多分日本の次期主力戦闘機導入計画FにA S F・C・F—X00/YF—0、正式採用されればVF—11だけど採用されるのは確実でしょうね」

「ええ、今は余り国内外での日当たりはありませんがそれでもあの論文は興味が惹かれる内容です。だからこそ国内外からの諜報員が入らないよう我々がここの警備を担当している訳ですが」

「そうね、私からすれば日本唯一の対暗部迎撃暗部が私の研究夢の為に四六時中警備をしてくれているなんて贅沢としか言えないわ」

琴乃の心からの言葉に対テロカウンター組織対暗部迎撃暗部の長である男はその本心を理解しているからこそ毎度同じく苦笑いを零す。

「それだけ貴女の夢が他人から見れば価値があるという事です。配備が発表されればすぐに表からも国外から情報の開示が求められ日本は開示せざるを得なくなると分かっているからこそ、根幹となるブラックボックスと初期配備については先を取りたいのか政府であり自衛隊ですから」

日本が国外からの圧力に弱いのはいつの時代、どこの世界でも同じ事、ただそれを最小限に止める為の努力はなるべく行われているのだ。そしてそれをなしている一族、それこそが日本を遥か昔から影から守り続ける対暗部諜報機関なのだ。

「分かってはいるわ、だから頼りにしているのよ。『更識』さん？」  
「理解しています、では娘達を待たせていますので失礼します」

男はそう言って席を立つ。所長室にただ1人残っていた琴乃はソファーにもたれ天井を仰ぐ。

「……………日本唯一の対暗部を目的とした暗部、その当主『更識楯無』……………ね」

琴乃の眩きは部屋の空気に溶けて誰の耳に届く事もなく消えていった。

## ミツシヨン：インポツシブル 授業参観に潜入せよ

〈14〉

飛行試験から少しして5月の中旬頃、若宮宅（織斑姉弟は半同棲中）と篠ノ之宅ではそれぞれ1年生である栞と一夏、箒の3人がそれぞれ食卓にて食事にとある事の書かれた1枚のプリントお知らせを渡していた。それは、

「授業参観のお知らせ？」

そう、授業参観のお知らせである。ちなみに授業参観とは学校の授業の一環であり教育規約に定められた真大な学校行事のひとつである。なので平日じゃなく休日に行われても生徒は文句を言っていないのである、なんたって学校行事ですから。

そして栞達の通う小学校では運が良いのか別にそんな事関係ないのかよく分からないが授業参観は来週の金曜日にあるようだった。

そして若宮宅では食卓を囲う琴乃、総司、翼、千冬、栞、一夏の栞が琴乃に、一夏が千冬に渡し、同時刻篠ノ之宅では箒が篠ノ之父に渡していた。

「うん、そう。来週の金曜日の5時間目にあるんだ」

「だから良かったら琴乃さん達に見に来て貰いたくて」

栞が切り出し一夏が琴乃と珍ここに来て初登場しくいる総司に授業参観に来てくれるよう誘うが2人の顔はあまり芳しくはない。

「ごめんなさい、この日はF—XでのVF—1の採用前最後のプレゼンがあるの。総司君は？」

「済まないが高2の数学の授業中だ、抜けるにしても放課後に外せない会議があつてすぐにとんぼ返りする事になる」

なんとも運の悪い事か、2人共すっかりと仕事が入ってしまった。

「駄目……みたいね、ごめんね2人共。今回の授業参観見に行けないの。次こそは見に行けるようにするから」

「うん、……仕事なら仕方ないね」

「だね……無理言つてごめんなさい、琴乃さん、総司さん……」  
しゅんと落ち込んでしまった栞と一夏を元氣付けようと向かいに座っていた琴乃は2人の頭を撫でる。

「貴方達は悪くないわ……、ごめんね。次こそ必ず行くから」  
「うん」

目の前でやりとりを見ていた翼と千冬は考える。勿論この  
ブラコン2人の考える事は同じ事、それは、

どうやって授業参観を見に行こうか？

である。晩御飯の御菜であり翼と千冬が下準備し揚げて作った唐揚げをぱくりと口に放り込みながら2人は考える。とそこでふと同じ事を考えているであろう2人は互いに見合わせる。

『一緒に作戦考える？』

『無論だ、この後翼の部屋で話し合うぞ』

『了解』

僅か数瞬の目配せだけでそこまでやりとりを交わすと小さく頷き合い2人は本格的に食事を再開する。そのスピードは心なしか先程より下品にならない程度に早く良く見ていた者にしか分らないレベルだ。そしてそれを真正面から見ている総司はそんな内容を伝え合っていた事も露知らず、教師としては止めた方が良いのだがそれに気付けずに仲が良いのは良い事だと勝手に解釈して千冬が作った少ししょっぱめ塩の味噌汁を啜っていたのだった。



「それではこれより第1回『栞や一夏、箒の授業参観潜入作戦』の作戦会議を始めます。千冬参謀、意見は？」

で夕食後、先程のアイコンタクト通り2人は翼の部屋にて作戦会議話し合いを開いていた。

「さ、参謀？……まあ良いか、取り敢えず先ずは来週の間割は分かるか？」

「確か……いつも通りで5時間目の数学は先生の出張で自習か時間割

入れ替えだった筈だよ」

「何？それなら是非とも自習であつて欲しいものだが……」

「でもあくまで予定だからね、どうなるかはまだはつきりと確定してないから過信するのは良くないかな？」

「その通りだ……翼軍曹」

「翼軍曹であります……つて俺軍曹なの？」

翼は思いの外階級が低かった事に突つ込むが気を取り直して今度はどうやって潜入するかの話へと変わる。

『認識障害』と『身体強化』、あと『風』魔法を併用して学校から小学校まで一直線に屋根を走れば授業参観開始ギリギリには間に合うと思ふよ」

「ふむ、しかし……束はどうする？アイツを放置放つしておいたら後々面倒だぞ？それ以前に絶対何処からともなく察知してくるに気付くだろう」

「……いつそ巻き拉致込らうもうか、多分それが後々も平和に進みそうだし」

「否定できない点が悔しい上にアイツ別の意味で信頼されてるな……」

「あははは……分からなくもないよね？」

「ああ……」

2人の話し合いはその後も続く、それは琴乃がどちらかが先にお風呂に入るよう呼びに来るまで続いた。



翌週の金曜日、授業参観当日、保護者達親が教室の後ろに集まり静かに見学し、教室がいつもとは少し違う雰囲気霧を漂わせる中、同じクラスにいる栞と一夏の気持ちはやや沈んでいた。その理由は先週の話の通り、2人には親や親しい人が見にこれていないからである。

「それでは授業を始めます」

始業のチャイムが鳴り、教師が前で授業を進めるが2人の顔は少し暗い、心なしか少し俯き気味でもあった。

ガラガラガラ

と、始業から10分程遅れて教室の扉が開かれる音がする。2人は「今度は誰の親が来たのだろうか」と思い自分達には誰も居ない事に少し寂しく思ったその時、

「ちよつと済みません……」

「済みません、通して下さい」

そうその時、2人は聞えない筈の2つの声に思わず背後を振りかえってしまった。

「お兄ちゃん翼と千冬千冬さん姉」

居ない筈のその2人の姿に授業中なので小声ではあったが2人共思わず叫んでしまう。それを見た元凶翼その1は苦笑いを、その2は「前を向け、静かにしろ」と言いたげにムスリとした顔で前を指差しているが、少し離れた栞と一夏には気付けなかったが真横に居た翼はそんな風にしながらも驚サブライズが成功したいてくれた事に嬉しいのか口元が少しにやけていたのをきつちりと見逃さなかった。

そしてそれでも2人は嬉しかった。当然だろう、誰も見にこれなかった筈のここに大好きな兄姉が来てくれたのだから。2人は前を向き直す前に1度目を合わせる、合わせた栞と一夏は笑い合い前を向く。そこからの授業は2人にとっていつも以上に楽しいものとなった。



無事潜入し上手く知り合いに発見されず学校に戻って来た翼と千冬、東の3人は放課後、未だ教室にて残っていた。

「帰ろうか、送るよ」

「ごめんつくくん、ちーちゃん、私はこの後用事があるんだ……」

「私もだ、琴乃さんの研究所での秘書仕事が少し残っていてな。寄り道してから帰らなくてはならない、だから一夏の迎えを頼んでも構わないか?」

「構わないよ。それに早めに栞達が俺達がああの時間帯あそこにいた事は口外しないように釘を刺しとかないと親にバレそうだし」

「あー……、そうだな」

あの嬉しそうな2人組の顔を思い出し千冬は同意する。嬉々として琴乃や総司に自慢する光景が目には浮かび2人は少し冷や汗をかいた、因みに束は別クラスの箒のところに行っていたので2人に見つかっていない。なので束も同罪なのだが多分怒られるのはばれた2人だけの可能性が高かった。

「頼んだぞ翼、………琴乃さんは怒ると怖いからな……」

「うん……親だからよく理解している」

「えつと……私はあるまり関係ないから……ドンマイ？」

「……なんか違う気がする」

「息ピッタリだね……2人共」

怯える2人に束はそう言うのとそれに翼と千冬は真顔で否定する。無駄に息ピッタリだったり束でさえ嫉妬するのでなく呆れる程のレベルだった。

「……取り敢えず帰るか……」

「うん……そうしよう」

「だねー、そうだねー」

「……」

三者共無言で教室を後にする。その姿を帰り際チラツツと見た見回りの先生曰く、「なんかあの歳でスゲー哀愁が漂ってたんだけど……」との事らしい。学校の正門前で別れた3人はそれぞれ違う道を歩き、翼は栞達が居るであろう小学校に向け向かって歩いていった。

その途中、通り掛かった小学校近くの公園にふと目を向けると3人程の男の子に囲まれた黒髪の女の子が目映った。

「ん？あれは……箒ちゃん？」

小学1年生にしては大きい目の男の子3人に囲まれていたのは家族や知り合い以外には人見知りの激しい箒だった。

「何している」

「げっ×ヤベっ逃げろ！」

「待て、お前達。その手に持っているものは何だ」

イジメっばいので止めに入る為に向かうと翼に気付いたらしい男



の子達は逃げようとする。だがその手に握っていた白い布が目に残った翼は回り込み3人を捕まえた。

「これは……これは箒のリボンの筈なんだがなんでお前達がこれを持ってている?」

捕まえた男の子の手から取り戻した白い布、箒の頭の髪を纏めていたりボンを手に翼はそう尋ねる。その声は抑えられてはいると言え極寒の鋭さを持ち、そして疑似的ながら魔法すら使わずに物質的重力をその場に発生させているかの如くだった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……もういい、行け。保護者と担任に連絡はしておく、たつぷりと絞られる。俺が言うよりその方がいいだろう」

「「ひいっ」」

余りの重圧に耐えきれなかった男の子3人は黙り込み時間の無駄だと判断した翼は3人を保護者達に報告した上で解放する。解放された3人は恐怖に耐えきれず一目散に逃げて行った。

「大丈夫か? 箒ちゃん」

「うう……、ふえええーん」

蹲っていた箒に翼が目線を合わせると涙に耐え切れなくなった箒は声を上げながら翼に抱きつき涙を流す。それを翼はいつか彼女の姉にした時のように心音に合わせ背中を叩きつつ泣き止むのを待った。

「グスっ……グスっ……、っーにい……」

「なんですか? 箒ちゃん?」

「ごめんなさい……服、汚しちゃって……」

「気にしないでいいよ、洗えばいいしそろそろ衣替えだしね」

「でも……」

泣き止んだ箒はまず自分の涙と鼻水にぐしょぐしょになってしまった制服の上着に罪悪感を感じてしまったらしい、そんな所もどうやら姉似なようだ。それを思い浮かべた翼はクスリと笑い箒の頭を

撫でる、リボンが無い事でいつもの黒髪のポニーテールがおろされた状態の為珍しい撫で心地だった。

「大丈夫、それにやっぱり姉妹なんだね。東さんも昔同じ事言ったよ」「お姉ちゃんが?」

「昔の話だけどね?想像できない?今はあんな感じだけど」

昔の事を思い出しつつ翼は箒にそう言う。が箒にはあまり想像できないらしい。

「……うん」

「俺や千冬さんが完璧じゃないように天才の束さんだって完璧なんかじゃない、なんでもできる人だけど人だからこそなんでもできない『普通』の人間なんだよ?それは箒ちゃんだってよく知ってるよね?」翼と問いに箒はコクリと頷く。

「束さんは不器用なんだ、誰にでも優しくなれるけど不器用だから誰かに思いを伝え辛い、不器用な人。それは箒ちゃんもだけどそれはきっと伝えられる」

「……それってつー兄にも?」

「勿論、だから箒ちゃんもできるよ」

「うん……」

上着を脱ぎ領いてくれた箒の頭を再び撫でていると何処からかサッカーボール片手に走って来た栞と一夏が駆け寄って来ていた。

「あ、つー兄!迎えに来て……って箒どうしたの!?!?」

「ホントだ!?!?誰に泣かされたの!!?まさかおにい「いや、違うから」

……ホントに?」

「本当だから……なんで妹からの信用こんなに低いんだろ?」

「いやだってお兄ちゃん女の子に鈍いし」

「?」

「いやそれだから鈍いんだよ……お兄ちゃんのはか……」

「なんでデイスられたし……はあ、取り敢えず家に帰ろうか。洗濯物もあるし」

「はーい」

栞と一夏が少し離れた位置にあるベンチにランドセルを取りに1

度その場を離れる。翼も鞆と脱いだ上着片手に帰ろうと立ち上がった。

「さ、箒ちゃんも一緒に帰ろうか」

「……………うん、つー兄」

「ん、なんだい？」

その時、箒は翼のスボンの端を摘み翼を引き止める。

「……………ありがとう」

振り返った翼の先にはあの時の彼女の姉と同じ、いや姉とは違う彼女らしいまるで白百合の花のような綺麗な微笑みがあった。

「……………どういたしまして」

4人は横並びにして家路につく。そんな今日の家路では、珍しく翼の隣を歩く箒はその手を翼の手と繋いで歩いていたのだった。



「これで……………できた、完成したんだ……………」

ここは何処かにある研究所、束が1人でこっそり作った秘密ラボのひとつである。そして彼女は今、彼女の『夢』を形に変えその完成を迎えていた。

彼女は手にしていた工具を置き、唯一付いている光源の下に鎮座したソレを改めて見る。

「遂に……………遂に完成した。今まで私が描き続けていた夢が」

今まで10年もの間の感傷に浸っていたその時近くの作業机の上に置かれていた束自作のタブレットに着信が入った。束はすぐに『SOUND ONLY』のボタンをタップし通信にでる。

「はい、私です琴乃さん。プレゼンの後すぐに済みません」

『大丈夫よ束ちゃん、それに添付されてたこの論文は……………』

「はい、私が今まで10年間で掛けて書き上げた『宇宙空間用マルチフォーム・スーツ基礎理論』です」

琴乃との通信が繋がるタブレットからの音声は一瞬沈黙する。その一瞬の沈黙の後、琴乃は再び口を開いた。

『束ちゃん……確かにこの論文は素晴らしい、人類の宇宙進出を1歩どころか2歩3歩と一気に推し進める起爆剤になるだけの可能性と確実性がある。でも早過ぎるわ、この技術は革新的過ぎる。今現実化しかけている私が発表した『外装可変型戦闘機基礎理論と設計』でさえ発表したばかりは夢物語だと相手にもされなかった、航空宇宙産業を新たな分岐点に1歩前進させるだけのあの技術でさえそれだけ反発を招いたのよ。ましてこの技術なら……』

学会だけでない、国家、いや世界からさえ抑止力が働くだろう。束の大切な夢を踏みにじる為に……

「……それでも私は発表します……。今からこの論文を正式に発表しようとしてももう今年の公募は終わってるからこれが学会で発表されるのは早くても来年になる。それに実用化を考えるならもっと、それも10年単位で掛かる。でも私はこれを今すぐにつくんに、ちーちゃん達に乗らせてあげたい！それに私の夢と一緒に見てもらいたいから！」

束は天才なのだ、それも琴乃を超えるレベルの天才である。だからその程度の事はしっかりと予想はできている。人間の本質が醜いものだとも知っている。だが彼女は信じたかったのだ、人を。そして大切な人達と自らの夢を一緒に見てもらいたかったのだ。

それを聞いて、琴乃は彼女とかつての自分と重ね、そして絶対に折れないと言う確かな確信を持ってしまった。故に彼女を止める説得は諦めた。

『……分かったわ、そこまで言うなら私は科学者として、女として、息子を大切にしてくれる母親としてそれを否定することなんて私にはできないもの。』

今私の名前は航空宇宙関連の学会では特別な意味を持つわ、だからもしかしたら今からでも無理矢理振じ込めるかもしれない。でも貴女はそれは望まないでしょう？でもだからこそ次の発表の公募推薦には私の名前を使いなさい。あくまで推薦だけによ？発表者は貴女だけの名前にしなさい。そうじゃなきゃ貴女の夢を私の夢と勘違いする人も出てくる筈だから……』

「ありがとうございます……琴乃さん」

『束ちゃん……頑張ったね、論文を読んで私はやっぱり束ちゃんは頑張り屋さんなんだって理解できた。でも束ちゃん、1人で頑張り過ぎないで。私も、翼も、千冬ちゃんだってどんな時でも貴女の味方だから……忘れないで』

「……はい」

音声通信が切れた暗闇の中で唯一光源に当た<sup>ライトアップされる</sup>る純白の機械鎧に束は目を向ける。薄く蒼い光を燈すクリスタルのようなコアのはめ込まれた胸部をその白く細い指で撫でつつ彼女は呟いた。

「……始まりの『白き騎士』、本当の意味での始まりはこの子<sup>君</sup>じゃないけど……私の夢の始まりは君に託すよ……」

インフィニット・ストラトス  
無限の成層圏、後に頭文字を取り Infinite Stratos I S と呼ばれる最初のその機体は今、儚げな人工灯の元、ただ自らの出番を待ち続けていた。

## 『白騎士事件』 飛翔せし一対の翼

〈15〉

西暦2007年8月15日、その日世界は変わる。先の同年6月某日に開かれた航空宇宙工学の学会にて僅か15歳<sup>中学生</sup>のたった1人の少女により発表された『とある』論文によって、

それは決して発表<sup>少女</sup>者が望んだ訳ではない『始まり』であり、されどそれは国家<sup>世界</sup>にとって掛け替えのない『分岐点』であり、そしてそれを仕組<sup>世界</sup>んだ者達<sup>影</sup>にとって望んだ『結果』である。

◆ ◆ ◆  
全てはその日、僅<sup>世界</sup>かばかりの人間<sup>意思</sup>達がたったひとつの引き鉄<sup>スィッチ</sup>を弾<sup>押し</sup>いた事から始まった。

8月15日、その日、束の機嫌はあまりよろしいとは言えなかった。その理由は6月に彼女が学会で彼女の夢のカタチ、『インフィニット・ストラトス』を発表した際、世界は彼女を机上<sup>玩具</sup>の空論<sup>具</sup>だと笑い認めなかった為である。

「クソオっ、良いよもう！ならオモチャだと笑った私の夢で本当に宇宙……月に行ってついでにテレビもジャックして盛大に笑って自慢してやるうっ！」

「……………荒れているな、束。まあだからこそお前最近あいつの前に出てこないんだろうが」

「うっ、……………それは……………」

そしてそんな荒れに荒れた束に物怖じせず背後から声を掛けたのは真っ白な全身スーツを着た千冬だった。

「全く……………前に翼に『私の『翼』<sup>夢</sup>』で空まで連れて行ってあげる!!?」っ

て断言したのに認められなくて会いにくいとか……はあ」

「わ、悪いちーちゃん！あれだけ大見得切ったんだよ!!？あんなにドヤ顔かまして自信満々に言い切ったんだよ!!？しかも乙女の決死の覚悟なんだよ!!？恥ずかし過ぎるよおうっ!!？」

「阿呆、隣でいた私も見たわ。分からんでもないが翼をそれを笑うとでも思っているのか？」

「そんな事ないよ……多分っー君なら『大丈夫、束さんなら次こそ世界を納得させる事ができる。その為ならもし良かったら俺も手伝うよ』って絶対言ってくれるに決まってるけど私はっー君を驚かせたいの……本当は今日のっー君の『誕生日』に間に合わせたかったんだけど今年はまだ無理かな……。私の初めての夢を一番初めにプレゼントしたかったんだけどね……」

そう言っつて束はほんの少し寂しげな微笑みを零す。本当は今日この日、彼女は自分が抱き彼が名付けてくれた『無限の成層圏』インフィニット・ストラトスと言う『翼』を彼にプレゼントとして贈るつもりだったのだ。しかし世界がその翼を認める事はなく、結局誕生日に間に合わず今日が来てしまった。一応万が一に備え別の物も用意してあった為誕生日プレゼントが渡せないという最悪の事態だけは辛うじて避ける事が出来た束だったが、あれだけ一生懸命にそして想いを込めて今日という日の為に準備してきたのだ。故に、渡せないと言う事は彼女には少し悲しかった。

「バカが……すっかり乙女の顔をしおって、全く……私だって翼を驚かせたくて内緒で手伝っているんだぞ？確かにそんな顔をするのはお前の勝手だが手は動かさず、さもなければただでさえ渡す時期が遅れているのにまた渡す時期が遅まるぞ？」

「……………そうだね、ちーちゃんの言う通りかな？」

千冬の彼女らしい不器用なメールちよつとだけ辛辣な言葉に束は少し微笑んだ。流石幼馴染み、互いにある程度簡単にだがしっかりと言葉にせずとも意思が通じ合っている。

「……………じゃあ気を取り直して、今日の稼働実験を始めるよ」

「ああ、分かった。今日は何処の実験場に行けばいい？」

「今日は試作品として作ってあった超振動ブレードの改良品の試し斬りと同じく試作品のレーザーガンの改良品の試し撃ちをして欲しいから1番広い地下第4層実験場かな」

「了解した、1時間で全ての試験項目を終わらせてくる。……と、そう言えば丁度今頃、翼も研究所の方での機体の実験だったな。それと翼も気になっていたがお前がコックピットにつけたあの黒い箱、アレはなんだ？ 琴乃さんの許可は取ったみたいだが……」

「それは内緒、それに流石所長付き秘書さんだね。スケジュールの管理はお手の物、って感じかな？」

「常識だ、寧ろ全く気にしないお前がおかしい。それで何度私と翼が注意したことが……はあ」

「あははは……」

突然の話の方向転換と思いついた事に頭の痛そうな千冬に束は思わず苦笑いを零してしまった。

「全く……とにかく、行ってくる」

「頼んだよ……っ!? これって!!?」

千冬が踵を返し研究室から出ようとしたその時、束の見える空間に幾つかの警告が表示される。それを見て瞬時に束の顔色が変わった。

「どうした？ 束、お前らしくもない」  
「だってっ！ 見てっ！」

その長い付き合いである千冬ですら未だかつて滅多に見た事の無い束の反応に千冬は進行方向を反転させすぐにその束の側に立つ。そして束によって見えやすく表示されたディスプレイを見て同じく千冬もまた瞬時に顔色を変えた。

「何……っ!? 日本周辺国全ての軍事基地及び原子力潜水艦のコントロールが強奪され日本に向け4,000ものミサイルが強制発射シークエンスに入っただっ」

このままでは中国、北朝鮮、韓国、ロシア、アメリカ本土、オーストラリア、太平洋、北極海にあるミサイル基地及び原潜から一斉に発射されたミサイル、その数約4,000が降り注ぐ事となる。その中



には勿論『核』弾頭を搭載した物もあり、その全てが日本に降り注げば日本は島が沈むとはならずとも確実に地形は変わる。それも日本にいる全ての人間を巻き込んで、

「自衛隊と在日米軍でもここまでミサイル攻撃は想定していない。落とせて精々半数程度、それもこんな事態では100%可能とは言い切れん……お前でも止められないのか」

「ごめん……無理、でもシステムに割り込めば限界までは発射まで引き伸ばせると思う。……でもそれでもミサイル到達までの時間を計算して最長でも日本海側は残り<sup>約</sup>1456秒<sup>30分</sup>、太平洋側は北が<sup>約</sup>4234秒<sup>1時間</sup>、東が<sup>約</sup>5545秒<sup>2時間</sup>、南が<sup>約</sup>6476秒<sup>2時間</sup>……駄目だよ……今緊急出動してもとてもしゃないけど間に合わない」

目にも留まらぬ速さで投影型キーボードを打つ東は幾つものウィンドウを開きつつそう零す。既にコントロールの奪われたミサイル発射システムの7割にハッキングを仕掛けシークエンスにシステム異常を排出させ続けて遅延工作を行う傍ら宇宙にある軍事衛星にもハッキングを仕掛け緊急稼働させる、発射されてから束のやれる事はミサイルを迎撃する自衛隊の<sup>海</sup>対空誘導ミサイルの誘導の精度の計算を肩代わりして99.9%まで引き上げる事くらいしかない。

「……東、あの機体は、『白騎士』は出れるか？」

「え？それは……できない事もないけど……飛ぶ事メインで考えてたから武装はほぼ未完成だしエネルギー問題が解決し切ってないからリミッターを外したら半日も保たないよ？……つてまさかちーちゃん……」

東は千冬の言葉から彼女が決意した事にすぐさま思い至ったのだろう。本来ならば目を向ける余裕すらない筈だが東はそれでも千冬へと顔を向けた。

「……そのまさかだ、東。私が『白騎士』に乗ってミサイルの迎撃に向かう。……お前の夢をこんな形で世界に見せる事になる、いや明らかにさせる私を怨んでくれ。……それでも、私はっ……」

「……良いよ」

「え?」

「ちよつと今の白騎士じゃ頼りないかもしれないけど……ちーちゃんがあの翼<sup>I S</sup>を必要としているなら、生みの親として、親友として背中を押さないといけないから……」

「だ、だが……、良いのか。お前の夢を、『宇宙に行きたい』と言う夢を私は私の為に『戦いの道具』として使うんだぞ!?? そんな事が……ねえ、ちーちゃん」……なん……だ」

ならなんでそんなにちーちゃんは辛そうな顔をしているの?

「そ、それは……」

東の言った通り、千冬の顔は酷く辛そうな顔をしていた。

「ちーちゃん、本当に自分の為だけに誰かの夢を道具として使う人はね。そんな辛そうな顔をしないんだよ?」

「……………」

東は手を止めず、それでも千冬の顔から目を離さずに言葉を紡ぐ。その顔は……とても優しい顔だった。

「確かにI Sが戦いの為に使われるのは生みの親としては悲しいよ、だってこの翼は元々宇宙を飛ぶ為に作ったんだから。……でもね、本当は最初から分かってたんだ……。I Sが兵器として持つとても高い側面に、副次的なものだとしても現存兵器とは一線を画す能力を持つてる事くらい」

搭乗者をデブリから防ぐ為の防護シールドも宇宙空間での作業樂にするパワーアシストやインターフェイスを利用した機体の思考制御、万が一搭乗者が宇宙で迷子になった場合の最後の砦として搭乗者の救援までの間体調や精神を安定させる為のナノマシーンさえも、どれを取っても、いやI Sそのものを兵器に転用する事も出来る。

「でもね、ちーちゃん。私は世界を、人を信じてみたいんだ。きっとI S達は世界を良くも悪くもがらつと変えてしまうだけの価値が有る、変えてしまう。でも人はきつと良い方に向かっていける、向かう事が出来る。つー君が教えてくれたように」

生み出されたモノに善悪などはない、本当に大切なのはそれを扱う者次第。それは魔法もISも変わらない、でもどれだけ人が使い方を間違えようと、いずれきつと人は良い方向に使っていける。

「だから間違えないで、ちーちゃん。あの日つー君との『約束』を忘れないで、そしたらきつと、私達の夢はきつと間違いなんかじゃないんだから……」

「ああ……、分かった。私は忘れない、あの日の翼との『約束』を……：ありがとう、束。いつてくる」

「いつてらっしやい、ちーちゃん」

完全ではないものの束の言葉に吹っ切れたのか、千冬は部屋から出ると『白騎士』の鎮座している格納庫のハンガーに向けて全力で走って行った。

「あーあ……、こんなの私の、束さんのキャラじゃないのに……。絶対こういうカツコいいのはつー君の仕事だと思っただよな……」

ただ1人残った部屋に束のそんな小さな呟きが響く。誰よりも負<sup>負け</sup>け<sup>た</sup>く<sup>ない</sup>の長い親友<sup>ライバル</sup>が決めた事だ、ならば自分はその背中を迷わず蹴<sup>蹴り飛ばす</sup>り<sup>飛ばす</sup>押<sup>押し</sup>す<sup>す</sup>だけである。

「さーて、「丁ちーちゃんと2人で日本<sup>ただ大切な人達を守り</sup>を救<sup>ブリコンヒルデ</sup>つちやいませうか」  
未来の人類最強<sup>白兎</sup>と天災の最強<sup>人</sup>タツグが動き出す。



その頃、とある研究所の一室でとあるニュースを見ていた少年が1人いた。つい先程着いたばかりでジーンズに半袖のシャツとかなりラフな格好をしたその少年、若宮 翼は緊急ニュースにて流れる『4,000ものミサイル発射が日本に向け発射される直前である』と言うテロップとキャスターの報道を見ていた。

『緊急ニュースです、先程首相官邸にて緊急非常事態宣言の発表がありました！本日9時27分、日本周辺にある中国、北朝鮮、韓国、ロシア、アメリカ、オーストラリア等の国々のミサイル基地が一斉にハッキングされ発射態勢に入ったとの事です！防衛大臣曰く「本来な

らばミサイルの発射はもう既に行われていてもおかしくは無い時間は経過している筈だが未だハッキングの行われたミサイルは発射されてはいない。もしかしたら何者かがハッキングされたミサイルにハッキングを仕掛け発射までの時間を稼いでいるのかもしれないがいつまでもこの状態が続くとは考えられない。よって国民の皆さんは可及的速やかに各都道府県にて指定された避難場所に避難して下さい」との事です。これを見た皆さんも冷静かつ迅速に避難を開始して下さい』

キヤスターがニュースを視聴する全ての人間に対して避難を呼び掛ける。4,000発ものミサイルが日本を目指しているのだ、恐らくこんな事現代に入った今……いやこれから先未来でもそうそう無い大事件だろう。規模で言えばアメリカ同時多発テロとは比べ物にならないレベルのものである。ただ翼が注目していたのはそんな事ではなく、防衛大臣が言った『もしかしたら何者かがハッキングされたミサイルにハッキングを仕掛け発射までの時間を稼いでいるのかもしれない』と言う台詞だった。そんな芸当ができる人物など、翼はたった1人しか知らない。それにももしかしたら彼女と一緒にもう1人の彼女もまたいいそこに関わっている可能性が……

『あつ!!?速報です!海上自衛隊護衛艦群と陸上自衛隊が展開している日本海側にて撮影を行っていた当番組のクルー達が謎の機体を目撃、ごく僅かにですがその姿を捉えました!ご覧下さい!……皆さん、見ましたか?スーパースローでもう一度再生します、ほら、ここ!ここです。見て下さい、私にはこれは戦闘機でなくヒト型の機体に見えます!!?あれは一体何なのでしょうか?』

……あつた。まさかと思つたが本当にあつた。間違いない、この事件にはあの2人が、東さんと千冬さんの2人が関わっている。それも東さんの夢を望まない形で使つてまで彼女達は日本を、自分達を守ろうとしてくれている。

「くそっ!あの2人にだけ押し付ける訳には、傷付けさせる訳にはいかっ!」

翼は部屋から飛び出し1人格納庫に向かう。この状況を打破する

事が可能な、自分も彼女達を守る事ができる手段を手に入れる為に。  
「着替えてる暇は無い！でも運が良かった！今日が武器弾薬を満載した際の機体の状態を調べる為の実験の日で今から準備するまでもなく実弾が装備されてて」

思考接続用インターフェイスの付いたヘルメットだけは被り翼は耐Gスーツも着ずに身着のままそのまままで雪風の操縦席コックピットに飛び乗る。  
「機体電源起動、主機エンジン始動開始……メイン・サブシステム起動、戦術データリンクシステムアクティブ作動開始、火器管制システムオンライ接続……攻撃兵装は20mm機関砲、三菱製試作30mmガンポッド共に異常無し、追加兵装の新型空対空誘導ミサイルも接続正常」

画面に浮かぶチェック項目を即行でクリアしていき機体の状態を確認する。……うん、流石うちの整備員さん達は腕が良い。全システムオールグリーン。

「ただ問題は……」

機体に問題は無い、問題は無いのだが肝心な事に翼は格納庫の隔壁の電子ロックを開けられない。全数列14桁の数字など覚えられないし、そもそも翼はその辺りについては一切教えてもらっていないのだ。

「どうやって開けるか……まさかミサイルで吹っ飛ばす訳にはいかなしいし、そもそもミサイル4発で吹っ飛ばせる厚さじゃなかったよな……この隔壁」

ここにあるのは最新鋭の新機構を積んだ世界にひとつだけの可変戦闘機である。その分この研究所の警備網は人的、電子的にも最高峰の強度を誇りそれは物理的隔壁なども当然ながら含まれる。確かどつかのHE☆N☆TA☆I企業が『C4をガン積み爆破されても120mm滑空砲を真正面から喰らっても破れない超超合金仕様です！』とか言ってた気がする。……まさかとは思いがマジで試したのか？ソレ？

どうしようかと考え徐々に焦りが現れ始めた翼は操縦桿を握る握力が上がる。機体に搭載された武装？これから必要になるしたとえ使っても隔壁は破れない。魔法？監視カメラがあるここで堂々と使

える筈がない、却下だ却下。

「だがどうすれば……どうすれば良い？何か手は無いのか!?!?」

翼にしては珍しく言葉として内心に思っていたその焦りが口から漏れる。その時、今まで計器関係の情報が浮かんでいた画面に今まで見た事の無いマークが浮かび上がり続いて文字の羅列がそこに綴られる。

「――――搭乗者の波長適合を確認、  
Infinite Stratos Core System 全演  
算式完全構築完了、システムを起動します。」

――システム起動、これより搭乗者の支援に入ります。

「お困りですか？マスター」

「君は……?」

「私はコア No. 〇、お母さんに最も初めに生み出された  
貴方の為だけの IS コアです」

画面に綴られるその文字に翼は束が取り付けていたあの黒い箱に隠されていたモノが一体何だったのかをここで初めて把握する、がしかしなんの為に付けたのかは分からない。かなり高い演算能力と人格を持った人工知能のようではあるがただこうやって会話させたいだけなら他のカタチで渡されていそうである。

「IS コア……って事は束さんに生み出された束さんの『夢』を実現させる為の根幹を成す部分と言う事?」

「Yes、私達を中心に IS は機体を構築されます」

「ならなんで君はこの機体に?」

「残念ながら私もお母さんから知らされていませんのでお答え出来ません」

「……そうか」

束さん……貴女自由過ぎやしませんか?せめて取り付けられた本人にくらいは理由か何か言つときましようよ……

やはりというかなんというか、やっぱり分からないという謎は謎のままなのだがいつもの事なので翼はスルーする事にした。そう言えばこの子、IS のコアらしいが名前とかはあるのだろうか?流石に数

字呼びは勘弁して貰いたい。

「ところで俺は君をどう呼べば良い？名前とかはあるのか？」

「名前ですか？それはもう貴方が呼んでくれたではないですか」

「え？」

【私の名前は【雪風】、私の意識が目覚めてから初めて出逢った貴方が呼んでくれた『幸運』と『奇跡の栄光』の名を冠する貴方の『翼』。若宮 翼、私を『無限の成層圏』に連れて行って】

その文字が表示された瞬間、雪風のハッキングを受けた格納庫の隔壁の電子ロックがガコンと言う大きな音と共に外れる。ゆつくりと開く扉の向こうから溢れるその光に、翼の乗る操縦席は包まれた。



『F・C・F-X0/YF-0起動、システムオンライン。格納庫から第2滑走路へ移動開始、機体及び火器管制システムオールグリーン。出撃スタンバイ』

武装積載時機体状況試験を行おうとしていたその直前に発令された周辺国のミサイル強制発射の報を受け騒然としていた筈の研究所の発令室に、何故かそのシステム音声は恐ろしくよく響いた。

「!?、搭乗者は誰!? 離陸命令及び搭乗許可は出てないわっ!!?」

「若宮所長!!? 搭乗者は翼君です!!?」

「なっ!?」

その報告に丁度機体状態試験の責任者としてその場にいた若宮琴乃はただ驚いた。まさか翼がそんな行動を取るとは思ってもいなかったのと、そもそもASF・C・F-X00/YF-0、雪風はいくら試験前で整備が完了しておりほぼ完成した機体であろうとも中学3年生の子供がただ1人で動かせるような代物ではないからでもある。だがしかし、現に雪風は今、翼ただ1人の力だけで起動し格納庫から発進している。

「機体は電源さえ入れればエンジンは起動するけど格納庫のロックは翼じゃ開けられない筈……でもどうやって……」

まさかあの時東のお願いを許可し取り付けさせる事を許したあの黒い箱に入っていた物が彼女自身が初めて製造したISの中枢を成す根幹部、翼の為だけに生み出されたISコアだとは知らない琴乃にはその訳はいくら考えても分からない。

『母さん……』

「翼っ、今すぐ戻りなさい!!? その機体はまだ実戦には耐えられないし自衛隊からの離陸命令と許可は出てないわ! 今出したら貴方は軍法会議に掛けられるわよ!!?」

『ごめん母さん、でも俺はあの2人を、千冬さんと束さんを守りたい。彼女達の翼を戦いの為に使わせたくないんだ……だからこの翼を借りるよ、……もう誰も傷付けたくはないから』

「やめなさい翼っ!!? 翼っ!!?」

『……ブツッ』

「……回線遮断、『ASF. C. F—X000/YF—0【雪風】』とのコンタクトが全て途絶えました」

「っ!!?」

彼女はすぐ側にあつた金属の机をその拳で叩く、かなり大きな音が鳴るがそれだけ琴乃も余裕が無かった。その間も雪風は着々と離陸の為の準備を済ませて行く。

『ASF. C. F—X000/YF—0滑走路に到達、エンジン出力上昇中。出撃準備完了、管制塔離陸許可申請

……

許可申請棄却

ASF. C. F—X000/YF—0、Code—B—5発動、無許可強制離陸シークエンス開始します』

『こちら管制塔・ASF. C. F—X000/YF—0【雪風】の離陸を辞めさせて下さい!!? 離陸許可は出ません!!?』

「所長……」

管制員と職員達の声を聞き琴乃は1度目を閉じる、目を閉じ、心を落ち着け、冷静になる。何が正しいのか、どうすれば後悔せずに済むのか、そしてどうする事が『親』として子にやってあげられる事なの



かを。そして再び目を開いた時、既に彼女の覚悟は決まっていた。

「……いいわ、私達はあの子に賭けましょう。オペレーター職員を緊急招集！航空自衛隊幕僚長にはミサイル防衛の為緊急出撃すると伝えなさい！それでも渋るなら実践データも手に入るから云々と誤魔化して、管制塔経由でASF・C・F—X00/YF—0の離陸許可を。全責任は私が負います」

「了解!!？」

琴音は決断しメインモニターに映る『雪風』を見る。いつの間にか、未だ小さいと思っていた我が子は立派に成長していたらしい。その事を思い親として嬉しくなる反面、少し寂しくなる。元から手の掛からない、親に甘える事の少ない子であったがここまで強く我が儘を言ったのは初めてだったのだ。ならば叶えてあげたいと思うのが、思ってしまうのが親というものだろう。

だから絶対に大切な2人を守って帰ってきなさいよ？そうじゃないきゃ偶には親らしく貴方を叱れないじゃない。

成層圏に飛び立つもう一对の純白の翼、彼女の理想を乗せたその翼は彼女の息子の望みを叶える為に今、大空へと飛び立った。

## 『白騎士事件』 交錯する白き対翼

〈16〉

その日人々は目にする

白き機械鎧甲冑を身に纏い、まるで天使の様にその翼を広げて降りかかる

厄災ミサイルの雨を斬り払う1人の『騎士』の姿を

白き翼日の丸に太陽を背負い、幾つもの姿を使い分けその翼で空を翔けて厄災ミサイルを祓い続けた1人の『戦乙女』の姿を

戦場を駆け抜け抜けた多くの人々の命を救い、救えぬ事に嘆いた者達の絶望を希望に変えたその白き一対の翼は人々の目とその心にソラへの憧憬を焼き付けた。

これは『騎士』と『戦乙女』の英雄譚、8月15日この日から何年経とうとも決して色褪せる事の無い、世界を変えた1つの時代物語が産声を上げた、これはその始まり序章である。



太平洋中央海域上空にて、たった1機の戦闘機がミサイルの雨の中を飛び回りただひたすらにミサイル達を破壊、叩き落としていた。

「……………くそ、ミサイルの量が多い……………」

翼は操縦桿を傾け機体下に付いている試作30mmガンポッドと両翼付け根にある20mm機関砲をフルバーストで撃ちながらミサイルを撃墜しつつ『人型不明機』の居る空域を目指し飛ぶ。先にその機体がミサイルを迎撃している空域より遙か前方に割り込むようにして突入したのでまだまだミサイルが雨の様に貫いてくる危険空域を後退しつつ飛んでいるのだ。

「ぐっ、…………大陸間弾道ミサイルじゃなく普通の大型か小型ミサイルが大半だから何とかなってるけど、これが多弾頭ミサイルや超小型マイクロミサイルだったらと考えたら……………ぞつとしなない……………つな!!？」



背後から追撃する。そして辿り着いたその先では時にブレードで斬り裂き、時に光学兵器<sup>ビームガン</sup>で狙撃する純白の不明機の姿があった。ただ少々余力が無いようで、動きにキレが余り無い。あのままでは危険だ。

「援護する。これでっ、終わりだっ！」

操縦桿を倒し降下、バトロイドに変形し不明機と背中を合わせるようにガンポッドと機関砲を構えて撃ちまくる。20mmと30mmの弾丸と不明機のビーム光線が通り過ぎようとしたミサイルを全て叩き落とす。この際銃身が焼け焦げても構わない、残りは僅か、ここで全て叩き落とす!!?」

【残りミサイル357、あと5分耐えて下さい】

「いけえええええっ!!?」

長い世界で1番長く、最も沢山の生命が賭かった最後の5分間の迎撃が始まった。



中国、北朝鮮、韓国、露国、米国、豪州、太平洋、北極海にて発射されたミサイルの数は総数約4,000、影にて1人の天災の尽力にて遅延、迎撃精度向上の援護を受けたそれらはその内日本首都東京への直撃コースで予想されていたミサイルの数は領海領土内で自衛隊に撃墜された2,000を除く約2,000発。その内の561発は雪風に乗る翼に撃墜され残りの約1439発はミサイル発射及び到着予想からほぼ同時刻に出現した謎のヒト型兵器により全て残らず日本本土沿岸までに駆逐された。

そして……、

全てのミサイルを落とし終えた後、雪風と白い人型機は向かい合うかの様にして太平洋上の空に滞空していた。

「……………」

ガウオークのまま翼はただ向かい合い続けるが両者共に互いに無言、どちらも何も言わず何も言えず、ただ互いに向き合い見つめ合う事しか出来なかった。

「……千冬さん」「……翼」

ただ唯一言えたのは集音器マイクにすら拾えないくらい小さな声で互いに相手の名を呟く事のみ。

だが時は、世界は2人を待つてはくれない。2人の索敵範囲内に幾つもの接近する物体が光点として出現する。おそらく航空自衛隊の戦闘機かもしくは米軍の戦闘機の緊急発進したものだろう。方角から推定して4機の内片方の2機は日本から、もう2機……あ、今倍に増えて16機だ。あれ？倍じゃなくて3乗じゃね？とにかくその16機は太平洋上から来ている。雪風のしてくれたデータ照合から日本からの機体がF-15J改、洋上からの機体はF-35B、間違いない空自と米海軍の機体である。

「……まずいな、このままじゃ不明機は空自と米海軍機を相手に戦う事になる。でもそんな事したら不明機だって保たない筈だ、……しかしだからと言って今俺が彼女を見逃す訳にもいかない。一体どうすれば……」

最初に『不明機』に接触したのが自分であると少なくとも日本、自衛隊には知らされている。それに今ここで互いに睨み合っている事も、ならば今ここで万が一彼女と相手もせずに逃げられでもすれば一体どうなるか、理解していない訳ではない。ただでさえ自分は命令無視でここまで飛び出してきた身だ、それもそれを母や研究所の皆さんに庇って貰った上でののである。それでありながらなんの成果もなく、寧ろ見逃す事などすればこの先母達にどれだけ迷惑が掛かるのか翼でも見当もつかない。

「……マスター、私は『不明機』への攻撃を提案します。貴方が全て負い目を背負う必要はありません。私は貴方を支えるモノであり共に歩むモノ……だから貴方だけに泥後悔を押し付けたくない」

雪風がそう画面に綴るのを見て翼はより惨めな気持ちになる、相棒にそんな事を言わせてしまった自分はどれだけ情けないのか。あの

日、もう『後悔だけはしない』ようにと決めたというのに。

「くそっ……………ごめん、千冬さん。俺は、俺は……………」

……………そして悩んだ末に翼は千冬でなく自分他人を取った。

「こちら日本国航空自衛隊次世代型先進技術実証機試験団所属A S F・C・F—X00/YF—0です。貴女の行動に我々が守るべき国民の生命を守って頂いた事、深く感謝します。

しかしここは日本国領空内であり日本の法が適用されます。よって貴女の使用している機体は刑法に抵触しており同時に未確認機である貴女は領空侵犯をしています。多大なる恩人に対し誠に心苦しいですが武装を収め投降して下さい。応じて頂けるならば身柄の安全は保障します」

翼は対象を相手だけに絞る接触回線ではなく広域に無差別に発信する国際救難回線オープンチャンネルにてそう宣言する。多分、絶対に彼女はこれに応じない。だがこうして先に手宣言を打っておく事で彼女が動かない限りF—15J改とF—35Bは手を出せない、つまりこれが本当の意味で牽制している相手は目の前の不明機ではなくここに近付きつつある空自と米海軍の機体に対してである。

「……………」

返答無し、ある意味想定通りであるがF—15J改とF—35Bが雪風と不明機の目視できる距離まで近付いたその時、そこで事態が急変する。突如雪風の操縦席にロックオンアラームが鳴り響いたのだ。

【米海軍機、本機に向けロックオン、ミサイル発射、総数4、回避を】  
「くっ、駄目だ間に合わない……………ぐあっ」

着弾、爆発。ミサイルは雪風右後方に着弾しその衝撃は雪風を、操縦席に乗る翼を揺さぶる。だが雪風は墜ちてはいなかった。

「…、千冬さん……………貴女という人は……………」

翼が見た先に居たのはついさつきまで雪風と向かい合っていたはずの不明機だった、そしてその手には一丁の銃が握られており僅かにだがその銃口からは銃身加熱による白煙のような物が立ち昇っている。彼女は1度量量子化していたビームガンを瞬時に取り出し4発ものミサイルを一瞬の内に全てを撃ち抜いていたのだ。

「……やってくれたな米軍め、翼の牽制すら無視して動きを見せる前に奇襲とは。何が「真珠湾を忘れるな」だ、しかも一番近くに居た翼を連れ去る目撃者となる可能性があるからと排除しようとするとは、舐められたものだなそこまでして私を連れ去りたいか……」

フルスキンフルフェイス型のISの中でそう呟いた千冬はひとつため息を零す。その口調とは裏腹に珍しく千冬は……キレていた。「だがそう簡単に私をいいように扱えるとは思うなよ？ 私の大切な者に手を出したんだ、取り敢えず海に頭から飛び込んで頭を冷やして来い」

一閃、米軍最新鋭機であるF-35Bの主翼や尾翼を瞬く間に千冬はブレードやレーザーで両断、もしくは貫通させ脱出させた上で海面に墜落させていく。流石に無闇矢鱈と命を奪う程キレてはいないようだが容赦が無い、それを見てヤバイと感じたのかすぐそこまで来ていた筈のF-15J改は1度空域を離脱していた。

「F-35B16機を瞬殺して……これは千冬さんが凄いのか？ それともF-35Bが弱いのかどっちだ……？」

多分千冬さんが強過ぎるだけです、ハイ

しかしこれからどうすべきか……戦うべきなのだろうかイマイチその気にはなれないし助けて貰った手前こちらから仕掛けるのもどうかと考えられる。そして翼のそんな悩みに気付いたのか不明機はその手にブレードを静かに構えた。

『今後禍根を残さぬ為にも今ここで1度勝負を付ける』

言外に彼女から伝えられたその意味に、翼はガウオークが持つガンポッドの銃口を相手に向ける事で答える。

互いに間合いをとる

戦闘用意

(残弾は機銃が241発、ガンポッドが76発、空対空誘導ミサイルは使い切った)

(超振動ブレードの振動率は45%、レーザーガンの銃身は冷却中の上にエネルギー残量も先程の戦闘で尽きた)

武装良し

(機体は色々と無理な機動をとった所為で損傷は酷い)

(やはり機体が私の反応に完全に対応出来ずズレが酷くなってきた)  
る)

気合いよし

(燃料の残量からしても余り長くは飛んではいられない)

(リミッターを途中で解除してしまったから戦闘動作をとれるのもあ  
と僅か)

覚悟よし

(なら)

(ならば)

目標固定

「最短でケリを付ける！」

翼も千冬も互いにスラストを全開にし相手目掛けて一気に間合いを詰める。ガウォークの右手に持ったガンポッドの銃口が標準に合  
わさり、白き騎士の持つブレードが脇構えで構えられる。

発砲、一閃

互いにそのままの勢いで通り抜ける。

「……………」

「ふっ……私が考えていた以上の腕だな……翼」

海に落ちてゆく赤い両断された太陽日の丸の描かれていた白い翼と火花を散らし黒煙を上げる白いメインスラストがその空を彩った。

『ちーちゃんー!』

「問題無い、このまま海に落ち着水してて姿を隠す。おそらくこのままでも無事に帰れるだろうが一応迎えは頼む」

『了解、手配しとくね』

そのまま海に消えた千冬の姿を視界の端に収め翼は雪風の主翼が半ばで無くなった事で不安定になったガウォークのバランスを整える。彼女が海に逃げたという事はおそらく逃げ切られるだろう、元から彼女を捕まえる気も捕まえさせる気も毛頭無かったが、これは勝負には引き分けて戦いには翼は負けたという事だろう。

【不明機反応ロスト、索敵範囲外に離脱されました。マスター】



『ようやく繋がった……こちら研究所司令室、……翼』

「……右主翼が欠落していますがガウオークの飛行なら支障ありません。帰投します」

『了解、……気を付けて』

『お疲れ様ですマスター、ですが着陸するまで気を抜かないようご注意を』

ASF・C・F-X00/YF-0は機首を日本に向けその空域を飛び去って行く。

後日、翼の無断出撃の件は当時責任者であり保護者でもあった若宮琴乃所長の1年間減俸並びに次の可変戦闘機VF-1の開発チーム主任を担当する事、そして問題の翼に対しては下手に処分を下すと存在が露呈してしまう上ただでさえ太平洋上で米海軍機のいる前で自衛隊の所属であると宣言してしまった為に万が一にも存在が公表されれば少年兵にも見えなくはなく国際的批判を受ける事にもなりかねない為自衛隊幕僚本部は書類上のテストパイロットとしての情報を抹消、隠蔽し更識までもを動員し完璧な情報統制を敷いた。それによりテストパイロットの翼という存在は書類上自衛隊には存在しなくなってしまうた為になかった事は罰せないという事態が発生、更に米海軍でさえ一瞬で落とされた不明機に善戦し引き分けたという功績これから配備される可変戦闘機の売り込みもあつた為帳消し、だが何もしいない訳にもいかなないので将来自衛隊に入隊する事が義務付けらる事でこの一件は闇に葬られる事となった。ただこれはあくまで表の世界での話、裏の世界では未だ完全には葬られてはいなかった。



世界の何処か、誰もが知っている場所であり、誰ひとり知らない場所にあるその一室。暗闇に包まれた円卓には幾つかのマイクとカメラ、そしてその背後に置かれたナニカしか存在しない席には人の気配が何ひとつしない、そんな部屋でひとつのスポットライトが灯った。

『……此度の件、実行したのは誰だ』

言葉が発せられたそこに映し出されたのは青い旗、青の布地に白い地球儀の模様が描かれた1枚の旗である。

『左様、今回の件、我々の計画には無かったものだ』

もうひとつ光が灯る、その下にあったのは1枚の向日葵の絵、紺の下地の上に5輪の向日葵の花が描かれた1枚の絵画である。

そしてその『向日葵』が言うにはその日起こった事件、後の世では

『白騎士事件』とも呼ばれる事となる世界にあのアメリカ同時多発テ

ロを超える影響と衝撃を与えたこの事件は、

この謎の組織が本来計画していなかった筈の出来事らしい。

『だが予想は付く、あれ程の事を可能とするだけのチカラを保有す

る部門は少ない。なあ？情報部門、工作部門？』

『私は知らんぞ、会計部門。1番怪しいのは情報部門ではないかね？』

更に2つ灯ったライトの下に現れたのは今は亡きとある帝国皇族の紋章の刻まれた金の延べ棒の山とつい最近死んだとある独裁国家の長男の写真だった。

そして『写真』に槍玉に挙げられた情報部門はと言うとその矛先をまるで気にも留めずに口を開いた。

『さて、なんの事か分かりかねますね？』

『ええ、分かりませんね』

『いけいけしやあしやあとまあ……、しらばつくれるつもりかね情報部門？』

そしてまた灯った下にあったのは50個の星が描かれたとある国の軍事機密の記された紙束と『代理』と書かれた1つのネームプレートだった。どちらも情報部門の幹部なのであるがその内の1人が開発部門の幹部を兼任する事となっている為今その席には代理という名の次期幹部候補がその席に着いている。

『しらばつくれるも何も、私は何も手を出してはいませんよ？ねえ？』

『私もです、それに私はあくまで情報部門幹部『代理』ですのでそこまでの権限はありません』

『どうだか……、口ではなんとも言える』

『確かに』

『……………』

『……………』

『ともかく、今後の方針だけは決めて置くべきだと私は思うのだけれど?』

そして険悪となりかけたその場の空気に割り込んだのは1人の女性の声、今まで沈黙に徹していたとある国<sup>実行部</sup>の違法<sup>部門</sup>研究所の壊滅<sup>幹部</sup>報告書<sup>の</sup>だった。

そしてその声に1番最初に声を出した『青い旗』<sup>継続役</sup>は厳かに同意する。それによりその場の空気は一気に引き締められた空気となった。

『ふむ……、確かに実行部門の言う通りだな。では今後我々はあの『翼』達を生み出した『天災』篠ノ之 束と『天才』若宮 琴乃の身柄を確保する事を目的とする。尚同レベルの優先事項として今噂のA S.F. C. F—X00/YF—0のパイロット、その情報の収集もまた並行して行うとする。異論は?』

『無い』

『無いな』

『無かろう』

『無し』

『無いぞ』

『無いわ』

『では本会議を終了する、全ては我らが悲願の為に』

そこでスポット<sup>照</sup>ライト<sup>明</sup>が全て落ち、その場はまた暗闇の中に還る。各々がそれぞれの思惑で動き、蠢き、誰にも悟られぬまま闇から闇へ移っていく。先代より受け継いだ彼らしか知りえぬ組織の悲願の為、そして隙さえあれば相手の喉笛を噛み千切りその頂点<sup>自らの欲</sup>に君臨<sup>を叶える</sup>する為に。



白騎士事件以降、世界ではISの『女性にしか乗れない』という余りに大きな特性<sup>欠陥</sup>により世界各地では都心部などを中心に女尊男卑の

考えに染まり、ありとあらゆる場所から男達は駆逐されていった。しかしそれでも男達は諦めなかった、腐る事はなかった、決して誇りを失う事はなかった。何故ならば彼らは皆とある『映像』と『事実』を知っていたからだ。

とある軍人は言う。

「あの時、あの空に、あの翼が存在しなければ今自分はここに居ない。あの翼があつたからこそ今自分達は諦めずに前を向けるのだから」

僅か467個しかないISコアによる空白を埋めるために配備されたのはISと同じ極東の島国<sup>日本</sup>で産まれたISとは異なる翼、可変戦闘機、通称『ヴァルキリー』。その雛型たるASF・C・FX00/YF-0は、そのパイロットはあの『始まりの』IS、『白騎士』と互角に渡り合ったのだから。確かにそのパイロットの名は公表されていない、だが公式発表でそのパイロットは男性だった事が判明していた。

ならば腐っている場合ではない、腐ってはいけけない。彼はその身を持って誰よりも早く今、近頃囁かれる『IS神話』を否定して見せた。ならばそれと同じ翼を持つ自分達がソレを否定できない訳がない、否定しなければならぬ。

ISが女にしか使えない？

大いに結構、なら我々はISとは違う翼でその隣に立とう。かつて私達の絶望を希望に変えた、あの『戦乙女』の様に。今度は私達が『戦乙女』と共に、

では何故私達がそうまでして空を飛ぼうとするのか？

自分達よりも前に出て来た女性に対する嫌悪か、今まで空を飛んでいた者としての意地か、それとも女性ばかりを戦いに出す事からきた無力感からの矜持なのか。確かにそれもある。だが敢えて言おう。

そんな事決まっている。ただ『飛ばすにはいられなかった』からだ。『白騎士』と『戦乙女』<sup>ヴァルキリー</sup>にソラへの憧憬を焼き付けられた者達はそう答える。

今、世界の空には今尚続く彼らの英雄譚が綴られ続けていた。



## 始まりより前の終わり

〈17〉

あの『白騎士事件』から3ヶ月、あの後こつてり母親琴乃と父親総司に叱られてその後2人に思いつきり抱き締められた後、おずおずと気まづげにうちにやって来た千冬と束相手に3人で気が済むまで謝り倒し合つて仲直りつぽい事をした俺達はいつも通りの関係に戻っていた。

そして白騎士によりISが世間に発表、認識される事となり一躍有名ともなったIS開発者の生みの親である束は気が進まないものの各国の要請を受けてISの中核であり心臓部、ISコアの製造を行う傍ら元から内緒で手伝つて貰つていた千冬の他にあの件から手を借りる事を決めた翼や琴乃を含めた4人で束本来の夢である戦闘用ではない宇宙を飛びたいと言おう夢を実現する為の『宇宙空間用のマルチフォーム・スーツ』の製作に取り組んでいた。



その日、翼達4人組は束が建造した秘密地下研究所ラボにてとある実験を行おうとしていた。

「翼、本当にいいのか？今回の実験は不確実要素が多く成功率は余り高くはないと琴乃さんから聞いたが……」

「多分大丈夫だよ、一応俺は魔法を使えば万全の守りを使えるし束さんと母さんもいるから」

「しかし確かに琴乃さんにも魔法について話したしあの2人は頼りになるが万が一も……」

地下試験場へ行く途中、廊下を進むその隣には白騎士の時と同じ純白のISスーツを身に纏った千冬が共に歩いている。どうやら彼女には今回の実験には何か嫌な予感がするらしい。

「その時の備えて君が居るんだよ、万が一『暴走』でもしようものなら

物理的に俺を止められるのは千冬さん、貴女しかないから」

「……………確かに……………その通りだが……………」

彼女は目を少し伏せ少しの間沈黙する、その間にも彼女は先程からずっと頭の中に存在する不安と琴乃や束への信頼と自身の実力からの自信とを比べ自分がどちらを選ぶべきなのかを悩んでいた。そしてその結果、

「……………分かった、その期待に応えられるよう。私は全力を尽くす」

千冬は琴乃や束、自分を信じる事にした。

「ありがとう千冬さん」

「礼を言われるまでもない、私は私がしたい事をするのだから。だから翼、……………頑張れ」

「ああ、勿論だよ。千冬さん」

翼と千冬の2人は並んで廊下を歩く、心なしか千冬と翼の肩までの距離が先程よりほんの少しだけ近くなったのは千冬の翼との心の距離が縮まったからか、それとも束達や自分の信頼があつてなお心に煙り続けているなんとも言えぬ不吉な予感の所為なのか千冬には分からない。

「じゃあ、いってきます」

「ああ、いってらっしゃい。翼」

だがこの時、2人はこの後起こる事など欠片も予想できていなかったのは確かだった……………。



この日、束の秘密地下研究所第3試験場にて行われる予定の実験は束と琴乃が協力し作り上げたとある機関をISに搭載する搭載実験である。

熱核反応タービン基礎理論と不確定要素が多く未完成ではあったが既に存在した半永久エネルギー機関理論を転用、ISの登場により可能となった重力及び重粒子制御技術や分子結合強化素材を含めた

特殊カーボンの誕生により製造が可能となった太陽炉を世界最高峰の頭脳が再設計、試作し完成したその第1号炉。それこそが今回の実験でISに搭載、テストされる『太陽炉』である。

既に先日行った1号炉<sup>太陽炉</sup>単体だけでの起動テストではその結果は上々。本日機体に装着し起動、安定領域に達すれば理論通り無限のエネルギーを引っ張り出す事のできる夢のエネルギー源の完成となる。が、但し上々だった前回の実験では幾つかの不確定要素もまた発見されていた。それは製造される個体により炉の性質が若干異なるようになる事が予想される事、重粒子が崩壊する際に生成、放出される<sup>一種の光子</sup>謎の粒子がごく僅かにだが人体に有害性がある事、更に至近にいる人の感情に干渉され粒子濃度、密度が変化するという事である。理由は不明、解析を続けてはいるが先に有害性を取り除く事を最優先に執り行いこの1号炉は人体に無害な粒子のみを放出するようにはなっていない。

『つー君、気分はどう？』

「んー、悪くないよ。寧ろ昨日は良く寝たから良い方かな？」

『分かった、でも気分が悪なったら早く言っただけ。つー君が倒れたりしたらちーちゃんも大慌てしちゃうから』

『東、そんな事言っただけで真面目に進めろ。人を乗せてるんだからな』

『うん、そうだね。ごめんちーちゃん』

『はあ……、謝るなら翼と琴乃さんにだろう？全く……』

試験場中央にアームでロックされた白銀色の金属装甲を持つISに乗った翼は乗ってみて気分はどうかと管制室にいる東や千冬、<sup>母親</sup>琴乃に聞かれそう答える。まあ乗るだけなら男にだってできるのだ、問題は起動してからだが……

『とにかく、つー君。ISを起動してみて』

「了解『起きろ【雪風】』」

ヒュイイイイン——……

ISの機体が起動し白銀色の装甲に色が灯る。幾つもの投影型ウイ



ンドウが開き高速に0と1の数列が流れた後、閉じたそれらの代わりに新たな1枚が開かれそこにはあの時と同じ交差した翼をあしらったマークが浮かんでいた。

『ISS起動を確認、コアネットワーク接続、【雪風】起動しました』  
『やっぱりつー君はISSが動かせたみたいだね……』

『だが何故翼は動かせるんだ？世間では誰ひとり動かせていないようだが……』

『確かに謎ね、でも今はこの実験について集中して千冬ちゃん。翼も良い？』

「勿論、注意が散漫になって変な所で躓いて大事故は起こしたくないからね」

無事起動したIS、【雪風】は束が翼の為に設計し琴音が自らの可変戦闘機技術をISS用に応用発展させた『宇宙空間の意味での束の夢のカタチ』であり、基礎データにはASF・C・FIX・00／YF・0の飛行データ（謝りに来た時についてにばれて束はしつかりと琴乃に叱られた）が使用されている為にその外見は可変戦闘機のバトロイドを人のサイズまで縮めたような印象を受ける姿である。

そして今は本来ならば熱核反応タービンが搭載されるはずの場所には太陽炉が搭載されていた。

『じゃあこれより太陽炉搭載実験を開始します。翼君、起動を』  
「1号炉起動」

脚部に搭載された炉が独特の稼動音と共に起動し淡く儂い蒼色の粒子を放出しつつ同時に少しずつも生成された純粋なエネルギーを機体各部に送り込んで行く。

『太陽炉1号炉稼動率20%……30%……40%……なおも上昇中』

『順調……だな』

『うん、此処までは太陽炉単体の起動実験でも』

問題は此処から、稼動率が80%以上で安定領域に入る事になるけど機体の相性もある。此処から先は私でも分からない』

『そうか……』

『稼働率70%を超えたわ、後少しね』

実験が順調に進む事に千冬は少し安心したようだが束の顔は未だに硬い、琴乃とも話したがいくら天才天災といわれる頭脳を持つ彼女でもこの先の未来については少々不透明過ぎたのだ。

『……駄目駄目、今は他の事を考えてる余裕なんてない。翼君が乗ってるんだから……』

そう呟いた束は心に立ち込めていた僅かばかりの不安を脇に追いやり再びしっかりと雪風の現状の映し出された画像に目をやる。……今の所問題はないようだ。

ほんの僅、ほんの僅だけ安心して安堵の息を吐いた束だったが世界とは如何にも残酷で嫌らしい事か、最悪の事態こそはそんな時にこそ唐突にやって来る。

ERROR!ERROR!ERROR!ERROR!ERROR!

『緊急事態発生!コアNo. <sup>00</sup>機の内部太陽炉に高エネルギー反応有り。稼働率300%、理論値を大幅に超えているわ!至急実験の停止を!』

『駄目っ!停止信号を受け付けない、まさか……『暴走』!?!』

突然に鳴り響き始めた警報に束は焦る心を抑えつつ急いで原因を探る為に動き出す。搜索から発見までに掛かった時間は時間にして数十秒程度、それでも今の彼女にはそれが何時間にも感じた。急いで原因たる太陽炉に停止信号を送るがERRORとだけ表示され反応はない。『暴走』した太陽炉は『雪風』の白い装甲にそこから過剰なまでの膨大なエネルギーを送り込みそれにより装甲が異常な閃光を放ち様々なシステムゲージがラインオーバー、理論上の最大値さえも超えて上昇し続ける。

「っー君!!?」「翼あつ!!?」「翼!!?」

懸命に束と琴乃は事態の沈静化の為全力でキーボードを操作し太陽炉へのアクセス回復を行うが間に合わない。3人が絶叫にも近い

その悲鳴のような声をあげる中、翼はたったひとつの言葉を紡いだ。

「時すら凍らせる蒼き氷よ、全てよ凍り付け『氷結鏡界』」  
アフソリユート・ゼロ

翼が唱えたのはたったひとつの呪文、だがその呪文から生み出される魔法は呪文通り全てを凍り付かせる最強クラスのものである。

『何するつもり翼!?!?その呪文はまさかっ』

「1度全て凍らせる、そうすれば時間は稼げる!」

『そんな事したら貴方ごと凍る事に!』

「ちゃんと助けてくれるんでしょ?なら大丈夫だ」

『でもっ!!?!?』

「待つて!」

暴走する雪風の末端から凍り付き始めた試験場に思わず管制室から飛び出して来た千冬が生身で飛び込んで来る。暴走した雪風に生身で近付くのはかなり危険なはずだが今の彼女にはそこまで考えられるだけの余裕などは欠片も存在しない。ただ少しでも早く、翼の元に辿り着きたかった。

「嫌だ!私はず、私はず、諦めたくない!私はお前に受けた恩ひとつ返せていないのにつ!!?!?だから手をつ!!?!?」

駆け着ける千冬の手が伸ばされる。だが翼はその手を取らなかった。

「駄目だよ、それじゃ君まで巻き込む事になる。大丈夫、すぐ帰ってくるよ」

「翼っ!!?!?」

『』

「っ!!?!?」

触れたモノ、その全てを凍らせる伝説上の氷が暴走した雪風を覆い、凍らせ、そしてそこに乗る術者翼ごとその無慈悲な絶対聖域水で包み込む。最後に紡がれた言葉は氷が凍り付く音色に阻まれ後に残されたのはあと一歩という所でその手が僅に届かず氷に阻まれた少女とただ見ていることしかできなかった少女と女性、そしてただその場に

は少女達が零した悲痛な絶叫と涙が凍<sup>着</sup>てつく大<sup>氷</sup>気に溶けてゆく、たつたそれだけだった……。

## 設定集

### 人物設定（情報公開毎に随時更新予定）

〈18〉

#### プロフィール

##### 【IS学園】

??若宮翼わかみや つばぎ

偽名：天羽時雨あまは しぐれ

所属：詳細不明unknown

専用機：第零世代型IS 雪風

ワンオフアビリティ  
単一任用能力：無し

年齢：24（肉体年齢は16）

誕生日：8月15日

血液型：B型

身長：168cm／体重：67kg

パーソナルカラー：黒

特技：戦う事、魔法、料理

好きなもの：家族、友達、読書、魔法式の製作、空

苦手なもの：涙、赤（血・炎）、殺し合い、正義

天敵：家族の涙、過去の自分

備考：本作における主人公であり2回目の転生を行い3度目の人生を歩む事となった人間、全世界での通算年齢が100を超えるこの物語内でも最高年齢の保持者。

??織斑一夏おりむら いちか

所属：日本Japan

専用機：第3世代型IS 白式  
単一仕様能力：零落白夜  
ワンオフアビリティ

年齢：16

誕生日：9月27日

血液型：A型

身長：172cm / 体重：69kg

パーソナルカラー：白

特技：身体を動かす事、魔法、料理

好きなもの：家族、幼馴染、健康、平和

苦手なもの：偏った思想女尊男卑、射撃

天敵：遠距離攻撃の得意な人

備考：原作主人公であり本作においては翼本作主人公（時雨）含む色々濃くて普通だけど普通じゃない逸般人に囲まれて育った所為で本人も気付かぬ内に魔改造が施され自らも一般常識のある逸般人となってしまった人物の1人。また気付いたらいつの間にか若宮家の一員になっており、しかも何故かもう1人の幼馴染とも1つ屋根の下で暮らしていた現実については割とあっさり流した過去がある

将来の夢は警察官らしい

??篠ノ之 箒しののの ほうき

所属：日本  
Japan

専用機：無し

単一仕様能力：無し  
ワンオフアビリティ

年齢：16

誕生日：7月7日

血液型：O型

身長：160cm / 体重：54kg

パーソナルカラー：白？

特技：天桜御神楽流剣術篠ノ之、お菓子作り（和菓子限定）、魔法

好きなもの：剣道、剣術、抹茶、和菓子

苦手なもの：擬音語を用いない具体的な説明、姉（しつこい時限定）

天敵：口の上手い人

備考：原作における織斑一夏の『ファースト幼馴染』でありヒロインであるサムライガールであるが本作においてはどうやらヒロインではないっぽい反応を見せる。また小学生時代に常に更識により護衛されていた若宮家との交流があったお陰で『重要人保護プログラム』に巻き込まれず親元と離れる事となったものの身内に近い人物達と暮らせたお陰で原作と比べてかなり性格は丸くなり余裕も持っている為今は良妻賢母の清楚系サムライガールというキャラに落ち着いている

将来の夢はまだ未定との事

??若宮 葉

所属：日本

専用機：無し

単一仕様能力：無し

年齢：16

誕生日：5月3日

血液型：A型

身長：163cm／体重：48kg

パーソナルカラー：灰

特技：プログラミング、オペレーション、お菓子作り、魔法、家計簿を作る事

好きなもの：機械いじり、FPS、お菓子作り、魔法式の構築

苦手なもの：激しく動く事、戦闘

天敵：千冬（運動させようとする為）

備考：若宮 翼の実の妹で若宮家では一夏の妹であり箒の姉とも言えるポジションに位置し、翼居ない若宮家を7年間上手く回していた縁の下の力持ちである。性格は彼女本来の前向きさと翼譲りのお人好し、千冬譲りの自分への厳しさ、そして束譲りの頭の柔らかさが入り交りぱつと見最強に見えるがまじめな時以外は少しものぐさな部分もありそう言った部分が彼女の魅力らしい（五反田 蘭談）

尚、容姿に関しては母親似であり学校一ではないがクラス若しくは学年で一番程度の美人さであると言われている（五反田 弾談）

将来の夢は母親譲りの電子系に強い部分を生かしてゲームプログラマーになり一発ヤマを当てる事か専業主婦らしい

??セシリア・オルコット

所属：英国 England

専用機：第3世代型IS ブルー・ティアーズ

単一仕様能力：無し ワンオフアビリティ

年齢：16

誕生日：12月24日

血液型：O型

身長：156cm／体重：49kg

パーソナルカラー：蒼

特技：銃火器の取り扱い（狙撃）、貴族淑女の嗜み

好きなもの：本、紅茶、お菓子、クッキー（日本製）フィッシュ&チップス

苦手なもの：納豆、正座、（本場の）フィッシュ&チップス

天敵：近接格闘戦が得意な人（例、時雨や一夏等）

備考：英国国家代表候補生の1人であり専用機として第2世代試作BTシステム搭載型IS「ブルー・ティアーズ」の搭乗者パイロットである。また原作における織斑 一夏の2人目のヒロインであるが本作においては翼（時雨）が決闘に勝利して見せた事により一夏でなく翼（時雨）に初恋を抱く事となる

将来の夢は母の様に強くあり、そして守りたいものを守るだけの力を得る事らしい

??鳳 鈴音 ファン・リンイン

所属：中国 China

専用機：第3世代型IS 甲 シエンロン／こうりゅう 龍

単一仕様能力：無し ワンオフアビリティ

年齢：16



誕生日：4月8日

血液型：B型

身長：150cm／体重：52kg

パーソナルカラー：赤

特技：中華料理（酢豚）

好きなもの：辛めの食べ物、ラーメン、ゲームセンター、一夏

苦手なもの：頭を使うゲーム、クレイジーゲーム、千冬

天敵：理詰めでくる相手

備考：原作における織斑一夏の『セカンド幼馴染』<sup>2人目の</sup>でありヒロインであるチャイナガールであり、本作でも同様に一夏に恋している模様。その性格はサバサバした性格でかなりの努力家であり原作程ではないが気性が激しい所があつて考えるよりも即行動というタイプでどつちかという脳筋に近い思考をしている。また協調性に若干欠けた所があるが自他共に認める恐ろしいまでものフットワークの軽さと気安さ、強い牽引力からリーダーに向いてはいるものの脳筋な上少し思い込みも激しいので隣にある程度親しく物事を冷静に考えられるストツパー役が必要となる。（中学時代のその主な担当は葉か箒だつた）

なお入学が遅れ編入となつた理由は僅か1年で代表候補生になつたという実績はあるものの家庭の事情から専用機の支給が見送られそれに釣られて入学申請が滞っていたからであり、彼女が一夏と親しい間柄である事を知つた後は上層部はすぐさま手のひらを返し彼女に最新鋭の専用機を支給し急遽入学の手続きを再開した所為で現場が混乱、申請期日を逃してしまつた為である

また両親の離婚で彼女は母方に引き取られたがもう1人、来日せず中国の実家で居残っており遂には父に付いて台湾に行つた実の妹が1人居る

将来の夢は漠然的に昔を懐かしんで中華料理屋でも開こうかと本気で考えてしまう今日この頃

?? 織斑 千冬

所属：日本  
Japan

専用機：第1世代型IS 暮桜（機体封印凍結及び修理中）

ワンオフアビリティ  
単一仕様能力：零落白夜  
れいらくびやくや

年齢：24

誕生日：12月8日

血液型：A型

身長：166cm／体重：55kg

パーソナルカラー：黒

特技：我流剣術、天桜御神楽流剣術<sup>ノ</sup>

好きなもの：体を動かす事、生徒、弟（一夏）、翼（時雨）

苦手なもの：デスクワーク、戦闘狂、謀略<sup>バトルジャンキー</sup>

天敵：天災状態の束、バーサークしたライバル達

備考：原作の一夏の幼馴染の定義からすれば翼の幼馴染に当たる女性で人類最強の称号「ブリュンヒルデ」の名を唯一名乗る事を許された元日本国家代表であり、現在はIS学園学園長に誘われ日本にあるIS学園にて教師として教鞭をとっている。

また束が万能型の天才であるとするならばと千冬の方は肉体系、特に凡ゆる戦闘に関する才能が飛び抜けて、それでこそ束すら超えて高い能力を保持しておりその下地となる身体能力もまた恐ろしく高い。（実際に魔法補助無し<sup>バト</sup>の生身でIS専用武装を使いこなす事が可能である）

更に学園での他の教師間の関係は悪くなく特に国家代表時代から付き合いのある後輩の山田先生とは偶に飲みに行く仲であり実の話山田先生は恐ろしくザルで酒豪らしい、また生徒とも良好な関係を築いておりちゃんと質問に行けば真摯に答えてくれ困っていればそつと手を貸してくれたりするのでその高い観察眼からよく生徒の事は見ている。が、ただ少々彼女を怒らせ過ぎたりするといった手が出てしまったり脳筋的思考になってしまいう点についてはかなり恥じておりなんとか直そうと努力している。

学生時代の将来の夢は教師、現代の夢はかつて昔の様な些細な幸せを感じる事

【束陣営】

?? 篠ノ之 束 しののの たばね

所属：詳細不明 unknown

専用機：G O L E M 零式 ゴムプロトタイプ

単一仕様能力：無し ワンオフアビリティ

年齢：24

誕生日：3月3日

血液型：B型

身長：164cm / 体重：52kg

パーソナルカラー：紫

特技：肉体労働、頭脳労働全般

好きなもの：宙、箒、千冬、翼（時雨）、一夏、葉、研究

苦手なもの：人付き合い、偏った思想 女尊男卑

天敵：頭の固い人間、正義を語る人間

備考：原作の一夏の幼馴染の定義からすれば翼の幼馴染に当たる女性でISの生みの親であり『白騎士事件』では日本を救った英雄の1人。現在は日本を出奔し世界中から追われる身であるが何気に若宮家で琴乃とゴロゴロしたり愛する妹弟分達に度々電話を掛けて来たリクロエと温泉巡りをして居たりとかなり自由的振る舞いを続けている為に箒に（コイツ今本当に日本どころか世界中から追われているだよな？）と常々思われている。しかしそんな彼女であるがその灰色の脳細胞を有する頭脳はかのレオナルド・ダビンチの再来と呼ばれ、身体能力は凡ゆる薬物を無効化し戦闘能力こそそれに特化した千冬に劣るものの少し全力を出せば余裕で凡ゆる世界最高記録を更新できる本人曰く「細胞レベルでオーバースペック」な存在。更にその上翼の所為で魔法まで習得してしまいその高い魔力補助及び対魔力能力により生身で深海の海底火山に飛び込んで湯加減の調節を地球に願い出れるくらい常識を鼻で嗤って蹴り飛ばす文字通り『天災』を地で行く凄過ぎる人物と化してしまった。

学生時代の将来の夢は宙を飛ぶ事、現代の夢は外宇宙への進出とそ  
の先での対話

??クロエ・クロニクル

所属：詳細不明<sup>unknown</sup>

専用機：第3世代型生体補助IS 黒鍵

単一仕様能力：隔たれしは今や儚き幻想郷<sup>ワンオフアビリティザ・ワイルド・オブ・パージ</sup>

年齢：17〜18?

誕生日：9月9日

血液型：A B型

身長：151cm / 体重：49kg

パーソナルカラー：モノクロ（白・黒）

特技：鉄甲作用を用いたナイフ投げ、家事、影を薄くする事

好きなもの：ご主人（束）、ご主人のご友人（千冬）、ご主人の想い

人（翼）、温泉、暖かいモノ

苦手なもの：料理（現在映像料理教室受講中）、冷たいモノ

天敵：もう1人の自分達（クローン・シスターズ）

備考：過去束がとある違法研究所を襲撃し潰した際に偶然被検体の中で唯一辛うじて生き残って居た名も無き番号だけを付けられた少女であり、研究所関係者の中でただ1人生き残った女の子だった。束に救出された後はその恩義から束をご主人と呼びその生活を管理補佐しているが、実際の所は人類の負の部分から生まれそれしか知らないある意味『無色無垢』な存在である彼女を危ぶんだ束が敢えて手近に置いて世話を焼かせて苦勞させ、笑わせる事で何か新しい事を、世界の美しい部分を見せて学ばせる事でせめて人らしい、彼女の幸せのカタチを見つけさせようとしている。実際に最初の頃は手料理の作り方を教えながら一緒に作って食べたり忙しい千冬を引っ張り出してファッションショーを開催して服に興味を持たせたりと色々している模様。今は温泉巡りが多いらしい。

将来の夢は自分の幸せのカタチを見つけてやる事だとか

機体設定（情報公開毎に随時更新予定）

〈19〉

【可変戦闘機】

??ASF・C・F—X00/YF—0

諸元データ

分類：第0世代型可変戦闘機

設計：若宮 琴乃

開発：三菱重工（日本国航空自衛隊）

製造：三菱重工（日本国航空自衛隊）

全高：4.02m（ファイター）20.10m（バトロイド）

全長：17.60m（ファイター）

全幅：14.92m（ファイター主翼展開時）

虚空重量：9.240kg

エンジン：擬似熱核反応タービンエンジン×2

OS：ISコア（のち第零世代型IS 雪風コア）

攻撃兵装

・20mm機関砲×2

・三菱製試作30mmガンポッド

防御兵装

・分子結合強化装甲

・特殊カーボン

選択式装備：新型空対空ミサイル

乗員人数：1+1名（後部補助席展開時のみ）

搭乗者：「抹消済み」<sup>若宮翼</sup>

『外装可変戦闘機基礎理論と設計』の提唱者であり開発者である若宮 琴乃博士が製作していたASF・C・F—X00/YF—0と呼ばれる可変戦闘機そのの先行試作機。OSとしてISコア『雪風』が設置されており、更に主機に基礎理論と試作機だけは存在した熱核

反応タービンを元に製作した擬似熱核反応タービンが搭載され従来の超高出力タービンを遥かに超える出力と燃費を実現している。『白騎士事件』では白騎士と協同しミサイルを迎撃、その後の白騎士との一騎討ちにて引き分ける偉業を成し遂げる。初代雪風

??VF-0 セイヴァー

諸元データ

分類：第0世代型可変戦闘機

設計：若宮 琴乃

開発：三菱重工

製造：三菱重工

全高：4.02m（ファイター）20.10m（バトロイド）

全長：17.60m（ファイター）

全幅：14.92m（ファイター主翼展開時）

虚空重量：9.350kg

エンジン：擬似熱核反応タービンエンジン×2

OS：TOV／ST00

攻撃兵装

・20mm機関砲×2

・三菱製試作30mmガンポッド

防御兵装

・分子結合強化装甲

・特殊カーボン

選択式装備：新型空対空ミサイル

乗員人数：1+1名（後部補助席展開時のみ）

搭乗者：「抹消済<sup>若宮翼</sup>み」

ASF-C.F-X00／YF-0の正式採用機であり世界一般

で正式に最初の可変戦闘機と呼ばれる機体。ただ正式採用機であるが目的はあくまで破損したYF-0の代わりに次の機体を製作する為の試作実験機である為自衛隊に配備されることは無かった伝説の幻の機体。

『白騎士事件』の際の教訓より機体強度強化の為重量が110kg増加している。現在所在は不明。二代目雪風

## 【IS】

??雪風

諸元データ

分類：第零世代型IS

設計：篠ノ之 束、若宮 琴乃

開発：篠ノ之 束、若宮 琴乃

製造：篠ノ之 束

全長：1.90m?↓2.00m《new!》

全幅：0.80m? (主翼折り畳み時) 2.00m? (主翼展開時)

## 《new!》

虚空重量：詳細不明↓935kg《new!》

エンジン：試作太陽炉1号炉↓ステージII熱核反応タービンエンジン

## ン《new!》

アタックプリセット  
攻撃兵装：詳細不明



R. i. W製 BGP-T01 20mm多目的重粒子

## ビームガンポッド《new!》

R. i. W製 BHG-T01 多目的ビールガン×2

## 《new!》

大太刀 風片かざひら《new!》

小太刀 月桜つきくさぎ《new!》

ディフェンスプリセット  
防御兵装：詳細不明



エネルギー転換装甲《new!》

ピンポイントバリア《new!》

アクティブステルスシステム《new!》

選択式後付け装備：詳細不明

搭乗者：若宮 翼↓天羽若宮 時雨翼

篠ノ之 束が若宮翼の為に設計、若宮 琴音が自らの可変戦闘機技術を応用発展させた『宇宙空間用のマルチフォーム・スーツ』であり基礎データにASF・C・F—X00/YF—0「雪風」の飛行データが使われている。

今回の試作太陽炉搭載実験にて太陽炉が暴走、翼が咄嗟の判断で氷魔法最高峰である時すら凍りつかせる『氷結鏡界』「アブリュート・ゼロ」を使用、自分ごと凍結させた為現在は秘密地下研究所第3試験場に封印されている。太陽炉暴走の原因は現在調査中であり不明、束と琴乃が不眠不休で解析、千冬は翼の救出を行っている最中である。

←

封印解除後は来るべき翼の目覚めの為に束が7年の月日を掛けて改装、より彼女の『夢』に近く、そして翼がその身を守るように成長させた機体。更にISコア No. 1「雪風」を超時空共振水晶体「フォールド・クォーツ」と融合する事により演算能力を大幅に強化、他にも幾つかの特性が発現しているとの情報も有るが【雪風】のインフィニット・ストラトス・コア・システムはアップデート中である事もあり詳細については現在目下調査中である。《new!》

??打鉄改（天羽改造機）

諸元データ

分類：第2世代型IS

設計：倉持技研

開発：倉持技研

製造：三菱重工

全長：2. 14 m?

全幅：3. 12 m?（非固定武装展開時）

虚空重量：716 kg

エンジン：三菱重工製高出力エンジン



アタックプリセット  
攻撃兵装：アサルトライフル『焰備改』

ディフェンスプリセット  
防衛兵装：非固定武装大盾（改造版）×2

イコライザ  
後付け装備：13mm機銃×2（盾裏に1つずつ）

IS専用刀『葵』（盾裏に1つずつ）×2

スラッシュハーケン（腕先、腰）×4

搭乗者：天羽 時雨（若宮 翼）

日本の倉持技術研究所にて開発された第2世代型ISであり、この機体は第二次製造機である為三菱重工が製造を担当した機体である。IS学園にて訓練機として配備されていたが今回の模擬戦において専用機の調整が間に合わなかった天羽<sup>若宮</sup>時雨<sup>翼</sup>に貸し出され魔改造される事になる。尚、オルコット戦により機体各部、特に関節部の磨耗が厳しくその後の模擬戦には使用不可となった。

現在改造はそのままに修理中。

## 可変戦闘機設定

〈20〉

??開発と運用

第0世代型(2006)

最初の可変戦闘機A<sub>V</sub>S<sub>F</sub>・C<sub>I</sub>・F<sub>O</sub>／X<sub>O</sub>0／Y<sub>F</sub>1<sub>0</sub>ただ1機のみが分類される可変戦闘機の歴史において伝説であり指標ともなる世代。理論は存在したが実用化されていなかった擬似熱核反応タービンが搭載されている。

第1世代型(2007～2009)

A S F・C・F—X 0 0／Y F—0に継ぎ開発されたV F—1

バルキリーを筆頭とした機体が分類される。

例)

V F—1 バルキリー

V A—3 インベーター

V F—4 5 ライトニングⅢ

V F—1 1 サンダーボルト

V F—1 5 グレートイーグル

等

第2世代型(2010～2013)

熱核反応タービンが実用化されそれに伴い実装された機体が分類される。

例)

V F—1 7 ナイトメア

Y F—1 9 カリバーン

V F—1 9 エクスカリバー

V B—6 ケイニツヒモンスター

Y F—2 2 ラプター

V F | 1 7 1 ナイトメアプラス／フェアリー 等

第3世代型(2014〜2016)

新型であるステージII熱核反応タービンが搭載された機体が分類される。

例)

V F | 1 7 1 E X ナイトメアプラスEX

V F | 2 5 メサイア／シルフ

V F | 2 7 ルシファー

Y F | 2 9 デュランダル

Y F | 3 1 カイオスS.M.S改修型ジークフリード／スーパーシルフ

等

??最高峰の機体に与えられる称号

『メイヴ』 未発表

『スーパーシルフ』 Y F | 3 1 カイオスS.M.S改修型ジークフリード

『シルフ』 V F | 2 5 メサイア

『フェアリー』 V F | 1 7 1 ナイトメアプラス

??傑作機一覧

A S F . C . F | X 0 0 / Y F | 0 (初代雪風) 日本製

V F | 0 セイヴァー (2代目雪風) 日本製

V F | 1 バルキリー 日本製

V A | 3 インベーター 英国製

V F | 4 5 ライトニングIII 米国製

V F | 1 1 サンダーボルト 米国製

V F | 1 5 グレートイーグル 米国製

V F | 1 7 1 ナイトメアプラス／フェアリー 米国製

Y F | 1 9 カリバーン 日米共同開発

V F | 1 9 エクスカリバー 日米共同開発

V B | 6 ケイニツヒモンスター 米国製

Y F | 2 2 ラプター 米国製

V F | 2 5 メサイア／シルフ 日本製

V F | 2 7    ルシファアー    米国製  
Y F | 2 9    デュランダル    日本製  
Y F | 3 1    カイオスS.M.S改修型ジークフリード／スーパーシルフ    米国製

??各国配備機（2016年現在）

○自衛隊（日本）

V F | 1    バルキリー

自衛隊に於いてほぼ退役済みの機体、現在では『ブルーインパルス』として国内外での航空ショーにて活動中。別名、名誉なき栄光の俊翼  
V B | 6 J 改    ケイニツヒモンスター改

アメリカからライセンス生産しているもので生産を担当する『大爆発、大量高性能火薬こそ浪漫、これぞ至高。爆発は芸術だ』で世界に名を馳せる大神重工が砲弾、砲身の強化を行っている機体。見た目はあまり元と変わっていないが中身が全く違うH E N N T A Iを地でいくH E N N T A I企業が作り出したH E N N T A I機、しかしその分その過剰とも言える戦闘能力は折り紙付きである  
V F | 2 5    メサイア／シルフ

現在自衛隊に於ける主力機で全国に143機が配備されている  
Y F | 2 9    デュランダル

性能実証試験通過済みで次期主力機、5年後を目処に10年をかけたV F | 2 5と世代交代する予定（民間軍事プロバイダーS・M・S<sup>日本</sup>極東支部に性能評価委託中）

Q F | 4 0 0 0    ゴースト  
日本製半自立型中型無人機、全長14メートルとV F | 1とほぼ同じ大きさでありながらV F | 1 7 1とほぼ同等かそれ以上の性能を誇りながらその生産コストは3分の1程度に抑えられている。

F R X | 9 9    レイフ

自律型大型無人機であり従来の無人機とは一線を画す驚異的な性能を誇る。元々は現在開発中の可変戦闘機の機体飛行形状試験用に作られた機体でその能力の高さ故に存在は秘匿されている

○米軍（アメリカ）

VB-6 ケイニツヒモンスター

米陸軍が「巨大兵器、要塞を大火力によって粉碎する」という大時代的発想の基に移動式の大口徑砲として開発されたHWR-00-Mk-II デストロイド・モンスターを可変爆撃機<sup>B</sup>として再設計した機体。現在47機が配備されている

VF-27 ルシファア

現在米軍に於ける主力機で246機が配備されている

YF-31 カイオスS.M.S改修型 ジークフリード／スーパーシルフ

次期米軍主力機、15年かけてVF-27と世代交代する予定（民間軍事プロバイダーS・M・S本部に性能評価委託中）

AI F-9V ゴーストブイナイン

米国自律型中型製無人機で現在存在する『有人機不要論』を生み出した原因であり、それをAIの脆弱性を持つて否定した機体。有人機<sup>VF-17I</sup>との撃墜比率1対7という驚異の性能を誇る

QF-5100D ゴースト

VF-27とセットで運用される最新の自律型中型無人機、AI F-9Vの後継機にあたる

○英軍（イギリス）

VB-6II E ケイニツヒモンスター

アメリカからライセンス生産されているVB-6 ケイニツヒモンスターの英軍仕様機であり現在15機が配備されている

VF-171EX ナイトメアプラスEX

アメリカからライセンス生産をしているVF-171 ナイトメアプラスの改修機であり汎用性や性能、コストに優れるVF-17系可変戦闘機の最終形態機。VF-171 ナイトメアプラスEXの英軍仕様機であり55機が配備される予定だがVF-171の更新が終わっておらず現在25機が配備されている

VF-27II E ルシファア

アメリカからライセンス生産されているVF-27 ルシファア

の英軍仕様機であり現在30機が配備されている

QF-4000 II E ゴースト

日本からライセンス生産されている半自律型中型無人機  
QF-4000の英国仕様機

○仏軍（フランス）

VB-6 II F ケイニツヒモンスター

アメリカからライセンス生産されているVB-6 ケイニツヒモ  
ンスターの英軍仕様機であり現在15機が配備されている

VF-171 EX

アメリカからライセンス生産をしているVF-171 ナイトメ  
アプラスの改修機であり汎用性や性能、コストに優れるVF-17系  
可変戦闘機の最終形態機。VF-171 EXの仏軍仕様機であり5  
5機が配備される予定だがVF-171の更新が終わっておらず現  
在25機が配備されている

VF-27 II F ルシファー

ライセンス生産されているVF-27の仏軍仕様機であり現在3  
0機が配備されている

QF-4000 II F ゴースト

日本からライセンス生産されている半自律型中型無人機  
QF-4000の仏軍仕様機

○独軍（ドイツ）

VB-6 II B ケイニツヒモンスター

アメリカからライセンス生産されているVB-6 ケイニツヒモ  
ンスターの独軍仕様機であり生産を担当していた企業が日本の大神  
重工と繋がりのある企業だった為こちらも相当なHENTAI機  
に仕上がっており現在15機が配備されている

VF-171 EX ナイトメアプラスEX

アメリカからライセンス生産をしているVF-171 ナイトメ  
アプラスの改修機であり汎用性や性能、コストに優れるVF-17系

可変戦闘機の最終形態機。VF-171EXの独軍仕様機であり35機が配備される予定だがVF-171の更新が終わっておらず現在15機が配備されている

VF-25B メサイア／シルフ

日本からライセンス生産されているVF-25の独軍仕様機であり現在40機が配備されている

VF-30 クロノス

日本からの技術供与を受けドイツで開発された次期主力機、10年をかけて世代交代予定だが既に10機がロールアウトし特殊部隊に優先配備されている

QF-4000B ゴースト

日本からライセンス生産されている半自律型中型無人機  
QF-4000<sup>ゴースト</sup>の独軍仕様機

#### ○露軍（ロシア）

VB-6R ケイニツヒモンスター

アメリカからライセンス生産されているVB-6 ケイニツヒモンスターの露軍仕様機であり現在25機が配備されている

VF-24 スホーイ

ロシアが独自開発した主力機でありVF-171とほぼ同等の性能を持つ。現在79機が配備されている

YF-26 ファルクラム

日本とアメリカの技術供与を受けてロシアが開発中の次期主力予定機、未完成の為配備予定等は未だ未定である

QF-4000R ゴースト

日本からライセンス生産されている半自律型中型無人機  
QF-4000<sup>ゴースト</sup>の露軍仕様機

## 第1章 IS学園入学編

### 7年後の世界は……

〈21〉

これは日本を狙った21世紀最大とも言われる『白騎士事件』と呼ばれる事件より7年もの歳月が過ぎた2016年、間も無く咲き誇るであろう桜が未だ花開く前の蕾である頃、表向きには『世界初の男性IS搭乗者』として『織斑おりむら 一夏いちか』が世界の表舞台へと現引き摺り出されてれて1ヶ月が過ぎたそんなある日の話。

たった1人の少年の目覚めを待ち望むかつての2人少女の話である。



日本首都東京某所にあるとある近未来的な内装の廊下を千冬は1人歩いていった。ヒールと床が打ち鳴らすコツコツという音が、照明が落とされ薄暗いオレンジ色の非常灯のみが灯ったその廊下に反響し響き合う。そして漸く彼女はその廊下の先にあつた1つの扉へと辿り着いた。

——コンコンコン——

3回ノックすると全自動である電子扉が開きその部屋の内部の電灯が灯る、いきなり明るい空間に入ったことで千冬は少し眩しげに目を細めた。

少し古びた感じはするが掃除ロボットが常に定時に清掃をしに来るおかげで小綺麗に保たれた清潔のある白い内装を施されたその部屋に幾つか並んだ東特製の医療ポット、そしてその中でも1番奥にある今尚起動し続けているにはあの日からずっと眠り続けている翼の姿があつた。



「……………翼」

千冬は医療ポットの側にある少し古びた丸椅子に腰を下ろし翼の顔を覗き込む。一見身動きもしないその姿に死んでしまったのではないかという不吉な予感を受けるが、よく見れば病院服の下の胸が規則正しく上下に動いておりしつかりと呼吸をしている事が認識できる。それに医療ポットの投影型画面には安定した心電図も映し出されており間違いなく確かに翼はそこで生きていた。

「ただ……………目を覚まさないが、な……………」

そう、翼は確かにここで生きている。……………だが翼は7年が経った今でも目を覚まさない、時をも凍らせる氷にその身を長時間包まれていた所為か翼は未だ目を覚ましていなかった。



その時、千冬のスーツの内ポケットに入っていたプライベート用のスマートフォンスマートフォンが鳴り出した。今鳴っている着信音はとある特定の人物からの連絡の時にしか鳴らないように設定されているものであり、千冬はすぐに通話ボタンを押した。

「束か、久しぶりだな。前の連絡以来だから1ヶ月振りか？」

『うん、久しぶりだねちーちゃん。やっぱりちーちゃんは今彼処に？』

「ああ、そうだ……………あの場所、あの日から変わらない変わる事のないあの地下秘密ラボに」

電話を掛けてきた相手は失踪し現在世界中で搜索され行方不明中であるISの生みの親、篠ノ之 束だった。因みに現在束との連絡手段ホットラインを持っている人物は5人居る。まず親友である千冬に研究者仲間である琴乃、妹の箒と千冬の弟一夏、翼の妹葉である。そしてその中でも1番束が連絡を密に取り合っているのはこの場所の存在を知り親友だと認め合っている千冬だった。

千冬と束はいつも通り最近一夏や箒、葉達に起こった事や自分がIS学園で働いていてあった出来事、最近の近況等を話し互いに情報交換を行う。そしてそれが漸くひと段落した頃、千冬は前回束が次くらいには報告できると言っていた事について聞いてみた。

「ところで【雪風】はお前が回収していったが結局、『暴走』の理由は

分かったのか？」

『ある程度はね、詳しくはつー君本人に【雪風】を起動して貰わなきゃ分からないけど……多分、1号炉……太陽炉と雪風のISコア、そして搭乗者のつー君の相性が良過ぎたからだと思う』

「相性が良過ぎた？」

『そう、太陽炉にはひとつひとつに特徴があつてしかも人の感情や意思に稼働能力が左右されるのはちーちゃんも覚えてるよね？それと新しく分かった事なんだけどどうやら太陽炉には相性つてもものがあるみたいなんだ』

「ふむ、つまりIS適正みたいなものか？」

『うん、だからつー君と【雪風】の適正がEX―S……理論上の限界最大値だったのと同じようにつー君と【雪風】の1号炉の適正が最高に良かったみたいなの。だからそれに太陽炉が過剰反応して出力は私達が想定していた以上にいきなり跳ね上がった……そう私は思う』

本来束達が想定されていた1号炉<sup>太陽炉</sup>の最大稼働率は安定域少し上であつた87%、だが実際に1号炉が叩き出した最大瞬間稼働率は強制凍結させられる直前の327%。想定約4倍もの稼働率は【雪風】の許容出来るエネルギー限界を遥かに超え、装甲に使われていた試作エネルギー転換装甲を過剰起動させその結果『暴走』へと繋がつた……そう束と琴乃は【雪風】に記録された最後のデータから導き出した。

「……そうか」

『太陽炉との適正 エネルギー転換装甲の限界想定外に想定外が重なつた結果あの暴走は起きた……、言い訳なんて言えた義理なんてないけどこれは間違いなく私の落ち度だよ……』

束は全ての責任が自らにあつたのだと千冬に告白する。千冬が自らを責める必要はない、責められるべきは自分なのだ束は言外にそう言った。だが千冬はそれを聞いてなお首を横へと振つた。

「お前だけの所為ではない。私だってあの日嫌な予感はしていた……もしあの時私が実験の中止をお前達に頼んでいれば翼はこんな目に遭わなかつたのかも知れない、誰も後悔なんてしなくて良かったのか

もしれない。でも……だからこそ私はお前だけを責めるなんてできないんだ」

『ちーちゃん……』

「謝らないでくれ束、お願いだ。お前に謝られたら私はどうすれば良いのか分からなくなる……だから私に謝らないでくれ」

『……分かった、話を変えるね。ちーちゃんから見てもつー君はやっぱり……』

「……ああ、あの日から少しも成長していない。身体の時が止まった所為で翼の姿は7年前の16歳の姿のままだ」

千冬の嘆願するような頼みに束は話を変える、それは翼がただ眠り続けているのではなく、あの時アブソリュート・ゼロをも凍らせる氷を使った事が原因なのかそれともそんな氷に包まれていた副作用なのか、詳しくは不明だが7年もの年月が流れているにも関わらず彼の身体は1mm、1gと成長していない。見た目も何もかも変わっていないの事だ。

『つー君の体調バイタルは常に観測してるけど……やっぱりつー君の時は止まったままなんだね……』

「くそっ……確かに私達はあアブソリュート・ゼロの結界を解除した筈だ、筈なんだ！……でもどうして翼の目は覚めない？どうして未だ翼の時は止まらなかったまなんだ？分からない、分からないんだ束……」

千冬は翼の眠る医療ポットのある部屋の壁にその拳を叩き付ける。だがその叩き付けられた拳はいつもの本来の威力などもなくそれより遙かに弱いもの、世間では『世界最強』と名高い彼女だが本当の姿は辺りを見回せばそこにいるような普通な女性である。そして誰よりも優しく彼を大切に思っているからこそ今の本当の彼女は何もできない自分を悔やみ悲しんでいる。

『ちーちゃん……、私にも……分からないよ……私にも』

そして帰って来た束の声もまた、いつもの仮面天災としての姿とは異なりずっと弱々しいものだった。

「束……」

『何が『天才』、何が『人類最高の頭脳』なのさっ、これじゃあたった1人の大切な人を助けられない、親友ライバルの苦しみを楽にさせてあげる事

もできない唯の凡人以下じゃないか!」

東が溢した慟哭の様であり、大事な事であるのに何もできない自ら向けられた怒りであり、彼女がずっと一人で悩み苦しみ心の底で蓄積され続けていたその感情の欠片カケラに千冬は何も言えなかった。自分だけではない、皆んな苦しんでいたのだ。何ひとつできない自分自身の非力さに……

『…………ごめん』

「…………いや、良い。気にするな…………また掛け直す、互いに落ち着いたらまた掛けよう。あと箒ともしつかり連絡は取っておけよう。」

『…………分かった。少し気不味いけど…………ちゃんと真面目に連絡しとく…………』

「ああ、頼んだぞ……………………ふう」

千冬は通話を終えた携帯を元通り内ポケットに仕舞うと丸椅子から立ち上がる。最後に翼の顔を眺めた後千冬は少し名残惜しげにその部屋医務室を後にした。

「翼…………私頑張るから、いつかきつと翼が目覚めた時に誇れるように頑張るから」

立ち去る瞬間、電子扉が閉じ切るその僅かな間に千冬はそう呟く。訪れ此処学園から去る度に何度も紡がれたその決意を胸に、彼女はまたいつもの日常へと戻って行った。



「………………………」

人気の無くなった医務室、この場所にただひとりしか居ない人である翼は未だ眠ったままである。

—————キリツ…………キリツ…………

そんな部屋に静かに鳴り響くその小さな音色こそは、まるで今まで止まっていた時計の歯車が少しずつ回り出した音色にそっくりであり…………それはいつか千冬が聞いた欠けていたはずの歯車が廻る音と同じもの。

始まりの時は近い  
それは全ての歯車<sup>物語</sup>が廻り始める1ヶ月前の話だった。

## 目覚めた少年

〈22〉

東京某所に存在する僅かな人間しかその存在を知らない秘密の場所、とある場所の地下深くに潜む秘密研究所<sup>ラボ</sup>、そこに眠るたった一人の少年にとある変化が起きていた。

「……………うつ」

今まで浅く、そして安定していた筈の呼吸に乱れが起きる。浅かった筈の呼吸は次第により深く、そして力強いものへと変わり……

「……………ぐっ」

正しくそれは人が眠りから目覚める時に起こる呼吸の変化だった。

「……………はっ、はっ」

<sup>7年間</sup>長き眠りに就ていた少年は今、目を覚ました。



太平洋洋上、地図にも載らぬ名も無き島にその『<sup>目覚め</sup>異変』は直ぐさま届いた。

「っ!!? 束様! 束様!」

「ん? 如何したのクロエちゃん? 私は今【雪風】の回析と改修に忙しいんだけど……」

「それどころではありません! と言うよりも束様の所にも最優先で届いてる筈ですが」

「ふえ？あ、ゴメン。『メカ兎耳Ver. 5』をVer. 6に更新して机の上そのままだった」

そしてその情報を受けて直ぐにでも飛び出していきそうな性格の主人が今もまだ何も行動を起こしていかない事実<sup>命の恩人</sup>に気付いたクロエアクション(今日はメイド服用)はまさかと思いつながらも主人である束の元に突撃すると案の定全く気付いていないという非常事態に彼女は頭が痛くなるばかりであった。

「早く付けて下さい、早く！多分私が説明するよりも早く束様なら理解できますから!!？」

「？、何？まあ分かったけど……今丁度良いところだったんだけど仕方ないね」

「早くして下さいー！」

「はいはい……」

そして束はクロエに急かされるままにその手に持っていた工具を机に起きウサ耳をその頭にカポツとセットする。で、セットした瞬間認識した事実<sup>命の恩人</sup>にいつもなら『天災』の仮面が貼り付けられる筈の彼女の顔は未だかつてない程の驚愕に満ち染められた。

「つつつ???!うそっ!!?ホントに!!?」

「本当です、現実です。夢じゃありません」

「嘘……嘘、嘘、……ウソ………本当に……」

驚愕だけだった表情が次に歓喜に代わりにそして遂には大粒の涙となった。しかしその涙はあの日、あの時流した悲しみの涙ではなくその逆、嬉しさから流れ出た彼女の心からの歓喜である。

「良かったつ、本当に、本当に目覚めてくれてっ……良かったよう……」

ポロポロと涙を零しそう呟き続ける束の姿を見てクロエもまた漸く主人がひとつ救われたのだという事を実感し我が身の事のように嬉しく思う、そしてそれと同時にもう1人、それを『知るべき人間』がいる事もまた知っていた。

「束様、千冬様にも連絡するべきかと。それと御早くお会いに行かれるのがよろしいかと」

「うん、うん、……ぐすつ、そうだね……ぐすつ」

「人参型ロケット<sup>ト</sup>の用意は出来ております。今にでも直ぐに出発可能です」

「うん、うん、……流石、ぐすつ、くーちゃんだよ、ぐすつ、ありがとう」

東は未だ零れ続ける涙を白衣の袖で拭いながら献身的に全ての準備を整えてくれていたクロエに礼を言う。それを見たクロエは微笑ましいものを見たかのような笑顔を浮かべながら礼に答えた。

「こちらこそ、東様。さあ、行つて下さい。貴女が誰よりも会いたいと願ひ何よりも望んだその奇跡の場所に」

「うん!!?行つてきます!!?あつ、ちーちゃん!ちーちゃん、ちーちゃん、ちーちゃん!!?ビックニユースだよ!ビックニユース!!?理由は行く途中に説明するから急いで!!?」

泣いていたと思えばまるで嵐のように出て行った主人<sup>東</sup>の後ろ姿を見送ったクロエはひとつため息を吐く。やれやれ、漸く救ってくれた主人にも救いが訪れたのかと安堵のため息を零すその姿は一体どちらが保護者なのか分からなくなってしまいそうな程であった。



打つて変わりこちらは日本首都東京、その沖合いにある人工島に建設されたIS技術専修国際学園、通称『IS学園』では何やら一悶着起こっていた。

「退いてくれ、退くんだ山田先生」

「いいえ、退きません。退く訳には、ここを貴女に通させる訳にはいかないのです織斑先輩」

「私に逆らうというのか山田先生」

「はい、ここで貴女に屈すれば今まで倒れた同僚達に顔向けできませんから」

黒いレディーススーツに左手にプライベート用の携帯端末、それと何故か出席簿を右手に持っている千冬に対するのは深緑色のレ



デイスーツを着て部屋の出口である扉を背に背水の陣を敷き両手を広げ彼女を迎え撃つのは山田真耶という女性教諭だった。字面からすれば正に命の危機をも感じる一触即発と言える雰囲気だが少し視点を引いてみるとその雰囲気は変わる。

机の上に山程積まれた書類が数十個、それが山脈のように隣の机へ隣の机へと連なりそこに倒れるのは真つ白に燃え尽きながら右手にボールペン、左手に判子を持ち山の斜面に頭から突っ伏している女性教諭数十人の姿であり中には「書類が245枚……、重要書類が975枚……、機密文書が24枚……もういやああ……」とか「も、もう無理です……ガクツ」とか言う謎の寝言（遺言？）まで聞こえてくる始末、まさに文字通り死屍累々って奴である。

「1番私達の中で頑丈でまだ二徹は余裕そうな先輩が抜けたら私一人で残り全部やらなきやいけなくなるんじゃないですか!!? 私だってもう二徹目ですよ!!? もう無理です!!?」

「それは私もだっ!!? それと私は今日で三徹目だ!!? 身内の事で巻き込んで済まないとは思いますがその分私は多めにやっているだろう!!? あと私は今すぐ行かなきゃいけない所があるんだ! 通してくれ!」

「嫌です!!? 先輩は私に死ねと言うんですか!!? 始業式と入学式までもう2週間もないんですよ!!? こんなエベレスト登頂なんてできる筈がありませんよ!」

あ、今上手いこと言ったなと密やかに思った2人だが現実逃避をしている暇などない事を理解している為（そんな余力も無い）直ぐさま睨み合いが再開される。降り積もった白い雪が何処までも続く<sup>積み重ねられた書類がうず高く積み上がった</sup>白亜の山脈、確かに喩えとすればエベレストが最適だろうとは思いますがそれを処理する当事者ともなればそれを陽気に笑ってなどいられない、むしろ死活問題である。だからこそ千冬は未だにここから逃れられていないのだが。

「そんな事はどうでも良い、私はっ! 私はあいつの元に行かなきゃいけないんだ!!? だから通せ!」

「嫌です!!? と言うかあいつって誰ですか、ニュアンス的に弟さんではなさそうですが」

「それは……友達だ。私の、私達姉弟にとって恩人でありそして私にとっては大切な友人だ」

真耶の問いに千冬は言葉ひとつひとつを大切なようにしてそう答える。そんな千冬が初めて見せた姿を見て思わず真耶は言葉に詰まってしまった。それは何処からどう見ても恋する乙女がするような初々しくも甘酸っぱい、未だ自分がした事も無いような姿であったからである。まあまさかそんな姿を目の前の世界最強のブリュンヒルデがするとも思っていなかったからでもあるのだが……

「失礼しま……ってなんですかこの空気？文字通り一触即発しかも死屍累々って感じですけど……」

「あ、生徒会長さん。丁度良かった、先輩を抑えるのを手伝って……」

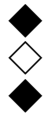
「今だっ！」  
「あっ！」

丁度そのタイミングで何かを届けに来たであろうIS学園生徒会長の二年生は、扉を開け見渡した職員室の様子から『一触即発』といつの間書かれた扇をひっくり返し裏面に『死屍累々』と書かれた扇を開きつつ中に入ってくる。

だがその好機を逃す程、織世界最強は甘くない。

真耶の意識が生徒会長に逸れた瞬間を突いて千冬は全力で職員室から脱出を図る、こモンド・最グロッツ近でも出した事のないレベルまで力を解放し間一髪逃走に成功した彼女は途中学園長にすれ違ったので「急用が入りました、直ぐ戻ります」と深々と頭を下げたのち再び走り学園の正門から脱出、その足でリニアレールに乗り本土へと渡って行った。

彼女が出て行った後、深緑色のスーツを着た女性教諭の涙交じりの絶叫とどうして巻き込まれた!??と言う世界の理不尽を呪う追加の書類仕事のとぼちちりを食らったとある生徒会長の悲鳴がIS学園に響いてたとかないとか。あとそれを見てとある老人が苦笑いをしていたのは知る人ぞ知る事実である。



そして今……

「つー君……」 「翼……」

地下研究所にて3人は対面していた。小まめに<sup>1ヶ月ごとに</sup>見舞いに来ていた2人とはいえ実際に顔を合わせて3人が出会うのは実に7年振りの事である。

「おはよう……束さん、千冬さん。……………」 『ただいま』

「!!?。」

『ただいま』

そのたったひとつの言葉は夢の中で一体何度聞いただろう? 何度も聞いた、そして夢から覚める度にそれが夢なのだと思い知り2人は胸が苦しくなった。それが今、本当の現実に誰よりも聞きたかった、言って欲しかった人から言われた。たったそれだけで、たったそれだけだが2人が今まで堪えていた感情の<sup>涙</sup>籠<sup>が</sup>が<sup>零</sup>れ<sup>れる</sup>には、救われるにはそれで十分だった。

「つー君!!?。」 「翼つ!!?。」

どれだけ自分が眠りについてたのか翼は知らない。だが明らかにあの頃よりも成長してしまっている2人の姿を見て翼はあれから長い年月が過ぎてしまったのを理解していた。……………そして、彼女達にどれだけ苦しみと悲しみを与えてしまっていたのかも。

だからこそ翼はその胸に飛び込んできた2人を受け止めた。本当は彼女達2人を泣かせてしまった自分には相応しくない事なのかもしれない。だが翼は涙を流す2人を放っておく事など出来なかった、抱きしめなければならぬのだと思った。

「……………ただいま、ただいま束さん、千冬さん」

「つー君つ……………つー君つ……………つー君つ!!」

「翼……………翼……………翼!」

その時涙を流していた2人は不意に顔を上げ翼の顔を見る。そしてあの頃と変わらない、いやずっと美しくなった微笑みを満面に浮かべ翼に言った。

「『おかえりなさい』つー君」<sup>翼</sup>

「いつてきます」と言う言葉はその言葉ひとつで完結しない。送り出された者が帰ってきた時送り出した者が「おかえりなさい」と言う言葉を紡いでこそ、その言葉は漸く完結する。今ここでたつたひとつの寂しい時間は終わった、そしてこれからまた新しい時は始まるのだ。

だがその前に3人は互いに抱き締め合う。互いの存在を確認するように、今までの無くした時間を補うかのように、今はまだ3人はそのままずっと抱き締め合い続けたのだった。



——時は満ちた、凍て付いていた歯車は再び廻り始め本来ならば有り得ないなかつた筈の物語の幕は上がる。

その先にあるのは希望か、それとも絶望か。それは誰にも分からない。

ただ1つ確かな事は、これは何処かの誰かさんが願った事から始まり、そして今はその願いを受け取ったとある少年を中心に紡ぎ上げられる星屑数多の物語未来であるという事である。

## これからの事

〈23〉

若宮翼が7年振りに目覚めて数時間後、3人は秘密地下研究所から場所を変え篠ノ之神社にある『元』篠ノ之一家の暮らしていた家へと移動していた。

「叔母さん、神社と家の管理ありがとうございます」

「気にしないで東ちゃん、私達だって事情は理解しているわ。私達はこれから『外食に出る』けど……東ちゃん達の部屋は掃除だけしてそのままだからね」

「……お気遣いありがとうございます叔母さん」

現在東と箒の家族は出奔している束と若宮家に同居している箒を除き両親は国の『重要人物保護プログラム』と言う名の隔離が行われている。名前、経歴の全てを偽りバラバラの国内の地域に護衛と言う名の監視付きでの生活を強要される。当時幼かった箒がこの保護プログラムを逃れる事ができたのはただ単純に既に『更識』により直接裏から護衛の為されていた若宮家と近い人物であり、まだ幼かった為である。またこれは一夏にも当て嵌まる。

で、この神社と家にいられなくなった篠ノ之一家の代わりに管理の為に篠ノ之両親から頼まれて引越して来た叔母夫婦が今はこの家に住んでいる。

「良いのよ、それにそれくらい出来ずして篠ノ之の女にはなれないのよ？」

「は、はあ……」

そう言いながらにこりと笑ってひとつウインクを飛ばす自らの叔母に若干引きながら頷く束の様子を背後から見ると千冬は会話に入れずただ黙って聞いている事しかできていない。いや、まあ面識がないのだから仕方ないのだが特に『今の姿』の翼はあまり見られたいものではないのだ。

「あら？そちらの『女』の方2人は誰かしら？」

「初めまして、IS学園で講師をしております織斑千冬と申します」

「は、初めまして……『天羽時雨』です。ハイ……」

黒のレディーススーツを着た女性の隣に立つ右眼が紅く左眼が夜色の瞳を持ち明らかに束のお下がりっぽいアリス服を身に包んだ『少女』はそう答えた。

……もうお分かりだろう。このアリス服を着た少女、その正体は病院服の着替えがないのと身バレしない為に押し付けられた束の予備のアリス服を着て女装した若宮翼である。

「あらあら♪綺麗な肌ね、おばさん羨ましいわ」

「ア、ハイ。ソウデスカ？」

「ええ、それに片目だけ赤色の……オッドアイというのかしら？それも綺麗ね」

「ア、ハイ。ソウデスカ？」

「……………」

「それに……」

「こほんこほん」

死んだ目をしつつ片言に答え続ける翼の姿に耐えられなかったのか束はワザとらしく咳をつく、2人も中学生の時に女装させて案外似合ってたから悪ノリして今回もさせてみたのだが思いの外翼へのメンタルにクリティカルダメージを与えているようなので流石に駄目だと判断したのだ。……しかし後日またやらないとは言っていない。「あら、もうこんな時間。主人との待ち合わせに遅れるわ、じゃあゆつくりしていつてね。冷蔵庫の中は自由に使って良いから」

「はい、ありがとうございます」

こうしてやたら元気な束の叔母さんは外に出て行った。あとに残されたのは死んだ目をしたまま突っ立っている翼とそれを見て顔を僅かに引き攣らせた天災と世界最強千冬はと言うと、

「……………取り敢えず食事の準備でもするか……………インスタント有るかなあ……………」

「……………取り敢えず着替え用意しとこう、うんそうしよう。……………そう

じやなきやつー君が多分ずつとこのままだし……」

取り敢えず翼が復旧するまで個々に動き出す2人だった。



女性2人組説明中……

説明後、

「……取り敢えず、簡単にだけど現状は把握したよ。白騎士 I S 登場からいきなり女尊男卑って頭おかしいんじゃない？この世界」

篠ノ之道場に置いてあった道着と袴を着る事で漸く正気に戻った翼はズルズルと千冬が作湯を注いだったカップラーメン（シーフード）を食べつつそう一刀両断した。

「まあ……7年前からいきなりここに来たらそう思うだろうな、正直私達もそう思ってるし」

「女権団体とやらが煩いんだよ……こっちはさっさと宇宙行けて色んな企業急かしてて忙しいのにさ」

片や女性で世界最強を示した元ブリュンヒルデ白騎士に、片やその原因となる I S を登場させてしまった生みの親天災は思い出すだけでも嫌そうにそう言う。実際本人が了承していないのに勝手に旗頭にされ掛かったり言動を捏造されかけたりと未然に束が裏から手を回して潰しているがかなりヤバイ行為に手を出している女権団体には2人も辟易としていた。

「でもまあ、1番驚いたのは俺だけじゃなく一夏も I S に乗れるって事なんだけど……結局理由って分かったの？」

「それがさっぱり、幾つか推論はあるけどまだどうとも言えないかな？今後稼働データを調べていけば何か分かるかもしれないけど……まあひとつ言うなら多分、いっくんもまたつー君と同じ様に彼女達I S コアに選ばれたんじゃないかな？」

束は何処か意味有りげにそう言う、それを聞いた千冬は自分もカップラーメン（塩）を啜りながら彼女がずっと聞きたかった事を口に出した。

「ところで翼、なんでお前の右眼は赤くなってるんだ？それと少しだけだがそこから魔力が漏れ出ている気もするし……」

「あ、本当だ。確かに言われて漸く気付いたよ、ちーちゃんの魔力感知は凄いいねえ」

「はあ……お前は浮かれ過ぎてるだけだ。普段ならお前だつてすぐに気付く」

カップラーマン（味噌）をとつくの昔に食べ終えて塩おにぎりに手を伸ばしてもしよもしよも頬張っている束に千冬は少しため息を零しながらそう言う、彼女もまた手を伸ばしおにぎりを掴むと更に出そうになったため息ごと噛み砕いて飲み込んだ。

「うーん、多分1度に大量の魔力を使った障害かな？回路に大量に魔力を通した所為で閉じてた魔眼が開いたのかも……とはいえ開き方が開き方だったしで不安定な状態だから色も違う上に片目しか発現してないし任意で解除することもできないんだけど」

「魔眼？」

「うん、外界からの情報を得る為の物である眼球を、何らかの影響を受けて外界に働きかける事が出来るように作り変えられた物。それ自体が半ば独立した魔術回路で血筋に関係なく発現、適応できる特殊な魔術刻印に近いもの……かな」

翼は魔眼についての知識を2人に話す。魔眼自体先天的に発現するモノであるし、正直魔法を使う人間がこの世界には翼自身が使い方を教えた5人だけであるので発現する気もさせる気も無かったのだが、いきなり氷系統魔法最高峰の魔法を発動させ魔力を消費した所為か勝手に開いたようだ。いやだがかし……あの時のあの感覚、何かおかしかった気がする……気の所為か？

「魔眼か……私にもあるのか？」

「あるんじゃないかな？特に千冬さんなら唐突にほんの少しの限定的な未来視、記憶にはない？」

「……あるな、魔法を習い始めてから元はもつとぼんやりと不確定だったがあの日からなんとなく少しだけ鮮明に見える気がする。これが直感かと思っていたが違ったのか？」



「多分ソレは【天眼】、かの劍豪宮本武蔵が持っていたとされる先見の魔眼の一種だね。具体的に一言で効果を言えば最適解たる未来の『確定』、もしくは『限定』。千冬さんの場合は『斬る』事に特化したのではなく全体的に発動するタイプだと思う」

「んじや私は?」

「ん……魅了?」

「……………魅了」

「うん、魅了<sup>暗示</sup>」

多分1番剣を合わす機会の多かった千冬の魔眼はそうに違いないのだが、何気に最近(7年前だが)あまり魔眼が発動しそうな機会に会っていなかった束については翼も殆ど分からない……そもそも持つてののかも分からない。

「そう言えば翼の魔眼とは一体どんなモノなのだ?」

「<sup>コードサイト</sup>【シキの魔眼】、<sup>エレメンタルサイト</sup>【妖精の瞳】の亜種で全ての魔法を『式』として認識、

更に任意で改変できる。希少ランクで言えば【天眼】には劣るけどね」

翼はラーメンを食べ切りおにぎりひとつを手にとると半分程一口でかじり魔眼についての説明を締め括った。

「ふむ……なるほど。と、それよりもだ。翼はこれからどうする? 私としては取り敢えずISが使えるし年齢的にもIS学園に入ってもraithたいところだが」

「そうだねー、事情を知ってる琴乃さんには連絡<sup>報告</sup>したい所だけど今『VF-30』のテストの為にドイツだもんね。戸籍とか諸々問題あるし、1番の問題は『所属』かな……」

「だな、一夏の場合私や束の後ろ盾があったからなんとかあったが、実際に戸籍<sup>過去</sup>を捏造して翼を完全な一般人にしたら<sup>女権団体やマッドなサイエンティスト達</sup>世界のアホ共が翼を喰い物にしかねん……まあ自力で脱出してきそうな気がするが」

千冬は翼が女権団体やマッドなサイエンティスト達に攫われる姿を思い浮かべるがすぐに正攻法でも裏からでも脱出してくる姿も思い浮かべてしまったため息を吐いた。多分どんな権力も翼を捕まえる事はできてもすぐ翼は脱走してくる、その辺は多分束より技術は上である。

「うむ、丁度良い場所か……」

「あ」

「あ?」

「丁度良いのかあるよ、ちよつと待ってて」

不意に何か妙案でも思い付いたのか束はとある人物へと電話を掛けた。

「もすもすひねもす? Hello、私です。……うん、少し提案があつてね。……そう、事情は後で話すからちよつと一時的でも代表候補生欲しくない?……うん、腕は保証するよ。……分かった面接だけはするから連れて行けば良いんだよね?日時と何処に行けば?……2日後にアメリカね、分かった。ありがとう」

「束、誰に電話してたんだ?」

「ん、知り合い。IS理論の論文を発表した時の学会で笑わなかったたつた2人の内の1人」

「研究者か?お前が普通の対応をしているところを見ると信頼できる人物の様だが……」

「元研究者だね、何やら裏の顔もあるみたいだけど信頼はできるよ。」

「一応私の『夢』の賛同者の1人だしね」

「そうか……なら安心だな」

束が信頼できるというなら間違いないだろうと千冬はそれ以上突っ込むのを止める。ちよつとその裏の顔があるみたいと言う所をもう少し突っ込みたかつた翼であったが、そこからの段取りは早く特に翼が口を挟める隙間もなく束と千冬の2人だけであつと言う間に翼の偽造される戸籍の基本情報が完成していた。

「さて、これで準備はほぼ万端。あとは所属面接の合格通知を貰うだけだね」

「ああ、あとは翼……いや時雨自身の問題だ」

トントンと書類を纏めて量子化した束は隣で一緒に纏めていた千冬と共にニヤツと笑う。その笑みに翼の背に猛烈な寒気が走ったの

はおそらく幻ではない。

「え、なんか嫌な予感が……」

東さんが指をパチンと鳴らすと食卓の上には大量の紙束がバサバサと落下して来た。パツと見たところ全てIS関連の書類であり中には無駄に達筆で書かれた束直筆のメモっぽい奴も混じっている……アレ？あの内容、アメリカの軍事機密じゃね？あ、こっちはロシア？ドイツもあるの？……えっ？一般人が見ちゃ駄目なやつだよコレ？

「ともかく、これからはつー君は『若宮 翼』としてじゃなく『天羽 時雨』としてIS学園で過ごして貰うね。大丈夫、入学式までもう2週間もないけど知識は殆ど7年前のでも大丈夫だし束さんとちーちゃんが付きっ切りでしっかり教えてあげるから」

目の前に積まれた紙束の山……某黄色い電話帳にして厚さ3冊分位を前にして束はその豊満な胸を張りながら「ムフウー」と息を吐き出しながら言い切り、しかも隣の千冬においては小声で「3日である山登り切るか……うん、そうしよう」と呟く。ここで更に時雨の背に寒気が走ったのはきつと絶対に幻ではない絶対ない。

「頑張ろっか、しー君？」

「ア、ハイ……」

……ここから2週間、束と千冬の一对一もしくは二対一の個人授業を受けていた翼もとい時雨の平均睡眠時間は2時間だったとか遠距離で教材を準備し発送、主人達の暴走の監視を行っていたとあるメイドがそんな事を言っていたらしいが、事実については定かではない。

## 表の物語の始まり

〈24〉

一人の少年の7年もの時を超えた眠りからの目覚めにより世界は再び回り出す。この世界に何者か神の手により落とし込まれた異端因子——人類世界の変革者、かつて世界を救った者、正義の味方に成れなかった愚か者——様々な名過去を持つ3度目の転生者は再びその手に剣を取る、この世界今にて手に入れた翼と共に、今度こそ、『後悔しない』その為に。



女性しか動かせないはずのISを男でありながら動かした、通称『世界で唯一の男性操縦者』である織斑一夏は内心混乱していた。何故ならやっぱりというか当然というか所属するクラスどころか学園全体をも含めてもここにいる男子が自分一人だけだからである。

ああ……帰りたい……もしくは逃げたい

今日はまだ初日である入学式であるのだが周りの女子生徒達からまるで上野公園のパンダを見ているかのようにして見られている感覚に一夏はかなりメンタルが削られていた。それはもうガリガリと、藍越学園普通の高校への入学ならどんなに良かったか……

女性しか起動できないはずのISを何の手違いか起動させてしまいそして女子校とも言えるココ、IS学園に放り込まれたこれまでの経緯を脳裏に浮かべつつ一夏はこっそりため息を吐いた。

「はあ……」

ちらりと窓際に目を向ける。

窓際の席には久し約1ヶ月ぶりぶりに再会する幼馴染の篠ノ之箒と若宮葉が居る。救いを求めて視線を投げかけるが箒は辺りに視線を向け何処か悟った顔をして謝るような視線と共に窓の外に顔を逸らし、葉もわざ

と目を逸らして気付かない振りを貫くつもりらしい。

……どうやら頼みの綱の幼馴染も、俺と同じく目立ちたくないようだ……

『この薄情者っ!?』と叫んでやりたいのはやまやまだがやはり自分がああ2人の立場なら絶対に関わりたくはないので無理矢理諦めることにした。

「全員そろってますねー。それじゃあSHRを始めますよー」

と、そこで教室の扉が開き緑髪の女性が教室に入ってきた。必然的に一夏から視線は外れて彼女に集まる。本日の彼女の服装はスーツではなく、薄黄色のワンピースに大きな黒縁眼鏡をかけていた。

「今日からこの1年1組の副担当となります『山田<sup>やまだ</sup> 真耶<sup>まや</sup>』です、よろしくお願ひしますね」

緑髪の女性教師、真耶はそう言つて一礼する。生徒たちも座りながら一礼を返した。

「担任の先生は少し遅れますので、その間に皆さんの自己紹介をしましょう。出席番号順でお願いしますね」

「……えっ!?」

真耶の発言に自分だけにしか聞こえないレベルで声を出してしまった一夏だった。何故ならこの教室(学園内含めて)に男は彼唯一……つまりどうやっても注目されてしまう。

どうする……!??どんな事を言う!??そうだ、得意な事……翼兄に教えてもらった家事全般とか素振りとか魔術鍛錬は得意だな、うん!!?つて魔法関係については言えねえじゃん!?!?

自己紹介の内容についての思考の海に焦る一夏は沈んで行く。

得意な事と……後は何だ……?好きな食べ物とか趣味?うん、これでイける!!?

「……むら……ん……織斑一夏君!」

「はいはいっ!?」

自己紹介の内容を懸命に頭の中で組み立てていた一夏だったが真耶の声によって現実に引き戻された。

「おっ、大声だしてごめんなさい、びっくりしましたか? でも自己紹

介の順番が『あ』から始まってもう『お』なんだけど……自己紹介してくれませんか？」

「あ、はい、大丈夫です」

そういつてすつと立ち上がり……残念な事に先程まで一生懸命考えていた自己紹介の内容丸々全て一式が頭から綺麗さっぱり吹き飛んでいることに気付いた。

「ヤバイツ、内容忘れたーっ!?」

心の内で絶叫しながら教室を見回す。完全にクラスメイトは一夏から何が出るか期待している眼差しを向けていた。

「あああつ!?」翼兄に言われた通りもう少し内面を鍛えるんだ たったーっ!?」

相変わらず心の中で叫び続けたままだが先程考えていた内容を思い出す時間もなく、仕方なく自己紹介を開始する。

「おつ、織斑一夏です……」

沈黙が流れる。そして彼は再び口を開き……

「……以上です！」

結局何も咄嗟に言えず名前だけの自己紹介に一夏とその一夏の性格を良く知る2人を除き1年1組の人間が全員ズッコけた。

そして何処からかその内容について冷静かつ真面なツツコミも入る。

「織斑、お前は普通に自己紹介もできないのか？」

「げえっ、ギルガメッシュっ!?」

「誰が古代ウルクの英雄王だ、馬鹿者」

驚いた一夏の頭に神速の何か当たり鈍い音を立てる。頭を叩いた凶器凶器の非非殺殺傷傷宝宝具具だ。モノのはごく普通な出席簿だ。

「痛つつう……ッ!!」

しかしどう考えてても普通出席簿で叩いた音ではないとクラスメイト全員が思い教室に入って来るなり一夏を叩いた張本人人に視線を合わせた。

「織斑先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。それに『とある』奴も案内して連れてこなければなら

なかったからな……クラスへの挨拶を押し付けてすまなかった」

「い、いえっ、大丈夫です！ 私もこのクラスの副担任ですから！」

真耶の言葉に微笑み一夏を叩いた人物、織斑千冬が黒板の前に立つて話し出す。

「このクラスの正担任の織斑千冬だ、私の仕事はこの1年でISについて科を問わず必要最低限の基礎を叩き込み最終的には無事に全員を卒業させる事だ。よって私や山田先生の言葉はよく考えて自分のモノにしろ、口答えしてもいいがあまり煩わせるなよ？」

まるでどこぞの独裁者のような発言だが、何故か彼女が言うとしつくりきってしまう。やはりその身に纏う覇気というか覇者の風格がそうさせるのかも知れない。そしてその言葉に爆発したかのような黄色い声が教室中から上がった。

「ギャ——！千冬様よ！しかも本物の！世界最強の『ブリュンヒルデ』!!?。」

「貴方のようになりたくてここに来ました!!」

「北海道から来ました！」

「ずっとファンでした!!?。」

「叱って下さい！」

……ごく普通一般の年頃の女子の言葉じゃないようなものが混ざっており、まさに教室は阿鼻叫喚の地獄絵図、女三人寄れば姦しいという文字諺が正にぴったりの様相になっている。その様子に心底鬱陶しそう且つ半ば諦めかけたに千冬が口を開いた。

「……毎年、よくもまあこれだけ馬鹿者……大馬鹿者が集まるものだ。全く……逆に感心させられる。それともなにか？学園長辺り誰かが私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？はあ……」

呆れと傍観、その他諸々色々と感情が混ざり合い千冬の語気が少々荒くなっているが、結局それは火に油を注ぐだけで更に女子生徒達ははしやぎ始める。

「ギャ——！ もっと私を叱って罵って下さい！」

「我が生涯に一片の悔いなしっ！」

「まだまだ、まだ終わらないわ！」

「いつそそのヒールで私を足蹴にっ!!?」

「飴と鞭で私を貴女だけのモノに!」

「……………」

一夏は一部女子生徒のあまりの暴走具合に未だ嘗てないレベルでドン引いているが生憎と彼の席は最前列ど真ん中、しかも教卓のすぐ近くなので女子生徒と千冬に挟まれて逃げるに逃げられない。物理的にも精神的にもである。

その様子に顔に手を当て頭を抱えながら千冬はため息をついた。

「…………織斑、さっさと自己紹介を続けろ」

「えっ、千冬姉っ!!?まだやるのっ!!?」

「当然だ馬鹿者…………それとここでは織斑先生だ」

「…………はい、千ふっ…………織斑先生」

千冬は一応公私を分ける為そこを注意し身内への親しい呼び方を『先生』に訂正させる。それを察して一応すぐに従った一夏に全ての視線が集まりとある女子生徒がそこにいた全員が考えたその疑問を漏らす。

「えっ、千冬先生と織斑君って姉弟きょうだいなの?」

「あ、確かに…………苗字同じだし」

「それに顔のパーツもなんか似てる…………」

「隣に並んだらよく分かるね…………」

「…………貴様ら、いい加減に無駄口を叩くな、時間が無いんだ。さっさと自己紹介を進めろ」

千冬の鶴の一声（半分物理）で雑談は消え、クラスの自己紹介が再開された。

なお、全くの余談だが取り敢えず一夏は真耶に話しかけられる前に考えていた自己紹介の内容を何とかかろうじて思い出して英雄王織斑先生の真ん前で自己紹介を完遂する事が出来たと言う事をここに明記しておく。

また更にどうでも良いことだがその自己紹介の中には女尊男卑に影響を受けている生徒が数人いたがかなりの少数派であり、勿論無事自己紹介を終えて気を抜いていた一夏が真面目に聞いていたかと言



えば皆さんお分かりの通りノーである。

そしてクラス全員の自己紹介が終わったことを確認した千冬が黒板の前に立った。

「さて全員終わったな、お前達も知ってる通りこのクラスには希少な男性搭乗者が居る訳だが……実はこのクラスには『もう1人』男性搭乗者が増えることになった」

「「えっ!?!」」

その言葉に担当教員である真耶と千冬を除く全員が息を飲む。そんな情報は今まで一切彼らには知らされていなかったのだ、そして勿論世界に向けて発表すら『まだ』されていない。何故なら今日、このIS学園入学を持ってその存在を発表する予定だからだ。

故にその好奇心からそこにいた全員のその視線は自然と教室の戸に注がれる。

「入ってこい」

「はい」

教室の引き戸が開かれ、そこに1人の少年が入ってくる。

漆黒か濡れ羽色の黒髪に黒い眼帯で左眼を隠した特徴的な右の紅の瞳、身長は170cm程で細すぎる訳でもなく太い訳でもないその身には一夏と『ほぼ』同じデザインであるIS学園の男子生徒用制服を着ている。そう本来『白』である筈の部分を『黒』にした制服を着ているのだ。

だがその中でも極一部、ほんの数人だがその『顔』見て驚愕に染まった人間がいた。

「翼兄………?」

その中の1人である一夏は思わずそう呟く。何故ならその顔は7年前に自分達の前から姿を消したはずの男、自分達の師であり親の様な人であり自分達の姉が思いを寄せていた兄の様な人である『若宮翼』と瞳の色などの差異はあるもののそっくりだったからである。だが……

「皆さん初めまして、第2の適格者として入学してきた天羽時雨です。所属は機密なので答えられませんが一応所属はしています、趣味

は読書と体を動かす事、得意な事は料理や剣術、あと狙撃とかです。何かと迷惑をかけるかも知れませんがよろしくお願いします」

「……天羽時雨？翼兄じゃない……の、か？」

そう呟くと時雨の背後にいた千冬からの無言の圧力を受けて一夏は自席にしぶしぶ座る。その彼女の口が小さく「……すまない」と言っていたような気がしたが再び黄色い声で溢れ、まるで爆発するかのよう騒がしくなった為結局一夏にはよく分からなかった。

「織斑君もカッコいいけど天羽君もいい！」

「織斑君の柔和なカッコいいイケメン具合も良いけど天羽君の優しげで何処か寂しげなイケメン具合も更に良い！」

「眼帯に紅い瞳だどっ!??……うっ、私の封印されし魔眼と左腕が……疼くっ!!」

「天羽×織斑で新刊いけるんじゃないやあ！」

「なにそれ詳しく、3万までなら出す」

「任せろ、3日で書き上げる」

「「マジで!?!」」

キヤーキヤーと黄色い声と何処か聞いては駄目な気がする少数の声が響く中、時雨は少し疲れた様な呆れた様な顔をして苦笑いを浮かべていた。

「あはははは……なんか色々聞いてちゃいけない単語が聞こえた気がするよ……」

引き攣った微笑みを零した時雨がチラリと横目で千冬を見るのを見てみると、彼女も疲れたように顔に手を当てていた。本日何度目の溜息を吐いていた……

「はあ……仕方ない、天羽。お前の席は……織斑の隣だ」

千冬の視線の先には一夏のその隣にある空き席があった。少し作爲的な何かを感じないではないが……まあ、学園唯一に近い男子なのだからわざわざ隣にしてくれたのだろう。

「よろしく、織斑一夏君」

「あ、ああ……よろしく」

隣の席に着いた時雨の挨拶に一夏は辛うじてそう応える。今の一

夏の頭の中は『若宮 翼』と有り得ない程そっくりな『天羽 時雨』と言う少年がどうしても記憶の中の若宮翼とダブって見えてしまうその現象をどうにかする為に手が一杯だった。そしてそれは他の2名もまた同じである。

「さて、全員揃った所で……」

千冬は改めて生徒たちに向き合うと表情を引き締める、いつもとは違う、完全に『教師』の表情だ。

「これからお前達には、ISの基礎知識を半年で完璧に覚えて貰う。その後本格的にISを使用した実習に入る訳だが、基本動作は1ヶ月以内で体に染み付かせろ、さもなければ将来きつとお前達はISで過ちを犯す事になる。」

良いか？ 舐めるな、驕るな、だが息抜きをするなどは、無理しろとは言わん、だがその『翼』が何の為に在りその『翼』がどんな意味を持つのかを理解しろ！

そしてその為にいるのが私達教師だ。だから返事をしろ、如何なる時であろうと良くななくても返事をしろ！

少し無茶苦茶の理論だが、これから彼等は人を殺める事のできる道具を扱う事となる。その意味でも確かに千冬が言う程の気合を持たなければ、この学園に入った意味もその『翼』が持つチカラと意味を理解する事などできないだろう。

と、そこで1時間目終業のチャイムが鳴り響く。

「時間だな、ではお前達。これで私からの話は終わりだ。2時間目以降からはこの事を胸や頭の片隅にでも止めて受けて欲しい、以上だ」「二「ありがとうございます!!?」「二」

そう言って千冬は最初の最初の始まりを締め括ったのだった。

## 初日の授業

〈25〉

「……でありまして、世間一般に認識されている『IS理論』、正式名称『宇宙空間用マルチフォーム・スーツ基礎理論』は2007年6月21日に初めてIS開発者『篠ノ之束』博士により発表されました。しかし当時の学会は……」

白亜の教室に女性特有の少し高めの声が響く、電子黒板にスラスラと厚さ5cm、文字の大きさが3mmでぎつちりと書かれた参考書の文字の海から要点だけを掬い上げ更には分かりやすく噛み砕き纏められて写される文章を生徒達はノートに取る他の高校と変わらない、そんなごく普通の光景がそこに広がっていた。

そこに2時限目終了のチャイムの音が鳴る。

「はい、2時限目のIS基礎知識の授業はこれで終わりです。次の3時限目の授業もIS基礎知識ですから遅れないで下さいね！」

そう言って先程まで教鞭を取っていた山田先生は荷物を纏め1度職員室へと帰って行つ……あ、今何もない所で躓いた。大丈夫だろうかあれ？ふとそう思った時雨だがいい加減スルーできなくなってきた横と背後からの視線の弾幕に遂には時雨が折れた。因みに一夏の方は既に諦めて緊張にノックアウトされたのか机に突っ伏している。

うん、現実逃避辞めよう。無理だわ、悪意がないのは理解してるけど……ある意味針の筵の状態だな。

現在学校が始まって初の休み時間なのだが、教室が色々凄い。てかむしろヤバイ。クラスメイト達（勿論全員女子）は時雨と一夏から距離を取り固まって此方の様子を伺っているし、更には互いに互いが牽制し合っている所為で誰ひとりとして話し掛けてこない。多分誰か1人がこの均衡を破って時雨が一夏に話し掛けて来なければずっとこのままであろうし、逆に話し掛けた瞬間にクラスメイト達は一斉に堰を切ったかの様に怒涛の勢いで話し掛けて来ると……。

そしてそんな猛者がなかなか出てこないが故に免罪符となる時雨が一夏から「話しかけて来て下さい」オーラが半端じゃ無い。え、廊下？他のクラスの女子諸君（上級者含む）で一杯だよ。

「……………なんでさ？」

今なら上野動物園の客寄せパンダの気持ちが理解できる気がする

……。

「……………なあ」

「……………なんですか？」

とその時突つ伏していた机からいつの間にか起き上がっていた一夏が時雨へと話し掛けた。

「不躰に悪いが……………若宮 翼って人に心当たりはないか？」

「残念だけど……………御免ね」

「そうか……………いや、良いんだ。気にしないでくれ。俺は織斑おりむら一夏いちか、さっきのゴタゴタにもあつたけど織斑先生……………千冬姉と姉弟きょうだいなんだ。まあこれからも新しい適合者が現れない限りこの女子校に2人しかいない訳だから仲良くしようぜ……………むしろ仲良くして下さいお願いします見世物パンダはシンドイんです……………」

「そ、そうか。天羽 時雨だ、パンダ見世物がシンドイのは同感だから仲良くしよう……………女の園とかごく普通の一般男子には地獄でしかないし」

「ああっ、よろしく頼む！」

「うん、そうだな」

やっぱり時雨が『若宮 翼』と関係のある人物なのかを確認して来た一夏だったが時雨の反応を見て違うと判断したのか普通の挨拶に切り替える。……………ただ挨拶だけでなく思いつ切り心の声までがダダ漏れだった事はご愛嬌だろう、実際にパンダは辛いししんどいのだ。多分ここで互いに交わした握手は3度の人生の中でも上位に匹敵する程硬いものだった、悲しい事に。

「握手！握手よ握手！しかもガツシリ硬いヤツ!!？」

「なんとツ！これぞまさしく愛だ！」

「天羽君が攻め？それとも織斑君が攻め？どっち？」

「ぐふふ腐腐腐腐、ネタがあつ、次巻のネタがここに！」

「よろしい、ならば戦争だ……因みに予算は20万からだ」

「マジで☒」

「……………」

「ナニ、アレ……………」

「これからは気を付けようか……………パンダはパンダでも流石にアツチ系腐ってる方のパンダにはなりたくはない……………」

「ああ……………それには心の底から同感する」

何故かどんな学校（特に女子校や進学校で多い）でも一定数は存在してしまう腐女子がクラスメイトに居る現実に時雨と一夏が目が死んでいる状態で嘆いているといつの間にか2人の目の前には箒と栞の2人組が立っていた。

「……………済まないが少しいだろうか？」

「あ、箒と栞。2人共なんであの時助けてくれなかったんだよ……………視線だけで物理的に穴が空いて死ぬかとも思ったぞ、俺が」

「アハハハ……………御免、一夏。流石に私もあの空気に突撃する勇氣はないよ……………だよね箒……………箒？」

「どうした？箒？ずっと時雨を見て」

「あ……………いや……………なんでもない」

一夏と栞が話す中、箒は一言も言葉を発さずずっと時雨の顔を見続けていた。それに気付いた一夏と栞は箒に話し掛ける。ふと我に帰った箒は慌てて返事を返した。

「箒……………そうだ一夏、屋上に行かない？話したい事も沢山あるしさ！ね？行こう？箒も、ね？」

「あ、ああ、ほら行こうぜ！箒」

「……………ああ……………分かった……………」

「悪いな時雨、また」

「うん、休み時間もあと5分と少ししかないから気を付けろよ」

「ああ」

未だ動きのぎこちない、どこか心ここにあらずと言った感じの箒を

連れて一夏と栞は教室を去る。時雨はどうしてもあの3人に本当の名前を偽る自分に罪悪感を覚えるが今はまだ、打ち開けるべき時ではない。

「ゴメン……栞、一夏、箒」

きっとこの言葉は意味がないものだろう、相手に届かぬ謝罪などそれは謝罪ではなく『自己満足』なのだから。だがそれでも……決意としてならば……それには違った意味があるはずだ。

そう考えていた時雨だったが意識の外から声を掛けられ急いで意識をそちらに向ける。そこに居たのは茶髪のツーサイドアップの髪型で手の部分が隠れている変わった改造制服を着た、ほんわか垂れ目の女子生徒だった。

「ねえねえ、しぐしぐ〜」

「へ？しぐしぐ〜？」

「そうだよ〜時雨の前2文字から取って『しぐしぐ』、私はのほとけ布ほんね仏 本音ほんねって言うんだ〜。しぐしぐをしぐしぐって呼んで良い？」

何だろう？こののほほんってした人、癒し系？癒し系なのか？知り合いには全くと言って言い程珍しいタイプの人だな。なんか心が安らぎます。

「え、あ、うん。大丈夫だよ。俺は何て呼べば良いの？」

「う〜んと、幼馴染は『本音』って呼ばれてるけど友達には『ののほんさん』って呼ばれてるから『ののほんさん』でよろしく〜」

「了解、ののほんさん。こちらこそよろしく」

あだ名の通り『ののほん』としたののほんさんと軽く握手を交わす。そこで丁度3時限目始業のチャイムが鳴り響きののほんさんは自分の席……時雨の席の左横へと帰っていった。案外近かったらしい。

……ところで一夏達、まだ帰ってこないのだろうか？始業のチャイムが鳴ってしまったって山田先生と千冬さん……織斑先生が教室に入ってきてるんだけど……



「箒、大丈夫？」

一夏と栞、そして私は生徒に一般開放されている屋上へとやって来ていた。元から休み時間になれば栞と一夏を誘って屋上で一夏が国に保護されていた間に起こった話を話そうと決めていたのだが、どうやらその予定は変更となったらしい。……他ならぬ自分の所為で、

「箒、やっぱり時雨君が気になる？翼兄とそっくりだから……」

ああ、やはり栞達にはバレていたか……

「……ああ、私に、私には天羽がどう見ても翼兄にしか見えないっ。だが本当に翼兄ならIS学園に入学なんてできないはずだ、それにわざわざ名前を変えて私達に秘密にして入学してくるはずなんてない筈なんだ……でも」

名前が違う

年齢が違う

魔力も感じない

何より眼の色が違う

記憶の中の翼兄との違いは沢山ある。だが、だがそれでも私には、私の勘は間違いなく『天羽 時雨』と言う少年はあの日から自分達の前から姿を消した誰若よりも大切宮な人翼なのであると告げていた。

「だがそれでも私には……翼兄にしか見えない、翼兄なのだと思えない」

「箒、時雨は翼兄の事は知らないって言っていたんだ。って事は時雨は翼兄じゃない他人なんだ」

「でも……」

「時雨は翼兄じゃない、似てるだけだ……方が一時雨が嘘を言っている本当は翼兄なのだからしても7年前と同じ姿なんてあり得ないだろう。時が止まったとかそんなお伽話じゃあるまいし」

「確かにそうだね……翼兄は魔法なんてオカルトチックなものが使えたりするし束さんも凄い科学者だけど流石に不老不死みたいな事は絶対に出来ないって本人が言っていたもんね……」

栞はそう呟くがそれは間違いなく事実である。魔法や発明と言っ



た便利でありながら数多もの危険な側面をも持つモノに対して翼兄も姉さんも言う事は全て真実を言っていた。何故ならそれは半端であり不確定な事実や認識は必ず何処かで破綻や失敗、大惨事を齎すからである。実際、現実に現在の発明の象徴とも言える『IS』は現在進行形で世界各地で大小に関わらず破綻や失敗、惨事を齎らしている。

そしてふと、そこで思い出したのは昔の出来事、大切な人がいなくなった日突然姉さんが自分の目の前で涙を零しながら「ごめんなさい、ごめんなさい箒ちゃん」と何度も何度も地面に手を付きながら謝り続けていたそんな出来事だった。あの時はソレを完全に理解する事が出来なかった、だから私は姉さんを拒絶してしまった。でもあの時の姉さんと同じ年になった今は、今だからこそ少しは理解できる。あの何度も何度も繰り返し返された「ごめんなさい」という言葉に込められた想いが。

「……………姉さんも」

「箒？」

「姉さんも辛かったのかな…………？」

「……………」

「姉さん達は何も私達には教えてくれなかった。翼兄の妹である栞にも、姉さんの妹である私にも、千冬さんの弟である一夏にも…………。だから私は憎かった、教えてくれなかった姉さんが、でも今なら分かる…………あれは私達を思って私達には事実を伝えなかったんだって…………そう思う」

3人の間にシリアスな空気が流れる、だがその空気を破ったのは一夏だった。

「あ、ヤベっ。2時限目のチャイムが鳴るまであと2分しかない！」

「お先にっ！」

「あっ、ずるい！待てよ栞置いてくくなよ！」

「嫌だよ、千冬さんの出席簿体罰絶対に痛そうだもん」

「痛かったわっ！俺実際に受けたし！箒も急げよ！千冬姉の出席簿はマジで痛いぞー！」

「あ、ああ、分かってる。走れ走れ！」

あの魔の出席簿非殺傷宝具とそれを構える織斑先生英雄王を思い浮かべ、遅刻したら絶対に食らう事になる事を直感で理解した私達は全力で教室に向かい走り出す。そんなこんなで全く休めなかった休み時間が終わった。

……因みに遅れた私達に千冬さん英雄王、もとい織斑先生が軽く出席簿アタック（私命名）を落としたのは完璧な余談である……多分。

## 英国貴族令嬢、襲来

〈26〉

始まるまでに色々であったが3時限目の授業が始まった。前では1時限目の時と同じように山田先生があゝの馬鹿程分厚い参考書を広げつつ押さえなければならぬ要点だけをピックアップして電子黒板に書き込んでいく。

「――ISは元来宇宙にて搭乗者の単独行動を可能とする為に様々な機能が備え付けられており、機能については参考書P174以降に載っているので今回は省略しますが博士本人が公言していた通りISという存在は多くの既存の技術を凌駕する物であり軍事転用を行なえば個人で『核』とは違う意味で世界を滅せる要因となり得るものです。故に現在のISの基本的な運用は『アラスカ条約』に基づき――」

そしてまだ1時間しか山田先生の授業は受けていないが彼女の授業はとても上手い。教えるべき話の内容の要点は確実に押さえ実際にISに触れるとなった時に大切かつ必要となる知識を自己体験を交えて生徒に退屈させないよう90分間<sup>授業1時間</sup>をとっても上手く有効活用している。ちよつとドジで天然な所もかっているのだろうが彼女は他人に効率良くそして楽しく教えられる『才能』がある。それはこの嫌ほど分厚い参考書をあれだけ分かりやすく要点を押さえ板書ができる事で十二分に証明されているだろう。

ちらつ

あとそう言えばこの参考書、IS学園開校時に束が直々に編集した物らしい。なんでも国に都合が良い事とか変なこと書かれたら困ると束が言ったらしくわざわざ学園長に作成の提案書を極秘裏に送りつけて了承の返事から2日後に郵送してきたのがコレらしい。……ただ完成度が高過ぎたらしく参考書なのに参考書に載ってる事がまだ他の国で解析出来ない事とかが多々載っていたらしく参考書

が出来てすぐは世界中の科学者達が発狂していたとか……滅茶苦茶不憫である。

ちらっちらっ、

「……………」

……良い加減無視できなくなってきた。自らの教科書と板書を写したノート、それと時雨の色々書き込みまくった参考書（2週間しかなかった上、束が教えてくれる時は参考書なんか私がいれば要らないよね！のノリで鞆にシユートしてくれたおかげで書き込んだコレ全部は自力で調べたり千冬が教えたものである）とノートを12秒に3回くらいの周期で視線が行き来しているのと30秒に1回くらいの周期で助けを求める視線を送られるのを20分くらい続けいれば流石に時雨も無視できなくなってくる。

「……………」

「……訳がよく分からない」

「……参考書読んだか？」

「読んだけど……」

時雨の問いに一夏は言い淀む、とその瞬間を偶然目にしたのか山田先生がこちらを見ていた。

「えつと、ここまでで分からない所、理解できなかった事はありませんか？織斑君、大丈夫ですか？」

「あの、えつと……」

「分からない所があればなんでも訊いて下さいね、何せ私は織斑君達の先生ですから！」

山田先生がドンと来い的な感じで胸を張るのだが見た目的になんか癒される。微笑ましいって言うかアレだ、小動物っぽい？

そんな山田先生の姿を見て一夏は1度目線を自らの教科書とノートに落とすすぐに何か覚悟を決めたかのように顔を上げる。

「先生！」

「はい、何ですか織斑君！」

「専門用語的な所が丸々全部ほとんど分かりません！」

「えっ…………と、全部がですか？」

「はい、理論とか数式とか諸々全部です」

きつぱりと言い切った一夏に山田先生の微笑みが思いつきり引き攀った、流石に全部が分からないとは想像だにしていなかったのだから……それは時雨もだが確実に山田先生は困っている。

「え、えつと……織斑君以外で、今の段階で分からないっていう人はどれくらい居ますか？」

恐る恐るといった感じで山田先生はクラス全体に向け分からない人に挙手を促すがやはり誰ひとりとして手を挙げない。むしろそれを聞いて窓際の席にいる栞と箒が笑うどころか頭を抱えているくらいである。

「時雨君は……どうですか？」

「いえ、大丈夫です。ええ……大丈夫ですとも……ええ」

「ああつ、時雨君の目が死んでるっ!!? 帰って来てください時雨君!!」

一応たった2人しかいない男子の片割れである時雨もまさかそんな事はないかと聞いた山田先生だったが、あの魔の2週間をフラッシュバックさせてしまい目が死んでしまった時雨に大いに焦った山田先生だった。

「こほん……、織斑、入学前に渡された参考書は読んだか？」

と、そこにそんな空気を破壊すべく教室の後ろから生徒を見守ってきた千冬が一夏にまさかとは思いつつもそんな質問を投げ掛けた。表紙にガツツリデカデカと『必読』書かれていた上にあの分厚さ、無くしたとは考えられないが不安になったのかごく僅かだが声が震えている。それに対し答えた一夏はと言うと、

「3周目くらいやってたらコーヒーをぶっかけて汚して古い電話帳と間違えて揃って資源ゴミに出しました……」

ヒュツ——バシイインツ

なんともまあ言えない理由に教室中が「え……」となるが、投げナイフの要領で一夏に向け投擲された出席簿を時雨がギリギリで白刃取りする。どこの誰だ千冬さんに鉄甲作用のやり方教えた奴は! ……俺だわ。多分直撃していたら一夏が頭から机の向こう側にひっ

くり返るか電子黒板まで吹っ飛ばされる事になっただろうし下手すれば山田先生にも被害がいきそうだったので今回は時雨は全力で介入する事にした。

「千ふっ……織斑先生……正座」

「なっ、っ……時雨☒」

「正座」

「いやだがここは教室で……」

「せ、い、ざ」

「……はい」

出席簿片手にニコリと笑った時雨が立ち上がりそう言う。あまりの威圧感に教室中がシーンと静かになっていた。

「体罰禁止、良いよね？」

「はい……」

久しぶりにキレたので千冬は大人しく時雨の言う事に従った。いやそもそも体罰は厳禁なので当たり前前事なんだが……ってそこ、「スゲー」とか言っていない。正論だから！

「こほん……うん、あれだ。必読と書いてあったら馬鹿者」

正座から立ち上がった千冬は何事もなかったかのように（実際はなかったことにはできないのだが）先程の続きを再開する。若干声に元気がないのは気にしてはいけない。そう、気にしちやいけないんだ！「無い物は仕方ないから再発行の手続きはしてやるから1週間以内に覚えろ。いいな？」

「い、いや、1週間であの分厚さはちよつと……」

「やれ、それに私はアレを2週間でほとんど知らない状態からマスタ―した奴を知っている」

「……はい。やります」

反論しようとした一夏だが千冬の圧倒的目力と先例時雨の実体験で封殺された。正論だもんねえ……死ぬ気でやれば、人間なんかかなるさ……多分、maybe……。

「IS単体はその機動性、攻撃力、制圧力と数多くの兵器を遥かに凌ぐ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そ

うしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても先ずは覚えろ、そして守れ。残念だが規則や法律とはそういうものだ」

日常に便利な包丁やハサミだって使い方を間違えたり知らなければ凶器になる、逆説的に言えば銃や核だって兵器にはならないのだ。その最もたる例となるのは通り魔殺人や原子力発電所といった感じだろう。

「ふむ、御前達やはり『自分は望んでここに在る訳ではない』と  
思っているな？残念だが望む望まざるに関わらず、人は集団の中  
でしか生きられない生きなくてはならない。そういう風に社会は  
できていくし、だから最低限でもここでそんな社会を渡って  
いくだけの知識を得られたならば少しくらいはより良い生き方  
くらいは見つけられる筈だ。だから真面目に授業は受ける事だ」

千冬は少しだけ微笑みながらそう話を締め括る。格好良く締めたのは締めたのだが突然響いた「ズコツ」という音に全員の視線が黒板前に向く。意識を向けると、何故か山田先生が何もないところでまたこけていた。

「うー、あ痛たたた……」  
大丈夫なのかな？この後輩……  
大丈夫なのかな？この副担任……

おそらく、これが生徒先生関係無くクラス中の思いが一致した奇跡の瞬間だと思う。



### 3 時限目休み時間

「おうっふ……時雨え……助けて下さい」

「まあ……自業自得だな、学校に連絡すれば再発行くらいはしてくれただろうに……それにコーヒーぶっかけて電話帳と間違えて捨てるとか……コントか」

「げふっ……面目次第もございませぬ……」

漫画なら背後に「どよーん」と文字が付きそうなくらい落ち込む一

夏の姿に時雨は苦笑いを零す。言つといてなんだが罪悪感が湧いてきたしこういう素直な所は昔から変わらないらしい。

「まあ俺は大丈夫だから俺の参考書を貸しとくよ、新しい参考書が届くまでだけど」

「おおつ、時雨よ！お前が神か！それとも救世主か！」

「いや、一般人だよ」

普通に話をしていてもつもりだったがなんだか2人で漫才をやっている気分についての間になつてきた事に時雨は笑えいいのか突っ込めばいいのか分からなくなつてきていた。

「ちよつとよろしくて？」

「ん？」

「はい」

そんなコントみたいな事をしていた時雨と一夏に話し掛けて来たのは少しロールが掛かった鮮やかな金髪と透き通った蒼ブルーの瞳を持ち、ただ立っているだけでもどこからか高貴な気品を感じる、そんな雰囲気を持つ海外からの留学生だった。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくし私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

……訂正、『高貴な気品』じゃない『高貴な気品（笑）』だ。

「悪いんだが織斑千冬先生の目のまん前で自己紹介2回目をやった所為でその後は気を抜いてよく聞いていなかった。済まん」

「俺はそもそも自己紹介の時にいなかったんだが……何の用ですかセシリア・オルコツト嬢」

「まあ、なんですかその理由は！この私セシリア・オルコツトを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を侮辱するおつもりですか！まあその貴方はまあまあ礼儀がなっているようですが……」

オルコツト嬢は一夏の思わぬ返しに度肝を抜かれたのか驚愕したような顔をしているが時雨も実はここに来る前にサツと名前と写真、軽く詳細の書かれた名簿に目を通した程度のうろ覚えに近かった為合っているのか不安だったのだが運良く正解だったらしい。ホツと



影で胸を撫で下ろしたのは内緒である。

「ま、まあ良いですわ。どうやらお困りのご様子なので私は寛大なので泣いて頼むのであれば貴方達に勉強を教えて差し上げても構いませんわよ？何せ私は唯一入試で教官を倒しましたもの」

えっへんと自信満々に胸を張る彼女だがそこに一夏が大型爆弾を投下する事で一気にその自信満々な表情は崩れた。

「教官役の先生なら俺も倒したぞ？……いやアレは倒したにカウントされるかは微妙かも知れないが」

「貴方も教官を☒ですが担当の方には私だけと聞きましたか!?!?」

「多分タイミングが悪かったんだろ？俺がやる前に聞いてたんなら知らないのが当たり前だし」

一夏のフォローになってない正論のフォローがオルコツト嬢に入るが多分彼女は気が動転していてフォローが耳に入っていない。あ、多分この人見てるだけだったらマジで面白い人だ………巻き込まれたらサイクロンレベルで面倒くさいけど。

「ま、まさかとは思いますが貴方も教官を倒したりとかは……」

「いや、そもそも俺はその試験受けてないんだ。試験を受ける間も無くここに叩き込まれたから搭乗時間も起動時と軽い動作チェックの2時間位しか乗ってないし」

「ほっ……、そうですよ。ってそれでよく先程の授業付いて来れましたね……」

「はははははは……、頑張ったんだよ……そう頑張ったんだ2週間しかなかったけど……」

「あつ、(察し)………」

ついさつき織斑先生が「2週間でほとんど知らない状態からマスターした奴を知っている」と言っていた相手が誰か察しが付いた2人は全く同じ反応をする。

キーン コーン カーン コーン……

とそんな中虚しくもチャイムの音が鳴り響く。

「……ま、また後で来ますわ。次も逃げないで下さいまし、よくって？」

「え、あ、うん」

「ははは……」

何ともまあ……締まらない休み時間の終わりだった……。

## クラス代表決め

〈27〉

4時限目の授業が始まる、参考書ではなく教本と出席簿を片手に教卓の前に立ったのはついさつきまで授業をしていた山田先生ではなく千冬だった。因みに山田先生は3時限目まで千冬がいた場所に立って授業を見守っている。

「では4時限目の授業を始める。今日の授業内容はISの各種兵装の扱い等についての話の為私が担当する訳だが……その前に少し授業時間を貰い本日から2週間後に行われるクラス代表戦の為に、この1年1組のクラス代表を決める。クラス代表はクラス長、つまり学級委員として各行事や学年のクラス会議等にクラスの代表として出席して貰う事になる。あと1度決まれば余程でない限り変更はないので留意する様に。さて自薦他薦は問わんが、他薦する者はしっかり考えてから他薦する様にしろ」

そう言つて千冬は教卓に教本と出席簿を置き腕を組む。完全に聞きの体制に入った様だ。

「先生、私は織斑君を推薦します」

「私も織斑君で」

「同じく織斑君を推薦するです」

そして一拍の間を空けて上がるわ上がるわ女子の手が、多分珍しいのとノリと勢いからか男子、特にかのブリュンヒルデの弟である一夏を推薦する声が教室中から湧き上がる。

「えっ 俺!? 搭乗時間なんて試験中の数分しか無いんだぞっ!? そんな無茶な 〇」

「残念だが織斑、名が挙がったからには棄権は駄目だからな」

「そんなあ!?」

不憫である、一夏が滅茶苦茶不憫である。だがこれも必要な犠牲、俺だつてやりたくないから丁度良いスケープゴートになる。済まな

い一夏、きつとお前の事は忘れな……

「え、私はしぐしぐ……時雨君を推薦するよ」

「あ、それも良い。私も天羽君を推薦します」

「……はい？」

まさかの伏兵、女子ののほほんさんが推薦してくるとは時雨は予想だにしていなかった為ほんの一瞬だが心の声が素で漏れ出た。

「くそっ……これが一夏をスケープゴートにしようとした俺への罰だとでも言うのか……」

「うおいつ!? 何しようとしてくれてたんだ時雨!?」

「馬鹿、俺だっただでさえパンダ見世物なのに更にパンダ玩具になつてたまるか!」

「それは俺の台詞セリフでもあるよな時雨!?」

「そこ2人、私語は慎め。まだ推薦受付中だ」

「はい……」

口論に発展しかけた時雨と一夏だったが千冬に注意され直ぐさまに鎮火する、人間の汚い部分が多いに溢れ出た瞬間である。因みに時雨に怒られたので千冬からの体罰出席簿アタックはない。

そこで時雨には名簿で見、そしてさつき会ったこの事態の解決策と成り得る1つのピースを思い出す。それは、

居るじゃん、うちのクラスに専用機持ちの国家代表候補生……

「先生、俺は国家代表候補生であるセシリア……」納得いきませんわ!!  
? 何故イギリス代表候補生である私が推薦されず、その様な何処ぞの馬の骨とも分らない猿が推薦されるのでしょうか? 推薦されるべきはこのセシリア・オルコットの他に有り得ないと思いませんか!!?  
……俺推薦しようとしたじゃん……」

時雨がさつき出会った英国の国家代表候補生、セシリア・オルコットを推薦しようとした瞬間その張本人はその推薦に被せるように机にその両手を叩きつけ立ち上がりつつそう叫んだ。

「クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ! 大体珍しいとかノリとか勢いとかでIS搭乗時間が数時間しかない男子が推薦される方がおかしいですわ!」

「……まあ、な」

「そりやそうだよ、まともにISを動かせるかも分からない相手をクラス代表にするのはちよつとどころじゃなく綱渡りすぎる。……でもなんかさつき結構失礼な事言つてなかった？」

オルコットの正論に一夏と時雨は同意する……がしかし言い方が悪い、しかも結構失礼な事をつつり口走っている。多分このまま行けば決定的に不味い事を言いそうだが……大丈夫だろうか？

「大体この様な文化的に後進的な国で生活するだけで苦痛を感じていきますのに、これ以上の苦痛は幾ら私が寛大とはいえ許容できませんわ！」

「それならイギリスだって大してお国自慢はないだろ？強いて言うなら世界一料理が不味い国何連覇中だよ。お茶とお菓子紅茶 クッキーしか美味しくないじゃん」

「な、な、な、なんですつてえ!!?」

「そこまでだお前達」

全然大丈夫じゃなかったオルコットの問題発言にキレた一夏が更に問題発言をするが直ぐさまそこに千冬の制止介入が入る。

「オルコット、貴様は何者だ」

「私はイギリスの……っ」

「そうだ、オルコット。お前は英国の国家代表候補生、つまりこの学園、このクラスにおいて貴様は英国の顔であり代弁者となる。即ち貴様の発言はそのまま国の発言とも取る事ができる、子供だからと無かった事にはできないものだ」

「それ、は……」

「織斑、お前もだ。そう簡単に感情を露わにすれば状況を悪化させるだけだ、冷静になれ。国際問題を起こすつもりか」

「うっ……済みません」

既に事態は結構不味い所までできているがこれ以上深刻化しないよう千冬が介入した事でオルコットと一夏は冷水を頭からぶち撒けられたかのように興奮状態から沈静化する。

「この際決着はオルコット、織斑、天羽の3名の決めたそれぞれの種目

における勝敗にて決定とする。個人で得意なものを種目としても構わないが勝負になるものを種目とするように」

「俺も参加するんですか？」

「ああ、一応お前も推薦されているからな。言っただけが悪いが、いい、済まないな」

「良いですよ」

変にごねると既に面倒臭くなっている現状が確実に抉れて面倒くさくなりそうなので時雨は素直に頷いた。そして一夏やオルコットもまた千冬の案に同意する。

「分かりましたわ、ですが言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「四の五の言ってるより分かりやすくして良いが侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「でも質問だけでもし俺や一夏が勝ったらオルコット嬢は奴隷になるの？」

「えっ……」

「え？そういう事なんじゃないの？ノーリスクハイリターンな賭け事なんてないしましてや君は多いに人権を無視した提案をこちらにしてくれている。奴隷なんて人類が3000年と少し掛けてようやく理解した無駄な行為をかの大英帝国の御令嬢が推進するなんてとんでもない皮肉だよな？」

「天羽、そこまでにしてくれ。流石に正論とはいえそれ以上はどうしようもないオルコットの失態になる。入学早々自主退学者は教師としては出したくない」

いつも以上に、いや未だかつてない千冬ですら見た事がないレベルで冴え渡る時雨の毒舌に千冬はストップを掛ける。このまま行けば確実に大失言を行う事が火を見るよりも明らかなオルコットを守る為彼女は無理矢理にだが話を進めていく。

「取り敢えず要望は聞いておこう、何だ？」

「あ、ISですわ」オルコット

「料理だ」一夏

「バルキリーの操縦技術で」時雨

『「「えっ?」」』千冬&オルコット&一夏&クラス一同

「?、本物じゃなくてシミュレーターでだよ?」

「ああ、……まあ、そうだろうとは思ったが……」

「いや……うん、流石にそれは想定外だった」

「な、なんでIS学園に来てバルキリーなんですか?と言いますか貴方バルキリーを操縦できますの?」

「できるよ?実物にも乗った事あるし」

「マジで!??」「なんでですか!??」「『バルキリー乗りキター!!?』」

「しぐしぐ、もしかしてバルキリー学園の生徒だったの?」

「バルキリー学園?いや、違うけど?」

「え、じゃなんで乗った事あるの?美星学園か宝城学園じゃないと学生じゃバルキリーに乗れる機会なんて全くないと思うんだけど……」

「コホン……済まないが天羽、確実にそれを実行するとなると2週間以内では準備が整わないと思うのだが変えてくれないか?」

下手に答えて時雨の正体に繋がる情報を漏らしても困るので千冬は時雨と本音の会話に割って入る。それに実際バルキリー訓練用のシミュレーターを使うにはそれを保有する美星学園や宝城学園に手を回して許可をもらいに行ったり裏技なら琴乃の研究所に行けば教習用よりもっと凄いやあるのだが確実に2週間以内には準備できないので実行は不可能である。

「冗談です。剣の果たし合いにでもしましょう、もしくはアーチェリーでも弓道でも構いませんよ?」

「剣の方にしておく、格技場を借りれないか申請しておけば良さそうだからな」

時雨が何故かハッチャケてる所為で若干胃が痛くなってきたのか千冬は腹部を押さえる。しかし世界は残酷である、ハッチャケてる時雨が多いに突っ込める話題を女子生徒達が話し始めたのだ。

「でも大丈夫なの?オルコットさん国家代表候補生なんだよ」

「そうそう、それに男が女より強かったのって大昔の事だよ」

「確か男と女が分かれて戦争したら男は3日として保たないらしいからね」

「それはない。そもそも想定から間違っているがそれでも無理矢理想定した場合戦争は10年かけて両者共倒れで終わる。僅か500もないISという欠陥『兵器』のアドバンテージは確かに女性にはあるが男にもバルキリーがあるし補給は？兵站は？指揮は？正規軍人も軍需産業関係者も少ない女性に対し男はゲリラ戦術、テロリズムで対抗するだろう。ISもエネルギーや補給が途切れればただの鉄の塊、半世紀前の個の質を重視した大艦巨砲主義と同じように一般兵器の量により押し潰される。誰が言い出したのかは知らないけどISを絶対視すべきじゃない、抹消されてるが公式試合でISがバルキリーに落とされてるケースもない訳じゃないからね」

実際に『IS神話』なんて馬鹿馬鹿しい与太話を流している馬鹿もいるらしいが各国軍上層部ではどちらかと言うと資金を注ぎ込みまくって驚くべきスピードで発展して行っているバルキリーや無人機ゴースト系の方がコスパ、戦略上において軍勢力としては有力として考えている。またこの情報のリソースは東の持ってきたあの紙束の中にあつた書類の一部であるので間違いはない。

「……さて、話は纏まったな？それではすぐにも準備は整えられるオルコット提案のISでの勝負は1週間後の月曜日、その日の放課後の第三アリーナで行う。織斑、オルコット、天羽はそれぞれ作戦等の準備をしておくように。また織斑と天羽に関してはスケジュールが合い次第連絡する。それでは授業を始める」

時雨の毒舌カミングアウトに教室の空気が完璧に凍りついたが千冬の言葉によりそれは一応元通りに戻る。しかし女尊男卑の見えない闇が露呈しそれが時雨の正論に論破され続けた事により、この授業を境に彼女達は思想に対し思考するようになりこのクラスにおける女尊男卑の思想はゆっくりとだが徐々になくなっていくのだった。

因みに後日わかった事だが、この件の後山田先生は職員室で1人ど



こか疲れた雰囲気を漂わせながら胃薬を飲む千冬を見かけ今度飲みに行く約束をしたらしい。ただ自分のクラスの女尊男卑の傾向が収まった事にはとても喜んでいたらとコメントしている。

## 食堂での作戦会議

〈28〉

波乱の4時限目終了のチャイムが鳴り響き、少し胃が痛そうにした千冬が教室を後にして行く。時雨が教材を片付け5時限目の準備をしていると隣の席の一夏と一緒に食堂に行かないかと誘いをかけてきていた。

「時雨、一緒に食堂に昼飯を食べに行かないか？ついでに作戦会議でもしようぜ」

「あ、丁度良かった。私達も混ぜてよ一夏、結局天羽君には私達自己紹介できてないし」

「そういやそうだったな。時雨は構わないか？2人共少なくとも俺達よりI Sについて詳しいし頼りになると思うんだが」

「勿論大丈夫だよ」

とそこに一夏と昼食に行こうと思っていたのであろう栞と箒がやって来た為合流、4人で食堂に行く事になった。

「……………凄い混雑のしようだな」

「……………まあ、な。生徒の大半がここに来るからな、だが回転は速い。料理人の腕が良いんだろう、すぐ回ってくる」

「あ、一夏と天羽君はどうする？私と箒は日替わり定食にしたけど」

「俺は……………鯖の味噌煮込定食で」

「俺は野菜炒め定食ご飯大盛りにしとく、あと食券の交換は俺と一夏がやっておくから2人は席を取りに行ってくれないか？ここから見たか限り全く座れる席がないように見えるのは多分気のせいじゃないから」

それぞれ食券を買った4人だったが、例え食券を交換しても4人のいる場所券売機から見て4人で座れそうな場所が無い。

「あ……………うん。じゃお願いするよ」

「分かった、食券は渡しておく」

ぎつちり人が詰まった食堂を見渡し葉は確かにと頷く。時雨が葉と箸の食券を受け取り一夏と時雨がそのまま交換場所への列に並び、葉と箸が4人で座れるテーブルを探しに人混みの中に消えて行った。少しして漸く時雨達に受け取りの順番が回ってくる。

「おばさん、お願いします」

「はいよ！日替わり2、鯖味噌1、野菜炒めご飯大盛り1だね。ちよつと待ってな」

食券を受け取った人の良さそうなおばちゃんが1度調理場に引つ込むと次の瞬間には既に日替わり定食2人前が完成しておりその十数秒後には鯖味噌と野菜炒めご飯大盛りまでもが完成して2人の前に出てきていた。

「速い……これがプロのなせる技か……っ！為になるな」

「一夏君、君は一体何処に行こうとしてるんだい？ボクには分からないよ……っでご飯大盛りどころじゃなくてご飯特盛りになってる気がするんですがおばさん……」

「サービスだよ！しっかり食いな！」

「ありがとうございます！」

一体何処を指しているのか謎な発言をしている一夏は置いといて、気前の良い食堂のおばちゃんがご飯を大盛りにするどころか特盛りにしてくれた事にお礼を言いつつ定食を受け取った時雨達は先に席を取りに出た葉達を探す。

「おーい、2人共ー！」

「お、あつちか……結構遠いな」

「案外簡単に見つかったね。それを言っちゃおしまいだと思うけど？」

ちよつち失礼な事を口走った一夏に時雨は内心少しだけ同意しつつ混雑した食堂の中を人を掻き分けながら進む。席に辿り着くまでに更に5分は掛かった。

「思ったより早かったな」

「うん、あんなに混んでたのにね。どれだけ食堂のおばちゃんの回転率って良いの？凄いやね……」

「凄いぞ、日替わり定食なんて食券を渡して数秒で出てきたからな。しかも出来たてホヤホヤなのがだぞ？予知能力者でもいるのかあの中……ヤバ過ぎんぞ」

IS学園はIS専修の学校であると同時に世界中から様々な国家からの生徒や人員が集まってくる為に国際学科としての側面も持っている。故に学園内部にあるこの学食ではそのそれぞれの国家の生徒達の風習や文化に合わせた食事を用意する為にメニューにはざつと572ものレパートリーが存在し、更には食堂のおばちゃん監修の日替わり定食として和洋中イスラムインドウーが日ごとに違った献立で出てくるのだからここに勤めているおばちゃん達の凄さはお分かりできるだろう。

因みにとてもどうでも良い事であるがある時とある兎がもしIS学園の食堂が1日でも稼働しなかったらどうなるかの計算を行ったところ99・9999%の確率で暴動が起こると予想された程であるらしい。つまりIS学園において防衛上何よりも重要なのはIS……なのではなく学食のおばちゃん達であると言う事であり、もし学園を落とそうとするならば真つ先に学食を占拠すればあっさりと学園は陥落する可能性があったりする。

それはさておき  
閑話休題、

「さて、ご飯も揃った事だしもう1回自己紹介しようか。私はわかみや しおり若宮 葉、趣味は読書とお菓子作りだよ。よろしくね」

「私はしののの ほうき篠ノ之 箒だ。部活には剣道部に入ろうかと思っっている、あと弓道にも興味があるし和菓子なら作るのは得意だ。よろしく頼む」

「2回目だか俺は織斑 一夏、得意な事は家事全般と運動。特に料理は趣味でもやってるからそこそこの腕だと自負してるぜ」

「よろしく、俺は天羽 時雨。教室でも言っただけど趣味は読書と体を動かす事、得意な事は料理や剣術、銃器一式の取り扱いかな？時雨って呼んでくれたら良いよ」

「分かった。よろしくね時雨君」

「了解した時雨」

全員の自己紹介が済んだところで4人は揃って昼食を取り始める。

うん、めっちゃ美味しい。このもやしのシャキシャキ感とニラのシャキシャキ感とクタクとした丁度境目の絶妙な硬さ、豚肉の旨さを引き出すシンプルな塩胡椒の味付けはまさに天下一品！ご飯が進む！ヤバイ、おばちゃんの特盛りにしてくれなかったら絶対ご飯の量足りなかったわ。

「お、おお……凄いい食べっぷり……山ほどあったご飯がもう半分にな……」

「う、うむ……ここまでがつつり食べる人間など久しく見ていないな……」

「ま、当たり前だな。だってここの定食滅茶苦茶美味いもん……あ、ご飯が足りねえ」

もしやもしや美味しそうに食べるその姿に対面に座っていた栞と箒は何処か翼<sup>ついで</sup>兄の姿を薄っすらと幻視してしまうが直ぐさま頭を振ってその考えを否定する。

「ところで相談なんだが時雨……」

「なんだ？ご飯は分けてやらないぞ？これは俺の物だからな」

「ちげええよ！対オルコツトの話だよ！」

「あ、ソツチ？御免、ご飯が欲しいのかと……」

「それくらい自分でお代わりしに行くわこのヤロー！なんで飯の話になるとそんなに話のレベルが下がるんだよ!!？」

が、目の前で繰り広げられるコントに「それはないか……」と直ぐに打ち消した2人の目は若干死んでいたらしい。まあ、ご本人な上に彼女達が思い出効果で美化しまくってるからでもあるのだが。

「コホン……、取り敢えず真面目に対オルコツトさんの作戦会議を始めようか。箒参謀、何か案は有る？」

「そうだな……取り敢えず元となる身体を鍛えて、近い内に何が何でもISに1度は乗らなければ始まらない気がするな」

「ほうほう、確かにそうだね。私からすれば訓練用のISが借りられないか山田先生に確認を取って借りれたらとにかく今は搭乗時間を稼いで慣らすしかないんじゃないかと思うよ？あとオルコツトさんの情報を集めるとか」

葉の司会により作戦会議が始まり箒と葉の案が提示される。それに補足する形で時雨は自分が保有する情報を開示した。

「専用機<sup>I S</sup>についてなら名簿に載ってたから分かってるよ。英国が開発した試作BT兵装搭載型第3世代IS【ブルー・ティアーズ】、和訳すれば【蒼き涙】か【蒼き雫】で機体のカラーリングと形状も名前の通りブルーで涙線形を描いているらしい」

「『BT兵装』？」

「BT兵装って言うのはレーザービット及びミサイルビットを用いた『遠距離遠隔攻撃システム』の事で『BT』はその英語の頭文字をとった物……らしいんだけど直訳したら『Long distance remote attack system』になるからどう考えても『BT』にはならないだよねえ……もしかしてbeam<sup>ビーム</sup>から始まって？ いやでもlaser<sup>レーザー</sup>だし」

このBT兵装やブルー・ティアーズの情報もまた束の持ってきた紙束の中にあつた英国軍事機密書類の一部から抜粋した情報である為信頼性は高い。ただ流石にパイロットの個人情報や基本戦闘動作や基本戦術までは明記されていない上そもそも時雨が覚え切れていないのでその辺りは自力で情報収集をせねばならない。

「時雨君のお陰で一気に情報は集まったしこれで調べるべきものの方性は絞れた。取り敢えず私がオルコットさんの基本的な戦闘動作や戦術について分かるものがないかネットとかを使って調べるから箒は直接2人を鍛える方向で行こう」

「了解した、だが先に山田先生に練習機である【打鉄】とアリーナを借りれないか聞くとところからだな。よし放課後からでも聞きに行くぞ」「分かった」

「おうー」

だいたい基本的方針は決まったのであとは細かい所を葉と時雨が詰めて食事が終わった者から解散していく。そんなこんなで彼らの昼休み時間は忙しくも充実して終了したのだった。

## 放課後

〈29〉

その後、無事(?)に5時限目と6時限目は終わり放課後、時雨と一夏は未だ教室に残っていた。

「うーん……、この公式がこうなって……ええと……」

「そんなに難しく考えなくても良い、専門用語とかが多くて分かりにくくはなっているがそれを除けば高校生ならギリギリ解けるレベルだからな。因みにここは引っ繰り返してからXに置き換えると……」

「おおっ！簡単になった！ありがとう時雨！助かってるぜ！」

「はいはい、次行くよ」

「うっす！」

一夏な参考書と教科書、ノートを開き内容を書き込んでいるのを時雨はその斜め前から解き方の解説やヒントを与えている。やっている内容は今日の高校での最初の授業でやった部分の復習なので専門用語の解説とちよつとしたヒントを与えれば全く分からなかった一夏だつてすぐに理解できる。そもそも一夏の頭は悪くない、むしろ良い方である。故に1度理解すれば後はどんどんすぐに吸収していきけるだろう。

「なあなあ、時雨」

「ん、なんだ？」

「これからどうするよ？ISとアリーナ、借りられないみたいじゃねえか」

「あー、うん。まさか新学期早々貸し出しが一杯だとは予想できなかったからな」

「だな、箒だつて山田先生に聞いてすぐに「はい？」みたいな顔してたしな」

「そうだったの？俺は山田先生と話してたから全く気付かなかつた」

ノートにシャーペンを走らせていた一夏が顔を上げてそう時雨に

話し掛ける。ついさつき放課後が始まってすぐに箒と3人でI Sの練習に【打鉄】とアリーナを借りられないのか確認しに行つたのだが、その結果はまさかのこれから1ヶ月以上先まで既に予約が目一杯入っており借りられず更には確認を取ってくれた山田先生が何故か涙目になつてしまつたりしたのだ。

「まあ、そんな世界は甘くないし物事は上手くは運ばないって事だろ。あまり言いたくはないけど先輩達の勤勉さが俺達にとっては仇になつたね」

「まあ、そうだな。しかしどうするよ？ I Sに乗れないんじや兎に角筋トレばかりになるんじやないか？ 箒なら嬉々として「さあ、やるぞ！」って言つてきそうだが……」

「あー……、うん。彼女、どつからどう見てもサムライガールだもんね。袴と羽織があつたら絶対何処かの武将にしか見えなくなるよ」

「分かる、それは分かる。まあ本人が袴をはくのは剣道か剣術稽古をする時か神楽を踊る時しかないだけだな」

「神楽って事は男装するの？」

「ああ、箒は篠ノ之神社つて言う神社の娘で毎年その神社でやってる夏祭りでは巫女さんとして神社に勤める他に神楽として男装して剣舞を奉納するんだ。1回見たらきつと分かると思うけど凄え綺麗だぜ」

「へえ」

一夏が丁寧に説明してくれるのだが時雨の正体は若宮翼である為、その事は身を以て知っている。実は時雨も過去何度か神楽の奉納の際巫女装束女装をしてその剣舞を納めた事があるのだ。勿論その時神楽の剣舞の相方を担当していたのはその彼女の姉であり、1度だけではあるが彼の姉と舞つた事もある。ただし、これが原因で時雨キツカケが色んな所で事ある毎に彼女達に女装させられそうになっているのだとは時雨は欠片も気付いていない。

「あ、天羽君と織斑君。まだ教室に居たんですね。良かったです」

「え？ 山田先生？」

「どうしました？」



「えつとですね、お2人の寮の部屋割が決まりました」

と、その時何故か先程会ったばかりである山田先生が幾つかの書類と茶封筒を片手に教室に入ってきた。彼女の話によると時雨と一夏の寮での部屋割りが決まったらしい、手渡された封筒の中には部屋番号の刻印されたクリスタル製の飾り棒キーホルダーの付いた鍵と部屋番号とその位置が書かれた紙切れが入っていた。

「山田先生、俺の部屋ってまだ決まっていないなじやなかったですか？以前聞いた話だと、大体1週間は取り敢えず自宅から通学して貰うと話を受けたんですけど……」

「そうなんです、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを急遽無理矢理変更したらしいです。……織斑君はその辺りの事って政府から詳しく聞いてませんか？」

「いえ、さつき話した通り聞いてません」

「そうですか……天羽君の方はどうですか？上の方から何か連絡を？」

「特に何も、ただ一応すぐにも寮には入れる様調整するとだけ」

「そうなんですか……分かりました」

日本を含めた各国の無茶振りで無理矢理押し込まれた一夏とは違い、どうやら時雨の方は東と時雨の後ろ盾になっている『組織』が先に手を回してくれていたらしくしつかりと先に部屋が決まっていたらしい。その辺りは彼らの手際の良さに感謝すべきであろう。

が、そこで一夏はとある重要な事に気付いた。

「ん？ちよつと待てよ、時雨、お前部屋は何号室だ？」

「え？ちよつと待って……はいっ!?？」『0000』って何何処!?？」  
「嘘だろ!?？俺『1025』なんだけど!?？って事は男子は男子同士で相部屋じゃなくて俺は女子と相部屋なのか!?？」

そう、元から寮に入る前提だった時雨はちゃんと部屋が用意されていたが一夏の場合は違う。急だった故に学園側はどうしても一夏の方は女子と同室になる様になってしまったらしい。

「え、あ…はい。日本政府だけでなく各国政府からの特命も有って、とにかく寮に入れるのを最優先したことにより部屋割りに関しては先

に学園に入寮が通知されていた天羽君はともかく急に決まった織斑君についてはどうにもならなくてお2人は別々の部屋に入ることになりました……」

山田先生が気不味そうに一夏に説明する。流石にそれについて決定したのは学園上層部であり教師である山田先生には何の罪もない事を理解しているのか一夏は特に何も彼女に文句は言わなかった。

「だ……大丈夫です。1ヶ月もすればお2人にはそれぞれの個人部屋が相部屋が用意できますから、それまで暫らく我慢して下さい」

「いや……俺が我慢してもルームメイトの女子が我慢してくれるかが問題ですが」

一夏は目下第一に心配な事を呟く。どうやら言おうとしつ漏らした言葉ではなく思わず心の声が漏れ出てしまったやつらしい。

「取り敢えず荷物はどうすれば良いですか？俺ホテルと家に置きっ放しなんです……」

「あ、いえ、荷物なら——」

「私が手配をしておいてやった。織斑の荷物は総司さんに頼んで詰めて貰ったから後日感謝の言葉を送っておけよ」

そして山田先生の言葉を継ぐようにして千冬が山田先生が入って来た扉とは別の扉から入って来た。どうやら話の限り今も2人は若宮家時雨の家に同居しており、男である一夏の荷物は家の中で唯一同じ性別の時雨の父親、総司に用意して貰ったらしい。確かに女性にはその辺りは頼めないだろう、母親琴乃は除いてだが。

「あと天羽、お前の部屋番号は間違っではないからな。ただ元が寮の角にあるそこそこの広さがある倉庫でな、突貫工事で完全防音、火と水周り、配電は学園が整えたが何せ急過ぎて家具が保健室から持って来た簡易ベッドと丸椅子、ハンガー数個しか用意できなかった。後日家具を運び込む予定だが……それともお前が決めるか？その辺りはこちら側からの謝罪も含めているが」

「分かりました、やらせて貰います」

「ふむ、では今度の土日にカタログ……いや『レゾナンス』にも家具を取り扱うミトリがあつたはずだ、そこで注文すれば良いだろう。ただ

し私も付いて行く、経費で落とせるらしいが念の為にな」

千冬は時雨の部屋についての説明をする。彼女曰く他の部屋と比べるとかなり殺風景な部屋の内装となっていているらしいがその辺りは時雨の自由裁量で模様替えの許可が出たらしい。……あとついでにちやつかりと引率と言う名の『デート』の約束を取り付けるところを見ると何処か計画的犯行にも見えなくはない。

「では、時間を見て部屋に行って下さいね。あと夕食は六時から七時、寮にある1年生用食堂で取って下さい。因みに各部屋にはシャワールームが付いています、大浴場もあります。学年毎に使える時間が違いますけど……えっと、その、お2人は今のところ使えません」

「ああ、元々女子校ですもんね」

「男子が来るなんて予想してないだろ……と言うより元も何も今も女子校な気がするけどな」

最後の説明兼注意事項として大浴場の使用についてだが流石にこの歳で犯罪者にはなりたくはない2人はすぐに了解の意味で頷いた。多分そんな事したら社会的に死ぬのは勿論の事、IS学園女子全校生徒に袋叩きにされて生物学的にも死亡する羽目になりそうなので絶対に間違えないようにしようと心に決めた2人だったりする。

「えっと、それでは私達はこれから職員会議があるので、これで。2人共、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草食っちゃ駄目ですよ」

この校舎から寮まで歩いて数分しかない上に特に何も無いと言うのに、どうやって道草を食えと言うんだろうか山田先生は……。とはいえそれも彼女なりに自分達の事を心配して言ってくれているのだと分かっている2人はしかとそれに頷いた。できればこの心優しいこのクラスの良心癒しである彼女には迷惑を掛けないようにしようと固く誓った時雨と一夏であった。

## 寮の同居人と闖入者

〈30〉

2人は寮の入り口までやって来るとまずは寮の案内板を前にして自分達の部屋がどの辺りにあるのかを確認していた。

「お、あつたあつた。って案内遠いな……」

「一夏、俺はそこから更に奥にあつて遠いんだけど？」

「あ、なんか済まん」

「いや、こつちこそ済まん。……八つ当たりだ」

「はあ……」

案内板を見て時雨と一夏は2人して溜め息を零す。2人の部屋があるのは寮の入り口からは少々遠い奥の方にあり、つまるところその途中でも延々と女子の目線に晒され続けると言う事である。あと……

「あ、天羽君と織斑君だ」

「嘘つ、男子もこの寮で暮らすの!?!」

「きやつ、勝負着着なきや（使命感）」

「あつ、こんにちは？」

「……」

廊下ですれ違う女子の姿に時雨と一夏は沈黙する。ジャージはまあ良い、タンクトップにホットパンツだけとか挙げ句の果てに寝間着で廊下に出てくるのはやめて欲しい、マジで切実に。いや元つていうか今も殆ど女子校だからその辺りのガードが下がりまくってるのは理解できるがこれからは男子時雨と一夏がいるのだ。

「……なあ、一夏」

「……ああ、分かってる。……これはシンドイな」

「うん、俺達男子なんだけどね」

「だよなー、色んな意味で視線に困る」

「事故……、冤罪……、問題起こす……、織斑先生ががが……頭

痛い」

「あばばば……」

これからの気の休む暇もなさそうな私生活について頭の痛くなる2人だった。



「さて、一夏の部屋はここで合ってる？」

「ああ、『1025』号室。間違いない、ここだ」

そして遂に2人は漸く一夏がこれからの1ヶ月は過ぎす事となる部屋の前に辿り着いていた。

「取り敢えずノックだな、俺はマダ死ニタクナイ……」

事故とかマジで要らないんで学校外（寮も学園の敷地内にあるので厳密には違うが）では平穩に暮らしたいです、ハイ。

で、やたら高級そうな木製の扉を一夏がノックする事数秒後、

「はいはい、同室の人かな？今出るよ……って一夏？それに時雨君、どうしたの？と言うかよく私の部屋がここだって分かったね。あと情報についてはまだ収集中だよ」

「良かった葉だったのか、これが他の女子とかだったら死ぬところだったぜ……」

「え？もしかして同室の人って一夏なの？嘘っ、え？そこは男子同士が相部屋なんじゃないの？」

授業が終わって放課後になり次第すぐに教室からいつの間にか姿を消していた葉が一夏と同室となる部屋から出て来た。

「いや、俺はそう思ってたんだけどなんか色々あったらしくてな……って事は葉は千冬姉からは何も聞いてなかったのか？」

「あ、でも「配慮はしたが迷惑を掛ける」って放課後すぐに言われたかな。これってそういう事だったんだ……その辺は事前説明してよ千冬さん……」

学校が終わった為今は完全にプライベートな時間になったので2人はいつも通り織斑先生の事を千冬姉や千冬さんと呼び始める。取り敢えず現状を把握したのか葉はすぐに扉を開けて一夏と時雨を室

内に招いた。

「取り敢えず入って、立ち話はなんだし荷解きだって一夏にはあるでしょう?」

「おう、時雨も入るか?」

「え?良いのか?俺が居たら2人共の邪魔になるんじゃないか?」

「ならないならない、あ、でも荷解きは時雨君にもあるか」

「悪いな、だから後で寄らせて貰うよ」

「ああ、また後でな時雨」

一夏達と別れ時雨は更に廊下を進む。そして千冬に言われた通り確かに通路の角となる部屋余と部屋刺の間の部分スベには『0000』号室のプレートが付いた扉が存在していた。

「ここか……一夏達の部屋から5つは奥にあるから案外遠いな」

時雨は自室の扉の鍵を開けドアノブを回す。そしてその先にあつたのは聞いていた通りの殺風景な部屋……ではなく、

「お帰りなさいア・ナ・タ♡ご飯にする?お風呂にする?それとも……ワ・タ・シ♡」

見た感じ裸の上にエプロンだけを着た世に言う『裸エプロン』とやらをした自分の1、2年くらい歳上そうな何処かで見事のあるような顔立ちと青い髪をした美人の女性が何故か扇子を持ちながら玄関に立っていた。

パタン

時雨は取り敢えず速攻で1度扉を閉め部屋番号と鍵を確認する。間違いなく部屋番号は『0000』であるし鍵もしっかりと鍵穴に挿さり錠の開閉も難なく行える。つまりここは間違いなく自分の部屋である。

……ん?疲れてるのかな?よしもう一度開けてみよう、そうしよう。

「お帰りなさいア・ナ・タ♡ご飯にする?お風呂にする?それと……」

パタン

ん?ん?ん?ん?もしかして幻覚じゃない?そんな馬鹿な……

「お帰りなさいア・ナ・タ♡ご飯にす……」

パタン

.....ピッ

「もしもし千冬さん。今俺の部屋に裸エプロンしてる見知らぬ痴jy  
「御免なさい御免なさいだから織斑先生を呼ぶのだけは勘弁して！私  
が半殺しどころか生物学上でも抹殺されるから!!?。」

「ほう.....? 楯無、一体誰が誰に半殺しどころか生物学上で抹殺され  
ると言うんだ? なあ楯無?。」

「ひいつ!!? おおおお、織斑先生いつの間に☒」

「何、世界中でもたった2人しかいない男子の片割れから個人部屋で  
あるはずの自室に裸エプロンの姿をした痴女が居ると通報を受けた  
のだ。ハニートラップの可能性を含めてここの寮長兼警備主任を務  
める私が事態鎮圧の為に直接出向くのは間違っではないだろうか?  
なあ痴女闖入者?。」

「い、イエス、ママ！あと痴女は止めて下さいお願いします織斑先生  
！」

「あん?。」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ!。」

「はあ.....、濟まないな天羽。取り敢えずこいつは私痴女の方で引き取ろ  
う。ほら行くぞ楯無、まずは職員室で私が、その次は生徒会室で虚と  
一緒に説教を受けて貰う。まあ小一時間は最低でも覚悟するんだな」  
「いいやあああああああああああつ!!?。」

思わず千冬に連絡してしまった時雨だが、それを止めようとした痴  
女もとい闖入者も一歩及ばずすぐそこにはいつの間にか千冬が立っ  
ていた。そして彼女は楯無と呼んだ痴女のうなじ辺りを服を着てお  
らず掴む場所がなかった為にむんずと掴むとずりずりと引き摺って  
行った。

で、ただ1人残された時雨はと言うと、

「何、アレ?。」

イマイチ現状を理解できていないようだった。



数分後、取り敢えず今あつた事は全て忘れる事にした時雨は今度こそ自室へと入る。そして入って扉を閉めてすぐ部屋の至る所を「検知魔法」を使つての家捜しを開始する。そして案の定、

「有つたな……『ミニ』と『メ』、あと『シヨツカク』か。全力で俺の正体を探る気だつたな」

『ミニ』『メ』『シヨツカク』とは『盗聴器』『盗撮カメラ』『電波傍受器』の隠語である。その理由は読んで字の如く対象の音声や盗み聞く為の耳が盗聴器であり、対象の行動を盗み見る為の目が盗撮カメラであり、対象の出した連絡を傍受する為のアンテナが電波傍受器である。

「部屋を準備したのは学園側だつたか？だが誰がやった？学園長はそもそも入学する為に千冬さんが事情は話してあるし組織も束が多少黙っている所はあるが殆ど把握している。なら各国が潜り込ませて来た生徒や国家代表候補生の可能性もないことはないがそもそもまだ場所は知らない筈……教師を抱き込んだ？いやそれはない、その辺りは千冬さんと学園長が目を光らせているからやつた瞬間懲戒免職になるのは分かり切っているし……うーん」

そんな機材達を素手であつさりと砕きつつ時雨は呟くが情報が足りなさ過ぎて誰が犯人かまでは到達出来なかつた。

「うん、取り敢えず千冬さんに連絡だけしとこう。俺が今単独で動いても面倒が起こりそうだなだけな気がするし」

時雨はそう呟きかつて機材だつたガラクタの破片をゴミ箱に捨てつつ再び千冬に向け電話を掛ける。

「もしもし、千冬さん今大丈夫ですか？……はい、ならちよつと報告があります、部屋にですね『ミニ』や『メ』、『シヨツカク』があります。既に処分はしたのですが原因の方はですねどうすれば……あ、引き受けてくれますか？ありがとうございます。では……」

時雨は電話を切る。

「取り敢えずこれで安全かな？……つともう6時前か、晩御飯を食べに行こう」

そう言つて部屋を後にした時雨だったがいつぞや職員室からとあ



る女性の悲鳴らしき物が聞こえたのを最後まで気付く事はなかった  
そう。

## 専用機と改造機

〈31〉

あの痴女の一件から翌日、その日もまた昨日お同じ様にIS基礎の知識を1時限目から4時限目まで通して学び昼休みへと入った頃、時雨と一夏はつい先程まで授業を行っていた千冬に呼び止められていた。

「天羽、それと織斑、話がある。少しこっちに來い」

「はい」

「なんででしょうか」

呼ばれた理由が分からない時雨は若干首を傾げながら、何か授業中に不味い事でも自分がしてしまったのかと恐々としながら一夏は2人共片付けている途中だった自分の机から千冬の前までやって來た。

「6日後のISでの模擬戦についてだが織斑、お前のISは準備まで少々時間が掛かる事になった」

「え?」

「今何処の国家、企業にも予備機がない。だから少し待て、学園の方で専用機を用意するそうだ」

千冬は一夏に専用機が渡される事について話出した。

「せ、専用機? 1年生の、しかもこの時期に☒」

「つまりそれって日本政府からの支援が出てるって事で……」

「あー、いいなあ。私も専用機欲しいなあ」

そして千冬の話聞いていたらしい教室に居たクラスメイト達がざわざわと騒ぎ出す。

「専用機って……それ凄い事なんだよな? イマイチ実感が湧かないんだが……」

「馬鹿者。教科書6ページを音読しろ、そしてそこから自力で理由は導いてみせろ」

「は、はい。えっと……」

一夏が急いでまだ片付けられていなかった自分の教科書を開き6

ページの内容に目を通す。

「ふむふむ……ええつと……つまり要約したら『ISの根幹をなすコアは467個しか無く、そのコアが作れるのは生みの親である篠ノ之束ただ1人だけであるが本人が製造を拒否、日本から出奔した為にこれ以上増える事もない為にアラスカ条約批准国に分配されたコアより組み立てられたISは貴重であり取り分け個人に専用機として最先端ISを与えられる人間は特別な存在である』……って事だよな？」

「間違つてはないね、因みに一夏の場合は『この世にたった2人しかない男性搭乗者の1人だから』、何処の国も今まで取れなかったパイロットが『男性』である場合のデータが欲しいんだよ」

「え？なんで？」

「良いかい？俺達はこの世にたった2人しかない男性搭乗者な訳だけど逆説的に言えばこの先男性搭乗者が見つかる可能性が有るって事だ。1人いれば可能性として他にもいる可能性は0ではなくなる、それに男性搭乗者のデータを解析すれば上手くいけばいずれ男がISに乗れるような日が来るかもしれない。だからこそ世界各国はそんな可能性を手に入れる為に専用機モットっていう責任首輪を与えて世界初の男性専用機モット乗りにしたいんだよ……言い方は悪いけどね」

が、実際そうなのだから時雨の言葉は否定できない。どんなに言い繕つても結局は何処までいってもこの世にたった2人しかない貴重な男性搭乗者は世界にとっては未知であり調査されるべきモノなのだ。そしてそれが人道的か非人道的かの違いしかない。

「ストップだ、時雨。お前の言っている事は正しいしその通りだが言わない方が良く事だつてある。『言わぬが花、知らぬが仏』と言うだろう？」

そして2日目ともなれば良い加減慣れたのか千冬はため息1つつきつつも時雨にストップをかける。どれだけ今の世界が嫌いなんだと少し頭を抱えなくなる千冬だったが、次の話は時雨に関するものである為話を続けた。

「時雨、お前の機体は調整にまだ時間が掛かる。

ラビット・イン・ワンダーランド社から今朝連絡が来た、オーバーホールと機体改修にあと10日は掛かるそうだ」

「ああ……そういう、分かりました」

「なのでお前には一時的に今日から学園の訓練機を貸し出す、【打鉄】になるが構わないか？」

「ええ、大丈夫です」

「そうか、それと訓練機だが代わりに多少の改造の許可は出た。原型を留めているならば好きに改造して構わない」

一方時雨の方は専用機の到着は模擬戦までには間に合わないらしい、しかしその代わりに学園から一時的な専用機として貸し出される訓練機は時雨の好きなように改造して良いとの事なのでこの際実際にISを自力で弄ってみようと思う。……知識はあるのだ、あの魔の2週間で天災監修の元習得させられた知識は。

そして先程会話に出てきた『R・i・W』という企業についてだが、R・i・W、正式名称Rabbit・in・Wonderland社は元々篠ノ之束が立ち上げていた偽装企業（社長兼開発主任 束、副社長兼経理兼社員 クロエ）であり主にやっていた事は束がふと思いついて開発、商品化してしまっただ面白グッズや設計したIS装備、宇宙開発用の部品を暇潰しに売ったり卸したる為の形だけの会社に過ぎなかったがそれが幸いし時雨が表舞台に上がると同時にIS開発産業へ参入、元々ISの部品やシステム、兵装を開発していた為あまり怪しまれずに時雨の専用機の開発及び引き渡しを請け負う事になった。

また時雨の専用機となるのは勿論例の『アノ』機体であるが動力機関の変更、それに伴う機体の調節や改造、新たなシステムの導入などやる事が多くいかに天才的頭脳と能力を持つ束であろうとも暫く時間が掛かるんだそうだ。

「え、R・i・Wって最近IS開発産業に参入したあの『おもしろ便利グッズからISやバルキリーまで』がキャッチコピーの謎の超企業だよね？って事は天羽君ってR・i・Wの企業代表なの？」

「うーん……、ちよつと違うよ機密だからあんまり詳しくは言えないけどあくまでR・i・Wは俺の機体の開発製造をしてるだけ、所属はまた別の所だよ」  
「へえ〜」

実際時雨の機体を提供しているのはR・i・<sup>東</sup>Wであるが名目上所属は彼女が選んだ『組織』である。名前だけを借りているようなものだが借りている事は事実なので機密に触れない程度にその辺りはしつかりと一夏や質問してきた女子生徒には答えておいた。

「話を戻すぞ、で貸し出される訓練機だが整備室の1番奥のハンガーに駐機されている。改造には学園内にある備品や装備なら使つて良いからその辺りは整備室で先輩に説明してもらおうと良い、まあアリーナが使えないので結局改造しても本番までまともに動かせんだろうがな」

「了解です、あと本日からそれは可能ですか?」

「放課後からならば可能だ」

「分かりました」

時雨の質問に千冬はそう答える、他に聞く事は?と2人に問うたが2人とも無いと答えたのでそこで彼女は質問の受け付けを終了する。

「ふむ、ならば問題ない。さ、お前達も食堂に行つて昼食を食べて来るといい。残り時間はあと30分も無いぞ?」

『「あ」』

うっかり忘れていたが今は昼の休み時間であり、いつの間にか15分も既に過ぎてしまつていた事に気付いた一同は千冬の言葉に「あ」と言葉を漏らす。時間からして食堂の混雑イコールピークは過ぎているが混雑と空き座席の有無は決してイコールでは繋がっていない、寧ろピークよりその後の方が空き座席は少ないと言つても過言ではない。一応食堂には回転率の良いカウンター席もあるがその絶対数は少ない為今の段階でもこのクラス全員が予鈴までに座れる可能性は低いのだ。

「ぎゃあつ、急がなきゃー!」

「お昼御飯抜きはムリっ!」

「こらっ、廊下を走るんじゃない!早歩きで行け!」

バタバタと慌てて教室を飛び出て行く女子一同と走るなど注意しつつ教室を後にする千冬の背を見て時雨と一夏はどこか諦めた目をしながら顔を見合わせる。始業までに間に合う可能性は低いが諦める訳にもいかない、しかし購買もすぐ売り切れる上に弁当を作った訳でもないのに調達はあの混んだ学食で済まさなければならぬ。故に、

「急いで行くか……」

「おう、食後すぐに走りたくは無いらな」

千冬に見つから無いように廊下を曲がってから全力ダッシュで食堂に向かう2人だった。



#### 放課後

「さてと、一夏。俺は1度訓練機を見にIS整備室に行ってくる。悪いが今日の特訓は俺抜きでやってくれ」

「おう、いつてらっしゃい。時雨も頑張れよ」

「行くぞ一夏、今日は突きをメインに鍛えるからな！時雨も無理はし過ぎるなよ」

「ああ、分かってるよ。行ってきます」

教室を出た後、途中道に迷うなどというアクシデントもあったが時雨はIS整備室には1年1組の教室から凡そ10分も掛からずに着いた。

「ここか」

『IS整備室』と書かれたプレートのついた自動ドアを開けて中に入る。整備室の中はキッチンと整理整頓され設計図とか金具とか工具とか部品とかは一切その辺りに転がっていない、その光景に何処か新鮮なものを感じた時雨は一体何故そんな事を思ったのか一瞬で思い当たりポツリと独り言を零した。

「ああ……今までで『整備室』と名の付いた部屋で初めて見た。こんな綺麗に整理整頓された部屋」

束の整備室も琴乃の整備室も部屋の至る所に設計図やら金具やら工具やら部品やら何やらと乱雑に鎮座しており酷い時には足場が無かったりする事もあったのだ。そしてそれを掃除するのはその部屋を訪れる機会が有り、年齢的にも比較的まともに整理整頓ができる人物である時雨もとい翼しかいなかったのだ。それ故に彼自身は別に望んでもいないのに無駄に機械工学の知識が増えていき翼がそれを元に整理整頓をして束と琴乃は片付いている事によるこんで更に研究開発を頑張つてより部屋を汚くしてそれをまた翼が綺麗にして知識を得て整理してそれにまた束と琴乃がよろこんで研究開発をといった感じで悪循環を産んでいた過去があつたりする。

それはさておき中に入ってみると今整備室にいる人間は今入つて来た時雨を除き1人だけ、1番奥に駐機されている時雨の打鉄の隣に駐機されている組み立て中であろうISのシステムを熱心に自分のメカニカル・キーボードに打ち込んでいる少女がただ1人だけしか居ない。

「あれだけ熱心にやってるんだ、邪魔しちや悪いな」

千冬には整備室にいる先輩にでも説明を受ければ良いと言われたが今の整備室には先輩どころかその彼女しかない為時雨は自力で整備室にある各種設備の取り扱い説明書を探し出しそれを見ながらその通りに操作する。

「うーん、何を如何したら良いのか……取り敢えずは拡張領域に量子化せずに機体に更にくっ付ける形でいこう。メイン武装はライフル……アサルトライフルの方が良いか、有るのは……【焰備改】だけか？それにこの非固定武装大盾、無駄が多いな。まあオートじゃこんなものか、取り敢えずマニュアルに変更して可動範囲はそのまま、操作は思考制御に直結して……待てよこれじゃ並みの人間に使えないな。電子戦用バルキリーの管制システムがあれば楽になるが……仕方ない乗るのは今回限りだし諦めて普通の一部オートの思考制御にするか、問題は俺の知識だけで上手くいくかどうかなんだが」

「……ねえ、何やってるの？」

現状やれる事とできない事を把握した時雨は目の前にあるISを

眺めこれからの改造プランをパソコン片手に考えていると本人は気付いていなかったがずっと独り言が漏れていたのか、整備室に入ってきた時からずっと一人で時雨の【打鉄】と同じようにハンガーに駐機された機体を弄っていたIS学園の制服ではない制服を着て眼鏡を掛けた何処かで見覚えのある水色の髪をした少女が時雨に話し掛けて来ていた。

「打鉄の改造、汎用性と安定性の比較的高い機体だけどこそのままじゃ新型の専用機とは張り合えないからね。取り敢えず先にちよつとただ浮いてるだけに近いこの盾をどうにかしようと思つてプログラムを組んでたんだ。まあ上手くはいってないんだけどね」

「そつ……」

時雨は元から盾の操作システムに組まれていた一部のプログラムを改変し思考制御をメインとしたプログラムに組み直している画面を彼女に見せる。0と1の二進数が延々と続くその画面を軽くスクロールするとその途中、それを見ていた彼女は唐突に時雨とキーボードの間に割り込むと打ち込んであつた数字を修正、再編しあつと言う間にさつきまではシュミレートで上手くいっていなかった動作が上手くいくように手直ししてしまった。

「……でもこのシステムの書き換え、多分間違つてる。こつちにすればより安定性が増すはず。でも多分この部分のシステムはバルキリーの思考制御用のインターフェイスのシステムを一部応用すればより汎用性と完成度の高いものに仕上がると思う。それと……」

そう言いながら彼女は目にも留まらぬ速さでキーボードを叩き時雨の拙い組み掛けのプログラムを修正、改良していく。最後まで書き換えを終えた時、彼女は我に帰ったかのように「あ……」という声と共にキーボードから手を離し身を引いた。

「あ、……ごめん。出しゃばり過ぎた、気に入らないなら……消して」「いや、ありがとう。助かる。色々やつてる事はやつてるけど殆どが知識だけがある状態でほぼ手探りだったんだ。だからありがとう」

「つ……どういたしまして」

いきなりお礼を言われた事に驚いた様子の彼女だが、それに時雨は



気付かずに更に追い討<sup>話</sup>ちを掛ける。

「また良かったらアドバイスとか気が向いたらしてくれないかな？」

「……き、気が向いたら、する……」

「ありがとう」

「うっ……あう」

時雨のお礼に顔を赤くした彼女は慌てたように自分の機体の電源を落とし、それに接続していたコンピューターを手に逃げるようにして整備室から逃げて行ってしまった。取り残された時雨は少し呆然なるがふとディスプレイに表示された電子時計をみると既に18:23を指している、そろそろ夕食とするには頃合いとなった時間になっていた事に時雨もまたデータだけはメモリースティックに移し機体の電源を落とし整備室を後にする。

「そう言えば最後まで名前聞くのを忘れてたな……」

寮にある1年専用の食堂に向かう道中、ふと名前を聞くのを忘れていた事に気付いた時雨は次に会ったら名前を聞こうと決めたのだった。

## 模擬戦の行方

〈32〉

6日後、ISによる模擬戦当日。時雨と一夏は第3アリーナのピットに居た。

「遂にこの日が来たな……」

「ああ……遂にだ」

「俺達はこの1週間頑張つて来たよな……」

「それには同意する、ISがないから基礎練ばかりだったけどとにかく詰め込んだ甲斐はあると思うよ。俺は機体の改造もなんとか成功したしね」

IS専用のスーツに身を包んだ時雨と一夏はピットにてお互いに領き合う。因みに一夏のISスーツは何処かの男子陸上部みたいなの露出肌面積の多い何それ防御力は何処行つた？みたいなスーツであり、時雨のスーツはバルキリーに搭載されているEX—ギア・システムに対応した束特製の今時珍しいとされる白を基調メインに黒の線ラインの入った正統派全身スーツである。

がその前に何故模擬戦を目前に控えたこの2人が未だピットに残っているかと言うと、

「やっぱり来ないな……俺の機体専用機」

「ああ。結局と言うかやはりと言うか、練習には間に合わなかったな」  
一夏の専用機がまだ届かないからである。予定ではそろそろ着くはずだと千冬は言っていたがその彼女は受け渡し現場にIS学園側の責任者として立会いに行っているんで今この場には居ない。

「おーい、2人共！応援に来たよ！ほら、箒も！」

「お、おい、押すな箒！……コホン、応援に来たぞ2人共」

「おう、ありがとな箒、箒」

「えへへ、当たり前じゃない。家族なんだから」

「そ、そうだな。時雨も友達だからな……ってなんだその意外そうな顔は」

「いや、箒さんが友達だと思ってくれてるとは思わなくて……いつも話し掛けては来てくれないし」

「なっ……」

「箒……」

そしてわざわざ観客席ではなくピットに2人の応援に来てくれた栞と箒はただ機体の到着と模擬戦開始を待つ一夏と時雨に対してそう話し掛け、まさかの事実に一夏と栞はため息を吐いた。まさか箒が時雨に今まで一度も自分から話しかけに行っていないとは考えもしていなかったのだ。むしろ一緒に特訓をしていたと言う絶好の機会があったはずであるのに1度も自分から話しかけに行かないとか予想だにできない事でもあるが。

「……ねえ、箒。やっぱりまだ割り切れてない？」

「……いや、そう言う訳でもない訳でもないのだが……その自分から話し掛ける勇気と言うか踏ん切りが……」

「ええ……昔と同じ位人見知りが再発してる……なんでさ？」

「いや、私に言われてもだな……」

「何話してるんだ？あの2人？」

「さ、さあな……俺に聞かれても」

「？、お前もどうした一夏？」

小声でひそひそと話す栞と箒に頭に疑問符を浮かべた時雨の姿を見て鈍いな……と一夏は思う。実際は人の事言えないのではあるがその辺りは知らぬは本人ばかりと言う奴である。

と、そこへ急いで走ってきたのか息を切らせてピットへと山田先生が現れた。

「ぎ、来ましたよ！織斑君の機体が届きました！」

全力で走って来たのか髪の毛の乱れもだが呼吸が荒くそして顔が少し赤い。生徒の為に全力を尽くす教師の鑑とも言える姿であるが女性としてはあまりいただけない、なので先に1度呼吸と興奮を落ち着かせ冷静になって貰ってから話を聞いた。

「……ふう、済みません。お見苦しい所をお見せしました。と、先程も言いましたが織斑君の機体が到着しました。今織斑先生がここに向

け運搬中ですが天羽君に伝言です、「織斑君の機体の到着が遅れた所為で時間が押している。予定を変更して先にオルコットと対戦を始めてくれ」との事ですが、よろしいですか?」  
「大丈夫です。最適化も終わってませんし一次移行も済んでないですから仕方ありません」

何やってんだよしつかりしろよ倉持技研だとは思うもの。実際時間が押しているのだから仕方ない、時雨の了承を受けて山田先生は対戦相手であるオルコットにも理由を説明し対戦相手の変更の了承を貰う。山田先生が模擬戦を開始する為に色々と準備をしていると漸くそこに1機の機体の搬入に付き添っていた千冬が現れる。

「織斑、お前の機体だ。今すぐ装着、準備を開始しろ。……済まないな天羽、初期化と調整が済んでいない機体を出撃す訳にもいかないからな」

「いいえ、山田先生にも言いましたが気にしないで下さい。では行きませす」

カタパルトに打鉄改の両足をセットし時雨はその衝撃に備える。

「射出準備完了、射出タイミングは天羽君に譲渡します」

「了解。天羽 時雨、打鉄改、出撃する」

山田先生から受け取った発射トリガーを天羽は弾く。途端に急加速により発生したGが身体を押さえつけるように発生するがそれは時雨にとっては普通であり当たり前のもの、そのままピットのゲートをくぐりアリーナへと飛び立ったその翼は華麗にバレルロールを決めその低い空を羽搏いた。



第3アリーナ上空、その黒鉄の翼は其処に在った。

「ふむ……悪くない、な」

手を開いたり閉じたりして動作確認をする時雨は機体が満足のいくレベルでしつかりと動いている事を確認し意識を目の前にいる

セシリア・オルコット

相 手 に向ける。

「逃げずに来ましたのね」

眼前に滞空する蒼いIS、蒼き涙の名を冠した『ブルー・ティアーズ』の操縦者セシリア・オルコットは優雅に腰に手を当てたポーズをしながらそう言った。

「最後のチャンスを差し上げますわ。この模擬戦、国家代表候補生である私が圧倒的有利であるのは自明の理。ですから地に堕ちる惨めな姿を晒したくなければ、今ここは棄権なさり他の試合での決着に賭けるべきであると提案しますわ」

戦闘開始前の最終勧告であろう言葉を彼女は時雨に掛ける。所々相手を見下しながらも思い遣るような優しさが出ている所を見ると彼女もまたそこまで女尊男卑に染まった女性と言う訳ではないのだろう。

だが時雨はその勧告に乗る事はない。

「残念だけどお断りするよ。君の勧告は正しい、確かにこの場合は棄権し他の決着でもって対抗する事が最もリスクの低い遣り方だろう。でも時に人は損や得だけでは動かない、特に男はね」

「……馬鹿ですわ」

「その通りだよ。だからこそこんな真似ができるのさ」

時雨の言葉に何処か呆れと少しの寂しさを持った言葉をオルコットは零す。だが次の瞬間には真剣な表情へと戻りその手に持った大形レーザー狙撃銃『スターライトmkⅢ』を構える、時雨もまたアサルトライフルである『焰備改』を取り出し構えた。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で！」

「喜んで、御嬢様。空の舞踏は如何ですか？」

同時に構えられた銃口がこちらにも同時に火を吹いた。



その頃の試合の公平を期す為一夏が機体ごと退場させられたピットでは千冬達が画面に映る時雨とオルコットの弾丸の応酬を観戦し

ていた。

「これは……凄いな」

「確かに、オルコットさんもだけど時雨君も凄い応酬だね」

箒と葉は互いに撃たれるその弾丸の正確さとその回避能力の高さに驚き舌を巻く。特に実際はIS搭乗時間が一夏より更に低い僅かな時間でありしかも搭乗機が性能が抑えられた訓練機の筈なのだが今の彼の動きを見てそれを信じられる者はおそらくいないだろう。一体どんな詐欺なのだと言うレベルである。

それに対して同じくその試合を観戦していた千冬と山田先生であるが僅かに千冬が顔を顰めている事に気付いた付き合いの長い後輩である山田先生は彼女にどうしたのかと問いかける。

「……………」

「あれ？織斑先生？如何なさいましたか？」

「……やはり天羽の反応速度に機体訓練機が付いていけない。あのままでは機体の方が先に根壊を上げるぞ」

「えっ？」

千冬の答えに山田先生は一瞬それが理解出来ないように答えに詰まる、だがすぐにその言葉を理解し驚いた。

「ええっ!?それは本当ですか!?？」

「?、何があつたんですか？」

「天羽君の動きにISが付いていけないとはどういう事なんですか?」

「正しく言えば『IS』がでなく『訓練機』がだ。天羽の反応速度は常人より遥かに早くそしてその行動に移すまでのタイムラグはより小さい、そのタイムラグはおそらく0.15は下らないだろう。だがその分一般用に性能に制限の掛けられた訓練機には要求に答えられない、天羽も手加減をしているようだがほんの少しでも加減を間違えれば直ぐにでも機体はお釈迦になるぞ?」

山田先生の声に疑問を持った2人もまた千冬の話聞き驚愕する。だがこちらは余り実感が湧かないからなのかそれを理解できている山田先生よりかは反応が低い、だがそう思ってしまうのも無理はな

い、そもそも性能に制限の掛けられた訓練機であろうと加減せねば壊してしまいうレベルの搭乗者単体としての能力を持つ人間等彼女達の目の前にいる織斑<sup>ブリュンヒルデ</sup> 千冬か細胞レベルでオーバースペースな篠ノ之<sup>天災</sup> 束くらしいしかなかったのだ。と言う事はつまり天羽もまたそれだけ人間から外れた位置にいるという事でもある。

「はわわわ……とんでもない事を聞いてしまった気がします……」

「とにかく時雨君って千冬さん……織斑先生と同じくらい凄いつて事？」

「それって明らかに……イエ、ナンデモナイデス。ハイ」

千冬を化物呼ばわりしそうになった筈が千冬の極寒の流し目に片言になると言うトラブルもあったが一同はスルーする。心で思う程度なら千冬とて許すが口に出すのは禁忌<sup>タブー</sup>なのだ。流石に本人とて他人よりも思いつきりぶち切って色々おかしい力を持っている事は理解しているが一応心は他人と同じ硝子<sup>タプ</sup>である……おいそこ、強化ガラスとか言うな締めるぞ？

「そんな事より試合を観ておけ。きっと参考にならないとても重要な試合を観れるだろうからな」

「参考に、ならない？」

はあ、全く……とため息を零した後に続けられた千冬の言葉に復活した筈が反応する。参考になると言うならば重要であると言う事は理解できるが参考にならないとは一体どういう事なのか？

「簡単だ、まずお前達では再現出来ない馬鹿みたいな事しかやらないからだ」

彼女達もその言葉の意味する事をすぐにでも目撃する事になる。



模擬戦開始から10分、いまだ撃ち合いを続けている【打鉄改】に2人目の男性搭乗者対し有効な損害を与えられていないセシリア・オルコットは内心焦っていた。

「くっっ？……如何してこんなに当たりませんか！」

彼女は自らの得物である大型レーザー狙撃銃『スターライトmkⅢ』を打鉄改に向け連射するがその全ては躲されるか若しくは本来ならば有り得ないほど自由自在に稼働する非固定武装である大盾に阻まれるかの確かな角度を以って弾かれほんの微々たる量しかエネルギーを削れていない。

「それに！」

射撃から直ぐにスラストを使い狙撃位置を変更、そしてその移動した瞬間に元いた場所を2条の閃光が通過する。

「色々と魔改造が過ぎますわっ!!? 盾の裏に機銃とIS刀を直接装備するなんて！」

回避した先で相手の次の移動位置を予想して放つ偏差射撃でもってレーザーを撃つがそれも盾に弾かれてお返しとばかりに放たれる搭乗者の左右に浮遊する盾の裏に1つずつIS刀と一緒に装備された20mm機銃が火を吹き彼女の機体を追う。曳光弾の混じったその光の筋を掻い潜り彼女も撃ち返すが回避か防御で弾かれ埒があかない、幾ら非固定武装の盾の表面をレーザーで融解させても本体に直撃しなければシールドエネルギーは減らないからだ。故に彼女には焦りが募っていく。

「くっ!!?」

時雨の放った焔備の実体弾がオルコットの機体に直撃しまた彼女のシールドエネルギーを減衰させる、撃ち合いに夢中になり過ぎた所為でエネルギー残量は既に3分の2を切っていた。

「……認めましょう、貴方は強い。だからこそ私は負けられない！お行きなさい『ブルー・ティアーズ』！」

そして遂にオルコットは時雨を完全に認める事にした。彼女の掛け声と共に機体に装備されていた非固定武装の一部が分離して独立して動き出し時雨に向けその先端を向ける、今彼女が時雨に向けるその眼は今まで以上に鋭く『鷹の眼』と言っても過言ではない。

「私の機体はBT兵器『ブルー・ティアーズ』を搭載した試作実験機でありながらもその高い性能から実戦投入されたその一号機。故にその切り札を切ったからにはこれからは今までのようにはいきません



わ。踊りなさい『ブルー・ティアーズ』！」



「その切り札<sup>ビッド</sup>を切ったからにはこれからは今までのようにはいきませんわ。踊りなさい『ブルー・ティアーズ』！」

オルコットの掛け声に合わせ計4つのビッドが展開され時雨に向けその銃口からレーザーを放つ。まるで雨のようにレーザーが降り注ぐ為に時雨はアサルトライフルを構える暇もなく旋回や急降下・急上昇を行い回避に徹するしかない。しかし被弾量が増えたかと言われればそうでもない、確かに銃口が4倍になった事で防御を越え装甲に当たりシールドエネルギーを減らす回数は増えているもののそれは増える前の2倍程度しか増えていないのだ。

「くっ、ここまで当たらないなんてっ！なんという回避能力、いえ操縦能力ですの!?? 本当に貴方搭乗時間が2時間しかない初心者なんですの!?? 詐欺じゃありません!??」

「いや、事実だよ。本当に俺は起動させた時と借り物の機体で本当に動かせるのかチェックをした時位しか乗ってない」

本当だ、実際に時雨のIS搭乗時間は同じ男性搭乗者である一夏よりも少ない初心者である。だが時雨が今何故こんな風に戦えているのかと言えばそれは時雨が戦い慣れているからに他ならない。空戦? 向<sup>前</sup>こう<sup>世</sup>では魔法で飛んでやった事もあれば騎竜に乗った事も天竜に乗って戦った事もある。命懸けで鎬を削った回数など覚えてなどいない位に、

「でも生憎戦うのは得意でね、例えばこんな戦い方だって出来る」

バシユツ——ガキインガキイン

「なっ!?? ティアーズがっ!??」

それ故に時雨にとって空戦は<sup>初心者ではなく玄人である</sup>ある意味ホームグラウンドとも言える。だからこそバルキリー<sup>上手に戦える</sup>だけでなくISにおける空戦において時雨は誰よりも一歩先<sup>上手に戦える</sup>を行ける。

「スラツシユハーケン」

撃ち落とされるティアーズ、それを撃ち落としたのは時雨の機体の両腕の手の甲の上に装備されていたワイヤーアンカー、別名スラッシュハーケン。それがティアーズの推進部を撃ち抜き墜落させ、更にその事にオルコットが気を取られた隙に腰の部分にも装備されていたそれを今度はブルー・ティアーズ本体の脚部にハーケンを引っ掛けその巻き戻しの強力な牽引力を推進力に変え打鉄改は彼女に向け急接近し、

「藤堂さん直伝陽昇流誠壺式旋風脚、略してくるくるキック！」

そしてそのふざけたような技名と共に呆れるほど強烈な左回し蹴りをブルー・ティアーズへと叩き込んだ。オルコットは反射的に大型レーザー狙撃銃を盾にするがその衝撃はどうする事も出来ず数メートル先まで後退させられる、追撃に焔備の弾丸が撃ち出され数発命中するが彼女はなんとかその追撃を抜け距離をとる事に成功する。もしあれで地面に向けて蹴落とされていればきっと追撃からは逃れられなかっただろうと想像してしまい彼女は人知れず冷や汗を流した。「動かないのか動けないのかは分からないけど戦場のど真ん中で立ち止まるのは自殺行為だ。だからこんな芸当も出来るし受けてしまおう」「くっ!!?」

先程の攻撃を受けシールドエネルギーが半分を切ってしまったオルコットは最早隠しようもなく焦る、だがその所為で正確だった射撃精度に乱れが生じたのでさえ当たり難かった攻撃が更に当たらなくなりそれが更に彼女を焦らせる原因になった。

「当てにくい所をつ！」

圧倒的有利な頭上を取っているというのに操縦難易度が高く狙い難い筈の地形追従背面飛行をしつつビットの弾幕を躲し反撃される事にオルコットはその理不尽さに驚くより先に更に焦りが募る。そしてだからこそ例えそれが誘いだと理解していても地形追従飛行を終えその身を起こした瞬間に奥の手を切る事しか出来なかった。

「ブルー・ティアーズはただレーザーを放つだけではありません事よ！」

温存されていたミサイル型ティアーズが上昇中だった時雨に襲い

掛かる。起爆と同時に銃身が破壊されていなかった物やまだ撃ち落とされていなかった射撃用ティアーズ全てを使い全方位から飽和攻撃を放った。

「これでっ!!??っ!!??」

確実に撃ち抜いた、そうオルコットが、いやそれを観戦していた誰もがそう思ったがそうは問屋が卸さないとはばかりにはば無傷の時雨が爆煙から突撃して来る。着弾の寸前、時雨は焰備を盾にミサイルに投げつけ破壊し対ビームコーティングどころか対レーザーコーティングすらされていない唯の盾を最も広域を防御できるからと言う理由で防御に回したのだ。結果アサルトライフルはミサイルで木っ端微塵……ではないがぼろぼろになって何処かに吹き飛び非固定武装である盾は穴だらけになり最早飛ぶ事すら難しくなったのか軌道が低下し高度も下がってきている。だからその代わり時雨のシールドエネルギーは彼女達が想定したよりもずっと遥かに減少していない。

「今っ!」

「っ!!??やらせませんわ!!??」

驚愕による硬直の瞬間を狙い時雨は脱落しつつある盾鞆からIS刀を抜刀し間合いを詰める。それを見たオルコットは自らの大型レーザー狙撃銃を身代わりに投棄、そして近接武器をコールして迎撃する。

「甘っ!」

「っ!!??インターセプトっ!」

判断は良い、恥も外聞も捨てて咄嗟の判断ですぐさま近接格闘戦へと切り替えた。だが相手が時雨であるこの場合、それは悪手ともなる。

「はっ!!??」

キンツ

「なっ!!??インターセプトが!!??」

剣の達人である時雨は斬り上げで大型レーザー狙撃銃を、斬り下げでインターセプトを両断し再び刀を斬り上げる。

「良くやった。俺に刀を出ささせた分、君は十分強い」

「……斬られる直前にそれは、あまり嬉しくありませんわ」

時雨の最後の一闪が絶対防御を発動させシールドエネルギーを全損させた。

『試合終了。勝者——天羽 時雨』

模擬戦第1回戦オルコット対時雨の戦いは時雨の勝利に終わった。

## 蒼き涙の過去と今と

〈33〉

その後、私<sup>わたくし</sup>ことセシリア・オルコットと天羽 時雨の模擬戦の後に予定されていた織斑 一夏との模擬戦は私のブルー・ティーズと天羽 時雨の打鉄改の機体ダメージがこれ以上の戦闘は危険であると示していた為に織斑先生の判断で模擬戦は全て中止、結果不戦勝で織斑 一夏が全勝する形で今日の試合は終わった。まあそれに一番納得していなかったのは織斑 一夏なのですけど。

そして試合を終えた私は1人更衣室に付いたシャワー室でシャワーを浴びていた。たった一戦、時間にしてたった十数分の試合でありいつも行っている訓練より遥かに短い時間であったと言うのに、今私を感じている疲労はいつもより遥かに濃く、それであってそこから得られた経験値や改善点はいつもよりも遥かに多い。それだけあの試合は私にとって良い経験であり、刺激であり、そして忘れていた大切なモノに気付く事のできた試合だった。

「……天羽……時雨……」

ほんの、ほんの小さく呟いた筈のその人の名前は、シャワーから降り注ぐ水の音に掻き消される事も無くすんなりと私の耳に入っている。

「本当に……貴方は……」

天羽 時雨、入学早々何者かに切られた<sup>2人目の男性搭乗者</sup>ジョーカーであり本国に問い合わせても明確な回答は返ってこなかった謎の人物。おそらく、担当官の対応と反応から見て本国情報機関ですら把握出来ていなかった完全無名の『<sup>u</sup>ダークホース<sup>n</sup>』でありその後の<sup>表</sup>本国の対応や世間へ流されている情報から鑑みて未だ何者かによって完璧な情報規制が敷かれている。

と言うよりそもそも機密事項が多過ぎる、名前を名乗っていると言うのに世間には『2人目の男性搭乗者が発見された』とまでしか公開

されていない。所属、経歴、家族、血縁その他諸々全て含めてまるで薄いベールで覆われているかのようにある程度先まで見る事ができてもその先を見る事が全く出来ない。

「でも……」

だがそんな事は今の私には如何でもいい事、今私にとつて重要な事とはそんな彼の強さ……いやその生き様といったところだろう。

「強かった……力だけではなく、その目に宿った意思と剣に籠められたその思いは」

あの深紅の瞳に宿っていた戦意はまるで鋼の様に今まで自分が戦ってきた誰よりも強くしなやかであり、あの一閃に籠められていた重さは何よりも鋭くそして重かった。

……今思えば私の両親は今のこの世界の縮図のような関係だった。

英国有数の名家であったオルコット家の当主として気高くそして強かった母はとても厳しくて、優しくして私の憧れだった。対して父はと言えば母とは逆に気弱で、いつも母の下手に出て機嫌を伺っていた。もしかしたら婿入りして来た父はそんな母にどこか引け目を感じていたのかもしれない。

それから『I S』と呼ばれる世紀の発明が世に現れ、広まり、いつの間にか『女尊男卑』という風潮が広まれば、母と父の関係はより顕著なものへとなっていた。故に幼かった私は母に憧れる一方で、父に対しては情けないとしか感じなくなっていた。将来、自分が結婚相手に選ぶならば男性にはある種の『強さ』を求めようになる程に。

ですがそんな私達の暮らしもある日唐突に、それも呆気なく終わりを迎えてしまった。3年前に起きた越境鉄道のトンネル崩落からの横転事故、死傷者が百名を越える大きな事故に父と母も巻き込まれ、そして帰らぬ人と成ってしまった。余りに唐突で非現実的な現実にはショックを受け、受け入れられぬその現実には泣き喚くしかなかったその時の幼い私はそこで更に世界の非情さと醜さを知った、知ってしまった。両親が遺した莫大な遺産と財産を狙って同情と憐憫の仮面を被った金の亡者が両親を喪い孤独の身となった私の元に押し寄せて来たのだから。その時は満足に対応出来なかった私の代わりに使用

人であり代々オルコット家に仕えてくれているチエルシーの両親達が代わりに矢面に立って私を、遺してくれたものを守ってくれた為に奪われずに済んだ。そんな私はせめて2人が遺してくれたものや私の為に尽くしてくれた家族とも言える人達を守りたくて、私は若くしてオルコット家の当主となり、あらゆる勉強を始めた。ただ我武者羅に、脇目も振らずただ何もかもを後回しにしても……そう、両親との別れを悲しむ時間さえ許さずに、そしてその忙しきで両親の死を強く意識させないように。

そんな逃げるように勉強に打ち込む私を見ていられなくなったチエルシーがメイドとしての本分を越えてまでして無理矢理私を休ませようとするくらい私は一生懸命に頑張った、それでも私にはまだまだ足りない。力も知識も栄誉も実績も何もかも、そう簡単に私が憧れたあの母のように強くはなれない。何か手はないか頭を悩ませていると国からIS操縦者の適性検査があるとの話が私の耳に届いた。そしてもしも万が一高い適性があり、国家代表候補生にもなれば国から援助が受けられる様になるとも。それを聞いた私はこの行き詰まった現状に風穴を開ける糸口になるかもしれないと考えこれを受ける事にした、結果幸いにも適性はAと同期の方々よりも遥かに高いもので、直ぐに国家代表候補生として名を連ねる事になった。更に私が国家の後代表候補生の肩書きろ盾を得た事を知った亡者達はその時を境に掌を返したかのように私に媚びる様になっていた。

「全く、情けない……惨めでそしてこんなにも醜い」

人の醜い側面を直視し続けた私はそんな人の弱さに嫌悪感を越え、憎悪すら感じてしまっていた。幼少から育まれた弱さへの嫌悪は当主今もなつてからは益々増え、そして遂にはより深い憎悪ともなっている。あんな父のようには、目の前のこんな人達のようにはなりたくない。強くなりたい、強くならなくてはならない。

「もつと強く、もつともつと強く……強くならなくては……」

手段が目的に取って代わり、そんな強迫観念にも似た何かに突き動かされる様に国家代表候補生として訓練を重ねていけばいつの間にか国から専用機を持つ事を許された。自身の努力が実を結び評価さ

れた、実績を得た、また強くなれた、そんな喜びから訓練に更に熱が入るのは当たり前であり来るIS学園への入学に向けて更に研鑽を重ねていく。

——そしてその結果、私は天羽 時雨に負けた。

油断も慢心も、取り繕うような余裕すらも無かった。それ以上に最後は今まで私がISに乗った中で一番調子が良かった程だ。それでも私は負けた、あの刀一閃に見事討ち取られてしまったのだ。

「強かった、私が追い求め思い焦がれていた筈のその強さを彼は持っていた……」

何の為に私が強さを求めるようになったのかを、忘れていた筈のそれを私はその強さから思い出す事ができた。私は守りたかったんだ、皆んな私を支えてくれた家族とも言える人達を。

「本当……バカですわ、ある意味本当に弱かったのは私の方……弱くなりたくないから強さを求めた私が弱かったなんてとんだ皮肉ですわ」

ああ、間違いなく皮肉であろう。なりたくないと思っていた人の醜さをいつの間にか自分もまたその醜さを纏っていたのだから。

「……会いに……行きたい」

いや、会わねばならない。私、セシリア・オルコットは成した事に、成してしまった事に対する責任と義務謝罪、権利感謝がある。シャワーを止めた私は大き目のタオルで身体の水気を取り手早く畳んであった純白の制服に身を包む。時間も時間であり余り遅い時間に訪れるのも失礼な為、失礼にならない程度に髪をセットするだけし私は更衣室を後にした。早る心を抑え、駆け出してしまうようなその衝動を抑え彼の英国の淑女として恥じぬよう努めながら私は天羽 時雨の部屋である『0000』の扉の前に辿り着く。

「……ですわね」

意を決して扉をノックするとすぐに天羽 時雨は扉を開けてくれた。

「はい、どなたですか……って何の用ですかオルコットさん？」

「あ、はい。その、時雨さんにお話がありまして……」



「良いけど……中に入る？大したおもてなしはできないと思うけど……」

扉を半開きにし顔を出してくれた天羽 時雨の顔に嫌悪感などは無い、どちらかと言うと思わぬ訪問者に驚いたと言った顔だった。それでも丁寧な訪問者である私を招き入れようとする彼の言葉を丁寧に断りつつ私は用件を伝えるべく口を開いた。

「誘っていただけのありがたいですが時雨さんにお手間をかけさせる訳にはいきませんので……それにお詫びをしたくて……入学してすぐ私は時雨さんに失礼な事を言ってしまったので……」

「気にしないで良いよ、千冬さんが仲裁してくれたし過ぎた事だしね」「それでも私が不快にさせるような言動をしまった事は事実ですし私の自己満足なのかも知れませんが謝罪させて下さい……これまでのご無礼の数々について謝罪します。申し訳ありませんでした」

「頭を上げて欲しい、さっき言った通り俺は別に気にしてないから。でも、謝るなら一夏の方にもね」

「分かりましたわ、この後参ります。……あと差し出しがましいかも致しませんができればこれからは『セシリア』と気軽に呼んで下さい、私も時雨さんと呼ばせて頂きますから……」

「良いよ、よろしく『セシリア』さん」

トクン……

「は、はい！よろしくお願い致しますわ時雨さん！」

名前を呼ばれたその瞬間心臓が高鳴った、血流が勢い良く全身を巡りそして特に顔が赤くなつたのを感じる。羞恥ではない、怒りでもない、生まれて初めて感じたその感覚に私は驚きながらもすぐにその感覚の名を理解する事ができた。

「で、ではこれにて、し、失礼致しましたわっ！」

「おやすみ、セシリアさん」

慣れない感覚に戸惑い焦った私は思わずその会話を終わらせてしまった。閉じられた扉に背を預け珍しく誰もいない寮の廊下の真ん中で私はポツリと呟く。

多分この胸に生まれたもどかしくも暖かく優しい感情の名はきつ

と……

「初恋……なのででしょうか？」

人の負の側面を見続けいつしか家族と言える人しか信用出来なくなっていた筈の私がいっつの間にか他人を信用どころかそれよりもっと上の事を出来るようになっていたのです。そう、

私、セシリア・オルコットは初めて人に恋をしました

## 第2章 クラス対抗戦編

### 1年1組クラス代表決定、あと序でに中国娘来日

〈34〉

模擬戦翌日の朝のS H Rにて、  
シヨートホームルーム

「では、1年1組の代表は織斑 一夏君に決定です。あ、『1』繋がり  
で良い感じですね!」

教卓に立った山田先生の発表にクラスの女子一同は拍手喝采万歳  
三唱を挙げるが、その対となるように当の一夏は「……why?」と  
口には出していないがその顔そのものでそう言い表している。因み  
に時雨とオルコットはと言うとその2通りには当てはまらずに……、  
「まあ、そうなるよね」

「ですわね」

と納得顔をしている、だが理解出来ず納得も出来ない一夏は拳  
手し山田先生へとその理由を質問した。

「山田先生、質問です。如何してISでの模擬戦は兎も角他の試合で  
は俺に勝ってる時雨とオルコットは如何なってるんですか?あと何  
でいつの間にか俺がクラス代表になってるんでしょうか……?」

「あ、それはですね」

そう言うと山田先生はチラッと時雨とオルコットの方を見る、それ  
に気付いたのか2人はその話の後を継いで口を開いた。

「それは私が辞退し一夏さんを推薦した事と」

「俺が諸事情によりクラス委員にはなれなくなったからだな」

「えっ、辞退?」

「ええ、仮にでも国家の代表の候補生であり専用機を貸し与えられた  
身でありながら練習機の、それもIS搭乗時間の短い男性搭乗者に負  
けたとあればそれは明らかに私が如何に訓練不足かつ機体を完全に  
乗りこなせていなかったであるかが一目瞭然です。そんな私がクラ

スの顔であるクラス委員になる訳にはいきませんがそれに初日に私は皆さんに大変失礼な事を言ってしまった。この場を借りて皆さんに先日のご無礼を謝罪します、申し訳ありませんでした」

そう言つてオルコットはぺこりと腰を綺麗に90度まで曲げ心からの謝罪を伝える。この時彼女から漂つていたのは今までのような『高貴な気品(笑)』ではなく真正銘元々の彼女が持つていたであろう『高貴な気品』のそのものであり、それ故にそこに込められた彼女の誠意を感じ取る事の出来たクラスの生徒達は初日の彼女の事について水に流す事に決めた。

「悪いな一夏、模擬戦の後所属元から連絡が来たんだ。それに俺の所属は秘匿されてるけどやらないといけない事は地味に山積みでクラス委員としての仕事をやる気がしなかったんだ。ごめんね」

「それなら……仕方ないか、時雨が悪い訳じゃないし……」

そして時雨の辞退した理由もまたどうのしようもない事だった為に一夏は怒るにも怒れない。それ故に、

「……分かりました。謹んでクラス代表、委員の仕事を受けさせて貰う。その代わり時雨や皆さんも色んなところで至らない所があると思うから手を貸してくれないか」

「勿論だよ」

「ええ、喜んでお手をお貸ししますわ」

一夏はクラス委員としてクラスの代表になる事を承諾し、時雨達にその補助補佐を頼んだ事でクラスの喧騒は最高潮となり再び拍手喝采万歳三唱が巻き起こる。

「時雨君とセシリアは分かつてるね！」

「まあ正直一夏君でも時雨君でもどっちでも美味しかったんだけどね！」

「でもそうだよねー、せっかく男子が一緒のクラスなんだから全力で持ち上げないと損だよねー」

「私達は男子と一緒に訓練できるって言う貴重な経験を積める。なんか滅茶苦茶凄かった時雨君に手取り足取り教えて貰えかもしれない。他のクラスの子に同じクラスだからこそ知れるあんな事やこんな事

とかの情報が売れてガツポガツポ儲かれる。一石二鳥どころか一石三鳥だネ！是非もないよネ！」

「え、私はしぐしぐが良かったなあ」

「ちよつと、残念かな？でも一夏も頑張つてね」

「ふむ、一夏頑張れよ。私も剣道や剣術についてなら全力で手伝うぞ」  
「頑張つて一夏！応援してるよ！」

とことん不純な理由が漏れ出す女性陣（一部ではない）と純粹に残念がったり応援したりしてくれている女性陣（ほんの一握りしかないな  
い……）に涙しそうになった（色んな意味で）2人は多分悪くない。

と言うか仲クラスメイトの情報間を売るなよ……それにその売られた情報って何に使われんだよ……

ふと、そう思つた時雨と一夏だったが敢えて口に出して彼女達に問い詰める事は出来なかつた……世の中には知らない方が良い事や幸せな事も沢山あるのだ。多分これもそのひとつである。

「そうでしたわ、確か時雨さんと一夏さんは放課後にISの訓練を行つていて聞きましたわ。良ければ私も一緒に頂きたいのです。時雨さんに負けましたが腐つても代表候補生ですし専用機も持っていますから訓練では良い刺激にもなると思いますし、私も初心に帰つて一から本当に得たかった強さを求めて取り組めクラス代表戦に向けて良い補佐にもなると思うのですが……」

そこでポンつと思ひ出したかのようにセシリアは手鎚を打つと先程要請されたばかりの補佐について自分に出来る事があると2人に申し出る。その申し出を受けた時雨と一夏は最初から訓練を手伝つて貰っている栞と箒に向け意見を求める視線を送つた。それに彼女達は、

「ありがたい申し出だから受けた方が良いと思うよ？私達はオルコツトさんと違つて専用機は持つてないしISランクも【A】だから実際に動かす訓練になったら私よりオルコツトさんとした方がよっぽど為になるだろうし」

「うむ……、余り認めたくはない事実ではあるが栞の言うその通りであるし私も栞もISランクは【B】……、実力も上とあれば普通なら

ば頼み込んででも教えを請うべきな所を相手が教えてくれると言うならばその好意には甘えるべきだろう……特に一夏はな」

と2人共受けるべきだと返してきたので時雨達は彼女の申し出を受ける事にした。

なお先程の会話にあつた『ISランク』という物だが、これはランクが高いと言っても別にこれは実戦における戦闘力を示すものではない。ごく平均的なISコアとの普遍的な搭乗者と同調率シンクロを示したものであり、これの意味するところは搭乗者がISコアとどの程度深く接続できその機体をどの程度思考した思いの儘に動かせるかどうかをランク化した物。もっと分かりやすく言えば相性を階級で大雑把に表したものであり、実際は搭載されたコアの個々によりそのランクは変動し極端な例ではものによつてはある機体ではランクが【C】なのにそれとは別のとある1機の機体では【A】ランクを叩き出した子も居たらしい。束の資料にも実例としてそう書いてあつたし、その逆もまた然りとも書かれていた。……そして幾つか興味深い、搭乗者とコアの相互認識によるランク変動についても追記されていた。

「そう言えば時雨のISランクって幾らだつた？俺【B】なんだけど」  
「……………【B】だよ」

しかしふとISランクの話聞き、同じ世界でも数少ない男性搭乗者である時雨のランクが気になつたのか一夏は尋ねる。とはいえ時雨はまさか馬鹿正直に本<sup>EXIS</sup>当の事を言う訳にはいかないので取り敢えずで一夏達と同じだと答える。

時雨達がそんな話をしていた傍らに、既に大きかつた女子達の喧騒はその話を聞いた事より更に大きくなっていくが、そこに1時限目の授業担当の千冬が教科書と出席簿片手に教室に入って来、何やら廊下にまで響いていた騒がしい自分のクラスの様子に若干お冠なのか少々大きな声で一喝、注意した。

「騒々しいぞお前達。もう始業間近だ、さっさと準備して席に着かんか！……………では1時限目の授業を始める」

なお、その一喝の後僅か5秒で全員が着席して見せるという驚異の動きをしてみせた1年1組の生徒達であつた。

「……………ところで山田先生、どうして貴女まで着席を？」  
「えっ、その……………反射で……………」  
「……………」



千葉県成田市 成田国際空港国際線 到着口

「日本よー！アタシは帰って来たわ！」

キャリーバック片手に中国直通の国際線から降り立った1人の少女が国賓級VIP専用の空港ラウンジにて仁王立ちしつつ叫んでいた。なおこれはVIP専用であり他の一般人が居ないからこそ出来る事であり、誰ひとり居ないからこそ思いっきり彼女がそんな事を叫べている理由である。

「って誰も居ないんだけど!？」

そう、誰ひとり居ない。すなわち迎えの大使館員どころか人っ子ひとり居ないのだ。肩出しの白い改造型IS学園の制服に身を包んだ彼女、中国国家代表候補生でありしかも専用機まで持っている真正正銘のVIPでありこのラウンジを使えるレベルの超VIPである筈なのだが何故かそんな彼女の迎えが1人も居なかったのだ。

「ん？携帯に連絡？しかも本国内層部から？」

と驚いていているといつの間にか  
国から支給され所持していた方の携帯端末に1通の通信が届いている事に気付いた。

「えーと、何々……………ふんふん……………ほうほう……………えつと、これ態々めんどくさくてしかも長ったらしく書いてあるけど簡潔に要約したら『担当官の手違いで出迎えやIS学園への手配が行き届いてないから自力で向かえ。あと移動費は自分持ちな(意識)』って事よね!？ H U ☆ Z A ☆ K E ☆ N ☆ N A !! (ここからIS学園まで何kmあると思ってるのよあの上官め!!)」

そしてそれを読んでみるとまさかの手配ミスで色々できてないけど一応もと地元だろ？頑張れ、責任取らないけどなど書いてあり思わず彼女は何言ってるんだこのクソ野郎、ゴミ屑、ハゲ、馬鹿、デブと日頃の鬱憤も込めて盛大に罵る。中華4000年の歴史(笑)を誇る国なのに役人がコレだよこれぞ中国クオリティ(笑)ってアタシは誰に何言ってるのかしら……？

「ああ、もうっ！所持金も足りるか分からないのに如何すればいいのよ!!」

「あら？貴女もしかして鈴ちゃん？」

「えっ？どうしてアタシの名前を？」

現在財布の中身の残高は両替したばかりで2万円程度、IS学園までのタクシー代やりニアール代を考えれば絶対に足りないが日頃そんなに現金を持ち歩かず必要になつたら引き落とすタイプだった為に銀行での手続きを済ませていない(担当官が事前にやっつくべき仕事だが多分あの通信からしてまだっぽい)今は引き落とせずどうしようもない。

来日そうそうの八方塞がりになろうと頭を抱えていると背後から名前を呼ばれた。振り返るとそこには少し前に何処かで会った事が有る様な気がするサングラスを掛け、護衛と思われる黒スーツを着た女性を連れだ青色のスーツの女性が立っていた。

「あ、やっぱり鈴ちゃんね。久しぶり鈴ちゃん、大体1年ぶりね」

「え、えっと……貴女は……」

「あく、分からないか。ウチに遊びに来ても私はあんまり家に居なかつたし居ても鈴ちゃんのお目当ては一夏君だったからね、私の事は憶えてないか」

「えっ、一夏の事知ってるの☒と言うかアタシも会った事ある!??でも一夏の家族でこんな場所で会うような人なんて千冬さんくらいしか……い……な……い……え、つまさか……」

サングラスを掛けた女性の話に最初は付いて行けていなかった彼女だが漸くその女性の正体に辿り着き目を見開く。確か昔一夏と葉の家に遊びに行った時や授業参観の時に何度か見た事がある、そして



軍に所属しISやVFを扱う者ならば必ずや1度は目にする資料に写真で載る人物の1人である。

「私よ、私。サングラスを取れば分かるかしら？」

サングラスが外されその下から出てきた素顔を見て彼女は1発で彼女が何者なのかを把握し、そして唾然とする。彼女は……

「こ、琴乃博士？」

「そうよ鈴ちゃん、元気にしてた？」

世紀の大発明と言われる『宇宙空間用マルチフォーム・スーツインフイニット・ストラトス』とその対となる翼、『可変戦闘機バルキリー・ファイター』を開発した2人の20世紀最高と謳われる発明者であるISの生みの親 篠ノ之 束とその双壁を成すVFの生みの親 若宮 琴乃。そんな女性しかも彼女が態々国家代表候補生になって日本に帰って来た理由である一夏の保護者である若宮 琴乃が目の前にいたのだから。

「困ってるなら相談してね？一夏君と栞の友達なんだから出来る限り手を貸すわよ？」

ドイツ帰りの若宮琴乃はそう言って彼女に微笑んだのだった。

## 祝 クラス代表就任パーティー

〈35〉

「という事で、1年1組クラス委員兼代表に織斑一夏が就任すると言  
う奇跡の1繋がりを祝して！」

「「カンパニー！」」

ぱんぱかぱーん、と幾つものクラツカーが撃ち鳴ら<sup>乱</sup>され紙吹雪と  
色々な色の紙テープが1年生寮の食堂の空に舞い上がる。と同時に  
グラス……ではなくビール……ではなくジュースの入った紙コップ  
が打ち合わされた。

「え、ええ……ってか1組以外の生徒も居るよね？」

「いやいやいや……なんで俺も？一夏だけで良いんじゃないの？」

で、【織斑一夏クラス代表就任パーティー】と書かれた横断幕の架け  
られたその真下でクラツカーの紙テープと紙吹雪を頭から被ってい  
るのはめでたく1年1組のクラス代表に就任した織斑一夏と言わ  
れた通り料理を作るだけ作って持って来たら何故か一夏の隣まで引  
き摺り出されていた天羽 時雨だった。

「いやはや、これでクラス対抗戦も盛り上がるね♪」

「そーだね♪これで私達1組は安泰ですなあ！」

「ぐふふふつ、お主も悪よのう♪」

「いはいえ貴女程では……ってなんで越後屋と悪代官？」

「ラツキーだったよねー。同じクラスになれて」

「うんうん、だよねー」

「あははは……、2人も大変だねー」

「まあ……なんだ、頑張れ。応援している、あと最後におめでとう」

「おめでとー」

そんな2人をお構いなくと言った感じにワイワイ騒いでいる1年  
1組女子生徒（一部を除く）+ 他のクラスの女子 α と何処か同情と哀れむ様な視線  
を注ぐ2人がジュースの入ったカップ片手に時雨の作って来た

料理を摘んでいた。そしてそんな視線を向けるのはその2人の生徒だけでなく、

「大変そうですね、織斑君も天羽君も」

「まあ……そうだな」

「やっぱり心配ですか？普通なら誘われても来ませんけど今日は仕事も急いで終わらせたみたいですし」

「そうだが……まあ少し明日は用事が有ってな、それと只で酒が飲めるのなら……な」

「先輩、もう放課後ですしプライベートでも大丈夫なのは？」

「……君も言える様になったな」

「長い付き合いですから」

壁際で缶ビールを傾ける千冬と同じく壁際で葡萄ジュースの入ったコップを手にして苦笑している山田先生は共に皆んなの前で戸惑っている2人に視線を向けていた。尚、生徒に酒類を販売した購買の売店員は後でシめようと思った千冬だった。

「と、取り敢えず凄い事になったな……」

「それには同感、全く……料理作って来てくれて言われたから作って来たけどなんで俺まで祭り上げられたんだろ？訳分かんないよ、ホント……」

「へー……お、滅茶苦茶美味しいじゃねえか。このシチューとトマト煮込み、後でレシピ教えてくれ。で誰に頼まれたんだ？」

「トマト煮込みはトマト煮込みだけど正しくはラタトゥイユだけだね、良いよ。相川さん、あの実習の後直ぐの丁度君がセシリア達との特訓中に単零落一仕様白夜を発現させた頃に」

「あー……あの時にか、あれは済まなかった。何回も言うがワザとじゃなかったんだよ」

「あら？なんのお話をなされているのですか？時雨さんと一夏さん？」

と、頭にパーティ用の紙製カラフル三角帽子を頭に乘せた一夏と紙テープを頭に被ったまま爽康美茶の入ったカップを片手に時雨の料理を立ち食いしながら話していた2人の間に紅茶の入ったカップ片

手に彼女が持ち込んだクッキーの乗ったお皿を持ったセシリアがやって来ていた。

「5時限目の話、あの『シューティング・スター流れ星事件』の話だよ」

「おまつ、なんだよその名前……」

「もう専らの噂だよ、放課後には他のクラスや学年でも流れてたらしいよ。この命名も確か一個上の学年の先輩が付けたらしいよ。因みに情報源はのほほんさん」

「マジカヨ……」

「あれは……済みませんフォローの言葉が見つかりませんわ」

「ぐふっ!?」

「あれはねえ……初心者でも限度があると思うよ?」

「ぐふっ☒」

2人のフォローじゃ無い一言に大破した一夏はガツクリと肩を落とす。「流石にあれはフォロー出来無いよね(ですわ)」とボヤいた2人が揃って思い浮かべていたのは今からつい数時間前、時雨に至ってはついさつきまで関わっていた事の原因についてだった。



### 5時限目、第3アリーナ

「よし、全員揃ったな?ではこれより5・6時限目のIS実習授業を始め」

入学して初の実習授業に浮かれ気味だったクラスの大半分だったがチャイムが鳴ってすぐ現れた白色のジャージを着た千冬と紺色のジャージを着た山田先生の号令に3列程に分かれて並んでいた。

「本で行う予定の授業内容はISによる基本的な飛行操縦を実践して貰う事だ。でだ……ここは専用機持ちである織斑、天羽、オルコット。一番手だ、今日は見本になるよう試しに飛ん貰う」

「分かりました」

「了解です」

「分かりましたわ」

「良い返事だ。よし3人共先ずはISを待機形態から通常形態に展開しろ」

名指しで呼ばれた時雨ら3人はちよいちよいとこつちに来るように出された手のサインに習いクラスの前に並ぶと千冬の指示を受けそれぞれが待機形態の状態からISを展開、その身に纏う。その出来は、

「ふむ……流石オルコット、0.6秒で全身展開完了か。その調子だ、お前ならあと0.1秒は短縮出来るだろう」

「はいっ、精進させていただきますー！」

「フツ、期待している。で織斑だが……まだ出来ないのか？」

「むむむむ……済みません織斑先生」

「ふむ……まあ初心者であるから仕方あるまい。恐らくイメージが足りていないのだろう、もう少しハッキリとイメージしてみると良い。それで無理なら声を出して呼んでみる」

「むむむ……おっ、出来た！」

「よし、その調子だ。次はより1秒でも早く展開出来るよう慣れておけ。最後に天羽だが……」

国家代表候補生であり1番の熟練者であるセシリアはイヤークラスを、若葉マークを付けるよりも遥かに初心者である一夏はガントレットをISに無事展開させそれを見た千冬は満足そうに頷くと今度は時雨の方を見る。その時雨はと言うと、

「……早いな」

「あ、あははは……」

取り敢えず乗る分には問題無い程度まで修復された打鉄改を0.4秒で展開していた。流石ISランク【EX-S】、千冬には及ばないが恐らくそれは時雨の機体が本物の専用機では無いからだろう。恐らく専用機であれば同ランクである千冬と同じ0.1秒で展開出来たはずだ。しかし……

「お願いだから自重してくれ……」

初っ端から国家代表候補生のタイムを超えるのだけはやめて欲しかった千冬だった。

「……まあ良い、時雨には特に言う事はない……無いさ、無いんだ。では飛べ、飛び上がって10分程は自由に飛んで貰っても構わないが指定ポイントには既に山田先生が送っている筈だ。……あ、また胃が痛くなつて来た。胃薬まだ残ってただろうか？」

一瞬、何処か遠い所に目が向いていた千冬は少し頭を左右に振る事で意識を現実に戻し飛行発進指示を出す。尚、ちよつとだけさり気なくお腹の胃の辺りをさすってそんな事をボヤいていたのに気付いたのは隣に立っていた山田先生だけだった。

「行きますわ」

「よつと」

「お、おう」

まずセシリアのブルー・ティアーズが無音で急上昇し、それに続く形で時雨も若干踏み込むようにして発進。最後に遅れて一夏が飛び上がるがそのスピードは時雨の3分の2程度の速さしかない。

『何をやっている。いくら初心者とはいえスペースックシート上、出力では高機動特化型である白式の方が2機より遙かに上だぞ』

彼方へふらふら、此方へふらふらと頼り無き気に飛ぶ一夏に向けIスコアを経由した通信により千冬のお叱りの言葉が飛んで来る。代表候補生熟練者であり専用機であるセシリアに付いて行けとは流石に言わな  
いが改造されているとは言え量産機である時雨と同じ位には飛んで  
欲しい所であつたのだろう。

「自分の前方に角錐を展開させるイメージってどんなイメージなんだ？」

「まあ教科書通りじゃ馴染みが薄いからイメージし難いかも知れないね。そうだな……自分が鳥になったり紙飛行機を飛ばしたりする時をイメージするのも良いかも知れない」

「へえー」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。時雨さんの言った通り丸々教本通りではなく自分がやりやすい方法でやった方が上手くいきますわよっ。」

「そう言われてもな……、大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなん

だよ。そもそもどうやって浮いてるんだ、コレ？」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉、とても難しい物理の話になりますから」「よし、分かった。説明はしてくれなくていい」

「それは残念ですわ」

セシリアの有難い助言の後飛び出した提案を一夏は即行で遠慮する。流石にそんな普通の大学生でも習わないような難しい物理の話なんて絶対に理解出来ずに寝てしまいそうだからと遠慮した一夏だったが、そう言われた彼女は彼女自身も遠慮されると分かって言っていたようでお淑やかにクスクスと笑っていた。

「って事はセシリアはそういう感じに認識してるから飛べるのか？」

「いいえ、そういう訳ではなくて私は具体的には鳥や蝶をイメージしておりますわ。あの飛行挙動は戦闘行動バトル・スタンスとしても応用出来ますので」

「ほー、んじゃ時雨は？」

「……YF―0かな」

「YF―0か（ですか）……」

セシリアの答えになるほどと頷くと一夏は今度は時雨は如何なのだろうかと聞いた。その答え、YF―0と言う7年前日本を襲った超大規模テロを阻止しこの世にISという存在を世界に知らしめた『白騎士』と対となる『白戦乙女』の名に、一夏とセシリアはIS乗りとして何を言えいいのか言葉に詰まる。

そんな中でタイミング良く次の指示を伝えるべく山田先生が回線を開いた事によってその話は有耶無耶になった。

『指定ポイントに到達したみたいですね、ではこれから急降下と完全停止をして貰います。今回の目標は地表から15cm、許容誤差±10cmです』

「分かりましたわ。では時雨さん一夏さん、お先に失礼致しますわ」

そしてその指示を受け1番のベテランであるセシリアがまず降下を開始する。ハイパーセンサーで確認したが無事彼女は目標降下位置をクリア出来たらしい。まるで教科書に載せたい位綺麗な降下だった。

「へー、上手いなあ」

「そりゃまあ、この中で1番のベテランだし国家代表候補生だからね。これくらい出来ないど国の代表にはなれないって事じゃないかな？つと、次は俺らしい。行ってくる」

「おう、行つてらっしゃい」

そんな事を一夏と話していると次に降下してこいという指示が飛んで来たので時雨は2番手として降下を開始する。スラスタ停止、重力の引かれるままに頭から降下……見方によれば墜落し地上を指す。非固定武装の盾を翼代わりに使い姿勢を制御し真つ直ぐに降下して行つた。

300……200……100……50……40……今！

高度40を超えた時点で盾を地面エアプレーキとしてに水平となるよう展開、それと同時に反転し本体のスラスタを全開にして減速する。ただバツフ・イナーシャル・キャンセラー  
P I Cで抑えられているものの多少キツイGが身体に負担として掛かるがバルキリーに乗れば当たり前の様に掛かるので慣れている。

そして降下していた機体は無事地面から少し上の位置で完全に静止する事に成功した。

「こんなものかな？」

「ふむ、地表まで残り10cmか。合格だな、ただ自由落下とはいえギリギリまで加速し過ぎだ。見本となる様にしろと言っただろう」

「済みません……」

無事目標を達していた点は良かったが見本としてはOKとは言えない点に少し嘆息した千冬であったが、そこにハイパーセンサーから1つのアラートが鳴り響く。

Emergency  
【警告、急速にISが接近中】

「お？つて不味!!？」

それを認識した時雨は慌てて非固定武装の盾を稼動、更に量子化さ  
れていた前は使わなかった携行用のシールドを取り出し構えた。それを見たセシリアも同じくビットを操作し無いよりはマシ程度ではあるが盾とする。



そしてその直後そこから少し離れた場所に白いナニカが墜落し、少なくとも土砂が巻き上がりできたそこそこ大きなクレーターからはモクモクと土煙が上がった。勿論そのクレーターのど真ん中に居たのは……、

「……馬鹿者、誰が『地面に突き刺され』と言った。これなら時雨の方がまだマシだったな……」

「すつ、済みまない……本当に済みまない」

「いっちーがすまないさんなってる」

「……布仏、その辺りにしておけ。残念な結果なのは間違いないが茶化すものではないだろう。それと済みまないな、天羽、オルコット。助かった」

「どう致しまして」

「当たり前的事をしただけですわ」

そこそこ離れた位置に一夏は墜落したとはいえ一部の土や石は生身で居た千冬や生徒達の方にも飛んで来ていた。それに当たれば生身ならば大怪我を負ってもおかしくはなかった為にそれに気付いた2人は間に入って防御したのだ。

「しぐしぐにセツシーありがと」

「あ、ありがとね！時雨君！セシリアさん！」

「済まないな2人共、全く……先が思いやられるぞ一夏」

「ありがとだね2人共……あのクレーターどうするんだろ？」

そんな2人に守られていたクラスの生徒達は礼を言う。2人はそれに「どう致しまして」と返すと次は地面に突き刺さった一夏を引っこ抜く作業へと取り掛かり、それはすぐに済んだ。

「時雨にセシリア、済まない、本当に済まない」

「まあ……停止しようと思った形跡はあるし怪我人はいなかったから今回は置いとくよ」

「それに謝るだけでは駄目でしてよ」

「あ、ああ、ありがと2人共」

「どう致しまして（ですわ）」

「はあ……言いたい事は時雨達に言われてしまったから今回は省こ

う。では次だが……と思ったより時間が無いな。休み時間を挟みこの後の6限目の実習にて皆にISに実際に搭乗して貰う事にしよう。また本日以降の実習では武装の展開についてから始める。織斑、お前はアリーナに自分が作ったクレーターを次の授業中、放課後までに片付けておくように。以上だ、これから休み時間とする」

そこでチャイムが鳴る。

因みにこの後継続して行われた6時限目の授業中は一夏だけでなく同じ専用機持ちのよしみとして時雨とセシリアがトンボ掛けを手伝った(ただし千冬の指示で時雨とセシリアはISの使用が許可され一夏は生身でやった)のは余談である。



「……という感じだったよね」

「ええ、そうですね。思いの外巻き上がった土砂が多くて均すのが大変でしたもの」

「いやはや……本当に済まなかった。お詫びに今度何か奢るよ」

「んじや貸しひとつだね」

「私もそういう風にして頂きますわ」

「これは……高い借りになっちまったな……」

そんな感じで3人で談笑をしていると、そこで新聞部を名乗るリボンの色が違う女子生徒が1年生寮食堂へ入って来ていた。

「はいはい新聞部です。話題の新生3人組に特別インタビューをしに来ました〜!」

その彼女、恐らく3人の先輩は固まっていた3人の姿を確認すると笑顔でこちらに向かってきた。

「2年の黛まゆずみ 薫子かおるこです。よろしくね、因みに新聞部副部長やってます!はいこれ名刺」

「あ、どうも」

時雨は黛先輩から手渡された名刺を受け取り名前を確認する。なんで名刺?今時の子は進んでるなあ……(なんか違う)

時雨がそんな事を考えている間に黛先輩がボイスレコーダーを一夏に向けていた。

「ではまずは織斑くんから！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「えーと、まあ……頑張ります」

「えー、もつと良い……例えば「オレに触ったら火傷するぜ子猫ちゃん」的なカツコイイ感じのコメント頂戴よー」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

コメントに困ったのか一夏は無駄にキリツとした顔でキメるがそんなに受けなかった。というかそのコメントはカツコイイのかどうなのか……時雨は分からなかった。

「じゃあ適当に捏造するとして2人目の男性操縦者の天羽くん、何か一言お願いします！」

「うーん、俺も頑張ります程度しか言えないんだけど……」

「えー、今月の学校新聞の見出し全部『銀河の妖精 シェリル・ノーム 近日来日!!?』ばっかりなんだってば。……まーいつか、取り敢えず天羽くんの分も良い感じに捏造しちゃえば」

「お願いします」

「良いつて事よ少年！って事で次はセシリアさんに……はいいや、なんか長くなりそうだし」

「私の扱い酷くありません☒」

で次の矛先は時雨に向くが時雨も時雨でコメントに困ったので適当に繕ってもらえるよう頼むとOKが出たのでそのままお願いする、最後にセシリアの方を見た先輩だったが何かを感じ取ったのかインタビューを取り止めしかも彼女のツツコミすらもスルーしてしまった。

「んじやまー明日の一面用に写真欲しいからさー、専用機持ちの3人で並んでくれない？」

「あの、差し出しがましいかも知れませんが、後で多めに現像した写真を頂けませんか？」

「んー？いーよー。被写体になって貰うんだし何枚かは試しに現像を

するからねー、んじや並んで並んで」

「ありがとうございますございますわ、ではクラス代表である一夏さんを中心に並びましょう」

「おう」

「了解」

右端に時雨、中央に一夏、左端にセシリアが並ぶ。先輩は良い感じに撮れるように立ち位置を調整していたが途中何かに気付いたのか少し口角を上げると2歩程背後に下がった。

「それじゃあ撮るよー。2700×95÷34―1は〜？」

「え？」

「フツ？」

「7, 543. 117647058824ですわ」

「お、正解。流石スナイパーだね。この手の計算はお手の物かな？」

余りの理不尽過ぎるややっこしい問題に驚いた一夏と時雨を他所に一瞬で答えを導いたセシリアの答えと共にパシヤリとカメラのシャッターが切られる。

「ええ、スナイパーならもつと複雑な計算を瞬時にしなくては務まらないので……つてどうして皆さんが写ってるんですの!?？」

ちよつと自信満々にドヤつとしながら解説した彼女だったが案の定3人の周りに1組の全員が撮影の瞬間に集結していた事に驚いた。その一方だから先輩があの時ニヤツとしたのかと合点がいった時雨はなるほどと頷いていたが未だよく理解できていなかった一夏はただ頭に疑問符を浮かべ首を傾げるばかりである。

「セシリアだけずるいよ」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねっ、そうだよね」

「うぐぐぐぐ……」

そしてセシリアは結局皆んなに上手く言葉で丸め込まれてしまい、それに対して何も言い返せず黙ってしまった。

「んじやありがとね、1年生一同諸君！明日の学校新聞は楽しみにしておくように！あとセシリアさんは明日の朝現像した写真を送るか

らね。じゃっ!!?」

「あ、お疲れ様でした」

「お願いしますわ」

颯爽と食堂を後にする先輩の背を見送っているとつい先程まで壁際で缶ビール10本、シチューお代わり3杯、ラタトウユ2杯を黙々と食べていた千冬が手を鳴らし全員にそろそろお開きにするように呼び掛けた。

「よし、お前達。そろそろ時計は20:00を回る頃だ、入浴、着替えを考慮に入れば22:00の就寝時刻消灯に間に合わせるにはそろそろ終わりしろ。明日も学校があるから寝坊する事は許さんからな」

「はっ!!」

「宜しい、では2時間後確認に来るまでに各自自分の部屋居るように解散!!?」

こうして「織斑一夏クラス代表就任パーティー」と共にこの1日もまた終わりを迎えたのであった。



同時刻、太平洋上の何処かにある秘密の研究所ラボ

「さてと……、それじゃあ最後の調整を始めようか」

サラサラとした紫水晶アメジストの様な美しさの髪の上にメカ兎耳Ver.

6. 5を被り、珍しくエプロンドレスではなく白衣の下にお気に入りの蒼いワンピースを着た束は少し緊張した面持ちでとある純白のISの最後の調整に取り掛かっていた。

「くーちゃん」

「はい、束様。どうぞ」

束に呼ばれたクローエは机の上にその手に持っていた束特製の特殊合金で加工された鈍色のアタッシュケースを置き手早く右6桁、左6桁の計12桁のロックを解除、中に厳重に収められていた光の当たり加減によれば血赤色の色にも紫水晶紫色にも見える直径16cm程度の結晶体、その数3つをそのまま束に向ける。

「これが日本、富士山付近の地中深くで発見された鉱脈から発掘された現在この世に存在する中でも最も大きく、かつ更に最高純度であると言われる『超時空共振水晶体』の原石、これからの研磨によりありとあらゆる可能性を生むその在り方から付けられたその別名は『賢者の石』……これを手に入れるのに40億\$も使う事になったのは少し驚きだったよ」

「想定最低価格は200億\$、2000億円主な競争相手は新星インダストリー社とゼネラル・ギヤラクシー社の2社でしたがなんとか競り落としに成功しました。……ただ最後の方はおそらく我々の正体に薄っすらと気付き敢えて手を引いたと言った感覚がありました」

「まあ仕方ないよ、R. ラビット・イン・ワンダーランド i. W社は企業としては元々バルキリーの部品や設計図の販売してたけど機体の研究開発は全くと言って良い程手を出してなかったからね。そんな中での急なIS機体開発事業参入の発表と今回のフォールド・クオーツの競売への参加、その上企業実態も調べれば実績が無い訳じゃないけど殆どタミ<sub>隠れ蓑でありただの中継点</sub>ー企業に近い存在である事なんて分かる人は分かる。で、そんな事をこの世界でも実行しそうかつそれを間違いなく実行できる人物と言えば私、篠ノ之束しか居ないからね」

「あと名前からして分かるでしょ？」と束は言いながら手にしたコア・クリスタル フォールド・クオーツ 雪風のコアと賢者の石をひとつの機材にセットする。

「ISコアとフォールド・クオーツとの融合……意識を持つ結晶<sub>心</sub>と意思<sub>意</sub>を伝える結晶<sub>石</sub>、その2つを1つにした時何が起きるのか……科学者として研究者として興味深いよ」

そう今から行われるのは世界初の試み、誰ひとりとして思い付かずそして実行に移す事等普通ならば『出来ない』程困難な実験。だがそれも世界最高の頭脳と設備、物資さえあれば『出来るかもしれない』というレベルまで手練り寄せる事の出来る実験である。

「……とはいえ、『この子』から提案されなきゃ試そうとなんて思わなかったけどね」

実験開始前の調整の為にデータをキーボードに高速で打ち込みつつ束はそう呟く。先程も言ったがあくまでこの実験は彼女の全ての

力を総動員してでも『出来るかもしれない』程度の成功率しか見込めないものだ。そんな危険な、数%の奇跡を願う様な実験に自らの生み出したIS達を我が子のように感じている彼女が進んで試そうなどとは思わない。だが願われてしまったのだ、彼女が愛するその子供ISのコアから。

「よし、準備完了。でもこれだけ手を尽くしても成功率は2%もない、失敗する可能性の方が高い実験だ……それでもするのかい？」

彼女はそのコア——コアNo. 〃、【雪風】の名を持つソレは束の間に肯定するかの様に1度だけ強く瞬いた。

「……分かった。私は母として貴女とその覚悟と意志を尊重するよ。

だから、願わくば貴女とその決断に祝福と幸福のあらん事を願うよ」

カタンツ

白く繊細な指先がエンターキーを押す、そしてそれにより送信された命令を受け機材が動き出す。

全ての結果が分かるのは夜が明けてからになりそうだった……。

## 中華娘、襲来

〈36〉

例のパーティー翌日、時雨達のインタビューの載った『女共よ、刮目せよ！これが世界で僅か2人しかいない男性搭乗者だ!!?』の大見出しで大量発行された学校新聞が掲示板だけでなく学校中にバラ撒かれいつになくざわついている中に、その話題の張本人の1人である時雨は特に気にする事もなく（気付いてないだけ）1年1組の教室へと登校して来ていた。

「あ、おはようしぐしぐ〜」

「お、お、お、おはよう……時雨」

「おはよう時雨君」

「おはようのほほんさん、箒さん、栞さん」

扉を開けると本音、箒、栞の3人に挨拶されたので時雨はいつも通り挨拶を返す。

「うおおおっ！危ねええっ！遅刻するところだったぜー！」

「おおっ、なんだ一夏か。寝坊したのか？」

「はあ、はあ……ふう。いや、栞が起こしてくれたからしてないが朝練してたら時間を忘れててな。お陰で朝飯は買い溜めてたカロリーメイト1箱だけだぜ」

「それで足りるの？午前中」

「…………無理です」

「だよねえ」

とそこにもう1人の男子、一夏が教室に駆け込んで来た。朝の

ショートホームルーム

S H Rまで残り5分程度だった為に時雨が寝坊か？と聞くが一夏曰く朝練に学園の敷地を走っていたら時間を忘れていて急いでシャワーを浴びて登校して来たらしい。遅刻はしなかったがその代償に犠牲になったまともな朝食に一夏はマジで涙目である。健康志向の健康男児からすれば朝食抜きとはお昼ご飯に綾波定食にも勝ると



も劣らない拷問の如き事なのだ。

「まくまく、そんな事もあるって。ほら、そんなイッチーにはこの飴玉を進呈してぞんじよく。この間懸賞で1年分の飴玉が当たったんだ」

そんな一夏に同情してか本音が一夏の肩をポンと叩きその手の上に余った袖の中からポトリと1つの飴を落とす。

……と言うかのほんさんそんな所に飴を入れてるの？あとその改造制服の袖の中身ってどんな構造になってるの？

「おお、ありがとうのほんさ……って粘土味ってなんだよ？」

「……粘土味？」

ふとそんな事を一瞬考えてしまっていた時雨だっただがそれにぱあつと顔を輝かせ喜んだ一夏はその手に落とされた飴を見て疑問符を浮かべる。粘土味なんて聞いた事も無いどマイナーどころか実在するのも怪しい味なんです。

「ん？あ、イッチー運が悪いね。いやあ懸賞に当たったのは当たったんだけど『変わり種』の詰め合わせだったらしくてねえ、食べ物も味が問題無さそうなのは殆ど全部私と最初にお裾分けした友達が取っちゃったから残ってるのの9割9分9厘は『チョット』ヤバそうな変わり種だからゴメンね」

「それ絶対当たり外れなら外れる事前提だったよな？？貰つていてなんだけどそれ絶対わざと外れを引かせる気だったよな」

「エー、ソナナ事ナイヨー、ホントダヨー（棒）」

「『棒読みだじゃねえか？』（ね……）（よ！）（ないか？）」

思いつき目線が泳ぎ返事が棒読みになった本音に4人の4人4色のツツコミが突き刺さる。が当の本人の方は「えへへへ」といつも通り……いや若干ぎこちない笑いを零すばかりである。

「ねえねえ、その5人組。転校生の噂聞いた？」

「いや……聞いてないよ」

「俺も知らないな」

そんな中、5人の後ろからいつもは本音の背後の席に座っているクラスメイトの鏡ナギが話し掛けて来た。先に教室に来ていた女子3

人はともかく少し前に来たばかりの時雨と遅刻しかけた一夏が知らないと答えると彼女はその噂の内容を2人に話す。

「今日隣の2組に転校生が来るらしいんだ。それに今朝偶然職員室前を通った子が言うにはその噂の転校生、中国の国家代表候補生らしいんだ」

「へー」

「で、取り敢えず我がクラスの誇る国家代表候補生セシリアさんにその子の特徴を伝えて何か情報を知らないかって聞いてみたんだけどそれがセシリアさんでも知らない子らしいの。だからここ最近、1年以内に代表候補生まで上り詰めた子なんじゃないかって言ってたよ」

「ほー」

鏡が説明してくれた情報に時雨と一夏は興味深気に相槌を打つ。初耳な上に近くクラス対抗戦もあるので有益に成りそうな情報は有難く、それに僅か朝からの数十分程でそこまで情報を集めて整理したクラスの女子諸君の能力に驚くがちよつと気になった事が1つ。教えて言わなかったが1つ聞きたいのはそのセシリアでも知らなかったその転校生が中国の国家代表候補生だと見抜いたその人に聞けば1発だったのではないかと思つた2人だった。

「ふむ、だがその代表候補生が専用機を持つているかで今後のトレーニングの難易度を変えねばならなくなるな」

「だね、幾ら一夏が単一仕様零落白夜を発現させたからって現段階で各クラス代表で専用機を持つてる人は私達が知つてるだけだったら4組の更識さんだけだからね……」

そしてそれとは別に箒と栞の方はクラス対抗戦に向けての予定変更を考え始めていた。流石に専用機持ちが増えればその分専用機持ちと当たる確率も高くなりここ1年で代表候補生入りを果たした傑物相手と一夏は戦う確率も高くなるので今のままのトレーニングでは確実に良い勝負どころか開幕同時に叩き落とされかねない。

「——その情報、古いよ」

その時何処からか栞の呟いた言葉を否定する言葉が響き同時に教室の前の方の扉がガラリと勢い良く開く、そこには今まで時雨が見て

きた中で1番改造の施され露出面積の広い改造制服を着たツインテールの女子生徒が不敵な笑みを浮かべ両腕を組んで何処ぞの英雄王A.U.Oの様に傲岸不遜……と言うよりも無理に背伸びしてカッコつけてる様な子が立っていた。

「2組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そんな彼女はビシツと人差し指を一夏達に向けるそう言い切る。それを見て聞いた一夏達はと言うと、

「鈴……？お前、鈴か？」

「む、変わらないな鈴」

「あ、久しぶり鈴。1年振りくらいだね」

一夏は少し驚いた様に、箒は懐かしむかの様に、栞は嬉しそうな反応を返していた。

「久しぶりね一夏、箒、栞。中国国家代表候補生ファン・リンイン風 鈴音、今日は貴方達1組に宣戦布告に来たってワケ」

そんな反応に満足したのか彼女、風 鈴音は自己紹介序でに時雨達1組に対して高らかに宣戦を布告する。

しかし……

「成る程……ってかなに格好付けてるんだ？あんまりお前にはソレ似合わないぞ？」

「んなっ……なんてこというのよ、アンタは!!？空気くらい読みなさいよ！」

しかし一夏の空気の読めない発言により場の雰囲気が一気にぐだぐだになってしまった。これには一夏との付き合いの長い栞と箒も、

「……ハア、一夏」

頭が痛そうに額に手を当ててため息を吐く程だった。

「ありやりや……」

「イツチー……そりやないよ」

「うん、今のは思ってもスルーすべきだと思うな。うん」

そして身近な人ですらそうなのだからクラスメイトであるナギ、本音、時雨もまたそりやないよと思わず呟いてしまっていた。

「時雨さん方、もう間もなくSHRも始まりますしそろそろ席に着いた方が宜しいのでは？あら？貴女は……成る程貴女が中国国家代表候補生の……」

そんなぐだくだした雰囲気フウの漂う7人の場所でもう間もなく先生がやって来る為にそろそろクラスの全員が自分の席に着き始めた中で、未だ立ったままの7人に注意に来たセシリアが朝から噂になっていた中国国家代表候補生の姿を見付ける。セシリアは少し考えた後、新たに現れた彼女に向け一礼した。

「お初にお目にかかりますわ、私英国国家代表候補生で専用機『ブルー・ティーズ』を操縦しておりますセシリア・オルコットですわ。隣のクラスの方とはいえ同じく国家代表候補生の好として互いに切磋琢磨し合い高め合う事が出来る事を願います」

「アタシは中国国家代表候補生、専用機『甲龍』シエンロン操縦者の凰 鈴音。代表候補生入りしたのは最近だから候補生としてのマナーとかその辺りはアナタを先輩として学ばせて貰うわね」

「よろしくお願ひ致しますわ」

「こちらこそ」

セシリアの国家代表候補生としての挨拶に凰もまた国家代表候補生としての挨拶を返し互いに手を握る。とても平穏かつ友好的な第一次接触到終える事が出来た2人だったが、初めてセシリアが代表候補生らしい事をしているのを見て内心少し驚いてしまった時雨達は多分悪くない。

「ところで凰さん」

「鈴で良いわ。その代わりにアタシも貴女の事をセシリアって呼ばせて貰うわ、堅苦しいのは余り得意じゃないし好きでもないから」

「ええ、構いませんよ。ですがまずもうすぐSHR開始時刻なのと候補生の先輩として1つ最重要事項を伝えておきます。このクラスの担任は織斑先生です」

「……………あ、それマジで」

「はい……………マジです」

そこでふと思ひ出したかのようにセシリアは先程鈴から頼まれた通

り早速先輩としてのアドバ<sup>忠</sup>イス、1組の担任が誰であるかを伝える。そしてそれを聞いた瞬間鈴の顔が大いに引き攣った。

「えっ、あ、えつと……」

ちらりと壁に掛けられた時計を見ると既に秒針は半分を過ぎ残り20秒も無い、周りを見渡してみれば先程まですぐそこに居た時雨や一夏達はいつの間にか自分の席に着いておりつい先程まで目の前に居た筈のセシリアに至っては既に回れ右して自分の席に優雅に滑り込んでいる。(滑り込んでいながら優雅さを失わないってどう言うことなのか分からないが)

それを確認した鈴は高速で残像を残すかの如く勢いで180度回転、流れる様な動きで扉を開けると1組の教室を飛び出していった。なお「次の10分休憩の時にまた来るから!」と言い残しておくのも忘れない。ただ不運な事に、

「む?お前は……嵐!転校初日に遅刻とは大層な重役出勤だな。あと廊下は走るな!」

「ひえええええー!申し訳ありませええーんっ!!?」

飛び出てすぐに千冬と御対面してしまったのか廊下から教室にまで届く大ききで彼女の悲鳴にも似た絶叫が響いた。

「全く……、いつになってもあの子は変わらん……。まあそれが羨ましくもある訳だが……コホン。では朝のSHRを始める」

そして直後再び教室の扉が開き今度は千冬と山田先生が時間通りにやって来た。そして2人はいつもの所定地、担任たる千冬は教卓に、副担任の山田先生は教壇の窓側の端の方に立ってそれからいつも通りに1度教室を見渡し欠席者が居ない事を確認してから口を開いた。

「ふむ、欠席及び遅刻無しだな。結構だ、ではまず本日の連絡事項だが特に無い。強いて言うなら私はこの後本土に出る予定があるので今日の授業は山田先生を中心に行つて貰う。よつて時間割に変更は無いのでその点は気にしなくても良い。そして本日の日直当番はセシリア・オルコットだな、日誌は教卓に置いておく。あと……」

手元の出席簿にいくつかチェックを入れ、昨日回収した日誌を巡つ

て今日の日直を確認すると千冬はそれを言った通り教卓の台の上に置く。そこまでした所で彼女は何か付け足すかのようによ葉を零すとその視線は一夏の隣に座っていた時雨へと合わされていた。

「天羽、今朝お前に専用機が届いた。朝のSHRが終わり次第私と共に受け取りに第1格納庫まで来て貰う」

「？、届くのは明日の予定では？」

「予定ではな……、だが奴……もとい企業側が張り切ったらしく予定よりも早く完成したらしい。で、一時も早く納品したかったのか朝一で来訪の連絡が入ったんだ……くそのの兎め……私の仕事をこれ以上増やさないでくれ」

千冬の説明にあの彼女ならやりかねないと納得した時雨はあっさり「分かりました」と答えるがその後につけられていた彼女の切なる願いの方は時雨の専用機が届いたと言う事に湧いた女子達による教室内の喧騒に紛れて人知れずに消えてしまった。

唯一その苦労と言うか苦悩と言うかを知っているのは朝その連絡を職員室で副担任として真横で聞かされていた山田先生ただ1人である。彼女は絶対に今度の休みに尊敬する先輩を飲み連れて行くとうと人知れず心で誓った。

「静かに、ではこれで朝のSHRは終わりとする。以上だ」

「起立、気を付け、礼」

そして今日もまたクラス委員である一夏の号令により朝のSHRは終わりを迎えたのだった。

## 時雨の専用機

〈37〉

第1格納庫にて、少し胃の痛そうな千冬に連れられて来た時雨はそこで凡そ2週間振りに会う今世界で1番有名な兎と再会していた。

「久しぶりっ……しー君！事情は把握してるけど元気にしてた？」

「多分元気だよ……って『把握してる』？」

「そう、ちよつとIS学園のメイン・サーバーにハッキングしてそこからIS学園の監視システムにお邪魔してね。あ、大丈夫。私が覗いてるのは朝と昼と夜とイベントの時だけだから」

「……おい、束。そのお前が違法ハッキングをしているIS学園の関係者の前で堂々とそんな私やってますと言いつらすな馬鹿者。と言うかそれはほぼ1日中って事だろう？暇人か貴様。変態ストーカーと変わらんぞこの大馬鹿者」

そして時雨の背後にいた千冬のチョップがニコニコとしていた束の脳天に落とされる。あとやはり人が決して鳴らしてはならない様な音がした。

「はぐうつぎいいっ？？い、痛いよちーちゃん！しー君に怒られてから口より先に手が出るのは治ってたと思っただのに？？」

「馬鹿者、あれは体罰になるからだ。それに大馬鹿やった友人にお仕置きする位問題ないだろう？」

「でもさー、……ってあれ？今思えばそんなに痛くなかったような？やっぱりちーちゃんは優……」それよりも早く時雨に専用機を渡せ。あまり長引かせるとこの後の授業にも差し支える」……はーい」

あんな人が出したら不味いような音を頭蓋から出したら直後であると言うのに相変わらずニコニコ（ニヤニヤとも言おう）した束の言葉に、それを被せるように千冬は正論を被せこれ見よがしに右手を握るがいきなり煽てられた千冬の頬は薄っすらと赤くなっていた。

そして千冬に急かされた束も大人しく本題、時雨の専用機となる機

体の引き渡しの段取りを始める。

「んーと、これで良し……んじや、本題に入ろつか。さつきから気になつてると思うけどこのコンテナの中にしー君のISは入ってるよ」

幾つかの準備を整えた束は格納庫の中央に鎮座した巨大な白亜色に塗装されたコンテナを指差す。そのコンテナには大きく交差した翼のマークが描かれ、その隣にR・i・Wの兔をあしらったロゴがペイントされていた。

「それじゃあお披露目と行こうか。天蓋オープン」

パチンつと鳴らされた束の指の音に反応してコンテナのロックが外れ外壁が開き中に収められた一機の、白い機体が現れる。

「見た目は改装の所為で殆ど変わっちゃったけど基本コンセプト……低燃費と高速戦闘能力及び巡航能力の両立はバルキリーを基にしているからそこそこのレベルで両立出来てる。ただその代わりこの機体単体での火力はお察しだけどね……」

「……久しぶり、【雪風】」

そして其処に在った相棒の姿に束の説明も殆ど耳に入っていない時雨は……いや翼は感謝する様に、歓喜する様に、万感の思いを乗せてその相棒の名を呼んだ。

「ふふっ、しー君はもう雪風に目を奪われちゃったか。それじゃあ先に最適化と調整デフラグ フィットテイングをして一次移行を済ませちゃおうか」

「だな。時雨、いつまでも見惚れてないで制服のまま構わないから雪風を装着してみろ」

それを見ていた束と千冬はどこか懐かしくも少し子供っぽいその姿に、クスつと微笑まじげに笑うと説明を後回しにして時雨に先に実際に装着させてみることにした。

「……あ、うん。分かった」

千冬の声で漸く我に返った時雨はそつと少し緊張した面持ちで雪風の胸部装甲に手を触れる。するとそこにあつた装甲部品は粒子の光となり、そして次の瞬間には時雨の身に装着されていた。



「基本的な操作系は改装前とほぼ同じ、所々……例えばインターフェイスとかは新型に切り替えたから以前とは反応速度が桁違いに速くなってる筈だよ」

「……本当だ、思考から実行までのタイムラグとバランスを取る為の可動調節が前とは比にならない位やり易い」

試しに右手を上げ、左手を上げ、そして脚も動かしてみるのが生身の時と何ら遜色無く、寧ろ生身よりも下手すればスムーズに動ける事に時雨は驚いた。

「でしょ？あと大切な事だから一応言っておくけど見ての通り軽量化の為物理装甲は殆ど無く多くはISに直結したエネルギーラインからのISスーツに組み込まれたエネルギー転換装甲とピンポイントバリアに依存するから万が一被弾時でのシールドエネルギーの減少率は半端じゃない」

「それに防御が純装甲で無くエネルギー装甲に依存するのでは私や一夏の単一仕様の零落白夜とは相性最悪だな」

「うん、改装し終えてからそれには気付いた。だから一応装甲と腕と腰の部分にある特殊カーボンで織った特殊繊維には対ビームコーティングを施しておいたけど……まあ、気休めだね。装甲が無いお陰でパワーアシストは皆無に等しいし、偶然とはいえまさに零戦と似た設計だね。『どんな紙装甲でも当たらなきや問題ない』って所とかが」

「あれは巴戦……格闘戦は得意だったぞ。格闘戦だけは」

「ちーちゃんそれフォローになってない、なってないよ」

「……………」

ざっくり言って前回の対ブルー・ティアーズ戦でセシリアが使った大型レーザーライフルを雪風で直撃すると打鉄改の本体装甲で受けた時の約2倍はシールドエネルギー持っていかれる計算というまさかの鬼仕様に思わず時雨は少し頭が痛くなる。

ただまあそもそも雪風の製造理念は戦闘なんてものは一切想定せずこの成層圏を、その先の宇宙まで単独かつ自由に飛びまわる事な為に武装等は最小限、エネルギーもほぼ無限の熱核反応炉や太陽炉を搭載するものの出来る限りエンジン出力に回したり無駄節約する為に

装甲を削って重さを減らし必要時のみ展開するエネルギー転換装甲

とピンポイントバリアを採用、ヘッドギアも目視視界を重視した通常タイプと宇宙空間でも使用出来る密閉式フルスキン型のヘルメットタイプの2種類がある。ただそのかわり装甲だけでなく武装まで最初は一切合切付いていなかったりするのだが、そのおかげで現存ISで唯一マストドライバーや軌道<sup>建設計画のみだが</sup>エレベーター、補助ロケット無しで単独大気圏離脱が可能な機体となっている。

ただその所為で【雪風】が<sup>難易度</sup>とんでもなく玄人向けの機体でありその在り方が結果的に零戦に似てしまったのはちよつとした偶然である。しかし千冬言った事も強ち間違いではなかったりするが以前、第2回<sup>モント・グロツ</sup>世界大会に出場する前国家代表として暮桜<sup>IS</sup>に載っていた時に航空自衛隊の航空ショーで一緒に飛んだ事がありその時興味本位でちよこつと調べた知識を披露してみただけだったのがちよつと、そうほんのちよつと披露するタイミングとそのフォローがフォローになってなかつただけである。

「んんっ……ただまあ、動力部にステージII熱核反応タービンエンジンを搭載してるから補給はほぼ無しでも理論上とても長期間高い出力が得られるし転換装甲の対物・対エネルギーは高いから天敵の零落白夜じゃなきや大丈夫だよ……多分。あと試合用にはリミッターが付いてて試合用シールドエネルギー容量は590だよ。実戦用を選択したら無くなるけどね」

少々気不味い雰囲気<sup>に</sup>束が気を遣って敢えて無理矢理にでも話を突き進めた為その雰囲気は霧散した。そして説明は次に武装へと移り変わる。

「じゃあ先ずは銃器からいつてみよう。という事で実体化してみても」  
「分かった。……これ？結構大きいけど」

束に言われた通り脳裏に表示された量子化されていた物一覧に遠距離<sup>銃火器</sup>武装の括りに【??】と表記されていたその1番上を選択すると次の瞬間時雨の両手にはそこそこ大きく重いライフルらしき銃が出現していた。

「VF-27が装備する【ギャラクシー製 BGP-01β 55mm

ビームガンポッド」をモデルに人が持てるサイズに調整した【R. i. W製 BGP―TO1 20mm多目的重粒子ビームガンポッド】。大型の重粒子ビーム砲で通常の速射モードと、砲身を横に2分割・開放化した対艦用ハイパーグレネードモードの2つの形態があるのが特徴だよ。

……………本当はYF―29の【三菱製 HPB―01A重量子ビームガンポッド】をモデルにしたかったんだけどガードが固い上に色んな所を紙状媒体でアナログな保存してたみたいだからハッキングじゃ上手く集まらなくて比較的簡単に手に入れられたギャラクシー製のしたんだ」

「へー、……………ところでその言い方って事は勝手にコピーしたの？」  
「……………てへっ☆」  
「……………」

「……………束、後で少しお話な？お前の事だから完全なコピーではないと思うが勝手にハッキングしたって言う所が先ず問題だからな？」

「……………マジカヨ」

自分の身長を優に超す大きさのしかもそれに見合った重さのライフルを両手に持ち具合を確かめていた時雨だったが束の最後の方にポロつと零した結構重大な（本日2回目）失言にまた頭が痛くなる。千冬に至っては一周回って若干悟りを開いてしまったが如く普通の表情に戻ってしまった。

「ヤヤヤヤ、さて気を取り直して次に行こう。うん、そうしようか。って事でハンドガンとかは説明不要だと思うから次は近距離刀武装の方に行こう。今度は2つ共出してみて」

「お、おう……………2つ共だね」

続いて一覧に更新表示された【R. i. W製 BGP―TO1 20mm多目的重粒子ビームガンポッド】と【R. i. W製 BHG―TO1 多目的ビルガン】の下にある近距離刀武装の括弧に表記されていた【??】を2つ選択する。

そして次に現れたのは2振りの日本刀状の剣であり一振りは身の丈程長く、もう一振りは丁度普通の打刀と同じ位の長さの2振り

其々鞘に収められた状態で背中にマウントされた状態で出現していた。

「小太刀【月桜】、脇差みたいな形をしているけどガンブレードの一種で刀身の根元上部に銃口がついていて柄の部位に内蔵されたトリガーを引くことで発砲可能。刃の峰の後ろに付いている白い円柱状の部分がマガジンとなってるよ。」

大太刀【風片】、こっちが本命で特殊な機能は一切付いてない純粹に堅くしなやかであり折れず欠けずただ刺突の貫通力と斬撃の斬れ味のみを追求した至高の逸品。柄と鞘はISに搭載するから少しメカメカしいけど刀身はさる高名な刀匠にお願いで鍛って貰った一本物だから他の数打ち鈍なIS刀とはひと味違う大業物だよ」

束の説明を受け試しに風片を機械的な鞘から刃を抜くと「シャッ」と冷たい音がし、構えた刀身に瞳を写すと其処には美しく散り惑う桜の花卉の奥に自分の緋色の瞳が其処に写る。

「……………成る程……………ね。これは……………大業物なんて生温いモノじゃない、一其処に在るだけで血を吸い上げる兵器そのもの《最上大業物》だ」

その時の時雨の顔はどんな顔であったのであろうか……………前世で見て、扱ってきた物の中でも勝るとも劣らぬその至高の逸品。魔法をカケラも使っていない純粹な人技と熱意だけを注ぎ込まれ打たれた普通の刀だと言うのにそれが惜しみなく投入され鍛えられた異世界の刀剣類に引けを取らないと言うある意味狂氣的なその兵器の存在に、丁度刀の陰とその冷たい反射により見えなかった束と千冬だったが時雨の口は思わず三日月の様に釣り上がって嗤い、そして何処か悲しげで寂しげだった。

「?、……………もう次に行っていないかな?」

「……………ん、あ……………うん。ごめんね」

「じゃ次、待機形態に変えてみて」

「うん」

じつと刀の刀身を見つめていた時雨の姿に違和感を感じた束が話し掛けると時雨はハツとしたように顔を上げて風片を鞘にしまう。

それにまた少し違和感を感じた束と千冬だったが時雨がすぐに雪風を待機形態に変化させてしまった為にそれを深く考える暇がなかった。

「ん？イヤリング……か？」

「……………だね、左耳に1つだけだけど」

「……………ほう……………なかなか綺麗だな」

左耳に揺れる、銀に縁取られた見る角度と光の色によれば紫にも紅にも見える結晶が光を映しキラリと反射する。

「気に入ったか？」

「ああ、勿論」

鏡は無いが腕の装甲を解除して手でその形と感触を確認する様に触るその姿からそう聞いた千冬に時雨はYESと答えた。

「最後に【雪風】の意識、インフィニット・ストラトス・コア・システムは現在アップデート中だよ。【雪風】の意識が目を覚ますのもしー君が身に付けた状態なら数日の内に終了すると思うから完了したら一応私とちーちゃんに連絡してね」

「了解」

最後に束は『Infinitie Stratos Core System』、通称『ISS』の現状の説明を持って時雨の専用機 第零世代型ISS【雪風】の解説を終えた。後は時雨の直筆サインを彼女の持つ引き渡しを行ったかの証明書類にするだけだ。

「……………はい、サイン頂きました。これで【雪風】は世間的にも正式にしー君の物だよ」

「それでは時雨、もうすぐ1時限目も終わるが大人しく教室に戻れ。私と束は本土に諸用……………まあ、お前に関係あるがある事だから話しても良いか。琴乃さんに会いに行く、眠り姫の復活の報告にな」

「眠り姫って……………まあ強ち間違っではないかなあ……………性別は違うけど」

「うつつつぶく、ちーちゃんも上手いねえく。って事で、またねしー君」

「では……………な」

時雨がペンでササつとサインを入れるとそれを持って颯爽と去っていた束の後を追って千冬も格納庫を後にする。

「さて、それじゃ俺も行くか」

そして時雨もまた左耳に揺れる雪風を連れて1組の教室へと戻って行った。

## 少女の残した1年越し約束

〈37〉

時雨が2時限目に教室に戻って以降、その左耳に揺れるイヤリングについてクラスメイト（その中に山田先生が紛れていたのは、愛嬌）に質問攻めを受け続けた2時間が過ぎて遂には昼休み。

女子生徒達からの長〜い質問の嵐からやつと抜け出して来れた時雨はヘトヘトになりながらも学食へと向かっていた。

「はあ……結構長生きしてるけど人生初だよ……あんなに質問攻めに遭った事なんて」

「ん、お、時雨じゃないか。漸くアレから脱出できたみたいだな」

「なんとかね………とところで一夏君が助けてくれたら助かったし嬉しかったんだけどねえ………クラス委員として」

「うっ………済まん。でもアレは無理。絶対変なトバッチリ食らって俺まで巻き込まれる未来が鮮明に見えた」

そこで時雨は学食の入り口手前で誰かを待っているようであった。一夏と出会った。ぼやいていた事は聞こえていなかった様であるが、つい先程まで自分が遭っていた質問攻めを助けてくれなかった件についてクラス委員として、そして僅か2人しかいない男子生徒の片割れとしてちよつと位助けてくれても良かったのではないかと少し嫌味言を言ってみるが一夏の言言い分訳もまた間違っ誤てはいないのでなんとも言えなくなる時雨だった。

「まあ分かってたけどね………ってところで俺よりも早く教室を出た筈の一夏が此処にいるって事は誰を待ってるんだ？」

「朝うちのクラスに戦線布告っぽい事して来た2組の転校生が居ただろ。アイツ実は俺達の幼馴染3・4時限目の間で、前の10分休憩の時に『一緒にお昼飯を食べよう』って誘われたんだよ」

「へー、確か中国国家代表候補生の子だったよね？名前は……」

「ファン・リンイン鳳 鈴音よ。こうやって向き合って話すのは今回が初だから初めま

してね、もう1人の男性搭乗者さん？」  
「……」

時雨が朝その彼女が名乗っていた名を頭に思い浮かべて口にしようにとしたその瞬間、その背後から別の誰かがその答えを口にする。振り返った先に居たのは時雨が思い浮かべていた名の彼女、鳳 鈴音その人であった。

「ちよつともう！初対面(?)なんだからもつと丁寧に……そう第一印象を大切にしないと駄目だよ鈴」

「いや葉……もう既に駄目な方向よりなのでは？朝の一件からして」

そしてそんな彼女に付き添って一緒に来たらしい葉と箒は彼女の斜め後ろに立ってそんな事を口にしており、思わず時雨もそれには苦笑を零す他になかった。

「あははは……まあ確かに取り敢えず初めてましてかな？俺は天羽時雨、1年1組出席番号も1番だったりするけど……今は関係ないかな？宜しく鳳さん」

「んー……、なんでかアンタにそう呼ばれるのがムズ痒いからセシリアにも言ったけど鈴で良いわ。なんでかしら？」

「さあ？」  
「それに何処かで見えた事がある様な気もするんだけど……何処だったか？」

鈴は時雨の顔をマジマジと見ながら少し首を傾げる。時雨もつい最近まで地下の秘密ラボで眠っていた上に7年前に何処かであつた覚えもないので何故かは全く分からなかった。

「それはそうと早く学食に入らないと午後の授業に間に合わなくなるぞ2人共」

「え、ああ、そうね！まあその内思い出すでしょ。さ、行くわよ！」  
「ん？了解、今日の昼はどうしようかな？……まあ取り敢えず直前に考えればいいか」

互いに首を傾げる2人だったが一夏の「早く行こう」と言う言葉にそれ以上は特に考える事もなく5人の大所帯で学食前の券売機に並



ぶ。尚この大所帯周りの人にはかなり邪魔じゃないかなと少し心配した時雨だったが特に問題はなかった。

「よし俺は今日は朝ご飯抜いて死にそうだからちよつと奮発してこのがつつり定食にしよう」

「えっ嘘!!? あれ程病的なまでも健康志向でザ・健康男児ベストワードで1位になれる位のアンタが朝食抜いたの!?!?」

「なんでそんな驚くんだよ、てか病的って全然健康的じゃないじゃねえか。色々あつて飯食う時間が無かつたんだよ」

「へ、へえ。な、何してたのよそんな朝っぱらから」

「学校の敷地内を走ってたらいつの間にか朝のSHR10分前だった」

「……………相変わらずアンタがストイックな生活を続けてるのは分かったわ。そうね私は……………無難にラーメンを頼んどこつと」

「じゃ次は私だけど箸は何にする?」

「レディースランチとやらにチャレンジしてみようと思っている。昨日布仏が食べていて美味しそうだったんでな」

「なら私もそうしよつかな、はい」

「む、ありがとう」

とまあ一夏、鈴、栞、箒の並び順に彼らが次々に今日の昼食のメニューを決める中、その最後に並んでいた時雨は偶然真後ろに並んでいたセシリアと話していた。

「時雨さん」

「セシリアさん、セシリアさんも今から?」

「はい、少し日直の仕事として山田先生のお手伝いをしていましたら今の時間に」

「お疲れ様、なんだか山田先生って書類の山を持たせたらズッコケてばら撒きそうでちよつと不安だからね……………」

「先日実際におやりになってしまいましたので今日は私が持ちました……………」

「まあ……………うん、期待を裏切らないね……………」

「絶対にあの方があれ程不運に遭われるのは何かに呪われているのか

それともそう言う宿命なのかどちらかですわ」

「否定できないのが辛い」

と何気に笑えない談笑を交わしつつ時雨は焼肉定食ご飯大盛りを、セシリアは日替わり定食の食券を購入した。

「あ、オルコットさん。オルコットさんも今からだったんだね」

「ええ、日直の仕事が色々ありまして。栞さん方は鈴さんと？」

「うん、約束しててね。取り敢えず私は食券を箒達に任せて先に席取りに行きたいんだけどオルコットさんも一緒に来て来てくれないかな？……来てくれたら時雨君の隣か前に座れるようさり気なくフオローしてあげるよ？」

「!!？も、勿論ですわ！あの、その……時雨さん食券を、お願いしても……よろしいでしょうか？」

「？良いよ、席お願いね」

「ええ！このセシリア・オルコット、全力を尽くしますわ！」

「おお……なんか張り切ってるね」

「栞もなかなか遣り手……なのかな？」

「まあ、そうなのかもな。だが……」

「ええ……あんな分かりやすいのになんで時雨は気付かないのかしら……まるで一夏にソックリね。自分に向けられる好意に関して鈍感の所が特に」

「☒なんか言ったか？」

「ほらみそこれだから……」

そして上手い事言葉巧みに誘ってセシリアと共に栞は席探しの旅に出たが、その分かりやすいまでもセシリアの反応を全く気に留めてもない時雨の鈍感さに頭を抱えそうになった3人だったが自分に向けられる好意に関してはおんなじ位鈍感な約1名の所為もあって更に頭の痛くなる箒と鈴だった。



「とところでさ、鈴はいつ日本に戻って来たんだ？」もしかもしや

「昨日よ、色々あつて連絡してあつたとは言え到着したのが夜中で千冬さんに『御苦労だな、ゆつくり休め』って言われたのが23:00午後11時頃だったわ」ズルズル

「へー、大変だったんだね。でも僅か1年で国家代表候補生のしかも専用機持ちなんて凄いいじゃん」はむはむ

「まあ……ね、色々あつたけど何とかなつたわ」ズルズル

「ふむ……、良くやつたな。鈴」ぱくぱく

「ありがと、箒」ズルズルつるんっ

そして栞とセシリアの尽力(大半はセシリアの熱意)によつて何とか確保出来た6人掛けのテーブルに座る事が出来た6人は主に一夏、鈴、栞、箒の4人は別れていた1年分の思い出話に盛り上がっていたが、特に関わり合いの無い時雨とセシリアは向かい合わせで座りながら黙々と料理を食していた。

「うん、今日の学食もいつも通り美味しいかったね」

「ええ、そうですね。願わくば我がオルコット家専属のシェフに雇いたい程ではありますが校則で禁止されていますし」

「え、そんな校則もあるの?」

「はい、様々な複数の国家からあらゆる人種・民族・家柄そして要人から一般人の方まで方々が沢山この学園には在籍していますから必然的に校則も大抵は解釈の幅を広げる為に多少緩い部分もありますがそれでも部分によっては細かく沢山の事項を持つものも多いのです」  
「そうだったんだ……」

「ただそんなにも沢山の校則を覚えられる訳もありませんし最低限覚えておくべき校則は学園生徒手帳に書いてある分だけなのでそれだけでも十分だと思いますわ」

で黙々と食べていたからか話しながら食べていた一夏達より大分早く食べ終えた時雨とセシリアはセシリアオススメの紅茶をご馳走になりながら談笑と食後のティータイムを楽しんでいた。

「と、それよりも時雨さんは今朝専用機が受け渡されたのでしたわね?差し支えありませんでしたらどんな機体なのかお教え頂けませんか?」

と、その時ふと時雨の左耳に揺れるイヤリングを見て今日届いたばかりの彼の専用機について気になったセシリアはそう尋ねる。尋ねてから政治的に聞いたらまずいのではと一瞬考え後悔しそうになった彼女だったがそれに時雨は答えた。

「んー……、特徴と要点だけまとめてざっくり言えば零戦みたいな機体って事かな。あ、零戦が何か分かる？」

「旧日本海軍にて採用されていた零式艦上戦闘機の略称である事程度でしたら、ですが詳しくは知りませんわ」

「零戦の特徴は3つ、機体が軽量かつ紙装甲な事、長大な航続距離を持つ事、そしてこれらを生かした遠距離地での<sup>ドッグファイト</sup>戦が得意な事だ。詳しくは興味が湧いてくれたなら自分で調べてくれた方が分かりやすいだろうし嬉しいかな？」

でだ俺の機体……雪風はそんな零戦の特徴をそのままそっくり再現したみたいな性能なんだ」

「それは……また、随分と個性的な機体性能ですわね……」

「うん、<sup>難易度ルナティックな</sup>超玄人向けの機体。尚計算上シールドエネルギーが下手したらセシリアさんのスターライトmk.Ⅲのエネルギー弾を打鉄改で受けた時の倍くらい1撃で持つてかれるかもしれないくらい紙装甲だったりする」

「……………」

「ああ、良い紅茶ですなア……」

「そうですわね……」

説明していた時雨が若干目が死んで軽く現実逃避に走る姿に地雷を踏んでしまった気まずさを感じたセシリアはそつと目を逸らし家から送って貰った紅茶を口に含む。チラリと横を見ると「自分も放課後の自主練を手伝う」と言った候補生<sup>鈴</sup>としての後輩が栞と箒に正論で言葉巧みに「クラス対抗戦前だから」と丸め込まれてワイワイしているのを見て少し癒されたりした。

とまあそんなこんなで賑やか(?)なお昼の休み時間は終わった。



放課後、こんなに早く雪風が届くとは思ってもみていなかった故にアリーナの貸出許可申請を出していなかった時雨はちゃんと出してあった一夏（葉、箒、セシリア含む）一行と別れ毎度お馴染みのIS整備室にて雪風を実体化させた後ISSのアップデート進行状況を確認。序でに以前会ったあの制服の違う水色少女に名前を聞き忘れていた上ちゃんとしたお礼まだしていなかった為に少し会えないかなと待ってみたものの、結局彼女は今日の所は現れず諦めてそこを後にした時雨はちよつとした運動がてらに朝一夏が通ったであろう外周ルートを何周か走り込んで何処かスッキリした様子で1年生寮へと戻って来ていた。

「あれ？2人共、部屋の前で何やってるの？葉は自分の部屋なのになんでそんなの所に？」

丁度自室への通り道で一夏1025号室と葉の部屋を通ろうとした時、その部屋の前で僅かに開いた扉の隙間から漏れ聞こえる話し声を少しも聞き漏らさない様に壁と扉に張り付いて室内を窺う箒とその部屋の主の1人、葉の2人がいた。

「しっ！今大切なトコなの。静かにしてて」

「ああ、今ちよつと1年越しの乙女の一大勝負の決着なんだ。気になるなら場所は作るから静かにしておいてやってくれないか？」

「？事情はイマイチ飲み込めないけど一応雰囲気的には理解した。でも盗み聞きしてて大丈夫なのそれ？」

「問題ない、あれだけ私達が手を貸したり回したりしたんだ。寧ろその結果を知る権利と義務がある」

「うんうん」

2人の説明と理屈に少々納得も理解もいまいちできていないが言わんとしておくことは分かったので時雨は突っ込む事を辞めた。（諦めたとも言おう）

で、その後特に望んでもいかなかったが話の流れ的に参加せざるを得ない感じに誘導された時雨もその仲間に加わり扉や壁に張り付くようにして耳を澄ませると中からは2人の男女の声、おそらく部屋の主の1人である一夏と中国国家代表候補生の鈴の声が聞こえてきた。

「……ねえ、一夏……。約束覚えてる？」

「どうやら早速クライマックスかららしい。」

「ああ、臆気だけど確か『毎日酢豚を……奢ってくれる』だったよな？」  
「「えっ？」」

「済まん、まだ臆げな所為で間違ってるかも知れんが多分こんな  
だったと思うんだが……」

と一夏は済まなさそうに言うがそれにそれを直接真ん前で聞いて  
いた鈴と扉越しに聞いていた時雨や栞、箒の驚愕の声が重なる。

『毎日酢豚を作ってあげる』、つまるところ日本で言う『毎日味噌汁を  
作ってあげる』の告白を中国人の自分に合わせて『味噌汁』を『酢豚』  
にアレンジした告白をした訳で……

「バカっ！」

バシイン

「うわぁーん！一夏が酷いよー！箒……」

まさかの一夏の勘違い発言に涙した鈴はショックからか一夏に1  
発会心のビンタを喰らわせた後、部屋を飛び出し廊下で見守って居た  
友人の箒の胸元に飛び込もうとするがその瞬間鈴の視線は今自身が  
飛び込まんとしている箒の胸元に、たわわに実った自らよりも遥かに  
大きい果実……もとい胸部装甲に向けられる。

「チツ……」

それに思わずイラつときた彼女は舌打ち1つするとその隣にいる  
もう1人の友人、栞に目を向ける。悔しい事に自分よりは大きいもの  
の日本人標準平均である中くらいの為妥協した彼女は今度は立ち止  
まる事なく栞の胸元に飛び込んだ。

「えーん」

「よしよし、最初から分かってたじゃないか。一夏ってそんな感じ  
だって」

「ちよつと待て、なんで私は舌打ちされたんだ☒」

結局鈴を迎え入れる事のなく飛び込んでくる動作を見て予想して  
両手を軽く広げて待っていた腕だけが残った箒の心からの声が響く  
がスルーされた。まあ残当である。乙女のコンプレックスは成層圏

より高く海溝よりも深くそして世界七不思議よりも複雑怪奇なのだ。

「えつと……あー……大丈夫か？」

「えつぐ、えつぐ」

「取り敢えず一夏は女の子の心を傷付けた罰として  
時雨君と死ぬ気で掛かり稽古落ちるまです  
馬に蹴られれば良いと思うよ？」

「うむ、うむ」

「え、俺が相手なの？……ゴメン。ノーコメントで」

そしてビンタ直後は一瞬機能停止してしまっていた一夏だったがすぐに再起動を果たし飛び出した鈴を追って部屋から顔を出す。が帰って来たのは泣いている鈴に代わって慰めていた栞の辛辣な言葉でありそれに箒も同意なのか今度は彼女がうんうんと頷いている。が、完全に罰に関しては時雨がとぼちちりを喰らった形だった。

「うぐつ」

「ま、一夏はそのまま部屋に居て。私と箒は鈴を部屋まで送ってくるから。時雨君も巻き込んでごめんね」

「うん、いや……うん、大丈夫です。ハイ」

「じゃ、行こ？鈴」

「うん、グスツ……」

栞と箒に護送されていく鈴の後ろ姿を見送る。あの調子では多分2人が付きつきりで慰めても暫く元気一杯とはいけそうには見えそうにはない、だがあの2人なら親友とも言える大切な友達をあのままにしておくなんて許さないし何としても彼女らしく笑えるよう努力を尽くすだろう。

「なあ、時雨。教えてくれ、俺はどうすればいいんだ……？」

「取り敢えずよく思い出して全力で謝れば良いと思うよ？心の底から」

「……分かった」

「寧ろそれでも分からなかったら俺も流石に馬に蹴られて異世界転生とかしてみれば良いと思う」

「……なんで異世界転生なんだ」

「……良い子はそんな簡単に暴言吐いちゃ駄目なんだよ」

が、結局シメはシリアスなのかシリアルなのか分からないぐだぐだ  
な感じで終わってしまった。



〈38〉

ある日の放課後、クラス対抗戦まで残すところあと数日となったその日、対抗戦には直接関係の無い時雨は今整備室にて展開駐機された雪風を前にして居た。

「うくん、まだISSのアップデートは94%か……って事は雪風が目覚めるのは丁度クラス対抗戦くらいかな」

雪風を束から引き渡して貰った際にコンテナの中に付属されていた新品の小型タブレットと投影型ディスプレイのノートパソコンに表示されたインフィニット・ストラトス・コア・システムのアップデート進行状況を確認した時雨はいつも通り人気のない（本来なら上級生や整備士の人が1人や2人いる筈なのだが諸事情が絡みとある人物の独断で予め時雨が来る日にはほぼ人払いがされている）整備室でポツリとそんな独り言を零す。システムのアップデートを終えない事には雪風本来の能力は使用できないしその稼働率も低いままでまともな経験データを得られない、そしてそれ以上に【雪風】自身が目覚めないのだ。

「……全く、このお寝坊さんめ。早くしろとは言わないけれど大切な時に寝過ぎしたら俺だって怒るからな？」

時雨は雪風の胸部装甲を撫でる、そしてそれは次の瞬間には光の粒子となりいつの間にか時雨の左耳にイヤリング待機形態の姿でとして装着されていた。

「あ……」

「ん？君は……」

イヤリングがひとりでに揺れる。それと同時に声が聞こえた方に振り返ると、そこに居たのは時雨がここ最近ずっと会えないものかと探していたあのIS学園ではない制服を着た水色の髪の少女だった。

「ッ!? (ぐ)めんなさいっ……」

「え、あ……」

が、時雨がそう認識してすぐその少女は踵を返して逃げる様に……いや文字通り時雨から走って逃げてしまった。

「ええ……、なんで逃げられたんだ? それにまたお礼も言えなかったし名前も聞けなかった」

1人残されてしまった時雨は彼女の起こしたその行動とその理由が分からず啞然としてしまう、がすぐに我に返り兎に角話し掛けられなかったのは間違いないので気持ちを切り替えて次こそはお礼を言おう……言えたらいいなあと思う。

こればかりは時雨の意思だけではどうにもならないので願望ではあるが若干諦めというか逃げが入っているのはさつき顔を見られて早々に逃げられてしまった為である。時雨のハートは硝子でできているのだ……こらそこ、アクリル硝子とか言わない。確かに傷は付きやすいけども。

「あ、しぐしぐだ。こんな所で何してるの〜?」

そんなどうでも良い事をボンヤリ考えていると今度は反対側から時雨のあだ名を呼ぶ声がする。時雨にこんな一風変わったあだ名を付けたのも、そもそも時雨をあだ名で呼ぶのもその名付け親とも言えるそんな彼女のあだ名通りのほほんとした特徴的な声の女性は時雨の知る限りただ1人しかいない。

「ん、それはほほんさんこそだよ。まあ俺はちよつと雪風のシステムアップデートの進行状態を詳しく知り、もう終わったけどね」

「へ〜、アップデートね〜。……私はお姉ちゃんにちよつと頼まれてね〜、やる事ができたから来たんだよ」

時雨は振り返りつつ彼女にそう話し掛ける、新たにこの整備室にやって来た来訪者とは本音だった。ただ日頃の様子からして彼女がわざわざ整備室に訪れるような理由が思い浮かばなかった時雨は彼女が教えてくれたその理由に少しだけ驚く、ただ「そうだったのか」と驚きつつその彼女の姉について触れてしまったのが失敗だった。

「そう、のほほんさんのお姉さんもこの学校に通ってたんだね」

「うん、お姉ちゃんはね〜生徒会で会計をやってるの〜。でね〜、お姉ちゃん酷いんだよ〜。私も私で色々忙しいのに『暇そうだからちよつと整備室までお使い行って来て』だよ〜私だって色々やる事があつて忙しいのに!」

「へ……へえー、そうなんだ……」

「うん、でねでね〜。お姉ちゃんは……」

中途半端に聞いてしまったのが運の尽き、本音の姉に対する愚痴や最近の楽しかったり大変だったりした事、よりによってクラス対抗戦の日に楽しみにしていた武道館ライブが被つて観に行けなくなつた事、そして今大切な親友が自分で自分を追い詰めて無理をしている事が心配で仕方ない事等の話をほぼ一方的に話され時雨はただそれっぽく「そうだね」とか「そうかもしれないね」と言つてただただ相槌を打ち続ける。

「……だつたんだ〜」

「そうだつたんだ……」

で結局本音の話はその後も20分程度は続く事となつた。

「でねでね……つてあ、もう30分近く愚痴つてちやつた。ゴメンね〜、しぐしぐ〜」

「ん、まああんまり気にはしてないよ。俺も初耳だつた事もあつたし」  
「ありがとしぐしぐ、でもしぐしぐつてこう話しやすいつて言うか相談しやすい人だよね〜?はっ!もしかしてしぐしぐの正体つて超高校級の相談窓口なんじゃ……!?」

「いやいや、ないない。俺は日向みたいに善良な人間ではないし希望にも憧れてなんかかない、それに彼程他人に他人が望んでいるような答えを返せないから」

「え〜、そうかな〜?」

「そんなもんだよ、それによく『鈍い』とか『鈍感』とかよく言われるし」

「……あ〜、うん。よく分かつたよ」

話の合間合間で聞いたり同意して欲しかったりしてそんな場所で適当に相槌を打つていただけなのだが、それでも聞いてくれて嬉しそ

うな顔をする本音の姿に時雨は悪い気はしない、寧ろ適當だった事に罪悪感を感じてしまう。ただ最後の言葉に微妙な顔で納得したかの様に頷く本音の姿に若干の違和感を感じたが時雨は特に気に留める事もなかった。

「じゃあ私もそろそろお姉ちゃんのお使いに戻ろうと思うけどしぐははどうするの？ イッチー達のいる第3アリーナ？」

「いや、今日はちよつと違う所に行こうと思って」

「何処行くの？」

話を終えそれぞれ別れて時雨が整備室を立ち去ろうと踵を返した時本音から投げ掛けられた問いに答える為に振り返る。

「ちよつと射的場に、前回の試合じゃ殆ど狙った通りに撃てなかったし生身で撃つの久しぶりだからちよつと勘を取り戻しに」

時雨はそう言つて微笑んだ。



1度寮の自室に戻り、そこで久しぶりにアイテムボックス異空間を開いてその中から1つのケースを引っ張り出した時雨は第1アリーナ受付の片隅にある第1射撃試験場の受付の前に立つて居た。

「すみません。射撃場所を貸して貰えますか？」

「どうぞ、今は殆ど貸切状態なのでどこを使い下さっても結構ですよ。ご希望はありますか？」

そして時雨が撃てる場所を貸して欲しいと頼むと、その受付をしてくれて居た受付嬢の女性事務員は快くそれを受理し場所を提供してくれた。

「いいえ」

「では第3レーンを使つて下さい、使用する火器はどうしますか？ 一応貸出可能な物もありますが」

「分かりました、手持ちにあるので大丈夫です」

「では1度安全検査に通しますのでカバーから出して渡して下さい。所持許可証及び銃火器保持保証証の提出も」

「はい」

射撃試験場での入退場の時や第3レーンを使用する為に必要な認証カードキーと安全メガネ、ヘッドフォンを手渡された時雨は代わりに自分が持つて来ていた手持ちの銃を規則通り検査の為に言われた通り彼女に渡す。時雨が部屋から背負って来ていた黒い専用ケースに入っていたのは1丁の小銃ライフル、黒鉄の後装式ホルトアクションの銃身に銃剣を取り付ける為の機構が付けられた木製ストックは使い込まれて少し傷や色濃く変色しているものの綺麗にニスが塗られて防腐処理が施されていた物で、小まめに整備がされていたのか弾丸さえ込めればいつでも撃てる状態で保存された物である。

しかし……

「あと許可証と保証証ですが……済みません『渡した』事にしておいて下さい」

「……はい、分かりました。少々お待ち下さい」

しかしだ、当然の事ではあるがこの小銃は時雨の私物であり、しかもこの世界製の物ではないので保証証などは存在しない。その上それが故に時雨は警察にも所持を届け出していない為に許可証すら所持していない。よって無いものは出せないで時雨は先に謝った上で無理矢理相手の思考を誘導し書き換えてしまう為にあまりやりたくはなかった『暗示』の魔法を使って事務員さんに『もう保証証と許可証は渡した』と思い込ませて一部の検査をすり抜ける事にしたのだ。そして上手くその魔法にかかった事務員の女性は小銃だけを持って事務室の奥に1度引つ込んで行った。

「あれ？天羽君？」

「山田先生？」

事務員の女性が窓口から引つ込んですぐ、その直後に背後から名前を呼ばれるというつい先程あった様な気がする状況に再び巡り合う事となった時雨はその声の方向に視線を合わせる。そこに居たのは我らが1年1組の癒し兼マスコット（本人は認める以前に知りもしないが）の副担任、山田やまだ 真耶先生まやだった。

「見回りですか？山田先生？」

「いえ、そつちは今日は私が当番じゃありませんので違いますよ。今日はちよつと射撃場に用があつて、天羽君は？」

「俺は此処に射撃練習に、今銃の検査をして貰っている最中なんです。って事は山田先生も銃を撃ちに来たんですか？」

「はい、昔の習慣から時々どうしても撃ちたくなつてしまう時があつて、そんな時はよく此処に撃ちに来ているんですよ」

山田先生はそう言つて少し恥ずかしそうに笑う。普段教室でも廊下でも特に何も無い所で躓くわ、書類はぶち撒けるわ、眼鏡の置き場を忘れるわ、と何処か残念というかおつちよこちよいな場面が目立つ女性であつた為に時雨はそんな今まで山田先生に抱いていたイメージとのギャップに驚く。というかどうやら今日は時雨が抱いていた色んな人へのイメージが変わる日らしい。

「お待たせしました、銃に問題はありませんのでお返しします」

「ありがとうございます」

「あ、済みません。私の銃もいつもののでお願いします」

「分かりました。少々お待ち下さい」

再び窓口に戻つて来た女性事務員が時雨に銃を返す。そのついでとばかりに山田先生は慣れたようにいつものと銃の貸し出しを頼み、それに女性事務員もまた心得たとばかりに慣れたようにまた窓口の奥に引つ込み今度は銃架付きの台車を押して戻つて来た。

「M24 SWSとバレットM82A1-IIS、グロック19です。それにこちらが第1レーンの認証キーと安全メガネ、ヘッドフォンです」

スナイパーライフルに対物ライフルそして自動拳銃、確かに全部合わせれば台車が必要になる重量だ。それに使用弾の総重量も考えれば妥当である。……というかそれ全部撃ち尽す気ですか山田先生？

安置されていた銃の種類については兎も角銃架の隣、台車の一角に積まれた合計400発分は有りそうな弾薬箱の山に若干引いてしまった時雨であつたが山田先生はそれに気付く事もなく、タイトスカートの裾に注意しつつかがみ台車に安置された警察用・軍用ライフルと自動拳銃の動作確認と弾薬箱の中身の確認を済ませた彼女は立

ち上がり事務員から台車の取っ手を受け取った。

「はい……ありがとうございます。では天羽君も行きますか？」

「ええ、お伴させて頂きます」

こうして2人は第1射撃試験場へと向かった。



第1射撃試験場の第3レーンに立った時雨はコンソールを操作し50m先に人型標的を設置、小銃を手に5連装7・7mm実包をスライドした薬室を通じて弾倉マガジンに押し込む。

「ふう……」

一息、一息吐き精神統一。今この場で必要のない思考、雑念を取り払いそれから銃の発射準備に取り掛かる。

まずは黒鉄コッキンのボルトを一往復させ薬室カートリッジに実包を装填する、次に立ったまま少し脚を開いて若干半身になりつつしつかりと銃床ストックを肩に当てて固定、右手の人差し指は引鉄トリガーに触れないようにその用心金トリガーガードに掛け左手は前床フォアグリッパを掴んで構える。

「ふう……」

再び一息、2度目の精神統一。意識を完全に切り替える。

標的まで距離50、標的動作無し、無風、弾道誤差は覚えてないから不明、発射された弾丸に掛かる重力影響も覚えてないから不明

「……これじゃ1発目は試射だな」

しかし50m程度ならスコop無しが目測で充分当たる。照門に銃口の真上にある照星がピッタリと合わさり、そしてその先一直線上に目標中央心臓が重なる様調整、狙いを定めた。

「ファイヤ」

パアンツと爆けるような音、銃声が鳴る。弾薬に使用されているのは無煙火薬であるが精製技術が低く不純物等が混ざっている為薄い白煙が銃口から立ち昇っていた。

「う〜ん……ハズレだな」

着弾点は標的心臓中心より2cm程度左にズレた場所、これでは百発百中

には程遠い。ISには自動ロックオン・追尾システムが搭載されていた上にアサルトライフルと機銃でただばら撒けば良かったので前回の試合では何とか当たったが超長距離射撃や生身ではそうもいかない。それに長らく触つていなかったのもあるがこれは……

時雨は構えを解き徐に銃を隣との仕切り壁に押し付ける。その上で真横から銃身を観察してみると極僅かに、極僅かにであるが銃身の中央部から銃口先端に向けてほんの数mm程度であるが左側に湾曲しているのが分かった。

「……昔、前世で銃剣突撃なんかの手荒い扱いばつかを実戦で繰り返していた所為か銃身自体がほんの少し歪んでるみたいだな……」

だがその数mm程度の歪みさえも50m離れば2cmのズレを引き起こす。これが100〜200mともなれば2倍どころか2乗ものズレを引き起こすだろう、そう考えれば近く長距離での射撃を行う事を前提とした小銃にとってこの誤差は致命的に近い。

しかしならばどうして原因が分かっているのに直さないのかと言うと……

「さて、どうしたものか……簡単な整備くらいは出来ても本格的な調整は専門外だ。それに修理に出そうにも出す場所が無い……というかあるかどうか分からないしな」

とまあしようもない現実が理由である。つい最近までごく普通の逸般人（誤字にあらず）として生きてきたのだから仕方ない部分もあるがそれにしてもしようもない理由ではあった。それに物が物で一応当時の異世界魔法技術の結晶でもあるから何も知らない人が弄つたら壊しそうだし逆に魔法を知ってる人……例えば東に頼んだら絶対入手経緯について根掘り葉掘り聞かれるし文字通り『魔』改造されるのは目に見えている。

「はあ、どうしたものか……」

悩む時雨であったがふと、山田先生がいる第1レーンを見てみると彼女は今丁度新たな人型標的と弾倉を用意しその手にグロック19を構えたところだった。日頃の姿から彼女が銃を構え、ましてそれを撃つ姿など想像だにできなかった時雨は一体彼女が銃を撃つ姿はど



んな感じなのかと興味本位でその彼女を見る。

安全メガネの奥にある瞳はいつものような優しく朗らかな人のモノではなく歴戦の戦士<sup>猛者</sup>、もしくはは一種の仕事人<sup>プロ</sup>の様で、そしてその引き締められた横顔は何処か鞘から抜かれた麗しき妖刀の如く鋭く冷やかでありながらその特有の人を惹きつける妖艶さを感じさせる。

普段とは全く違う、その対照的な雰囲気、そのギャップに時雨は思わず見惚れてしまった。

ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……  
……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……  
……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……ダアンっ……  
……

15発、時雨が見惚れてしまっている間に山田先生は引き金を弾き教本通りの基本的構えから連続して装填されていた15発の弾丸が放たれる。弾倉が空になりスライドが後退した状態でロックされたグロック19の構えを解き、右手だけで持った彼女は残る左手でヘッドフォンを首まで下げ安全メガネをその下にあつたメガネ毎頭に掛けて一息付きつつコンソールのタッチパネルを操作する。すると50m先にあつた懸下式の的が此方側にスライドしその目の前で停止した。

「……えっ、1発だけ？」

正気に戻った時雨はよく見ようと山田先生の後ろに回りその目の前に吊るされた的を見る、あれだけ綺麗な射撃だったのだから全て当たっているだろうと思っていた時雨だったがしかし、そこにあつたのは時雨の予想だにしていなかった状態であり思わず時雨がそう呟いてしまったのも無理はない。その的に残っていた弾痕はたったひとつしか残っていなかったのだ……ただその標的の中央に穿たれた孔の直径は凡そ1.3mm、1発の弾丸が貫通したのであれば少々大きい気がし、それに貫通した弾痕の形状が僅かに歪な円形になっていた。

「1発しか当たっていない?.....いや、まさか!?!」

それに違和感を感じた時雨は思考を回転させる。1発しか当たっていない、それは残された弾痕の数から見てまず間違いはない.....なら1発しか的を傷付けなかったのだとしたら?」

「1発目に撃ち抜いた穴を撃ち抜いたのか!それも14発全て!」

時雨は辿り着いたその事実には驚愕した。グロツク19の口径は9mm、つまりそれは弾丸直径もまた9mmであるという事でありしかも的に空いた穴が13mm、即ちこの弾丸と穴の直径誤差は僅か5mmでありそこから導き出されるのは最初に穴を開けた1発を除く14発もの弾丸は誤差2・5mm.....いや着弾時の衝撃も考えればそれ以内で穴を通したと言う事である。

センスだけでは駄目、努力だけでも駄目、半端なセンスと努力が両方であろうとも不可。これを成すためには超抜級の類稀な射撃<sup>射撃</sup>センスと一種の狂気とも言える血の滲むような積み上げられた努力<sup>技術</sup>が両立せねば至れない『撃つ』事の境地。最早これは技術では無い、一種の芸術と言つても過言では無い。

「.....凄い!」

故に時雨は素直に賞賛した。これを賞賛せずになんとする。銃が撃てる者は星の数だけ居る、抜き撃ちの速い者は砂漠の砂と同じくらい居る、100先の的を正確に当てられる者など手で掬った砂と同じくらい居て、撃たれた弾丸を弾丸で撃ち落とす事が出来る人間は両手の指の数程しか居まい。だが1mmの狂いもなく先に開けた穴に14回連続で弾を通す事の出来る者など1人居れば十分だ。

「凄い!凄いです山田先生!!?」

「えへへ、生徒でも男の人にベタ褒めされるのは初めてですから照れますね.....」

そんな時雨の心からの賞賛を受けて時雨が側に来ていたのを知りながらも、自力でその答えに辿り着くのを静かに見守っていた山田先生は頬を染め恥ずかしそうに微笑む。普通ならそんな事に気付かず勝手に失望した目をしてくる人ばかりだと言うのにまさかこんなあつさりと見抜かれ、しかも心からの賞賛を贈られるなどは予想だ

にしていなかった彼女はそんな素直になれる目の前の教え子少年が眩しく見えた。

「……昔『トライガン』って言う漫画があったんです。その中で拳銃で百発百中の命中精度を叩き出し続ける赤いコートを着た主人公がいるんですが、そこである場面でそんな彼がズーッとこうやって的の中心を撃ち抜くトレーニングをしているシーンがあるんです」

だからだろうか？ 思わず口が開いてしまう、何故か聞いて欲しい思えてしまう。この行動トレーニングの理由を、それを為す原動力となる彼女の夢の始まりの話を。

「使う得物は6発式の回転式拳銃リボルバー、日差しも強く空調も無い炎天直下の屋外で風もある、精密射撃をするのに全く適さない最悪の状態でも彼は延々とそれを続けた。100発じゃきかない、200でも300発でも足りないくらいずっとずっと一人で気が遠くなりそうなくらい延々と撃ち続ける」

銃で撃てば、人は死ぬ。

それでも銃をとらなければ、銃には対抗できない。

銃をとって人を殺さない、その為にはなんでもしようと思った。

そして何でもした、できることの全てをした、そうやって生きてきた。

全ては自らの抱いた信念の為、ヒトの身に余る余りにも傲慢でそれでいて何よりも優しいその理想を貫き通す為に、何一つ見限らない為にどうしようもないくらい不器用な彼はそうやって生きてきたのだ。「それを見て凄いつて思つて、あんな風になりたいつて憧れちゃったんです」

地に平和を  
Love & Peace  
そして慈しみを

真紅のコートを纏ったツンツン尖った髪の男、『人間台風』ヒューマンノイド・タイフーンと言うあだ名を付けられた人類初の局地災害指定を受けた伝説のガンマン。不殺の信念と共にヴァッシュコロシアス・ザ・スタンピード愛と平和を愛するスタコラスと逃げる男が謳い続けた理想の体現。そしてソレをなすために積み上げられたその努力と研

磨。浅からぬ数多もの傷口から血が滲み、泥と塵、汗に塗れて尚、輝きを失わない多くの人々を惹きつけるその信念に彼女は、山田<sup>やまだ</sup> 真耶<sup>まや</sup>というただ一人の存在は憧れたのだ。

「まだまだその背中は遠い……私にはあの理想は重過ぎる、今の私が背負えるのは自分ただ一人。でも……」

だからまず自分にあると分かっていた射撃の腕を鍛えた。徹底的に、死に物狂いで鍛え磨き遂には自らが気付かぬままに射撃の腕だけで国家代表の候補生次席に登りつめてしまっていた程に。だがそれでもまだ遠い、彼のように例え自分を殺そうと銃を向けた相手を相手に殺さずに無力化し救う事など出来ない出来はしない。何故なら私は弱いから、彼のように出会った全ての人の顔と名前を記憶し忘れない事も誰かの為に命を張る事も出来ない。銃の腕前すら届かない自分では彼の通った生き様をなぞる事は出来ない。でも……

「でもだからこそ、せめて私が担当した生徒達だけは、彼から、数多から見ればただ一握りの僅かであるのだとしても絶対に見捨てない、見限りなどしない。ちっぽけな理想だと笑われても絶対私は諦めない、引き返しはしない。だってその為に私は『教師』になったのだから」その理想に憧れても、同じ理想は抱けない。だから彼女は彼女なりの理想を抱いた、子供が好きで、教える事が好きで、誰かと一緒に笑っている事が大好きな優しい彼女は『教師になり誰かを守り見届けたい』と言う夢を描いたのだ。

「……あ、駄目ですね私。いくら天羽君が聞き上手だからって天羽君は生徒なのに教師が生徒にこんな話をするなんて」

そこまで語って山田先生はぼつが悪そうに自嘲の笑みを浮かべる。教師生徒以前に歳上である自分が歳下である時雨にこんな話をここまでしてしまうのだからなんて自分は情けないのかと、教師として大人として失格ではないかと彼女は思ってしまう。

しかし時雨は少し可笑しそうにそれを笑った。

「ふふっ……つい先程別の人からも似たようなこと言われたばかりです。でも良いじゃないですか、山田先生の理想<sup>夢</sup>は十分誰かに誇れるものです。本当に、貴女が俺達のクラス<sup>教師</sup>の副担任であって良かったと思

いますよ」

時雨は言う、まだ出会って一月も経たぬ相手であると言うのに彼は山田 真耶が『自分達の教師で良かった』と一切迷う事なく言い切ったのだ。教師からすればその言葉は、生徒から贈られるその言葉こそがこの世にある凡ゆる賞にも勝る何よりの名誉であり証明だろう。その人生が、夢が間違いではない、なかった事の証左、認められたという事の肯定なのだから。

そんな時雨の言葉に山田先生は驚き少し目を丸くする、だがそれも一瞬で次の瞬間にはいつもとは少し違う、まるで野に咲き誇り風に揺られる雛罌粟の花のような微笑みを浮かべていた。

「じゃあ続けましょうか。少しでも……ほんの少しでもそんな彼の背中に近づく為に、貴女の夢を実現させる為に」

「……はいー」

そして2つの銃声は鳴り響く。理想は遠い、だがだからこそ追い甲斐あるというものだ。それに既にその彼女の理想は半ばまで叶っている、ならば後はそのまま貫き通すのみ。

山田先生は再びグロック19を構え引き金を弾く。その弾道は彼女の理想を表すように真っ直ぐに的の中央を貫き続けたのだった。

尚、この後時雨が山田先生にその漫画を借りに行ったのは言うまでも無い。

〈39〉

一方その頃、一夏の方はと言うと今日の17時より1時間貸し切られた第3アリーナにて白式を身に纏い同じく打鉄改（一時的に時雨の専用機化していた為改造され並みの腕では制御しきれない為に他の生徒からの予約も外されていたので案外簡単に借りられた）を纏った箒と対となるようにその空で滞空していた。

「ふむ、久しぶりだな。こうやって一夏と一対一でしかも文字通りの真剣勝負の仕合をするのは」

その時ふと、箒はわざわざ一緒に量子化してあった金属製の鞘から引き抜いた葵の刃を確認しつつ何処か感慨深げに言う。

「ああ、前まではちよくちよく千冬姉が稽古をつけてくれてたからその時に一応刃引きの訓練刀で危なくなったらすぐ止める条件で仕合はやってたけど最近千冬姉が『免許皆伝には程遠いが基礎は出来たようだからこれ以上は私は教えない、後は基礎を中心に自分にとって最良のカタチに合わせて調整すると良い』って言って本当に教えるの辞めちまったからな。アドバイスを聞きに言ったら教えてはくれるけどあれは師範代としてどうなんだ?」

「まあ間違っではないだろうさ。千冬さんも実際父さんから天桜<sup>ウチ</sup>御神楽流<sup>の剣術</sup>の免許皆伝を受けてたけど今千冬さんがメインで使ってる剣術は御神楽流を下敷きに自己流にアレンジしたほぼ我流の剣術に派生してるし」

ただまあ切れないが鈍器としては一人前な刃<sup>とつか元から研いでいないだけ</sup>の潰された訓練刀で実戦形式の仕合ができる時点で普通に世間一般の常識からかけ離れた逸般人の所業であるのだが、周りにそんな人間ばかりしか居なかった2人にそこをツッコませられるだけの常識がないのが悔やまれる。いや常識がない訳ではないのだが、変な所でズレているには変わりないので「ない」と言われても否定できなかつたりするのが痛い

所だろう。

つまり全部時雨達が悪い

『おーい、2人共！話をするのも良いけどそろそろやり始めないとアリーナの貸し切り時間が過ぎちゃうよー！』

『そうですね、この後私とも模擬戦をするんですのよ？』

「あ、悪い」

「私もだ。済まない、ありがとう葉、セシリア」

そんな話ばかりをしていた2人はコア経由で送られて来た2つの苦言に少し気まずそうに謝り感謝する。3人とは違い葉は専用機持ちではないがセシリアにブルーティアーズのコアネットワーク通信の使用コードを借りる事でこの4人の会話に参加していた。

「では」

「ああ、やろうか」

話を切り上げ一夏は身体を半身にとり雪片式型を脇に構え、箒は葵を鞘に戻して居合いの構えを取る。

居合いは本来奇襲・カウンターの為の術であるがその鞘走りにより一瞬で剣速を加速させるその術は手練れともなれば一閃にて鋼を両断するだけの威力を誇る。

それに対し脇構えは腰の位置に剣を置くことにより足場を問わず安定感が増し相手の動きを見てからの肩に背負う形からの斬り下がないし下段からの斬り上げの選択が可能である、また副次的に刀と握る手が身体に隠れ相手からは初期軌道や正確な間合いを読みにくくさせる効果もあり実戦においての実用性は高い。

両者共に自己の最も得意な構えを持ち出した訳だが、問題はどちらの構えも共に『後の先』を奪る事を主とした構えである事である。

『Combat 戦闘開始 Start !!?』

「はッー！」

「シッ！」

セシリアの合図と共に2つの刃翼は奔り出す。2人にとってここはここが最初の勝負だろう、勝負とは初撃の優劣により勝敗が決まる事は少なくない。故に先を取るか後を取るかと言う事は勝負において無視出来ぬ要素であるが両者の間にまたがる距離は凡そ十数m、スラスト最大で互いに翔け抜ければ接敵までにかかる時間は数瞬しかない。だがその数瞬の間にも2人は先を取るか後を取るかの熾烈な精神的攻防を繰り広げるのだ。

剣閃がアリーナ中央にて交差する。

結局先を取ったの筈であり後を取ったのは一夏であったが後の先は取れず互いに刀を斬り合った程度であった。

「ふむ、単一仕様は使わないのか？」

が、だからこそ筈は一夏に對しわざわざ仕合中であるというのにそう問いかけた。単一仕様を使えば斬ち合う事なく私を葵ごと斬れただろう？と。

「単一仕様など甘え、剣一本で近接格闘戦が出来ずして自分を守る事も誰かを守る事も出来るものか」

「よく言ったー！」

それに一夏は答える、そしてその答えに筈は賞賛を送った。単一仕様を使わないのは驕りではない。確かに単一仕様は強力であり特に白式の単一仕様は文字通り“必殺技”足り得るものだ。だが必殺技なんてものはそう簡単にポンポン繰り出すものでも大安売りのバーゲンセールをするものでもない、そんなものにありがたみなんて感じないしそんな目にする事が多ければあつまり攻略方法とかを見つけられかねない。だからそう簡単にソレを使ってやるのは駄目だ。しかしそれは出し渋りではない、そんな事をするのは愚人のする事だ。やるなら一回ポツキリ、出したからにはその1発で決めねばならない。乱発するものではない、そんな雑なものであつてはならない。全身全霊、後先も考えず放つその一撃が最強でありそして最も自分がソレを信じる至高の一撃。当たれば相手が必ず死んで外れりや自分が死ぬ、だがそうだからこそソレは“必殺技”足り得るのだから。



「それに……自分にだけは、負けられない」

そして剣閃が疾るその一瞬、一夏が思い出すのはつい先日のことだ。



「織斑先生」

「ん、織斑か。どうした」

クラス対抗戦まで残すところ凡そ1週間となったその日の昼休み。昼食を早めに切り上げた一夏は職員室に居た。

「時雨や箒、葉にセシリア達からもISの操縦についてはアドバイスを貰っているのですが織斑先生にもアドバイスを貰おうと思って、次のクラス対抗戦に勝ちたいのです」

そして彼がアドバイスを受けようと会いに行つたのは彼の姉であり自らの所属する1年1組の担任、織斑千冬の下であった。

「ふむ、ではそうだな。19時に私の部屋に会い、その時間なら私も時間が空いているしプライベートな時間だ。今私は『教師』と言う公の立場であるからお前1人に掛かり切りになる事は出来ない、だがその時なら『姉』として私的にお前に色々とおアドバイスを出来るだろうか」

「分かりました、ありがとうございます！」

「良い、では遅れるなよ」

『織斑千冬が織斑一夏に何かを教える』、実を言うところの行為は現状中々にやり辛い事であった。織斑千冬は教師である、故に当たり前ではあるが彼女は教師として誰か一個人、特に身内等に対して私情を優先してはならない。それに彼女は世界初にして唯一の『ブリュンヒルデ』、世界最強でありその肩書きは第一線から退き教師となった今でも……いや実の弟もが搭乗者となつてしまった今こそが最も彼女を縛る鎖となる。先の一夏のIS適性発覚当時こそは上手く盾となつた、だが次何かが起こつた時にはこちらを傷付ける刃とならない可能性は無い。

故に彼女は公的な立場では尚更私情を挟む事が許されない立場に居る、だがそれでもそれ以前に彼女は姉でありただ一人の普通の女性である。私情を抱く事も家族を思う事もある、支えたい、助けたいと思ってしまう事など当然ある。そこで彼女は一夏達が入学する事の決まってすぐに学園長とある取り決めをした。

ひとつ、日頃教師として恥ずかしくない行いをしない事は勿論の事、織斑千冬関係の者が問題を起こした場合は学園長に判断を仰ぐ事(尚それ程大きくない問題に関しては彼女の判断で解決しても構わない)

ひとつ、信賞必罰は徹底する事

ひとつ、個人的な指導を行いたい場合は学校業務時間外に行う事

後に天羽<sup>若宮</sup>時雨が急遽入学する事になりその辺りの裏事情込みでの取り決めが更に追加される事にもなるが、この場合主に彼女が一夏達に物事を教える際に留意すべき点はこの3つである。

「さて……、ではアイツに教えるアドバイスの手順を考えておかねばな……一夏なら……アレだな」

千冬は自分の机から去った一夏の背中を見つつそう呟く。愛する弟の成長に感慨深くも嬉しげに微笑んだ彼女はそう考えつつ、業務机の上に置かれた今日<sup>龍田の竜田揚げ定食</sup>のオススメ定食(大)へと箸を延ばした。



19時半過ぎ、織斑姉弟は千冬が管理部に無理を言っ貸してもらった閉館後の第3アリーナにて互いにISを身に纏い剣を交えていた。

まるで宙を翔ける流星の如くスラストから光の尾を伸ばし刃を交える2機の内その内の1機はいと美しき白銀色の専用機。そしてもう1機、高速で振るわれる斬撃を『予め其処にその斬撃が来るのだと予見している』かの如くその全てを最小限の動きでもって軽やかに避

けては躲し、時にはその手にした刀でもって逸らす事で攻撃全てを無害化、まるで河の流れに揺れる柳の如く美しげに捌いているのはごく普通の鈍色の量産機であった。

「甘いー」

「くっ×」

白式を纏った一夏が雪片式型を横一線に振るうが教員用打鉄纏う千冬はそれをあつさりど躲し、代わりに上段から振り下ろされた葵が一夏の背中を強かに叩きのめす。ただでさえ少ない白式のシールドエネルギーがまたガリガリと削られていくがアリーナの使用設定が『訓練』に設定されているので白式には直接アリーナからエネルギーが供給され減少していたエネルギーは回復した。

「ぜえ……はあ……ぜえ……はあ……」

が、幾らエネルギーが常時供給され回復しても消費した体力とスタミナが回復する訳ではないし実際に刀で殴られたダメージが消える訳でもないので一夏と白式の疲労や損耗は積み重なるばかりである。

「一夏、イメージしろ。現実ならば敵わぬ相手でも必ず勝てるモノを幻想イメージしろ」

開始から凡そ半時間、最初の10分程度は準備運動を兼ねた軽い打ち込み稽古であったがそれも徐々にヒートアップし今や一対一の掛かり稽古へと変化して一夏は常に千冬へと有効打を求めて斬り掛かり続けていた。

千冬は斬り掛かって来た一夏を躲しつつ言う。

「そして常に思い浮かべるのは最強の自分だ、外敵など要らない。お前が本当の意味で鎬を削り命懸けで挑み戦っているのはその最強イメージの自分に他ならない」

千冬は繰り返す、何処かの正義の味方が言っていたが常に想像すべきなのは誰かではなく自分自身だ。目標ではない、限界を決めてしまいう己こそが最大の敵だ。

「故に」

残心の後、旋回した一夏が再び斬り掛かる為に刀を背負う様にして千冬に向け全力で呐喊する。

「自分にだけは負けるな。何度地に墮ち這い蹲っても、何度他の誰かに負け無様と嗤われようとも、その自分にだけは負けてはならない」  
が、それすらも千冬はあっさりを受け流して今度は背後に強烈な左回し蹴りを叩き込む。

「があっ☒」

「さあ、もつとだ！イメージしろ思い描け、そしてその幻想を打ち破れ。自分と言う壁全ては其処からだ」

しかし千冬に躲され更に回し蹴りを叩き込まれあらぬ方向へと突っ込んでしまった一夏だが完全には同じ轍は踏まぬと無理矢理体を捻って進路を転換、スラストを吹かして慣性に抗って強引に進行方向を元来た方、千冬へと入れ替える。無理をした所為でISに搭載されたPICがあるとと言うのに強烈なGが一夏を圧迫するがそんなものは食いしばった奥歯で噛み砕き、吼える。

「うおおおおおおおおおおっ!!?」

一閃、単一仕様を使わずにただ本人の技量と全力で雪片式型を振り続け我武者羅に磨き上げた想いの強さを込めた本日最高の一撃、威力・速度共に申し分無く確実に捉えたと自信を持って言える刺突が放たれる。

「ふっ、良い突きだ」

が、千冬を捉えた筈のその一撃は割り込まれた彼女の葵に火花を散らして阻まれた。そして千冬は雪片式型に刀身を絡め、鏢で天に向け打ち上げる。

「マジ……………かよ…………」

届いた筈、そう確信していた筈の切っ先がいつのまにか消えその柄が手の内からすっぽ抜け気付いたら地面に突き刺さっていたと言うなんとも理不尽な現実に一夏は疲労困憊の朦朧とした意識の中でそう呟く。フラフラとかろうじて飛んでいる…………いや、もはや飛んでいると言うよりも浮いていると言った方が正しいような、一瞬でも気を抜けば墜落してしまいそうな状態であった一夏の腕を千冬は墜落しないように掴みゆつくりと着陸した。

「よし、それくらい出来るのならアレもちゃんと習得出来るだろう。」

寧ろ私の想定よりも早く出来そうだ、明日から本格的な特訓を始めるぞ」

「……………ういつ……………す」

しかしその結果に満足したのか千冬は一夏を支えつつそう言う。……………ただニヤリと少し嬉しそうにする千冬と反対に今日よりも遥かに大変な今後の特訓を前に若干目が死んでいた一夏だった。



「はあああああああつっ！」

「せえええええええいつっ！」

模擬戦も徐々にヒートアップし、20合も打ち合えば互いに熱が入って次第にその速度威力は加速度的に増加する。更に仕合は剣術だけでなく死角からの殴打や蹴り等の体術をも織り交ぜた実戦的なものへと変化しており、文字通り壮絶な格闘戦の様相を呈していた。

「くっっーやはり……………」

「ちっ……………決定打がないな」

開始より時間にして10分が経過し数えて92合目にもなろうとしたその時、相変わらず有効打を得られずにいた2人は互いに1度間合い外に下がる。いや、攻撃が全く当たらない訳ではない。互いにそれなりのダメージは与え合いシールドエネルギーは削っている。一夏は豊富な体力とスタミナ、白式の高機動・高出力を活かした攻撃を行っているが箒も時雨程ではないが自在に非固定武装である機銃と葵の搭載された盾を動かし一夏の動きを阻害、時にはカウンターを仕掛けており、2人が実感している通り互いに決定打を欠いた状態であった。

「仕方ねえ……………やるか、できればコレはもつと完成度を上げてからやりたかったんだけどな」

一夏は覚悟を決める。勿論やるのはわざわざ姉たる千冬に請いて教わったアノ技、未熟故にお披露目にはまだ早いとクギを刺されていたが熱に吞まれた彼にはそんな事は細事でしかない。

「行くぜっ！」

「来いっ！」

気合いの一声に一時的に低下していた警戒レベルを瞬時に引き上げた箒は葵を正眼の構える。

ゾクツ

「ッ!?」

一瞬脳裏に走った既視感と直感、それに導かれるままに彼女は反射的に葵の位置を正眼から右胴へとズラす。直後、一夏の姿が箒の視界から消えそれと同時に右胴前に置かれていた葵に強烈な衝撃を受けた。

「なっ☒これは瞬時イクニシヨン・ブースト加速!??いくら一夏が専用機乗りとはいえ乗って数週間の人間が出来るものではないぞ!?」

が箒にはそのカラクリ（瞬時加速に人が認識しづらい斜めの動きを組み合わせた縮地の一種）が簡単に理解できた。以前見た事があったのだ、実際にではなくテレビ越しではあるがその技を、その動きを。ただ今はその既視感と直感に彼女は救われた、もしあの時彼女が直感で葵の構えをずらさねば確実に雪片式型は彼女の胴を直撃していただろう。

「特訓したんだ！千冬姉に頼んで！」

「なっ!??なんだって☒ズルいぞ一夏！なんで私も誘わなかったそんな名前からして格好良さそうな技！千冬さんの得意技じゃないかそれ！」

「馬鹿っ、代わりに死ぬ程シゴかれたわ俺が！お前もそんなの受けたいのか？」

「えっ……それは……まあ嫌だな」

「デスヨネー、分かってるよコンチキショウ！俺はMマじゃねえ！って取り敢えず喰らえやオラアッ！」

尋常ではない速度で斬り掛かって来られた事に驚愕する箒に何故か真面目に答えを返す一夏だったがどうしてかこんな殺伐とした場であると言うのに最後は漫才と化してしまったが気にしない。

『瞬時加速』、別名『イグニツシヨン・ブースト』

ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、翼内部に一度吸収・圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速する技術の事であり、その速度は使用するエネルギーに比例する。尚吸収するエネルギーは外部のエネルギーを使用しても可。

元々千冬が得意としていた技術であり、これと彼女が生来から持ち鍛えてきた近接戦闘能力を組み合わせた事で彼女は相手の反応速度以上で接近、両断する事で2度続けてブリュンヒルデの座に君臨する事ができていたと言っても過言ではない。

ただ千冬曰く「1度放出したエネルギーを再度ブースターに吸収させ圧縮、それを急激に放出する事で爆発的加速を得る」という理屈は百歩譲って分かるがそもそもなんでブースターがそんな事ができるかなんて全く理解も納得もできないのだが……と言うかそんな事できるなら普通に使用したエネルギーを再吸収して幾らでも飛べるようになるだろ普通」とか挙げ句の果てには「それにアレはなんでそんな事ができたのか込みで開発者たる束すら想定していなかった超謎現象だからな」と言う呆れてものも言えないぶっちゃけ話が付いてきたある意味曰く付きの技術でもあったりする。

が、それでも結果的に言えば一夏はパターン分けしたオート操作を一部マニュアル操作で場合により組み合わせる事でそれをある程度使いこなせるようにはなった。なったのだが……

「……まあ、加速途中で曲がれないんだよね、コレ」

そう、致命的……程ではないがこの技には欠陥が多々あってまずそもそも前提条件としてスラスタ及びブースター出力制御及び稼働制御をオート操作ではなくマニュアル操作でできなくてはならない。スラスタとブースターの役割はただエネルギーを噴き出す事だけではない、加速・減速の推進や速度調節の他に接地機動や飛行時の方向制御や姿勢制御をも行なっておりそれは人ではほぼ不可能な超高度なコンピュータによる緻密な計算とレイコンマ数nm単位での微調整が全て全自動で行われている。そんなその全てを改めて人が完璧に使い熟せるかと言われればそれは勿論極一部の例外を除いてノーである。ただ一夏のような似非マニュアル操作くらいは練習すれば

感覚も掴めてなんとかそれなりに程度になら誰だつて出来るかもしれない、だが考えてみて欲しい。この技術、実際使うのは実戦の真つ只中である。戦いに集中している最中にこんな馬鹿みたいに神経の使う繊細な作業ができるだろうか？まあ大半の人間は無理である。これが最大の難関であり、それが故に世界でも戦闘中に真つ当な瞬時加速を実行できる人間が両の手の指の教程しかない最大の理由だ。ただ教えたその本人は初代雪片を振る片手間に難なくマニュアルで操作していた点については最早頭を抱える事すら阿保らしくなってしまうのは悲しい現実だろう。

また使用中は急加速に伴う空気抵抗や圧力の問題で軌道変更・修正ができず、直線的な動きになってしまつたりその他にも身体に掛かるGや慣性等々運用上の問題点は多い。技術としてはハイリスク・ローリターン、確実にそれを使い熟せる者以外はなんの使い物にもならないやたら危ないだけのただの突撃となんら変わらない。

ただそれでも、  
「間合ただ何も考えずに必殺の領域突つ込むだけでもいを一氣に詰めて 懐懐に潜り込むだけでも十分だろつ？」  
「はっ！ 違うない!!？」

縮地に及ばず、神速に至らず……されどその歩みは旋風よりもいと疾き

2度目の瞬時加速、疾風と化した一夏の間合い詰めに対し箒はまるで慌てることもなく1度葵を鞘に納める。

「偽・秘剣、燕返し!!？」

「なんの！ 純粹な剣技ならば新鋭専用機相手だとて旧式量産機であろうと喰らい付いてみせる!!？」

神速抜刀、雪片式型と葵が十字状に交差して打合ち合わされ火花と閃光が飛び散る。風を纏つた三閃と煌めき宿した一閃が正面からぶつかり合い、その専用機と量産機を隔てる出力差がその担い手の技量の差により覆されその威力は完全に相殺される。が、その結果その代償として雪片式型は弾き飛ばされ葵と打鉄の腕部装甲システムが大破してしまつた。

「……しまつた、やり過ぎてしまつた」



「……済まん。熱くなり過ぎて『強化』どころか『風』と『光』まで使つてしまった」

「それは私もだが……この損傷どうしよう」

一夏は唯一の武装たる雪片式型が手から弾き飛ばされ、箒は手放してはいないが葵だけでなく腕部装甲が破損してしまいこれでは武器を持ってそうにない。勝負としては両者攻撃手段喪失による引き分けと言ったところだが、つつい熱が入り過ぎてやり過ぎてしまった2人、特に箒の方はなんとか形は保っているもののヒビが入り所々刃の欠けた葵とプスプスと白煙と時折パチパチと紫電を放つ腕部装甲を眺め冷や汗を流す。まさかこうも簡単に故障するとはとも思う2人であるが、生身で岩をも砕ける『身体強化』に凶悪な威力を誇る各属性魔法を重ね掛けしているのだからいくら現代技術（何歩かさらにその先に行つてゐる気がしないでもないが）の粋を集めて造られた兵器に近いISとは言え『魔法』の『魔』の字もない只の鉄の塊に耐えられる筈もない。従つて残念ながら当然な結果である。

そしてこの後、一夏と箒は折角苦勞して短時間で修理した打鉄改をまた壊されて涙目になった技術部の人と管理部の人達に開幕土下座を喰らわせ事態を混沌化させ、遂には職員室で残業をしていた千冬までも召喚する羽目になり結局2人は千冬からのOHANASSIに2時間、反省文（20×20の400字詰）5枚の処分を受ける事となった。またとぼちりに近いがやり過ぎるまで止めなかつた栞とセシリアについては監督責任して別に千冬からお説教と称したOHANASSIを30分を受ける事となつたのだつた。

## 開幕 クラス代表対抗戦、銀河の妖精来日

〈40〉

成田国際空港、日本の首都東京の玄関口でありそれと同時に日本そのものの玄関口といっても過言ではないその空に、一对の巨大な銀翼が現れる。

『こちらフロンティア航空  
This is B787,  
ボーイング787機  
a Frontier Airlines  
成田国際空港管制塔聞こえますか?  
Reply to me Narita Control?』  
『B787, This is a Narita Control.  
ボーイング787機へ  
ようこそ。——我が日本は銀河の妖精、ミス  
シエリル・ノームの来訪を心より歓迎する』

1人の歌姫を乗せた翼、その来訪を歓迎する者もいれば、

「えっ、本当にシエリルのコンサートのチケット取れたの☒」  
「フフッーン、ランカの為なら俺に不可能はない！」  
「ありがとうお兄ちゃん！愛してる！………やったああ！オーディカ  
ルチャラー！もう最高っ！」

歓喜する者もいて、

「くだらねえ、俺なら5回は回れる」  
「たかがコンサートの余興だぜ？リスク高過ぎだつて」  
「俺ならできる」  
「へえ……相変わらず自信家だね、歌舞伎の女形おやまのアルト姫は」  
「っ！今なんて言った!!？」

複雑な顔をする者もいれば、

「さて、我々の計画の始まりだ」

「Operation Carnival」、11年前に失われた筈の鍵とその全ての運命の集約される地、始まりの島 日本を舞台とした大儀式」

「まさしく『carnival<sup>祭</sup>』ですな」

「まさか、災礼の間違いだろうか？」

その来訪に嗤う者もいる。

されどその歌姫は極東の島国へと舞い降りた。

「はあ……」

「大分お疲れの様ね」

「時差ボケと乗り物酔いの所為で最悪……」

「取材……キャンセルします？」

「グレイス、アタシが誰か忘れたの？アタシはシエリル、シエリル・ノームよ」

これは無限の成層圏と共に歌われる物語。銀河を巡る歌わずには、飛ばすにはいられなかった少年少女の物語のその序章である。



月もかわって5月、遂にやって来たクラス代表対抗戦当日の朝。体育館に集められた全校生徒は放送部生徒の司会の下で開会式及び大会スケジュールと組み合わせの発表を受けていた。

【本日スケジュール】

??9：00～9：10 開会式

??9：30～ 3年生

?? 1 1 : 3 0 \ 1 2 : 2 0 昼休憩  
?? 1 2 : 3 0 \ 2 年生  
?? 1 5 : 3 0 \ 1 年生  
?? 1 8 : 3 0 \ 1 8 : 4 0 閉会式

〵〵〵

### 【1年生】

第2アリーナ第1試合 15 : 30 \

3組代表 アリサ・イリーニチナ・アミエーラ v s . 4組代表 更

### 識 簪

第2アリーナ第2試合 16 : 30 \

1組代表 織斑 一夏 v s . 2組代表 凰 鈴音

### 【注意事項】

試合はIS委員会規定の大会ルールに基づいて行われます。全試合においてアリーナ観覧席は解放されず、下級生は上級生の試合を観戦し今後の参考にします。なお、個々の試合前ウォーミングアップは第1・第3アリーナもしくは各試合会場の開始30分前に行ってください

IS学園教務課課長 織斑 千冬

「え……マジか」

「へえ……3年生から先にやるのか。しかも1回戦目で2組と当たる」と

そして開会式も終わってそろそろと他の生徒が体育館を退去していく中、一夏と時雨は組み合わせの映された投影型スクリーンを見上げつつそれぞれにそう呟いた。

一夏はあの酢豚騒動（時雨命名）の後反省し毎日鈴の下に足しげく通い謝罪とご機嫌取りを繰り返したのだが相変わらず肝心の部分が

思い出せず、鈴もまた今さらもう一回言い直すなどという羞恥の極み  
を実行出来る訳もなく2人の関係は平行線を辿り遂には一夏が参つ  
て逆ギレ、それに鈴もまた反ギレして大喧嘩に発展した。そして結局  
は騒ぎを聞き付け駆けつけた栞と箒の仲裁の下でクラス対抗戦の勝  
敗でこの騒動の決着をつける事で手打ちとなったらしい。

「でも実際のところ専用機持ちの国家代表候補生相手に善戦できるの  
か？少なくとも勝てる確率なんてほぼゼロだろ？」

「ゼロじゃないだけマシだ……と言いたいところだけど俺もぶっちゃ  
け不安だ。栞が探してくれた甲龍の公開データも見ただけど機体の安  
定性も高いし、その上詳細非公開の特殊装備まで積んでるとか乗り始  
めて数週間の奴が挑む相手じゃないだろコレ。普通」

「まあな、でもそれがお前のケジメでもあるしクジなんだから仕方な  
いだろ。確率にして24分の1だ、そんな事もあるさ」

「そんなものかなあ……？」

試合当日にきて不安になってきたのかいつもは見せない不安げな  
一夏に対し時雨はそう言う。しかしそう言った時雨もまた専用機持  
ちである1組と2組（4組は専用機が未完成な為今回は訓練機で参  
加）が1回目からぶち当たる事にくじ運よりもどちらかといえば作為  
的なものを感じていた。実際に教務課としては機体や下地となる本  
人にも力量差があり過ぎる専用機同士を最初にぶつけ専用機の無い  
代表にも1回戦目は勝ち上がって貰いたい、という思惑もあつた為に  
その予想も強ち間違いでもないのかもしれない。

「でも良かったな一夏、午後からだ。これで朝一からだつたら色々  
ぶつつけ本番でやる必要になつただろ」

「おう、折角栞達と作戦を考えたのにまあ仕上がりがイマイチでな  
……だが代わりに俺の胃が緊張とストレスでキリキリしてきたけど」  
「程々にしておけよ、緊張も勝負には大切だが度が過ぎれば勝てる戦  
いでも勝てなくなる。ほら深呼吸、身体に入った余計な力は抜いて3  
年生の試合が始まる前に軽く体を動かしてリラックスして来い」

「ウッス、そんじゃあちよつと軽く走ってくる」

「3年生の試合が始まる前には観覧席に帰って来いよ」

いつまでも体育館に居座っては邪魔になるだけなので一度立ち去る事にした時雨と一夏は一旦その会話を終えてその出入り口前で二手に分かれる。一方は試合会場となる第2アリーナへ、もう一方はいつも走っている外周コースと向かう。

「何事もなく無事終われば良いんだけどな……」

だがアリーナに向かう前、ふと一夏の背中を眺めた時に感じたその予感に時雨は思わずそう呟いた。人間悪い予感によく当たると言われるが時雨のそれはシャレにならないほどによく当たる。実際、この日この後に起こる出来事など時雨には、いや世界の誰もが予想だにできなかつた。



一方その頃、太平洋上にて……

【到達不能極】

それはどの陸地からも最も遠い海域、正確には南緯48・89度、西経123・45度。そこは無人の島嶼すらほぼ存在せず、軍事・民間の航路からは大幅に外れた本来なら艦船は勿論、人っ子一人見かけぬ筈の海域である。

そう、筈であつた。

水面の底、陽の光も届かぬ深海に翠の一对の光が灯る。そしてそれはひとつではない。

一、二、三、四、五……

もはや両の手の指の数では足りず、されどその数はまだまだ増えてゆく。そしてその数は遂に100をも超えた。不気味に揺らめくその光、それは水面の先、遙かなるソラへと向けられそれらは何かに導かれるかのように人知れぬ深海の底より昇っていった。

………ソラの果てよりやって来た、その物語の始まりはすぐそこ

に。

## 譲れぬ闘い

〈41〉

午後、2年・3年生を試合を経て遂にやってきた1年生の第1試合は国家代表候補生同士による47分もの激闘の末、その勝負を制したのは4組代表の代表候補生であった。

そしてついに第2試合、1組代表対2組代表の試合が今始まる。



『白式の射出機カタバルト結合を確認、射出機通電。射出出力ボルテージ安定、射出準備完了。射出タイミングは織斑君に譲渡します』

「了解。白式、織斑 一夏。出撃する！」

電磁カタバルトより射出された一夏がその低い空を舞う。いつかの誰かさんのようにバレルロールをこなしつつ飛び上がったその先に、その紅い龍は居た。

「漸く来たわね、一夏。待ってたわ」

「待たせたな、鈴」

大陸の紅い龍、神龍の名を借りその名に恥じぬ威圧感とチカラを秘めた赤い大国の威信が込められたその最新鋭機にその身を包んだ鈴音は一夏が身に纏うその白き翼を待ち受ける。

遂に正面から相対する事となった2人は互いに己が得意とする得物を構えて向かい合った。

「さて……………何か言い遺す事はあるかしら？」

「無えよ……………っておいちよつと待て、その言い方だったら俺が死んでんじやねえか。そんな事より、分かってんだろうな？この勝負……………」

「勝った方が自分の言い分を通す。覚えてるわよ。どつかのお馬鹿さんと違って」

「また人の事を馬鹿って言いやがったな!?!?仕方ねえだろ最近色々



あつて日常が濃過ぎて俺だつて大変なんだ！それに馬鹿つて言った方が馬鹿つて習わなかつたのか！」

「この馬鹿一夏、鈍感、唐変木、朴念仁！」

「なんでお前にそんなに罵倒されなきゃいけないんだよ、この貧乳！」  
途中まではまだ良かった、途中まではまだただの喧嘩の悪口の言い合いとしてはマシな程度レベルであつたが2人共言い合いの最中で徐々に互いに熱くなり悪口が罵倒に変わつて遂には一夏の方が鈴音に対して禁句を口に出してしまつた。

「ひつ貧乳といったわね☒ 貴様コンプレックスを持つている乙女に対して絶対言つてはならない『貧乳』と言うフレーズを言つたなああああ☒」

「喧しい！知つた事か！悪口を言い合つた時点で50歩100歩じゃゴラア☒」

鈴音も一夏も互いに吠える。ほんと、確かに一夏の言つた通り50歩100歩でしかも周りの人が思わずズツコケそうな程低レベルな口喧嘩である。ただそれが口だけでは済まない、ISという強化外骨格を纏つた殴り合いの喧嘩に発展するのはどうしようもなくこの後ある試合の予定を考えればどうしようもない事であつた。

『Open 試合開始 Combat!!?』

「取り敢えず……」

「ブツ飛ばす！」「ブツチギル！」

こうしてどうしようもなくしようもない、1年生最大の目玉と言われた1組と2組のクラス対抗試合の火蓋は切つて落とされたのである。



一方少々時間は巻き戻り、1年生専用割り振られた観客席では時雨・栞・箒・セシリアの4人組（本音は4組にいる友達の下に移動しており不在）がアリーナの丁度中央部にて浮遊する鈴音の姿を眺めていた。

「アレが中国の最新鋭、第3世代型IS（シエンロン／こうりゅう）「甲 龍」。なんだか刺々しいというかやけに攻撃的なフォルムだな」

「確かに、装甲に塗装された赤と黒のカラーリングといい機体についてた角（スパイク）といい、何処か物々しいデザインですわね」

彼女と時雨達の居る観客席にはそれなりの距離がある為に一応会場の幾つかの場所に設置されたカメラから撮られた映像が観客席からも見られるようプログラムとして頭上に展開されているが専用機持ちである時雨とセシリアには関係無い。ぱつと見は肉眼で見ているように見えても待機形態になったISを通じて見ているので普通に肉眼で見ている筈の人よりは数百倍鮮明かつ正確にその姿を観察できる。ただししかし2人がハイパーセンサーを使って見ているのに気付いた栞と箒は「2人だけズルイ」とその映像の公開を要求、序でにそれを聞きつけた他の1組の生徒からも「ズルイ」、「ケチ」と大合唱をくらった時雨とセシリアは手分けしてその映像を1組全体に公開する羽目になり一時的にはあるが正直試合の観戦どころではなくなってしまうたのは全くの余談である。

それはさておき  
閑話休題

「それよりもさ……言う機会を間違えてるのは百も承知だけど私、『シエンロン』って聞いたら龍玉の神龍（シエンロン）しか思い浮かばないんだけど……3人はどう？」

「……言うな、多分その原作（漫画）を知る日本人ならまずそれを思い浮かべる」

「いや、今日の外国に於ける日本漫画ブームのおかげで日本以外のその手が好きな人にも絶対思い浮かべさせられるだろう……現にほら彼処に居るロシア代表候補生の顔を見ってみろ。『なんだかなあ……』って顔をしているぞ？」

「本当ですわね……」

そんなこんなで時雨とセシリアの作業が一段落を終えて漸く再び席に戻って来た頃、ふと栞がみんなが敢えて触れていなかった部分に触れる。というか敢えて触れずにいた部分について話題に振られた3人は三者三様微妙な表情を浮かべた。因みに勝手に箒に一例とさ

れた3組のロシア国家代表候補生もまた原作を知っているのか微妙な表情を浮かべていたりする。

「お、一夏も来たみたいだな」

その時漸く本試合の主役の片割れ、一夏がカタパルトの力を借りて天を舞う。打ち上げられた白き鋼はいつかの誰かさんの如き軽い曲芸飛行を見てその低い空に飛び上がった。

「出てきたとたんに曲芸飛行とは余裕だな、観客へのサービスも忘れないといったところか？ 全く、アイツも一体誰に似たんだか……」

「エー、誰ダローネ。ボク分カラナイナー」

「……時雨さん、片言になってますわよ」

「心当たり大有りって感じだね」

箒のジト目に思わず目を逸らして片言になってしまいう時雨にセシリアと栞は苦笑いをこぼす。ただ言い訳にも聞こえなくが時雨達がわざわざ射出直後にそんな曲芸飛行を行う理由は機体の動作確認も兼ねている為全くの無駄でも格好を付けている訳でもない事だけは明言しておく。ホントダヨ？

そして漸く本試合の主役が揃った訳であったが何故か始まったのは試合……ではなくどうしもなく低レベルな小学生の口喧嘩であった。

「……」

「……ええ、ええ。なんで喧嘩を始めたんだあの2人？」

「いえ、それ以前にコレ公衆の面前ですて大丈夫な事ではありませんわ……」

「確かに……な。全く……あの2人は……はあ」

「乙女の禁句を「どうでもいい」って言い切るのはちよつとダメだと思うし7割方一夏が悪いけど、確かにこれはどっちもどっちだよ……」

それには時雨は啞然とし、苦労人の箒が額を押さえて常識人のセシリアと栞は溜息と共に頭を抱える。ついでに今頃管制室では絶対に織斑先生も頭を抱えてそうだな……と思わず同情してしまったのは仕方ない事だろう。

とは言え、

「とは言えどだ、試合自体は悪くはないようだな」

「……本当ですわね、てつきりもつとお2人共もつと感情的な所為か直線的な動きになるものかと思っていましたか」

「ふむ、攻撃は苛烈だがどちらとも共に致命的になるような隙はない。やはり口はああでも頭と体はちゃんと戦闘用に切り替わっているみたいだな」

罵り合いの程度はそれはもう酷いものだったが試合内容自体は悪くない、寧ろほぼ初心者である一夏が1年で国家代表候補生に上り詰めた才女鈴音相手に上手く雪片式型で2本の青龍刀と打ち合っているのだから想定以上の良さと言えよう。彼女もまた中々の腕の持ち主ではあるが剣の腕は一夏の方が幾枚か上らしく、機体の高機動身軽特化ささも相まって近接戦では彼女を翻弄し徐々一夏の方へと勝敗の天秤は傾いていた。

『……ふんっ、中々やるじゃない一夏の癖に』

斬り合う事十数合、時雨とセシリアのハイパーセンサー経由で鈴音の声が聞こえる。あの高速機動中かつ剣戟の最中であつてもこれほどクリアに音声が選別・習得できるハイパーセンサーはやはり凄い。

『「癖に」は余計だ「癖に」は』

剣を振るう合間に一夏は先程の鈴音の台詞に対し苦言を呈しつつ、彼は剣を振り抜いた後にそのまま彼女の側をすり抜けて残心し一旦距離を取る。鈴音は一夏の一撃を受け流す事には成功したが衝撃による硬直停止中であつたのと基礎機動力の差からその追撃は不能だった。

『それに白式の特性も俺の剣術に上手くマッチしたからな、近く距離にかけてなら先に反応して動ける俺がお前の一步先を行く!』

ワンオフアビリティ、れいらくびやくや 単一仕様能力、零落白夜——オーブン 展開

そしてそのチャンスを逃す程、一夏は愚凡でも甘チャンでもない。硬直による数瞬を狙い一閃、斬る瞬間だけ展開されたソレに交差した青龍刀を難無く両断され、しかも返す刀で文字通り相対者だけでなく搭乗者までも殺しかねない必殺の2度撃ニノち要太刀らずが一夏の必殺の間合いに捉えられた鈴音に迫る。

『はあああああつ!』

『やるわね……』

迫る刃、必殺されどそれに迫まられている筈の鈴音に焦りなど欠片程も無かった。

『でもアタシが誰だか忘れてない？』

ガシヤコン

甲龍の肩パーツから何かアンロックが解除された音が鳴る。それと同時にそこにエネルギーが供給・圧縮されている事が警報として雪片式型を振るわんとする一夏とそれを見ていた専用機持ち全てに表示された。

Emergency  
警告、甲龍非固定浮遊部位兵装に高エネルギー反応を確認

『っーしまっ』

絶対切断能力を宿した切っ先が鈴音の絶対防御に触れる直前一夏はその鈴音の意図に気付き無理矢理体勢を変えようと足掻くがもう遅い。

『肉を断たせて骨を断つ』、武器も装甲もシールドエネルギーだつてそれくらい幾らでも食らわせてあげるわ。でも、勝利はアタシが頂く！』

空が爆ぜる、それと同時に今まで空にいた筈の一夏は轟音と共に地面へと墜落した。

『第三世代非固定浮遊部位兵装【龍咆】、この龍の咆哮でもって身も心も地に墮ちるがいいわ!!?』

不可視の砲身・弾頭による絨毯爆撃が一夏の墜落した地点を中心とし半径10m以内を無慈悲にも抉り薙ぎ払う。それは高空域にて滞空・砲撃を続ける鈴音の足下まで土煙が立ち上りセンサーで捕捉出来る限りギリギリまで続いた。

『センサーロス目標、でもまだ生きてる筈……ちよつち奮発してバラ撒きすぎたかも』

熱くなっていたのもあるが撃っている途中になんだか楽しくなつて後先考えずにばかすか打ちまくった結果、眼下の視界を物の見事にそこに広がる土煙に視界を遮られた彼女は後悔しつつも一夏による奇襲に備え高度を取らんと上昇を開始する。が、それは一歩遅く砂煙を目隠しに背後に回った一夏が今まで隠していた奥の手であった瞬間

時加速を使用しその煙を引き裂いて肉薄してきてしまった。

『背後、取ったあああああつ！』

『なっ☒墜ちろ!!?』

それを迎撃する為反転しつつ砲身なき砲が一夏へと狙いを定めたその時、事態は最悪へと動き出した。

『非常事態発生、当I S学園に対し日本国権限に於けるEVA―2が発令されました。全校生徒は至急速やかに最寄りの非常退避所<sup>シェルター</sup>に退避して下さい。繰り返し、全校生徒は至急速やかに最寄りの非常退避所に退避して下さい』

『非常事態により全試合中止、アリーナ内の防護壁及び隔壁<sup>シャッター</sup>を緊急閉鎖します』

突然鳴り出した警報と閉鎖される隔壁、赤い非常灯へと切り替わった館内に生徒はパニック状態を起こした。

「っ☒非常事態ですって☒そんなっ！」

「ひっ!!?」

超広域ジャミングにより索敵能力低下、超高エネルギー体接近。数8ないしそれ以上、距離2000

「全員伏せろおおおおおっ!!?」

時雨は叫ぶ。しかし時すでに遅し、鳴り始めた警報の直後、その叫びとぶつかり合う一夏と鈴音はアリーナそのものを揺らす轟音と悲鳴に掻き消された。



その通報が第2アリーナ管制室、山田麻耶と織斑千冬の下に届いたのはアリーナ崩落の実に数分前であった。

「……………」

審判役である山田先生は兎も角、千冬はこの試合の審判ではないものの自分の担当するクラスの試合であると言う事でモニターや管制

室の窓から見える白式と甲龍が時には砲火を交え（といっても遠距離武装の無い一夏は専ら回避するばかりではあるが）、時には激しい斬り結びを繰り返す白と赤の喰らい合いを監視していた。

「……最初はかなりぐだぐだでした。が今はとても良い感じですね。先輩」

「ああ……そうだな、全くだ。あのバカ共が、観衆の真ん前でよくもあんな事ができるものだ。全く……姉である私まで顔から火が出そうだ」

「あははは……織斑君も鳳さんも少し感情的になり過ぎてましたしね」

「気遣ってくれているの有り難いがアレは100歩譲っても少しとは言わんぞ山田先生」

試合開始前にバカ2人が繰り広げた醜態に対する山田先生の気遣いの優しさに目頭が熱くなりそうな千冬だが、彼女にとってそうも言っていられない。

「あの時と同じ……嫌な予感がする」

「織斑先生？」

「山田先生、何かあるかもしれない……いや何かあるだろう。注意しておいてくれ」

「は、はい」

迫る予感が世界最強の心臓を鷲掴みにした。つい先程から千冬の脳裏にチラつき始めた7年前の、あの時と同じ昏い陰。数年前にも1度あったがそれとは比べ物にならない程濃厚なまでの嫌な予感に千冬は不安でたまらなかつた。

「……何かが起こる、きつと……悪い事が」

隣に座りコンソールを弄る山田先生にも聞こえぬくらい小さな声で呟いた千冬は不吉な予感に押し潰されぬよう、おもむろに管制室に置かれていたコーヒーマーカーへと手を伸ばす。

「ん？このカップは学校の備品では無い？」

「あ、それ私の私物です。元々ここにあった筈のコップが少し前から行方不明らしいので自前で持って来てみました」

「ほう、そうだったのか。わざわざ済まないな、私も気付いていれば良かったのだが」

そしてコーヒーをいつもは飲まないブラックで注ぎ一度カップの縁に口を付ける事で漸く少し落ち着きを取り戻した。

「いえいえ、そんな事……っ☒大変です織斑先生」

「ムグウツ☒げほっ……かはっ……どうした何があった!?!?」

「これをー!」

再びカップを傾けたその時、管制室に届いた一通の通信が事態を急展開させる。つまりそれは千冬の悪い予感が的中したという事の証拠であつた。

「っ、EVA-02だと☒」

EVA-02

日本国権限に於けるIS学園に対する緊急事項、所属不明部隊によるIS学園襲撃の可能性を認む場合日本国政府及び陸海空自衛隊はIS学園に対し通報を発し事態の進展・規模によっては軍事介入を行う

どの国家にも属さず中立と独自の法、超法規的権限と一定の自衛戦力を保有するIS学園に対し日本国が持つ学園が日本国内にあるからこそ国連で正式に認められた唯一の干渉手段。それこそが Emergency Vigilance Alert<sup>緊 急 戒 告</sup>である。そしてその中でも第0から第2までである分類の中でもこの第2種の警告は他の種よりも緊急性がより高く、自衛隊戦力による軍事介入がある事を示す警告でなく通告である。

山田先生に見せられた通信に書かれたその文書に、その意味に、どれ程事態が最悪なのかを理解してしまい思わず千冬は唾然とした。

「っ、全館第2種警戒態勢! 非常事態だ、緊急避難警報及び警備課に出撃準備命令。非常赤色灯に電源切り替え、全隔壁緊急閉鎖。試合は中止、生徒の避難を最優先だ」

「はいっ……司令室より入電、当該アリーナに未確認飛行物体が急速接近中、退避せよと!」

「何っ☒シールド最大展開! ジェネレーターが吹き飛んでも構わん、



生徒のシエルターまでの避難時間を稼げ！」

「駄目です間に合いません！来ます！」

千冬の指示を受け山田先生がコンソールを操作、シールドジェネレータの出力を一杯まで引き上げる傍らそのコンソールの端にあつた非常警報装置のカバーを千冬へ叩き割り中の赤いスイッチを押し込む。しかしその足掻きも一歩及ばず、警報がアリーナに鳴り響くと同時にアリーナの天井とエネルギーシールドがブチ抜かれてしまった。

轟音、衝撃

アリーナが、否<sup>いな</sup>学園島そのものが揺れる。

「ぎゃああっ☒」

「くっ!?？一夏っ、鈴っ！」

その衝撃や凄まじく、衝撃はアリーナ内でも特に堅固な防御装甲と対音・熱・震構造の施され有事の際には前線司令室ともなる管制室をも揺らし轟く。それには流石の千冬でも耐えられなかつたのか椅子に座っていた山田先生と同じく姿勢を崩してコンソールに叩きつけられた。

「一体何が……」

手から零れ落ち割れカップから四散しまったコーヒーの事などものはや気にも留めず、叩きつけられ痛む身体のを無視して2人は身を起こす。そして辛うじて割れも罅も入っていないかつた特殊防弾ガラスが填められた窓から眼前に広がるそのアリーナの惨状を目にした。

「……………」

「……………なっ、なんて事だ」

崩落する天井、降り注ぐ建材にバリアの碎け散る場違いな程に涼やかな音色と悲鳴、濛々と立ち上がる視界を塗り潰した砂塵に一夏と鈴音のいるアリーナ<sup>闘技場</sup>は包まれる。そして張り上げられた土煙を切り裂き大気を震わせるその咆哮、無残にも碎け降り積もった瓦礫<sup>モンスター</sup>のその頂点、そこには血色の甲殻を持った巨大な怪物がいた。